

IBM QMF Analytics for Multiplatforms

バージョン 12 リリース 1

バージョン 12 リリース 1

**IBM QMF Analytics for
Multiplatforms のインストール
および管理**

IBM

IBM QMF Analytics for Multiplatforms

バージョン 12 リリース 1

バージョン 12 リリース 1

**IBM QMF Analytics for
Multiplatforms のインストール
および管理**

IBM

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM QMF Analytics for Multiplatforms バージョン 12 リリース 1、プログラム番号 5737-E42 に適用されます。本書の内容は、新しい版で明記されていない限り、これら両方のプログラム番号に関連した以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： SC27-8866-00
IBM QMF Analytics for Multiplatforms
Version 12 Release 1
Version 12 Release 1
Installing and Managing IBM QMF
Analytics for Multiplatforms

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

© Copyright IBM Corporation 1995, 2018.

© Rocket Software Inc. 1995, 2018

目次

この情報について	vii
この情報の対象読者	vii
保守による更新およびサポートに関する情報	viii
強調表示の規則	viii
メッセージ説明の検索方法	viii
ご意見の送付方法	ix
第 1 章 インストールの計画	1
概説	1
照会環境の管理	1
QMF for Workstationシステム要件	2
QMF for WebSphereシステム要件	3
iSeries の用語	4
第 2 章 QMF のインストール	7
セットアップ実行可能ファイル	7
QMF for Workstation のインストール	7
フィックスパックのインストール	10
QMF for Workstation のアンインストール	10
以前のフィックスパックに戻す	11
アプリケーション・サーバーへの QMF for WebSphere のデプロイ	11
WebSphere 管理コンソールのオープン	11
新規アプリケーションのインストール	12
JDBC ドライバーへのアクセスの構成	13
アプリケーションの始動	14
アプリケーションへのアクセス	14
インストールの完了	15
Java 仮想マシンのシステム・プロパティおよびフ ァイルのカスタマイズ	15
第 3 章 環境の構成	19
第 4 章 リレーショナル・データ・ソース 情報を QMF for Windows からインポー ト	23
QMF for Windows 設定	24
第 5 章 製品および環境の構成の考慮事項	27
第 6 章 概説	31
第 7 章 設定	35
一般設定	35
外観設定	36
監査システムの設定	37
ダッシュボード・ランタイムの設定	38
SMTP および E メールの設定	39
SMTP サーバー設定	39
E メール通知設定の指定	40

グローバル変数を使用した作業	41
ユーザー変数の指定	41
システム・グローバル変数値の編集	43
ヘルプ設定	43
リモート・サーバー上のヘルプ・コンテンツの組 み込み	44
JDBC 設定	45
LOB 設定	47
ログ設定	48
出力設定	55
QMF サーバー・レジストリー設定	56
エクスポート・アクションによって生成されたオブ ジェクトのディレクトリーの場所の設定	56
サード・パーティー・ライブラリーの設定	57
仮想データ・ソース設定の指定	58
ビジュアル・デザイナー設定の指定	58
第 8 章 QMF を FIPS-140 セキュリテ ィ標準に切り替える	61
第 9 章 リポジトリーの構成、およびデー タベースへの接続	63
JDBC ドライバー構成ファイルの作成	64
DB2 タイプ 4 UDB JDBC ドライバーの双方向テキ スト・レイアウト変換の有効化	67
第 10 章 共有リポジトリー・ストレージ の作成	71
接続パラメーターおよびユーザー・ログイン情報の 指定	72
表の作成および更新	74
リポジトリー・ストレージ表の保護とユーザー許可 の付与	75
最大同時データベース接続数の設定	77
第 11 章 リポジトリー	79
リポジトリーをリポジトリー・ストレージ表に追加	80
内部セキュリティ・フィールドの指定	83
内部セキュリティ・オプションのユーザーおよ びグループの指定	83
LDAP セキュリティ・フィールドの指定	87
第 12 章 データ・ソース	93
QMF カタログ機能を使用可能にする	93
QMF カタログ・オブジェクトの作成または更新	95
QMF カタログのデータベース・オブジェクトの 作成	97
カタログ表の保護とユーザー許可の付与	98
QMF カタログの選択	100
拡張カタログの作成	101

拡張カタログのプロパティの編集	101	トラステッド接続を使用しないログイン・マッピ	160
パーソナル・データ・ソースの作成	102	ング	
パーソナル・データ・ソースのエクスポート	103	トラステッド接続を使用した Db2 データベース	
パーソナル・データ・ソースのインポート	103	のログイン・マッピング	161
新規リレーショナル・データ・ソースの作成	104	データ・オブジェクトへの Web リンクの作成	163
データ・ソース・プラグインを使用可能にする	105		
リソース限界プロバイダーの選択	106		
追加パラメーターの指定	107		
新規マルチディメンション・データ・ソースの作成	108		
Hive データ・ソースの作成	110		
フォルダー・データ・ソースの操作	110		
フォルダー・データ・ソースの作成	111		
フォルダー・データ・ソースの編集	112		
仮想データ・ソースの作成	115		
仮想データ・ソースの編集	116		
仮想データ・ソースおよび JavaScript データ・			
ソースにキャッシュ有効期限スケジュールの設定			
を指定	118		
仮想データ・ソースおよび JavaScript データ・			
ソースのキャッシュ有効期限のスケジュール	119		
仮想データ・ソースおよび JavaScript データ・			
ソースの自動キャッシュ・リフレッシュの有効化	120		
JavaScript データ・ソースの操作	121		
JavaScript データ・ソースの作成	121		
JavaScript テーブルの操作	127		
仮想データ・ソースおよび JavaScript データ・			
ソースのキャッシュ有効期限のスケジュール	133		
仮想データ・ソースおよび JavaScript データ・			
ソースにキャッシュ有効期限スケジュールの設定			
を指定	134		
JavaScript データ・ソースの接続パラメーターの			
変更	136		
第 13 章 ワークスペースの設定	137		
ワークスペースへのコンテンツの追加	137		
ユーザーとしてのワークスペースの追加	138		
第 14 章 ER ダイアグラムでの作業	139		
ER ダイアグラムの作成	139		
ER ダイアグラムの編集	139		
ER ダイアグラム・フォルダーの作成	141		
ER ダイアグラムを自動的に取り込む	141		
第 15 章 環境のセットアップ	143		
新規環境の作成	143		
環境接続設定の編集	144		
第 16 章 QMF 用のリポジトリ接続の			
作成	147		
共有リポジトリ接続の作成	148		
ファイル・ベース・リポジトリ接続の作成	150		
リポジトリ・キャッシングの構成	151		
ネットワーク・リポジトリ接続の作成	155		
ネットワーク・リポジトリ・サービスの設定	156		
Web サービス・リポジトリ接続の作成	157		
データ・ソースのログイン・マッピングの設定	159		
		トラステッド接続を使用しないログイン・マッピ	160
		ング	
		トラステッド接続を使用した Db2 データベース	
		のログイン・マッピング	161
		データ・オブジェクトへの Web リンクの作成	163
第 17 章 構成済みアプリケーションの			
配布	167		
第 18 章 構成データをユーザーにエク			
スポート	169		
製品のサイレント・インストール	170		
応答ファイルの作成	171		
サイレント・インストールの実行	172		
JDBC ドライバーと接続情報のエクスポートおよび			
インポート	173		
更新スクリプトのエクスポート	174		
第 19 章 リポジトリ・オブジェクト			
を使用するためのユーザーおよびグルー			
プ許可の割り当て	177		
リポジトリ・オブジェクトへのアクセスを許可さ			
れるユーザーおよびグループの選択	178		
第 20 章 データベース・ベースのセキ			
ュリティーに関するユーザーとグループ			
の管理許可を割り当てる	181		
第 21 章 QMF サーバー・オブジェク			
ト・ノードへのオブジェクトの公開	183		
第 22 章 クイック・スタート・ウィザ			
ードを使用した JDBC ドライバーの構			
成およびリポジトリへの接続	185		
第 23 章 リソース限界の管理	187		
キャッシング	187		
管理者権限の割り当て	188		
集合 ID について	188		
長い名前をサポートするサーバー	189		
オブジェクトの長い名前	189		
オブジェクトの短い名前	189		
データ・ソース・リソース限界の設定	190		
照会リソース限界の設定	191		
リソース限界グループの定義	192		
デフォルトのリソース限界グループ	193		
リソース限界グループのセキュリティの確保	193		
リソース限界グループの作成	194		
リソース限界グループ・スケジュールの設定	194		
1 つのリソース限界グループに対する複数のスケ			
ジュールの指定	194		
有効なリソース限界スケジュールの判別	196		
リソース限界グループ・スケジュールの作成	197		
リソース限界の値の指定	198		

メイン・リソース限界の指定	200
タイムアウト・リソース限界の指定	201
限界リソース限界の指定	202
SQL 動詞リソース限界の指定	202
オプション・リソース限界の指定	203
データの保存リソース限界の指定	206
バインド・リソース限界の指定	206
オブジェクト・トラッキング・リソース限界の指定	208
LOB オプション・リソース限界の指定	209
レポート・センター・リソース限界の指定	210
キャッシュ・リソース限界の指定	212
オブジェクト・リスト・リソース限界の指定	213
リソース限界グループへのユーザーの割り当て	213
リポジトリ・リソース限界グループへのユーザーの割り当て	214
すべてのリポジトリ・リソース限界グループのユーザー割り当ての管理	215
QMF カタログ・ベース・リソース限界グループへのユーザーの割り当て	216
QMF カタログ・ユーザー・プロファイルの登録の許可	216
使用する QMF カタログ・ユーザー・プロファイルの決定	216
QMF カタログのユーザー・プロファイルによるデータベース・アクセスの決定	217
QMF カタログ・リソース限界グループへのユーザーの割り当て	218
第 24 章 リポジトリの管理	223
リポジトリの削除	223
共有リポジトリ・ストレージ・プロパティの編集	223
接続パラメーターおよびユーザー・ログイン情報の編集	224
データベース・オブジェクトの更新	225
保護オプションの編集	226
QMF カタログ・プラグイン・プロパティの編集	228
QMF カタログ表の更新	228
QMF カタログ表の保護状況の更新	230
データ・ソースに別の QMF カタログを選択	231
第 25 章 サンプルの表の使用	233
サンプルの表のアクティブ化	233
サンプルの表の名前と説明	233
第 26 章 オブジェクト・トラッキング報告書の使用	235
オブジェクト・トラッキングのアクティブ化	235
オブジェクト・トラッキング報告書の実行	236
オブジェクト・トラッキング表の保守	238
第 27 章 監査システムの使用	241
監査システムの設定	241
監査レコード表の読み取り	242
補助監査レコード表	243

付録 A. アクセシビリティ	247
QMF for Workstation での標準キーボード・ナビゲーション	247
標準キーボード・ナビゲーション	247
オペレーティング・システムのアクセシビリティ	248
支援技術製品	248
QMF for Workstation でのナビゲーション	248
QMF for WebSphere でのナビゲーション	251

付録 B. QMF オブジェクトのカスタマイズ	253
生成されるサンプル SQL	253
iSeries 用の物理ファイルおよび論理ファイルのリスト	253
iSeries に対する EXECUTE 特権の付与	253
オブジェクト・ビュー	254
Q.RAA_OBJ_DIR_X	254
RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X	255
RDBLUSER.USER_AUTHID_VIEW_X	255
RDBLADMIN_VIEW	255
RDBI.CATALOG_DIR_X	255
RDBI.AUTHID_VIEW_X	255
SYSIBM.SYSUSERAUTH	255
RDBI.AUTH_TABLE_X	255
Q.RAA_OBJECT_VIEW_X	256
RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X	256
RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X	256
RDBI.ADMIN_VIEW	257
RDBI.CATALOG_DIR_X	257
RDBI.AUTHID_VIEW_X	257
RDBI.AUTHID_TABLE_X	257
RDBI.TABLE_VIEW2_X	258
RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X	258
RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X	259
RDBI.ADMIN_VIEW	259
RDBI.AUTHID_VIEW_X	259
RDBI.AUTHID_TABLE_X	259
RDBI.ADMIN_TABLE	259
RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X	259
RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X	260
RDBL.ADMIN_VIEW	260
RDBI.AUTHID_VIEW_X	260
RDBI.AUTHID_TABLE_X	260
RDBI.ADMIN_TABLE	261

付録 C. トラブルシューティング	263
Internet Explorer 8 を使用していると QMF for WebSphere の画像の表示で問題が発生する	263
QMF for Workstation Win32 API が以前のバージョンの QMF for Windows に戻る	263

付録 D. メッセージ	265
特記事項	341
商標	342
製品資料に関するご使用条件	343

プライバシー・ポリシーに関する考慮事項	343
用語集	345
索引	351

この情報について

この情報では、QMF™ for Workstation および QMF for WebSphere® アドミニストレーターの各種アプリケーションに関して詳しく説明されています。¹ この情報には、以下の事項に関する説明が含まれています。

- QMF for Workstation アプリケーションのインストール
- QMF for WebSphere アプリケーションのインストール
- QMF for Workstation アドミニストレーターの使用によるリポジトリの構成
- QMF for WebSphere アドミニストレーターの使用によるリポジトリの構成
- リソース使用量を制御するためのリソース限界の設定

旧版から変更された箇所には、左側に縦線 (|) が付いています。技術的に重要でない編集上の変更には、縦線は付いていません。

本書の最新版については、以下の DB2® and IMS™ Tools Library ページを常にチェックしてください。

www.ibm.com/software/data/db2imstools/db2tools-library.html

この情報の対象読者

この情報は、以下のアプリケーションで構成される Db2® QMF 照会および報告書作成ツール・セットを構成したり保守したりする担当者を対象にしています。

- QMF for Workstation
- QMF for Workstation アドミニストレーター
- QMF for WebSphere
- QMF for WebSphere アドミニストレーター

Db2 QMF 照会環境のアドミニストレーターには、以下の項目に関する実務的知識が必要です。

- Db2
- QMF
- ワークステーション・オペレーティング・システム
- WebSphere

この情報はユーザーを対象にしていません。

1. 以降の説明では、IBM® QMF client for WebSphere Application Server を QMF for WebSphere と呼び、IBM QMF client for the workstation environment を QMF for Workstation と呼びます。

保守による更新およびサポートに関する情報

サービス更新およびサポート情報 (ソフトウェア・フィックスパック、PTF、よくある質問 (FAQ)、技術情報、トラブルシューティング情報、およびダウンロードなど) を検索するには、次の Web ページを参照してください。

http://www.ibm.com/support/entry/portal/Overview/Software/Information_Management/DB2_Tools_for_z~OS

強調表示の規則

この情報では、内容を強調するために以下の表記規則を使用しています。

- 太字体は、コマンドや、フィールド、フォルダー、アイコン、メニュー選択項目の名前などのユーザー・インターフェース・コントロールを示します。
- モノスペース・タイプは、ユーザーが示されたとおりに入力するテキストの例を示します。
- イタリック は、その他の資料の表題、または重要な用語の強調を示します。ユーザーが値を置き換える必要のある変数を示すときにも使用されます。

メッセージ説明の検索方法

メッセージとコードの検索には、以下のいずれの方法も使用できます。

インフォメーション・センターでの検索

IBM Information Management Software for z/OS® Solutions インフォメーション・センターなどの任意の Eclipse ヘルプ・システムの左上のツールバーにある検索ボックスに、検索するメッセージの番号を入力します。例えば、「検索」フィールドに DFS1065A と入力できます。

メッセージの検索効率を高めるために、以下のヒントを役立ててください。

- コードに関する情報を検索するには、そのコードを入力します。例えば、-327 と入力します。
- メッセージ番号の全体または一部分を入力します。メッセージ番号にワイルドカードを使用して、検索対象を広げることができます。複数の文字を表すには * を使用し、単一文字を表すには ? を使用します。例:
 - 検索ストリング DFS20?I は、ストリング DFS20 で始まり、任意の 1 文字が続き、その後に I が続くメッセージをすべて返します。
 - 検索ストリング DFS20??I は、ストリング DFS20 で始まり、任意の 2 文字が続き、その後に I が続くメッセージをすべて返します。
 - 検索ストリング DFS20*I は、ストリング DFS20 で始まり、任意の数とタイプの文字が続き、その後に I が続くメッセージをすべて返します。

インフォメーション・センターには、そこに含まれる情報管理製品すべてについての最新のメッセージ情報があります。

Web 検索エンジンの使用

メッセージ説明を検索するには、Web 上で使用可能な人気の検索エンジンのいずれも使用できます。特定のメッセージ番号またはコードを検索エンジンに入力すると、IBM インフォメーション・センター内のメッセージ情報へのリンクが提示されます。

LookAt の使用

LookAt というオンライン機能を使用すると、ユーザーが遭遇する多くの IBM メッセージや、いくつかのシステム異常終了およびコードに関する説明を検索できます。LookAt では、通常、該当メッセージの説明がただちに表示されるため、従来の方法よりも短時間で、必要な情報を検索することができます。

LookAt を以下の場所から使用して、z/OS のエレメントと機能、z/VM[®]、VSE/ESA、および AIX[®] と Linux のクラスターに関する IBM メッセージ説明を検索できます。

- インターネット。LookAt Web サイト (<http://www.ibm.com/eserver/zseries/zos/bkserv/lookat/>) から、IBM メッセージの説明に直接アクセスできます。
- z/OS TSO/e ホスト・システム。z/OS または z/OS.e システムにコードをインストールして、IBM メッセージ説明にアクセスできます。アクセスには、TSO/e コマンド行 (例えば、TSO/e プロンプト、ISPF、または OMVS を実行する z/OS UNIX System Services) から LookAt を使用します。
- ご使用の Microsoft Windows ワークステーション。Microsoft Windows コマンド・プロンプト (DOS コマンド行とも呼ばれる) から LookAt を使用して z/OS Collection (SK3T-4271) 上の IBM メッセージの説明にアクセスするためのコードをインストールできます。
- ご使用のワイヤレス・ハンドヘルド・デバイス。ワイヤレス・アクセスが可能で、インターネット・ブラウザ (Pocket PC 用の Internet Explorer、Palm OS 用の Blazer または Eudora、あるいは Linux ハンドヘルド・デバイス用の Opera など) を備えているハンドヘルド・デバイスで LookAt モバイル版を使用できます。LookAt Web サイトから LookAt モバイル版にリンクします。

ホスト・システムまたは Microsoft Windows ワークステーションに LookAt をインストールするコードは、z/OS Collection (SK3T-4271) のディスク、または LookAt Web サイト (「**Download**」をクリックして、適切なプラットフォーム、リリース、コレクション、およびロケーションを選択します) から入手できます。詳細は、ダウンロード処理の際に表示できる LOOKAT.ME ファイルに記載されています。

ご意見の送付方法

IBM お客様のご意見をお寄せください。本マニュアルまたは他の QMF 資料に関するご意見やご感想は、IBM 営業担当員にご連絡ください。

第 1 章 インストールの計画

QMF をインストールする前に、システム要件を確認し、QMF for Workstation と QMF for WebSphere の違いを理解してください。

概説

QMF for Workstation アドミニストレーターおよび QMF for WebSphere アドミニストレーターはどちらも、IBM Db2 リレーショナル・データベース管理システム用の Db2 QMF 照会および報告書作成ツール・セットの一部です。

これら 2 つの管理アプリケーションは、以下のアプリケーションの照会環境を構成および管理するためのアプリケーションです。

- QMF for Workstation は、Eclipse²ベースのリッチ・クライアント・デスクトップ・アプリケーションです。照会、報告書作成、およびビジネス・インテリジェンス (BI) ソリューションの開発機能と実行機能を備えています。
- QMF for WebSphere は、ピュア HTML のシン・クライアント配置モデルを使用して、QMF for Workstation の機能の大部分のサブセットを提供する、Java ベースの Web アプリケーションです。QMF for WebSphere は、さまざまなオペレーティング・システム上で実行可能で、数々のプラットフォームにわたってさまざまな Web ブラウザーを使用するユーザーに、この HTML ベースのシン・クライアント操作環境を提供します。

照会環境の管理

QMF for Workstation アドミニストレーター・アプリケーションと QMF for WebSphere アドミニストレーター・アプリケーションは、QMF for Workstation アプリケーションと QMF for WebSphere アプリケーションのユーザーにデータへのアクセスを可能にする管理用タスクを実行するためのアプリケーションです。

管理者が実行する可能性があるタスクは、以下のとおりです。

- JDBC ドライバーの構成
- リポジトリの作成
- リポジトリへの接続
- データ・ソース情報の構成
- リソース使用量とユーザー処置を制御するためのリソース限界の設定

2. Eclipse は、オープン・ソース・コミュニティであり、そのプロジェクトは、拡張可能な開発プラットフォームとソフトウェア構築用のアプリケーション・フレームワークを提供することに重点を置いています。Eclipse は、ソフトウェア開発のライフ・サイクル全体における拡張性のあるツールおよびフレームワークを備えています。これには、モデリング、Java™、C/C++、PHP などの言語開発環境、テストとパフォーマンス、ビジネス・インテリジェンス、リッチ・クライアント・アプリケーション、および組み込み開発のサポートが含まれます。主要なテクノロジー・ベンダー、革新的な新興企業、大学、研究機関、および個人から成る活力のある大きなエコシステムが、Eclipse プラットフォームを拡張、補完、および支援しています。Eclipse Foundation は、Eclipse プロジェクトをホストする、非営利の、メンバーの支援によるコーポレーションです。Eclipse および Eclipse Foundation の全詳細については、www.eclipse.org をご覧ください。

- 照会環境のパフォーマンスのモニター

ほとんどの場合、単一のユーザーが、QMF for Workstation および QMF for WebSphere ユーザーのために必要な管理用タスクの実行を担当しています。QMF 管理者は QMF for Workstation アドミニストレーターまたは QMF for WebSphere アドミニストレーターを使って管理用タスクを実行することを選択できます。

管理者は、QMF for Workstation アドミニストレーターを使ってアプリケーションで使用可能なすべての機能を構成することができ、QMF for WebSphere アドミニストレーターを使って、管理者は最も広く使われている機能セットを構成することができます。QMF for WebSphere アドミニストレーターでは構成できない機能もいくつかあります。

QMF for Workstation システム要件

QMF for Workstation をインストールする前に、ご使用の環境が以下の最小要件を満たしていることを確認する必要があります。

ハードウェア要件

QMF for Workstation が稼働する各ワークステーションは、以下の最小要件を満たしていなければなりません。

- Windows をサポートするハードウェア構成
- 最小 1 GB のディスク・スペース
- 最小 1 GB の RAM

ソフトウェア要件

QMF for Workstation は、以下のオペレーティング・システムで実行できます。

- Microsoft Windows 7
- Microsoft Windows 8
- Microsoft Windows 8.1
- Microsoft Windows 10
- Microsoft Windows Server 2008
- Microsoft Windows Server 2012

データベース・サーバー

QMF for Workstation では、以下のデータベース・サーバーがサポートされています。

- IBM Db2 LUW
- IBM BigSQL
- Microsoft SQL Server
- MySQL
- IBM Netezza
- Oracle データベース

- PostgreSQL
- Red Brick
- SolidDB
- Teradata

前提条件

次の QMF for Workstation 機能には、以下のようなソフトウェア依存関係があります。

- データベース接続では、アクセスされる RDBMS のタイプごとに適切な JDBC ドライバーが必要です。
- 結果セットを Microsoft Excel にエクスポートするために必要な最小レベルは、Excel 2003 です。

2003 より前のバージョンの Microsoft Excel を実行している場合、「Excel にエクスポート」機能はサポートされません。

QMF for WebSphereシステム要件

QMF for WebSphere をインストールする前に、ご使用の環境が以下の最小要件を満たしていることを確認する必要があります。

ハードウェア要件

- IBM WebSphere V8.5.5 または V9.0、あるいは Apache Tomcat 7 または 8 をサポートするハードウェア構成
- 最小 500 MB のディスク・スペース
- インストールされている各サーバーに最小 1 GB の RAM、および同時ユーザーごとに 50 MB の RAM を追加

ソフトウェア要件

QMF for WebSphere のソフトウェア要件は、以下のとおりです。

- 以下のいずれかのアプリケーション・サーバー。
 - WebSphere Application Server V8.5.5 または WebSphere Application Server V9 (Java 8 を使用)。
 - Apache Tomcat V7.0 または V8.0.
- 各クライアント上に以下のいずれかの Web ブラウザー (JavaScript サポートが有効になっている)
 - Google Chrome ブラウザー V50.0.2661.102 以降
 - Mozilla Firefox V47.0.1 以降
 - Microsoft Edge V25.10586.0.0 以降
 - Microsoft Internet Explorer V10 以降
 - Apple Safari ブラウザー V9.0.3 以降

データベース・サーバー

QMF for WebSphere では、以下のデータベース・サーバーがサポートされています。

- IBM Db2 LUW
- IBM BigSQL
- Microsoft SQL Server
- MySQL
- IBM Netezza
- Oracle データベース
- PostgreSQL
- Red Brick
- SolidDB
- Teradata

前提条件

次の QMF for WebSphere 機能には、以下のようなソフトウェア依存関係があります。

- データベース接続では、アクセスされる RDBMS のタイプごとに適切な JDBC ドライバーが必要です。
- 結果セットを Excel にエクスポートするために必要な最小レベルは、Excel 2003 です。

2003 より前のバージョンの Excel を実行している場合、「Excel にエクスポート」機能はサポートされません。

- QMF for WebSphere は、QMF Data Service データ・ソースにアクセスするためには、JRE V7 以降を必要とします。

iSeries の用語

QMF for Workstation および QMF for WebSphere では SQL の用語が使用されますが、これは iSeries の用語とは異なる場合があります。

次の表には、iSeries システムの用語および対応する SQL リレーショナル・データベースの用語をリストしています。詳しくは、「DB2 for iSeries Database Programming」を参照してください。

表 1. iSeries および SQL の用語の対応

iSeries の用語	SQL の用語
ライブラリー: 関連したオブジェクトをグループにまとめ、オブジェクトを名前によって検索できるようにする。	集合: ライブラリー、ジャーナル、ジャーナル・レシーバー、SQL カタログ (およびオプションとしてデータ・ディクショナリー) で構成される。集合は、関連したオブジェクトをグループにまとめ、オブジェクトを名前によって検索できるようにする。
物理ファイル: レコードのセット。	表: 列と行のセット。

表 1. *iSeries* および *SQL* の用語の対応 (続き)

iSeries の用語	SQL の用語
レコード: フィールドのセット。	行: 連続したいくつかの列を含む、表の水平部分。
フィールド: 1 つのデータ型の関連情報を示す 1 つ以上の文字。	列: 1 つのデータ型の表の垂直部分。
論理ファイル: 1 つ以上の物理ファイルのフィールドおよびレコードのサブセット。	パッケージ: <i>SQL</i> ステートメントを実行するために使用されるオブジェクト・タイプ。
ユーザー・プロフィール	許可名または許可 <i>ID</i>

第 2 章 QMF のインストール

QMF をインストールするには、QMF for Workstation をインストールするセットアップ実行可能ファイルを実行し、オプションで QMF for WebSphere をアプリケーション・サーバーにデプロイします。

注: インストール結果を確認するには、ユーザー・ホーム・ディレクトリーの一時的フォルダーにあるインストール・ログ・ファイルを参照してください。

セットアップ実行可能ファイル

QMF for Workstation は Eclipse ベースのハイパフォーマンス・デスクトップ・アプリケーションとしてインプリメントされ、Java の移植性とネイティブ・アプリケーションのパフォーマンスとを結び付けます。

下表に、QMF for Workstation のセットアップ実行可能ファイルとサポート対象オペレーティング・システムをリストします。

以下の各サポート対象プラットフォームでは、内蔵タイプのインストール・パッケージを使用できます。

表 2. QMF for Workstation によってサポートされるプラットフォーム、バージョン、および実行可能ファイル

オペレーティング・システム	バージョン	セットアップ実行可能ファイル
Windows	Server 2008、Server 2012、7、8、8.1、10	setupwin32.exe または setupwin64.exe

QMF for Workstation のインストール

QMF for Workstation をインストールするには、適切なセットアップ実行可能プログラムをターゲット・オペレーティング・システムで実行し、インストール指示に従います。インストールが完了し次第、入手可能な最新のフィックスパックを適用することをお勧めします。

このタスクについて

QMF インストール・パッケージには、以下の 3 つの .iso ファイルが含まれています。

- CD1 setupwin32.exe ファイル、README ファイル、特記事項および情報ファイルが含まれています。
- CD2 setupwin64.exe ファイル、README ファイル、特記事項および情報ファイルが含まれています。
- CD3 QMF for WebSphere、QMF Vision、QMF サーバーのインストール・ファイルと、特記事項および情報ファイルが含まれています。

このトピックでは、QMF をインストールする設定プロセスを実行する方法について説明します。ご使用のコンピューターに QMF セットアップ実行可能ファイルがダウンロードされていることが前提となります。インストール・プロセスで設定できるプロパティと値についても説明します。

インストールの途中でライセンス情報と製品インストール先を指定します。また、インストールする機能セット (アドミニストレーターとユーザーの一方または両方) を選択します。

インストールは、「キャンセル」をクリックすればいつでも停止できます。

手順

1. セットアップ実行可能ファイルをダウンロードしたディレクトリーに移動します。
2. セットアップ実行可能ファイルを実行してインストールを開始します。インストーラー・プログラムが製品のインストール準備を行います。
3. 「概要」パネルで、インストール・プロセスの推奨項目と説明を読んで「次へ」をクリックします。
4. 「ご使用条件 (License Agreement)」パネルで、ライセンス条項を読み、「使用条件の条項に同意します (**I accept the terms of the License Agreement**)」を選択してインストールを続行します。「次へ」をクリックします。

注: 「使用条件の条項に同意しません (**I do not accept the terms in the license agreement**)」を選択すると、インストール・プロセスは停止します。

5. 「インストール・フォルダーの選択 (Choose Install Folder)」パネルで、「選択 (**Choose**)」を選択して、QMF のインストール先となるディレクトリーを指定するか、またはデフォルト宛先を受け入れます。「次へ」をクリックします。
 - ワークステーション・アプリケーションおよびそのすべてのコンポーネントと機能をインストールし、QMF for WebSphere アプリケーション・ファイルをダウンロードする場合は、「標準 (**Typical**)」を選択します。

アプリケーション、コンポーネント、および機能については、『QMF アプリケーション、コンポーネント、および機能』を参照してください。

- 特定のコンポーネントをインストールする場合は、「カスタム」を選択し、パネル内の「インストール・セット (**Install Set**)」フィールドの下にあるリストからアプリケーション、コンポーネント、および機能を選びます。

インストールする特定のアプリケーションとコンポーネントを選択した後で、標準インストールのオプションに戻りたい場合は、「インストール・セット (**Install Set**)」ドロップダウン・リストから「標準 (**Typical**)」を選択します。

表 3. QMFアプリケーション、コンポーネント、および機能

アプリケーション	コンポーネントおよび機能	説明
QMF for Workstation	<ul style="list-style-type: none"> • QMF for Workstation ユーザー。 • QMF for Workstation アドミニストレーター • OLAP および XMLA データ・ソースのサポート <p>ユーザーが多次元照会を作成および編集することを可能にするファイルをダウンロードする場合は、このフィーチャーを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 仮想データ・ソースのサポート <p>管理者が仮想データ・ソースを作成および編集することを可能にするファイルをダウンロードする場合は、このフィーチャーを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • データ・ソース環境のサポート <p>この機能は、データ・ソース環境をアドミニストレーターが作成したり編集したりできるようにするファイルをダウンロードする場合は選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 翻訳済みヘルプ・システム <p>英語のヘルプ・システムのほかにインストールしたいヘルプ・システムを選択します。</p>	<p>QMF for Workstation には、ユーザー・コンポーネントとアドミニストレーター・コンポーネントが含まれています。</p> <p>自分のロールと、アプリケーションの使用方法に適したコンポーネントを選択します。例えば、次のように選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 自分のパーソナル・ワークステーションでアプリケーションを使用する予定の場合は、QMF for Workstation ユーザー・コンポーネントを選択します。 • 企業全体の複数ユーザーが使用できる製品構成を作成して、その構成を、その企業ユーザーを代表して自分が管理する予定の場合は、QMF for Workstation アドミニストレーター・コンポーネントを選択します。アドミニストレーターは、このコンポーネントを使用して、リポジトリへのユーザー・アクセス権限を付与し、リソース限界を定義します。これは、これらのタスクの実行を許可されるユーザーのためだけにインストールしてください。

6. 製品アイコンを作成する場所を選択して、「次へ」をクリックします。
7. 「プリインストール要約 (Pre-Installation Summary)」パネルで要約情報を確認します。
 - 変更が必要な場合は、変更対象の値が含まれているパネルが表示されるまで「前へ」をクリックします。
 - 選択した内容に問題がなければ、「インストール」をクリックして、インストールを完了します。

タスクの結果

QMF が正常にインストールされました。

インストールが正常に完了したら、製品を使用できるように構成する準備が整っています。

フィックスパックのインストール

このトピックでは、QMF for Workstation アプリケーションのフィックスパックのインストール方法について説明します。

このタスクについて

フィックスパックは、元のアプリケーションをインストールしたときと同じ手順を使用してインストールします。新規フィックスパックが導入できるようになる前にアプリケーションをアンインストールしてはなりません。フィックスパックの実行可能ファイルを実行すると、QMF for Workstation の既存のインストールは自動的に更新されます。具体的な手順については、7 ページの『QMF for Workstation のインストール』を参照してください。

重要: アラビア語およびヘブライ語の場合、アプリケーションのインストールに関する問題を回避するには、以前のフィックスパックを削除し、最新のフィックスパックを QMF for Workstation に上書きインストールしてください。

注: フィックスパックによっては、静的 SQL パッケージを使用してリポジトリまたは QMF カタログの保護をインプリメントする場合に、その静的 SQL パッケージを再バインドする必要があります。フィックスパックの実行可能プログラムをダウンロード時に、付属の readme ファイルで、既存の静的 SQL パッケージを再バインドする手順を確認してください。

QMF for Workstation のアンインストール

QMF for Workstation をアンインストールするには、ご使用のオペレーティング・システムのプログラム追加/削除機能を使用します。

QMF for Workstation を再インストールする予定がない場合は、製品のアンインストールの前にリポジトリ・ストレージをすべて削除しておく必要があります。

QMF for Workstation Administrator を使用してリポジトリ・ストレージを削除するには、「リポジトリ」ビューでリポジトリ・ストレージを右クリックし、ポップアップ・メニューから「リポジトリ・ストレージの削除」を選択します。

注: なお、リポジトリ・ストレージに格納された QMF オブジェクトを保存しておく必要がない場合のみ、リポジトリ・ストレージを削除してください。

QMF for Workstation のアンインストール方法を以下の表にリストします。

表 4. QMF for Workstation のアンインストール方式

方式	プロシージャ
アンインストーラーの手動実行	アンインストーラーにアクセスしてアンインストーラーを実行します。 アンインストーラーは、QMF for Workstation がインストールされているディレクトリーの <code>_uninst</code> フォルダーにあります。

表 4. QMF for Workstation のアンインストール方式 (続き)

方式	プロシージャ
「スタート」メニューからのアンインストール	<p>Windows インストール済み環境に対してのみ使用できます。</p> <p>QMF for Workstation のインストール時にプログラム・アイコンを「スタート」メニューに追加することを選択した場合は、「スタート」メニューからアンインストーラーを実行できます。例えば、Windows オペレーティング・システムで「スタート」 > 「QMF」 > 「アンインストール (Uninstall)」を選択します。</p>
「コントロール パネル」からのアンインストール	<p>Windows インストール済み環境に対してのみ使用できます。</p> <p>「コントロール パネル」機能を使用して QMF for Workstation をアンインストールします。</p>

以前のフィックスパックに戻す

このトピックでは、QMF for Workstation アプリケーションの以前のフィックスパックに戻す方法について説明します。

このタスクについて

以前のフィックスパックに戻す必要がある場合は、新規フィックスパックのインストールと同じ手順を適用します。既存のインストールをアンインストールする必要はありません。フィックスパックの実行可能プログラムを実行すると、QMF for Workstation の既存のインストールは自動的に更新されます。具体的な手順については、7 ページの『QMF for Workstation のインストール』を参照してください。

注: 新規フィックスパックのインストールと同様に、静的 SQL パッケージを使用してリポジトリまたは QMF カタログの保護をインプリメントする場合は、その静的 SQL パッケージを再バインドしなければならないことがあります。フィックスパックの実行可能プログラムをダウンロード時に、付属の readme ファイルで、既存の静的 SQL パッケージを再バインドする手順を確認してください。

アプリケーション・サーバーへの QMF for WebSphere のデプロイ

インストール・メディアには、サーバーの管理コンソールを使って即時に Web アプリケーション・サーバーに配置できる Enterprise Archive (EAR) ファイルおよび Web Archive (WAR) ファイルが組み込まれています。

WebSphere 管理コンソールのオープン

クライアント・マシンで Web ブラウザーを開き、適切な URL を入力して、WebSphere 管理コンソールを開始します。

デフォルトでは、`http://host:port/ibm/console` という URL を使用します。`host` は WAS サーバーのホスト名で、`port` は管理コンソールが `listen` するように構成されているポートです (デフォルトは 9080)。

新規アプリケーションのインストール

新規アプリケーションをインストールするには、以下の手順を実行します。

このタスクについて

「管理コンソール」ウィンドウの左側のナビゲーション・ツリーで以下の手順を実行します。

手順

1. 「アプリケーション (**Applications**)」を展開します。
2. 「新規アプリケーションのインストール (**Install New Application**)」をクリックします。「管理コンソール」ウィンドウの右側に、「アプリケーションのインストールの準備」ページが表示されます。
3. 「アプリケーションのインストールの準備」の最初のページでは、インストールする QMF for WebSphere EAR ファイルの場所を指定します。
 - QMF for WebSphere EAR ファイルがローカル・マシン上にある場合は、「ローカル・ファイル・システム (**Local file system**)」をクリックします。「参照」ボタンを使用してファイルを検索し、見つけます。
 - ファイルが WAS サーバー・マシン上にある場合は、「リモート・ファイル・システム (**Remote file system**)」をクリックします。「参照」ボタンを使用してファイルを検索し、見つけます。
4. QMF for WebSphere EAR ファイルを使用してインストールする場合、アプリケーションのデフォルトのコンテキスト・ルートは常に `QMFWebSphere112` です。何らかの理由でアプリケーションの代替コンテキスト・ルートを指定する必要がある場合は、インストール用に QMF for WebSphere WAR ファイルを使用し、「コンテキスト・ルート」フィールドに代替コンテキスト・ルートを入力し、プロンプトに従ってインストールを完了します。
5. 「次へ」をクリックします。「アプリケーションのインストールの準備」の 2 ページ目が開きます。
6. 「デフォルトのバインドを生成する」をクリックします。
7. 「次へ」をクリックします。「ステップ 1: インストール・オプションの選択」ページが開きます。
8. 「Web サービスのデプロイ (**Deploy Web Services**)」チェック・ボックスにチェック・マークが付いていないことを確認し、「次へ」をクリックします。「ステップ 2: サーバーへのモジュールのマップ」ページが開きます。
9. デフォルト値を受け入れて、「次へ」をクリックします。「ステップ 3: Web モジュール用の仮想ホストのマップ」ページが開きます。
10. QMF for WebSphere のモジュールに対してリストされているアプリケーション・サーバーの名前に留意して、「次へ」をクリックします。「ステップ 4: ユーザー/グループへのセキュリティー役割のマップ」ページが開きます。
11. QMF for WebSphere アプリケーションに対して `qmfadmin` という名前のセキュリティー役割をマップするかどうかを指定します。WebSphere セキュリ

ティーを有効にしている場合、少なくとも 1 つのユーザー ID をこの役割にマップすることが必要です。パッケージのバインドといった QMF for WebSphere のさまざまな管理作業を実行する前には、qmfadmin 役割を使用してユーザーの認証が行われます。このページでは、役割をすべてのユーザーにマップするか (役割に対する認証が事実上行われなくなります)、認証されているすべてのユーザーにマップするか (認証済みのユーザーは QMF の管理機能を実行できます)、または指定したユーザーまたはグループだけにマップするかを指定します。

12. 「次へ」をクリックします。
13. 選択したオプションのリストが表示されるサマリー・ページを確認し、「終了」をクリックします。
14. WAS によるアプリケーションのインストールが終了したら、構成を保存します。インストールの進行状況およびアプリケーションのインストール完了について通知する、メッセージ・ダイアログが表示されます。「エンタープライズ・アプリケーション」ページが開きます。
15. 「マスター構成への保存」をクリックして、「保存」をクリックします。

JDBC ドライバーへのアクセスの構成

WebSphere 管理コンソールを使用して構成する必要がある最後の要素は、QMF for WebSphere が使用する JDBC ドライバーに対するアクセスの設定です。

このタスクについて

「管理コンソール」ウィンドウの左側のナビゲーション・ツリーで以下の手順を実行します。

手順

1. 「サーバー (**Servers**)」を展開します。
2. 「アプリケーション・サーバー (**Application Servers**)」をクリックします。「管理コンソール」ウィンドウの右側に、「Application Servers」ページが表示されます。
3. アプリケーション・サーバーの表示リストで、QMF for WebSphere アプリケーションをインストールしたアプリケーション・サーバーをクリックします。アプリケーション・サーバーのプロパティが表示されます。
4. 「サーバー・インフラストラクチャー (**Server Infrastructure**)」の下の「**JAVA** およびプロセス管理 (**JAVA and Process Management**)」を展開します。「プロセス定義」をクリックします。「プロセス定義 (Process Definition)」ページが表示されます。
5. z/OS の場合、「**ProcessType**」リストから「サーバント」をクリックします。「プロセス定義 (Process Definition)」ページが表示されます。
6. 「追加プロパティ」リストで、「**Java** 仮想マシン」をクリックします。「Java 仮想マシン (Java Virtual Machine)」ページが表示されます。
7. 「クラスパス (**Classpath**)」リストで、QMF for WebSphere が使用する JDBC ドライバーに必要なすべての *.zip ファイルまたは *.jar ファイルを追加します。例えば、Microsoft Windows で Db2 Universal Database V8 Type 4 ドライバーを使用する場合は、次のファイルを入力します。

```
C:¥Program Files¥ibm¥SQLLib¥Java¥db2jcc.jar
C:¥Program Files¥ibm¥SQLLib¥Java¥db2java.zip
C:¥Program Files¥ibm¥SQLLib¥Java¥sqlj.zip
```

z/OS で Type 4 ドライバーを使用する場合は、次のファイルを入力します。

```
/usr/lpp/db2810/jcc/classes/db2jcc.jar
/usr/lpp/db2810/jcc/classes/db2jcc_license_cisuz.jar
/usr/lpp/db2810/jcc/classes/db2jcc_javax.jar
/usr/lpp/db2810/jcc/classes/sqlj.zip
```

8. z/OS 以外のプラットフォームの場合、ステップ 11 にスキップできます。
z/OS の場合、JDBC ドライバーが使用する固有のコード・ライブラリーを含むディレクトリーのリストを指定する必要があります。「サーバー」に戻り、「追加プロパティー」リストから「カスタム・プロパティー」を選択します。「カスタム・プロパティー (Custom Properties)」ページが表示されます。
9. 「新規」ボタンをクリックします。「構成」ページが開きます。
10. 「一般プロパティー」リストの「名前」フィールドに「LIBPATH」としてライブラリー・パス名を指定し、「値」フィールドにディレクトリー・リストを指定します。例えば、「値」フィールドには次のように指定できます。

```
/usr/lpp/db2810/lib
/usr/lpp/db2810/jcc/lib
```
11. 必要なファイルの追加が終了したら、「OK」をクリックして、構成を保存します。構成を保存したら、サーバーを再始動して変更を有効にする必要があります。

アプリケーションの始動

新規アプリケーションを始動するには、以下の手順を実行します。

このタスクについて

「管理コンソール」ウィンドウの左側のナビゲーション・ツリーで以下の手順を実行します。

手順

1. 「アプリケーション (Applications)」を展開します。
2. 「エンタープライズ・アプリケーション (Enterprise Applications)」をクリックします。「管理コンソール」ウィンドウの右側に、「エンタープライズ・アプリケーション」ページが表示されます。
3. インストールされているアプリケーションの表示リストで、「QMF for WebSphere」の隣にあるチェック・ボックスにチェック・マークを付けます。
4. 「開始」をクリックします。アプリケーションが使用可能になります。

アプリケーションへのアクセス

完了すると、以下の URL のいずれかを使用して QMF for WebSphere にアクセスできるはずですが (QMFWebSphere112 の推奨コンテキスト・ルートを使用していると想定)。

QMF for WebSphere アプリケーションを起動するための URL:

```
http(s)://[server]:[port]/[ContextRoot]/user
```

例: `http://www.ibm.com:9080/QMFWebSphere112/user`

QMF for WebSphere アドミニストレーター・アプリケーションを起動するための URL:

`http(s)://:[server]:[port]/[ContextRoot]/admin`

例: `http://www.ibm.com:9080/QMFWebSphere112/admin`

インストールの完了

QMF for WebSphere をインストールする最後の手順は、JDBC ドライバー・ライブラリー情報を設定し、リポジトリを構成し、リポジトリ接続情報を設定することです。

このタスクについて

QMF for WebSphere 管理者は、事実上 QMF for Workstation 管理者と同じです。ただし、QMF for WebSphere を QMF for Workstation と同じシステム上にインストールした場合は、その 2 つのアプリケーションは別々の構成ファイル (ユーザーのアプリケーション・データ・フォルダーにある) を持つことになります。JDBC ドライバーを登録するアクションと、QMF for Workstation および QMF for WebSphere の両方に対してリポジトリを定義するアクションは直接行う必要があります。

QMF for WebSphere の新規インストール済み環境は 2 つの方法で構成できます。

手順

1. QMF for WebSphere アプリケーションを使用してドライバーとリポジトリを構成する (詳しくは、19 ページの『第 3 章 環境の構成』を参照してください)。
2. QMF for Workstation を使用してドライバーとリポジトリを構成し、`.bi.jdbc.drivers` ファイルと `repositories.xml` ファイルをワークステーション上のアプリケーション・データ・ロケーションから Web サーバー上の同等アプリケーション・データ・ロケーションにコピーする。

Java 仮想マシンのシステム・プロパティーおよびファイルのカスタマイズ

QMF for Workstation/WebSphere のシステム・プロパティーおよびファイルを保存するために (特にクラスター・ノード間でアプリケーション設定およびその他のフォルダーを共有し、ユーザー・セッションのタイムアウトを設定するようにクラスターを構成する場合に)、Java 仮想マシンのシステム・プロパティーおよびファイルを指定できます。

このタスクについて

デフォルトでは、すべての QMF for Workstation/WebSphere システム・プロパティーおよびファイルがホーム・ディレクトリー (`user.home` Java 仮想マシン・システム・プロパティーにあるパス) に保管されます。ただし、`.instance.area.global`、`.instance.area.shared`、または `.instance.area` のいずれ

れかの Java 仮想マシン・システム・プロパティを使用して、ファイルを保管するディレクトリーをカスタマイズできます。

ユーザーがアプリケーションでの作業を行っていないときにセッションを閉じるように、ユーザー・セッションのタイムアウトを指定したい場合は、`.use.session.timeout` パラメーターを使用してください。

下表で、使用可能なパラメーターについて説明します。

表 5. Java 仮想マシン・パラメーター

パラメーター	説明	保管されるファイル
<code>qmf.instance.area.global</code>	このプロパティは、複数のクラスター・ノードに分散されているフォルダーに関与します。サーバー構成ファイル、スケジュール済みタスク、およびパーソナル・リポジトリーを保管するために使用します。このパラメーターを設定しない場合は、 <code>.instance.area</code> からの設定が適用されます。	<ul style="list-style-type: none"> リポジトリー接続データ (<code>repositories.xml</code>) JDBC ドライバー・プロパティ (<code>.bi.jdbc.drivers</code>) ライセンス・ファイル キャッシュ・ファイル
<code>qmf.instance.area.shared</code>	このプロパティは、複数のクラスター・ノードで共有されているアプリケーション・フォルダーに関与します。このパラメーターを設定しない場合は、 <code>.instance.area</code> からの設定が適用されます。	<ul style="list-style-type: none"> ログ・ファイル セッション・データ: <ul style="list-style-type: none"> ユーザー設定 ユーザー大域変数 ログインおよびパスワード
<code>qmf.instance.area</code>	このプロパティは、一時ファイルの保管に関与します。このパラメーターを設定しない場合は、 <code>java.io.tmpdir</code> Java 仮想マシン・システム・プロパティからの設定が適用されます。	<ul style="list-style-type: none"> 一時ファイル
<code>qmf.use.session.timeout</code>	このプロパティは、ユーザー・セッションのタイムアウトに関与します。 <code>true</code> に設定した場合は、サーバーで指定された HTTP セッション・タイムアウト後にユーザー・セッションが閉じられます。 <code>false</code> に設定した場合、または定義しない場合、ユーザーがアプリケーションを閉じるまでセッションはアクティブです。	-

システム・プロパティおよびファイルを保存するための特定パスを指定するには、以下のようにします。

手順

1. QMF for Workstation の場合

- a. アプリケーション・インストール・ディレクトリーで、`eclipse.ini` ファイルを開きます。

- b. カスタマイズしたい値を持つパラメーターを `-D` 接頭部とともに追加し、新しい保管場所のパスを指定します。例えば、`-D.instance.area=C:¥work¥` のように指定します。
 - c. `eclipse.ini` ファイルを保存します。
2. QMF for WebSphere の場合:
- a. クライアント・マシンで Web ブラウザーを開き、適切な URL を入力して、WebSphere 管理コンソールを開始します。
 - b. 「プロセス定義」にナビゲートし、Java 仮想マシンの「カスタム・プロパティ」で、変更したいパラメーターに応じて、必要なプロパティ `.instance.area.global`、`.instance.area.shared`、`.instance.area`、または `.use.session.timeout` を追加します。
 - c. 追加したパラメーターを保存します。

第 3 章 環境の構成

QMF for Workstation および QMF for WebSphere 向けの環境の構成には、いくつかの管理ステップが含まれます。

この章では、管理用タスクの概要を示します。これは、環境を構成する前に、幅広い概念についての理解を得ていただくことを目的としています。管理用タスクには、以下のものがあります。

1. 企業内のリレーショナル・データ・ソースにアクセスするために必要な接続データをセットアップする。企業内のリレーショナル・データ・ソースにアクセスするために使用される JDBC ドライバー・ファイルのロケーションを指定する必要があります。
2. データ・ソース定義および作成したコンテンツを入れるためのリポジトリを作成する。
3. ユーザーがリポジトリに接続し、構成されたデータ・ソースと QMF コンテンツにアクセスするために使用する方法を定義する。

JDBC ドライバーの構成

QMF for Workstation および QMF for WebSphere は、JDBC ドライバーを使用してリレーショナル・データ・ソースに接続します。この製品には、一般的な JDBC ドライバー (Db2、Informix[®]、Oracle、MySQL、SQL Server、Derby) 用のそれぞれの構成情報がプリロード済みです。しかし、製品に実際の JDBC ドライバー・ファイルは含まれていません。QMF for Workstation および QMF for WebSphere がドライバーをロードして使用するためには、管理者が JDBC ドライバー・ファイルのロケーションを定義する必要があります。ドライバー・ファイルのロケーションを定義する必要があるのは、QMF 製品を使用してアクセスする予定があるデータベース・タイプについてのみです。

リポジトリの定義

以前のバージョンの QMF for Workstation および QMF for WebSphere は、サーバー定義ファイル (SDF) を使用して、アクセス可能なデータ・ソースのロケーションを QMF 製品内に保管していました。最新のリリースでは、SDF の代わりにコンテンツ・リポジトリが使用されています。以前の SDF によるアプローチに比べて、リポジトリを使用する方法では、以下の主な点が改善されています。

- リポジトリの用途はデータ・ソース (サーバー) 定義の保管だけに限られません。QMF 内で作成されたすべてのコンテンツ (照会、書式、報告書、ダッシュボード、結果セット、スケジュール済みジョブなど) を保管することができます。これは、Db2 以外のデータ・ソースに対して実行されるコンテンツを作成するとき、QMF カタログ内での保管が適切でない場合に役立ちます。
- リポジトリには、特定の QMF ユーザーの環境を調整する機能があります。例えば、照会、報告書およびダッシュボードを、北米のユーザーの場合は米国ベースのデータ・ソースを使用するように、ヨーロッパのユーザーの場合にはヨーロッパのデータ・ソースを使用するようにルーティングすることができます。デー

タ・ソースのこのようなマッピングは動的に行われるので、基礎となる QMF オブジェクトを変更する必要はありません。

- 同様に、リポジトリには、QMF オブジェクトの表示をユーザーごとに、または地域に基づいて調整する機能があります。ビジネス・ユーザーに対してはビジネスの視点で整理された一連のフォルダーを表示するようにし、技術ユーザーに対しては使用可能なオブジェクトを示したデータベースを中心としたツリーを表示することができます。

リポジトリは、任意のリレーショナル・データベース内に保管できます。QMF カタログの場合と同様に、リポジトリは、ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを介してアクセス可能な表のセットで構成されています。リポジトリ表は、実動データと同じデータベース内に配置することも、リポジトリとして使用するために別個に作成されたスタンドアロン・データベース内に配置することもできます。リポジトリは、基本的には、構造化された形式の SDF ファイルに機能を追加したものです。そのため、サーバーとして Db2 on LUW、Informix、Oracle、SQL Server または MySQL などの分散データベースを使用することができます。

リポジトリには、オプションでセキュリティー・モデルを指定することができます。リポジトリ・セキュリティーを使用することを選択した場合、ユーザーごと、およびグループごとにリポジトリ・コンテンツを制御することが追加で可能になります。例えば、グループ A のユーザーがデータ・ソース A、B、および C を参照し、他方でグループ B のユーザーがデータ・ソース A、D、および E を参照できます。許可は、すべての QMF オブジェクト (照会、フォーム、プロシージャ、ダッシュボード、および個々のワークスペース・フォルダーなど) に適用できます。

リポジトリ・セキュリティーを使用することを選択した場合、以下のいずれかの方法を使用できます。

- LDAP/Active Directory: QMF は、外部 Active Directory または LDAP ベースのサービスを使用してユーザーを認証し、ユーザーとグループのリストを取得します。
- データベース・セキュリティー: QMF は、セキュリティー・モデルの基盤としてユーザーのデータベース・ログオンを使用します。このアプローチは、QMF カタログのセキュリティー・モデルと同じです。
- 内部セキュリティー: ユーザーとグループを、QMF 自体の中で直接定義できます。

QMF は、パーソナル・リポジトリもサポートしています。パーソナル・リポジトリは、QMF 組み込みデータベース・エンジン内に保管されます。このタイプのリポジトリは、個人での使用を意図したもので、リレーショナル・データベースがなくても、コンテンツをローカル・ワークステーションに保管する手段を提供します。

ユーザーがリポジトリに接続する方法を定義する

リポジトリが作成されたら、最後のステップとして、QMF for Workstation と QMF for WebSphere がリポジトリに接続するために使用する接続情報を作成します。この接続が定義されたら、QMF for Workstation のインストールと共に構

成情報を配布する準備ができています。製品をインストールするユーザーは、ソフトウェアを開くとすぐにリポジトリに接続されます。

インストール・プログラムと共に構成設定を配布する

環境の構成を終了したら、それを他のユーザーに使用してもらう準備ができたこととなります。最後のステップとして、以下を行います。

1. QMF ユーザーがアクセス可能な、リポジトリ内のデータ・ソースを定義します。
2. セットアップ・プログラムと共に構成情報を配布します。
3. 構成情報を QMF for WebSphere にコピーします。

第 4 章 リレーショナル・データ・ソース情報を QMF for Windows からインポート

「QMF for Windows 構成設定のインポート」ウィザードを使用すれば、既存のサーバー定義ファイルからリポジトリにリレーショナル・データ・ソース情報を追加できます。

このタスクについて

QMF for Workstation を初めて起動すると、「QMF for Windows 構成設定のインポート」ウィザードが自動的に開きます。このウィザードは、「ファイル」 > 「インポート」 > 「QMF for Windows 構成設定」を選択しても開くことができます。

注: QMF for Windows バージョン 8.1 および QMF for WebSphere バージョン 8.1 およびそれ以前のデータ・ソースは、SDF 内のサーバーと呼ばれていました。

関連データ・ソース情報を QMF for Windows からインポートするには、以下のようになります。

手順

1. 「QMF for Windows 構成設定のインポート」ウィザードの最初のページで、インポートする設定を選択します。
2. 「前回使用されたサーバー定義ファイルの内容のインポート先を指定」を選択し、関連データ・ソース情報を新規のパーソナル・リポジトリに追加するか、現行リポジトリに追加するか選択します。「次へ」をクリックします。

注: 初めて QMF for Workstation を実行する場合は、現行リポジトリ・オプションは選択できません。新規パーソナル・リポジトリ・オプションを選択した場合、作成されるリポジトリの名前は、内容のインポート元となるサーバー定義ファイルの名前と同じになります。この名前を持つリポジトリがすでに存在する場合、または禁止された記号が名前に含まれている場合は、有効な固有名を入力するように指示されます。

3. ユーザー認証情報と検索フィルター設定を追加するには、「サーバー関連情報のインポート」チェック・ボックスを選択します。
4. 「QMF for Windows 構成設定のインポート」ウィザードの 2 ページ目でサーバー定義ファイルを指定します。サーバー定義ファイルへのデフォルト・パスが自動的に指定されます。サーバー定義ファイルがデフォルト・パスにない場合は、正しいパスを「ファイル・パス」フィールドに指定します。
5. エンコード・タイプを「エンコード」リストから選択します。エンコードが正しければ、指定したファイルの内容をプレビュー域に表示できます。
6. 必要に応じて、「パッケージのバインド」を選択して構成パッケージを準備し、「次へ」をクリックします。
7. 設定を編集するサーバーを「見つかったサーバー」リストから選択します。サーバー定義ファイルに定義されている各サーバーがリストに表示されます。

8. 選択したサーバーへの接続パラメーターを変更するには、「別名」フィールド、「URL」フィールド、および「ドライバー」フィールドを編集します。「パッケージのバインド」を選択した場合は、「次へ」をクリックして先に進みます。それ以外の場合は、「終了」をクリックしてインポート処理を完了します。
9. パッケージをバインドする対象のデータ・ソースのリストを「QMF カタログ」テーブルで検討します。
10. パッケージ・バインドの設定を指定します。一部の設定はデフォルトで指定されています。次の表はデフォルト値をリストしたものです。

表 6. バインド設定

設定	デフォルト値
パッケージの集合 ID	QMF11
パッケージに対する許可を付与	PUBLIC
データベース・ユーザー名およびデータベース・パスワード	許可パラメーターが、選択されたサーバー定義ファイルからインポートされます。注: 複数のデータ・ソースを異なる許可情報で選択すると問題が発生する可能性があります。

11. 「終了」をクリックして、インポート処理が完了するまで待機します。

QMF for Windows 設定

QMF for Windows 設定を QMF for Workstation にインポートすることができます。

次の表は、「QMF for Windows 構成設定のインポート」ウィザードを使用してインポートできる QMF for Windows 設定のリストを示しています。

表 7. QMF for Windows からインポートできる設定

設定	説明	QMF for Windows での表示方法	QMF for Workstation での表示方法
お気に入り	「お気に入り」フォルダーの内容	「データベース・エクスプローラー」ツリーを開きます	「パーソナル」ビューを開きます
最近使用したオブジェクト	最近使用したオブジェクトのリスト	「データベース・エクスプローラー」ツリーを開きます	「パーソナル」ビューおよび「リポジトリ・エクスプローラー」ビューを開きます
グローバル変数	グローバル変数のリスト	「ビュー」>「グローバル変数」を選択します	「ビュー」>「設定」>「グローバル変数」を選択します
保存された結合定義	指示照会エディターまたは照会ビルダー・エディターで結合済みの表に関する情報に基づいて、自動的に追加される結合のリスト		
エクスポート設定	ファイルまたはデータベースへの照会結果のエクスポートおよび報告書のエクスポート・タイプの設定	「結果」>「ファイルに保存」または「結果」>「データベースに保存」を選択します	「ファイル」>「エクスポート」を選択します
LOB オプション	LOB オブジェクト設定	「ビュー」>「オプション」>「LOB」を選択します	「ビュー」>「設定」>「LOB」を選択します

表 7. QMF for Windows からインポートできる設定 (続き)

設定	説明	QMF for Windows での表示方法	QMF for Workstation での表示方法
グリッド・オプション	デフォルトのフォント・プロパティ、フォーマット・オプション、セルの色、およびその他のグリッド設定	「結果」 > 「フォントおよび結果」 > 「フォーマット」を選択します	「結果」 > 「フォントおよび結果」 > 「フォーマット」を選択します
ページ設定	印刷に使用されるページ設定	「ファイル」 > 「ページ設定」を選択します	「ファイル」 > 「ページ設定」を選択します
ユーザー・インターフェース設定	言語、デフォルト・フォント、NULL 値の表示オプションなどのユーザー・インターフェースの設定	「ビュー」 > 「オプション」 > 「一般およびビュー」 > 「オプション」 > 「外観」を選択します	「ビュー」 > 「設定」 > 「一般およびビュー」 > 「設定」 > 「外観」を選択します
コマンド・バー履歴	コマンド・バーに入力されたコマンドの履歴		
サーバー - 関連設定	ユーザー認証情報および検索フィルター設定 注: この設定が使用可能かどうかは、「前回使用されたサーバー定義ファイルの内容のインポート先を指定」オプションによって決まります。		

第 5 章 製品および環境の構成の考慮事項

製品を構成する前に考慮すべきいくつかの事柄があります。

このセクションでは、構成プロセスを開始する前に幅広く概念を理解しておくために役立つ、管理タスクの概要について説明します。

1. JDBC ドライバー・ファイルの場所を指定して、企業内のリレーショナル・データ・ソースにアクセスするために必要な接続データをセットアップする。これらのファイルは、企業内のリレーショナル・データ・ソースにアクセスするために使用されます。
2. データ・ソース定義および作成したコンテンツを入れるためのリポジトリを作成する。
3. ユーザーがリポジトリに接続し、構成されたデータ・ソースと QMF コンテンツにアクセスするために使用する方法を定義する。

リレーショナル・データ・ソースへの接続

JDBC を使用したリレーショナル・データ・ソースへの接続: JDBC ドライバーを使用して、リレーショナル・データ・ソースに接続できます。この製品には、一般的な JDBC ドライバー (Db2、Informix、Oracle、MySQL、SQL Server、Derby など) 用のそれぞれの構成情報がプリロード済みです。しかし、製品に実際の JDBC ドライバー・ファイルは含まれていません。QMF for Workstation および QMF for WebSphere がドライバーをロードして使用するためには、管理者が JDBC ドライバー・ファイルのロケーションを定義する必要があります。QMF 製品を使用してアクセスする予定のデータベース・タイプに対しては、ドライバー・ファイルの場所を定義する必要があります。

リポジトリの定義

以前のバージョンの QMF for Workstation および QMF for WebSphere は、サーバー定義ファイル (SDF) を使用して、アクセス可能なデータ・ソースのロケーションを QMF 製品内に保管していました。最新のリリースでは、SDF の代わりにコンテンツ・リポジトリが使用されています。以前の SDF によるアプローチに比べて、リポジトリを使用する方法では、以下の主な点が改善されています。

- リポジトリの用途はデータ・ソース (サーバー) 定義の保管だけに限られません。QMF 製品内で作成されたすべてのコンテンツ (照会、書式、報告書、ダッシュボード、結果セット、スケジュール済みタスクなど) を保管することができます。これは、Db2 以外のデータ・ソースに対して実行されるコンテンツを作成するとき、QMF カタログ内での保管が適切でない場合に役立ちます。
- リポジトリには、特定の QMF ユーザーの環境を調整する機能があります。例えば、照会、報告書およびダッシュボードを、北米のユーザーの場合は米国ベースのデータ・ソースを使用するように、ヨーロッパのユーザーの場合にはヨーロッパのデータ・ソースを使用するようにルーティングすることができます。データ・ソースのこのようなマッピングは動的に行われるので、基礎となる QMF オブジェクトを変更する必要はありません。

- 同様に、リポジトリには、QMF オブジェクトの表示をユーザーごとに、または地域に基づいて調整する機能があります。ビジネス・ユーザーに対してはビジネスの視点で整理された一連のフォルダーを表示するようにし、技術ユーザーに対しては使用可能なオブジェクトを示したデータベースを中心としたツリーを表示することができます。

リポジトリは、任意のリレーショナル・データベース内に保管できます。QMF カタログの場合と同様に、リポジトリは、ストアード・プロシージャーまたは静的 SQL パッケージを介してアクセス可能な表のセットで構成されています。リポジトリ表は、実動データと同じデータベース内に配置することも、リポジトリとして使用するために別個に作成されたスタンドアロン・データベース内に配置することもできます。リポジトリは、基本的には、構造化された形式の SDF ファイルに機能を追加したものです。そのため、サーバーとして Db2 on LUW、Informix、Oracle、SQL Server または MySQL などの分散データベースを使用することができます。

リポジトリには、オプションでセキュリティー・モデルを指定することができます。リポジトリ・セキュリティーを使用することを選択した場合、ユーザーごと、およびグループごとにリポジトリ・コンテンツを制御することが追加で可能になります。例えば、グループ A のユーザーがデータ・ソース A、B、および C を、グループ B のユーザーがデータ・ソース A、D、および E を表示できるようにすることができます。許可は、すべての QMF オブジェクト (照会、フォーム、プロシージャー、ダッシュボード、個々のワークスペース・フォルダーなど) に対して適用できます。

リポジトリ・セキュリティーを使用することを選択した場合、以下のいずれかの方法を使用できます。

- LDAP/Active Directory: QMF は、外部 Active Directory または LDAP ベースのサービスを使用してユーザーを認証し、ユーザーとグループのリストを取得します。
- データベース・セキュリティー: QMF は、セキュリティー・モデルの基盤としてユーザーのデータベース・ログオンを使用します。このアプローチは、QMF カタログのセキュリティー・モデルと同じです。
- 内部セキュリティー: ユーザーとグループを、QMF 自体の中で直接定義できます。

QMF は、パーソナル・リポジトリもサポートしています。パーソナル・リポジトリは、QMF 組み込みデータベース・エンジン内に保管されます。このタイプのリポジトリは、個人での使用を意図したもので、リレーショナル・データベースがなくても、コンテンツをローカル・ワークステーションに保管する手段を提供します。

ユーザーがリポジトリに接続する方法を定義する

リポジトリが作成されたら、最後のステップとして、QMF for Workstation と QMF for WebSphere がリポジトリに接続するために使用する接続情報を作成します。この接続が定義されたら、QMF for Workstation のインストールと共に構成情報を配布する準備ができています。製品をインストールするユーザーは、ソフトウェアを開くとすぐにリポジトリに接続されます。

インストール・プログラムと共に構成設定を配布する

上記の管理ステップを完了したら、QMF 環境は使用する準備ができています。最後のステップとして、以下を行います。

1. QMF ユーザーがアクセス可能な、リポジトリ内のデータ・ソースを定義します。
2. セットアップ・プログラムと共に構成情報を配布します。
3. 構成情報を QMF for WebSphere にコピーします。

クイック・スタート・ウィザードを使用したリポジトリの構成およびデータベースへの接続

クイック・スタート・ウィザードを使用して、初めての使用または個人使用のために QMF for Workstation を構成し、以下のタスクを実行します。

1. JDBC ドライバー・ライブラリーの定義
2. リポジトリ接続の定義および確立
3. データ・ソースの追加

クイック・スタート・ウィザードの使用については、『クイック・スタート・ウィザードを使用したリポジトリの構成とデータベースへの接続』を参照してください。

第 6 章 概説

管理者は、照会、報告書、およびビジュアル・ダッシュボードの作成に必要なデータ・ソースにユーザーがアクセスできるように、QMF を構成します。

通常、構成タスクは、アドミニストレーターが QMF アドミニストレーター・コンポーネントから実行します。アドミニストレーター・コンポーネントは、処理を容易にするためのさまざまなビュー、パースペクティブ、およびエディターで構成されています。これらのビュー、パースペクティブ、およびエディターについては、製品概要ヘルプにある『パースペクティブ、ビュー、およびエディター』を参照してください。

QMF を構成する作業は、以下のタスクに分けることができます。

- リポジトリを設定し、データベースに接続します。

これには、以下のサブタスクが含まれます。

- JDBC ドライバー・ライブラリーの定義
- リポジトリ・ストレージの構成
- リポジトリの作成
- データベースへの接続の定義
- ユーザーがデータをやり取りする方法を定義したり QMF ユーザー・コンポーネントでユーザーに表示される内容を決定したりするデータ・ソース、ワークスペース、および環境をリポジトリに取り込みます。

これには、以下のサブタスクが含まれます。

- 仮想データ・ソースの作成
- ワークスペースの設定
- エンティティ・リレーションシップ (ER) ダイアグラムの作成
- 環境のセットアップ
- データにアクセスするための許可を設定します。

このアクティビティには、以下のサブタスクが含まれます。

- リポジトリ・オブジェクトを使用するためのユーザーおよびグループ許可の割り当て
- リソースおよび使用量を管理します。

QMF では、アドミニストレーターは、リソース限界を設定したり管理したりすることで使用量を最適化できます。

リソースおよび使用量の管理には、以下のタスクが含まれます。

- データ・ソース・リソース限界の設定
- リソース限界グループの作成
- グループ・スケジュールの設定

- リソース限界グループへのユーザーの割り当て

アドミニストレーターは、QMF を構成した後でリポジトリ接続を作成します。ユーザーは、リポジトリ接続を使用してデータにアクセスします。

QMF for Workstation または QMF for WebSphere を使用した構成の作成

QMF for WebSphere アドミニストレーター・コンポーネントまたは QMF for Workstation アドミニストレーター・コンポーネントを使用すれば、複数ユーザー用に QMF を構成できます。

QMF を構成する方式は、ユーザーの好みで選択できます。次のダイアグラムは両方の方式を表したものです。

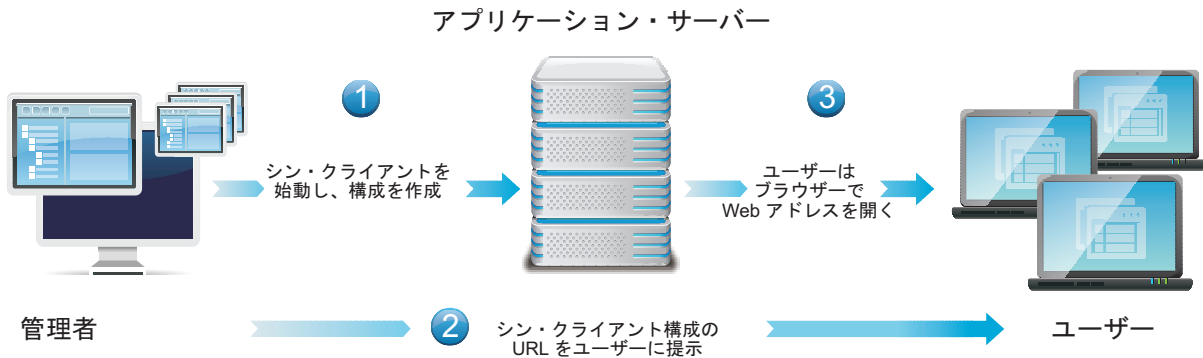


図 1. QMF for WebSphere を使用した複数ユーザー用の QMF の構成

1. ご使用の Web ブラウザーで QMF for WebSphere を開始します。
2. アドミニストレーター・コンポーネントを使用して共有構成の構成手順を完了します。
3. ユーザーに URL を知らせます。

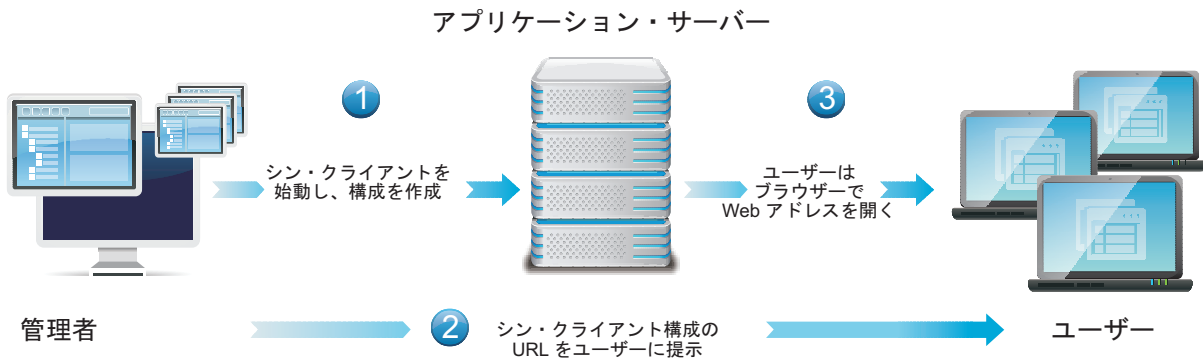


図 2. QMF for Workstation を使用した複数ユーザー用の QMF の構成

1. アドミニストレーター・コンポーネントを使用して、自分のワークステーションで QMF for Workstation を構成します。

構成手順が完了すると、*repositories.xml* ファイルと *.bi.jdbc.drivers* ファイルが更新されます。

2. インストーラー実行可能ファイル (またはサイレント・インストール・オプション・ファイル) を共有ファイル・サーバーに置き、QMF for Workstation の「ファイル」 > 「エクスポート」機能を使用して、リポジトリ接続情報や JDBC ドライバー情報が含まれている *settings.xml* ファイルを共有ファイル・サーバーにエクスポートします。

サイレント・インストール用の応答ファイルを作成する方法については、『サイレント・インストール・オプション・ファイルの作成』を参照してください。

3. ユーザーは、ファイル・サーバーにある共有ディレクトリーにアクセスし、インストーラー GUI またはサイレント・インストールを実行して QMF for Workstation をインストールします。

ユーザーがインストーラーを実行すると、*settings.xml* 内の構成データが、インストールされるアプリケーションに適用されます。その結果、ユーザーは QMF を開始すると、リポジトリに接続され、アドミニストレーターで構成で決定されたデータ・ソースにアクセスできます。

第 7 章 設定

「設定」ダイアログは、特定の QMF オブジェクトおよび機能に適用されるユーザー設定を行うために使用されます。

「設定」ウィンドウは 2 つのペインで構成されています。左ペインには設定グループのリストが表示され、右ペインには選択したグループのページが表示されます。以下の設定グループが、「設定」ウィンドウに表示されます。

一般設定

「設定」ウィンドウの「一般」ページを使用して、言語、方向、地域設定、およびオブジェクトのデフォルト・アクションを指定します。

このタスクについて

QMF アプリケーション・インターフェース現行セッションの一般ユーザー設定を指定するには:

手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。ツリーから「一般」を選択します。
2. 条件: 「設定」ウィンドウでオプションとして選択できる場合は、サポートされる言語の「言語」ドロップダウン・リストからアプリケーション・インターフェースの現行セッションに使用する言語を選択します。値「自動」を選択すると、現行マシンのローカル言語が使用されます。
3. 「方向」ドロップダウン・リストから、QMF アプリケーション・インターフェース現行セッションで情報を表示するために使用される方向を選択します。「左から右」または「右から左」を選択できます。「自動」を選択して、現行マシンのデフォルトの方向を使用することもできます。
4. 「数値、通貨、時刻、日付の地域設定」ドロップダウン・リストから、QMF アプリケーション・インターフェース現行セッションで数値、通貨、時刻、および日付を表示するために使用される言語を選択します。値「自動」を選択すると、現行マシンのローカル言語が使用されます。
5. 「オブジェクトのデフォルト・アクション」ラジオ・ボタンの 1 つをクリックして、エクスプローラー・ツリーに含まれるオブジェクトをダブルクリックしたときに QMF が実行するアクションを指定します。「オブジェクトの実行」を選択すると、選択されたオブジェクトを実行します。「オブジェクトの表示」を選択すると、オブジェクトの SQL コンテンツを表示します。
6. 新しい照会に対してデフォルトでビジュアル照会編集機能が開かれるタブを、「照会編集機能のデフォルト・タブ」領域で指定できます。
7. 「スケジューラー・タイプ」領域で、スケジュール・タスクに使用するスケジューラーを以下のように選択します。
 - アプリケーション・スケジューラーと連動する「**QMF for Workstation** スケジューラー」オプションを選択します。

- オペレーティング・システム・スケジューラーと連動する「ネイティブ」オプションを選択します。

制約事項: 「ネイティブ」が選択されている場合、ユーザー・アカウント制御が無効に設定されている Windows 7 または Windows Vista にインストールされている 64 ビット・アプリケーションではスケジュール・タスクは予定どおりに実行されません。

8. 「行幅」の省略符号 (...) をクリックするか、または最大行幅の値を入力します。

行幅に使用できる値は 10 から 1000 までです。デフォルト値は 79 です。

この値は、SQL テキストに対する「照会」メニュー項目の「テキストの再フォーマット」に使用されます。

さらに、「行幅」フィールドに指定された値は、以下の制御を行います。

- リポジトリ・ストレージまたは QMF カタログを作成または更新するときに表示される DDL スクリプトの行の最大長を制御します。
 - 「更新スクリプトのエクスポート」ウィザードを実行したときに生成される DDL スクリプトの最大線長を制御します。
9. 「進行状況」ダイアログに表示される長時間稼働操作をバックグラウンドで実行して、その他の作業を妨げないようにするには、「常にバックグラウンドで実行」チェック・ボックスを選択します。
 10. エディターの「結果」タブを初めてクリックしたときに QMF オブジェクトを自動的に実行するには、「「結果」タブをクリックすることで常にオブジェクトを実行」チェック・ボックスを選択します。
 11. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
 12. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
 13. 「OK」をクリックして「設定」ウィンドウを閉じます。

外観設定

「設定」ウィンドウの「外観」ページを使用して、デフォルトのフォント、カラー・スキーム、特殊値の表示および入力のためのストリングを指定します。そのページで、カスタム・ウィンドウ・サイズを保管することも選択できます。

このタスクについて

外観の設定を行うには以下のようにします。

手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。ツリーから「外観」を選択します。
2. 「デフォルト・フォント」領域で、照会結果の見出しや列、標準の報告書のフォント・タイプを定義します。
3. データベース・データ・ソースから取り出された NULL 値を QMF が表示するために使用するストリングを、「NULL 値の表示」フィールドに指定します。

4. 「NULL 値の入力」フィールドに、NULL 値を照会結果に入力するとき、または表エディターを使用してデータベース表に入力するとき使用するストリングを指定します。
5. 「デフォルト値の入力」フィールドに、デフォルト値を照会結果に入力するとき、または表エディターを使用してデータベース表に入力するとき使用するストリングを指定します。
6. 「テキスト・エディターのカラー・スキーム」ドロップダウン・リストから、テキスト・エディターでサポートされるカラー・スキームのタイプを選択します。ほとんどの場合、テキスト・エディターで使用されるデフォルトのカラー・スキームを許容することを指定するために、「QMF」を選択することになります。ハイコントラスト・モードで作業する場合は、「システム・デフォルト」を選択する必要があります。
7. 高解像度ディスプレイを使用する場合は、「アイコン・サイズ」領域にある「大きいアイコンを表示」チェック・ボックスを選択し、すべてのアイコンのサイズを倍にします。
8. アプリケーション内でウィンドウのサイズと位置をカスタマイズして、その変更を保存する場合は、「ウィンドウ・サイズ」領域で「カスタム・ウィンドウのサイズと位置の保存」チェック・ボックスを選択します。変更を元に戻すには、チェック・ボックスをクリアします。
9. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
10. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
11. 「OK」をクリックして、「設定」ダイアログ・ボックスを閉じます。

監査システムの設定

「設定」ウィンドウの「監査」ページを使用して、QMF の監査システムを使用可能にして構成します。

このタスクについて

監査システムを使用可能にして構成するには、以下のようになります。

手順

1. メインメニューから「ビュー」 > 「設定」を選択します。
2. ウィンドウの左側にある「監査」をクリックします。
3. 「監査を有効にする」チェック・ボックスを選択します。
4. 失敗したイベントのみを記録するように監査システムを設定するには、「失敗したイベントのみ記録する (Record failed events only)」チェック・ボックスを選択します。
5. 「バックアップ間隔 (日数) (Backup interval (days))」フィールドに、データベース・バックアップ・ファイルの作成頻度を定義する時間間隔を指定します。

注: バックアップ・ファイルが作成されると、元のデータベースはクリアされません。

6. 「(日数) より古いすべてのバックアップ・ファイルを削除 (**Delete all backup files older than (days)**)」 フィールドに、削除するデータベース・バックアップ・ファイルの経過日数を指定します。
7. 「ユーザーの **SQL** ステートメントを記録する (**Record SQL statements for users**)」 チェック・ボックスを選択して、データベースに対する照会のためにユーザーが作成した **SQL** ステートメントを記録するように監査システムを設定します。
 - すべてのユーザーが作成した **SQL** ステートメントを記録するには、「すべてのユーザー (**All Users**)」を選択します。
 - 「ユーザーの指定 **...(Specify Users...)**」 ボタンをクリックして「データ・ソース・ユーザー」ダイアログを開き、特定のユーザーを指定します。変更を受け入れる場合は「**OK**」をクリックし、変更を保存せずにダイアログを終了する場合は「キャンセル」をクリックします。
8. 「適用」をクリックして設定を適用し、ページに留まるか、「**OK**」をクリックして設定を適用し、ウィンドウを閉じます。

タスクの結果

監査が有効になると、監査システムによって収集されたすべての情報が H2 データベース内の **AUDIT** スキーマの下の表に保存されます。このデータベースは、アプリケーション・データ・フォルダーに作成されます。すべての表の要約情報が **AUDIT_VIEW** 表に表示されます。監査レコードの読み取りについては、241 ページの『第 27 章 監査システムの使用』を参照してください。

ダッシュボード・ランタイムの設定

「設定」ダイアログの「ダッシュボード・ランタイム」のページを使用して Google Map API キーを指定します。

このタスクについて

QMF アプリケーション・インターフェースの現行セッションのダッシュボード・ランタイム・ユーザー設定を指定するには、次のようにします。

手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。ツリーから「ダッシュボード・ランタイム」を選択します。
2. 「ダッシュボード・ランタイム」の値を設定します。Google Code の Web サイトから Google Map API を取得できます。
 - 「**Google マップ JavaScript API キー**」フィールドに Google マップ JavaScript API キーを指定して、Google マップ・レイアウト・オブジェクトをビジュアル・ダッシュボード内で **HTML5** レンダリング・モードで使用できるようにします。

Google Developers Web サイトから Google Maps JavaScript API を取得できます。

- 「**NULL** 値の表示」を設定し、NULL 値をダッシュボードにどのように表示するかを指定します。

3. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
4. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
5. 「OK」をクリックして、「設定」ウィンドウを閉じます。

SMTP および E メールの設定

「設定」ウィンドウの「E メール」ページを使用して、使用可能な SMTP サーバーと、アプリケーションからの E メール通知のリストを指定します。

このタスクについて

これ以降のトピックで、SMTP サーバー設定を指定する方法と、スケジュール済みタスクからの E メール通知を設定する方法について説明します。

SMTP サーバー設定

「設定」ウィンドウの「SMTP」領域を使用して、使用可能な SMTP サーバーのリストを指定します。

このタスクについて

一般的に使用される SMTP サーバーのパラメーターを「SMTP」領域に定義しておくこと、ユーザーが当該サーバーを使用して E メール・メッセージを送信する必要があるたびにそれらのパラメーターを指定する必要がなくなります。例えば、SMTP サーバーのパスワードの有効期限が切れた場合、「SMTP」領域でパスワードを 1 回変更するだけで済み、その SMTP サーバーを使用するすべてのオブジェクトの許可情報を更新する必要はありません。

「SMTP」領域にリストされているサーバーは、以下の各プロシージャで使用できます。

- 「メールの送信」アクションのビジュアル・プロジェクトへの追加
- 「ファイル」 > 「送信先」コマンドを使用した、E メール・メッセージの送信
- MAIL TO プロシージャ・コマンドを使用した、E メール・メッセージの送信

SMTP サーバー設定を指定するには、以下のようになります。

手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択して「設定」ウィンドウを開きます。ツリーから「E メール」を選択して、「SMTP」領域にナビゲートします。
2. 「サーバーの追加」をクリックして、新規サーバーをリストに追加します。
3. 「SMTP」ウィンドウで、SMTP サーバーの名前、アドレス、ポート番号などの SMTP サーバーのパラメーターを指定します。
4. オプション: SMTP サーバーで認証が必要な場合は、「SMTP 認証の使用」を選択し、「ユーザー」および「パスワード」フィールドにユーザー名とパスワードを指定します。
5. オプション: アクセス権限の設定を追加で指定する必要がある場合は、「拡張」をクリックして「拡張 SMTP 設定」ウィンドウを開きます。このウィンドウでは、javamail でサポートされる必要なキーワードを追加できます。「OK」をクリックします。

6. 「OK」をクリックして「SMTP」ウィンドウを閉じてから、「適用」をクリックして設定の選択内容を保存します。

ヒント: SMTP 設定を一括して制御するには、「有効」チェック・ボックスを選択するかクリアします。

7. オプション: デフォルト設定を復元する必要がある場合は、「デフォルトの復元」をクリックします。
8. 「OK」をクリックして「設定」ウィンドウを閉じます。

E メール通知設定の指定

失敗したスケジュール・タスクに関して、デバッグ情報と一緒に送信される E メール通知のリストを一括して構成することができます。この情報は、スケジュール・タスクに関する問題を早急に修正するのに役立ちます。

始める前に

注: リモート・タスクの場合、設定は Web サーバーで指定する必要があります。

このタスクについて

E メール通知を構成するには、以下のようにします。

手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択して「設定」ウィンドウを開きます。ツリーから「E メール」を選択します。
2. 「E メール通知」領域で、「通知の追加」をクリックして通知を送信するための構成を追加します。
3. 「E メール通知設定」ウィンドウで、通知の名前を「名前」フィールドに入力します。
4. 「メッセージ・プロパティ」領域で、以下の設定を指定します。
 - 本文テキストのフォーマットを「フォーマット」リストから選択します。使用可能な形式は、「テキスト」と「HTML」です。
 - E メールを送信する必要がある送信先アドレスを「宛先」フィールドに指定します。
 - E メールの写しを送信する必要がある送信先アドレスを「cc」フィールドに指定します。
 - E メールを送信する必要がある送信元アドレスを「送信元」フィールドに指定します。
5. SMTP サーバー・パラメーターを指定する場合は、「SMTP 設定」をクリックします。「SMTP 設定」ウィンドウで、管理者によって事前定義されたサーバーを使用するか、カスタム・サーバーを使用するかを指定します。
 - a. 事前定義された SMTP サーバーを使用する場合は、事前定義されたサーバーのリストからサーバーを選択します。または「サーバーの追加」をクリックして SMTP サーバーを作成します。
 - b. カスタム・サーバーを使用する場合は、サーバーのアドレスやポート番号などのサーバー・パラメーターを指定します。SMTP サーバーに認証が必要な場合は、「SMTP 認証の使用」を選択し、ユーザー名とパスワードを指

定します。アクセス権限の設定を追加で指定する必要がある場合は、「拡張」をクリックして「拡張 SMTP 設定」ウィンドウを開きます。このウィンドウでは、javamail でサポートされるキーワードを追加できます。「OK」をクリックします。

「OK」をクリックして、「SMTP 設定」ウィンドウを閉じます。

6. 「OK」をクリックして、指定した通知設定を保存します。指定した通知が「Eメール通知」領域に表示されます。「タスク・リスト」ウィンドウで特定のタスクに対して選択することができます。

ヒント: 通知を一括して制御するには、「有効」チェック・ボックスを選択するかクリアします。

グローバル変数を使用した作業

グローバル変数は、QMF の現行セッションがアクティブである期間中、アクティブであり続ける変数です。これは、オブジェクト (照会、書式、プロシージャー) の実行中にのみアクティブである置換変数とは対照的です。

置換変数を使用するオブジェクトの場合、値はオブジェクトの実行時にウィンドウで入力します。オブジェクトの実行後、変数および使用した値は残りません。グローバル変数を使用するオブジェクトの場合、グローバル変数に現在定義されている値が使用されます。

グローバル変数には、2 つのタイプがあります。

- システム・グローバル変数は、QMF アプリケーションにプリロードされています。つまり、その値は QMF アプリケーションをオープンするたびに再初期化されます。システム・グローバル変数は、DSQQW、DSQAO、DSQEC、DSQDC、および DSQCP という文字列で始まります。システム・グローバル変数は、追加または削除することはできません。ただし、システム・グローバル変数のデフォルト値を編集することは可能です。
- ユーザー・グローバル変数はユーザーが定義します。ユーザー・グローバル変数には、文字 DSQQW、DSQAO、DSQEC、DSQDC、および DSQCP で始まる名前を除いて、任意の固有の名前を指定できます。ユーザー大域変数の値は、現行セッションの間だけ使用することも、永続的に使用することもできます。QMF クライアント・コンポーネントを使用して、ユーザー・グローバル変数を処理します。

「設定」ウィンドウの「グローバル変数」ページを使用して、ユーザー・グローバル変数を表示、追加、削除、および編集できます。また、システム・グローバル変数の値を編集できます。

ユーザー変数の指定

「設定」ウィンドウの「大域変数」ページを使用して、ユーザー大域変数を表示、追加、削除、および編集します。

このタスクについて

ユーザー定義グローバル変数を表示、追加、編集、および削除するには:

手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。ツリーから「グローバル変数」を選択します。「グローバル変数」ページが開きます。
2. セッションに定義されたシステム・グローバル変数とユーザー・グローバル変数が、「変数」リスト・ボックスにリストされます。「名前」フィールドに、グローバル変数の名前がリストされます。「値」フィールドに、グローバル変数の現行値がリストされます。「変数存続時間」フィールドに、存続時間設定値がリストされます。
3. ユーザー定義変数を追加するには、「追加」ボタンをクリックします。「新規変数」ウィンドウが開きます。

- a. 「名前」フィールドに、新規ユーザー変数の名前を入力します。

注: 使用されていない、固有の文字の組み合わせを入力できます。ユーザー変数の先頭に、システム大域変数の接頭部である **DSQQW**、**DSQAO**、**DSQEC**、**DSQDC**、および **DSQCP** を使用しないでください。

- b. オプション: 「説明」フィールドに、「大域変数」ページの「説明」列に表示してユーザー変数を説明するテキストを入力します。
- c. 「値」フィールドに、ユーザー変数の初期値を入力します。
- d. 「変数存続時間」領域で、作成した変数の存続時間を以下のように選択します。
 - QMF の現行セッションが存続している間、変数を使用できるようにする場合は、「現行セッション」を選択します。
 - 変数を永続的に使用できるようにする場合は、「永続」を選択します。このオプションは、変数をさまざまなオブジェクトで使用し、他のユーザーに配布する場合に有用です。
- e. 「OK」をクリックします。

注: シン・クライアントのタスク・スケジューラーでユーザー変数を使用することはできません。

4. ユーザー変数の値を編集するには、変更する変数の「値」フィールドをクリックして、その変数の新しい値を入力します。
5. 永続ユーザー変数の説明を編集するには、変更する変数の「説明」フィールドをクリックして、テキストを入力します。

注: 現行セッション変数の説明は読み取り専用です。

6. ユーザー変数の存続時間を編集するには、変更する変数の「変数存続時間」フィールドをクリックして、この変数に適用する存続時間を選択します。
7. ユーザー変数を削除するには、「変数」リストから既存のユーザー変数を選択し、「除去」ボタンをクリックします。ユーザー変数が削除されます。
8. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
9. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
10. 「OK」をクリックして「設定」ダイアログを閉じます。

システム・グローバル変数値の編集

「設定」ダイアログの「グローバル変数」ページを使用して、任意のシステム・グローバル変数値を編集できます。

このタスクについて

システム・グローバル変数値を編集するには:

手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。ツリーから「グローバル変数」を選択します。「グローバル変数」ページが開きます。
2. システム・グローバル変数は「変数」リストに名前順にリストされています。システム・グローバル変数は、**DSQQW**、**DSQAO**、**DSQEC**、**DSQDC**、または**DSQCP** という接頭部で始まります。
3. 現行システム・グローバル変数値が「値」フィールドにリストされます。グローバル変数の値を編集するには、変更するシステム・グローバル変数の「値」フィールドをクリックします。「値」フィールドにシステム・グローバル変数の新しい値を入力します。
4. すべてのシステム・グローバル変数のデフォルト値を復元するには、「デフォルトの復元」をクリックします。
5. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
6. 「OK」をクリックして「設定」ウィンドウを閉じます。

ヘルプ設定

QMF for Workstation では、「設定」ウィンドウの「ヘルプ」ページを使用して、ヘルプ情報の表示方法に関するデフォルト値の指定、およびヘルプ・システムが使用する内部サーバーのインターフェースとポートの指定変更を行います。

このタスクについて

Web ブラウザー・アダプター設定を変更するには:

手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。ツリーから「ヘルプ」を選択します。
2. ヘルプ・システムは、「ヘルプ」ビューまたはブラウザーのどちらにでも情報を表示できます。ヘルプがブラウザーに表示される場合、ブラウザーは、組み込みブラウザーまたは外部のフル・ブラウザーのどちらでも使用できます。組み込みブラウザーがシステムでサポートされている場合、ヘルプはデフォルトでそれを使用してヘルプを表示します。常に外部のフル・ブラウザーを使用する場合は、ドロップダウン・リストから「外部ブラウザーを使用する」を選択します。
3. デフォルトで、ワークステーション・ウィンドウ用のコンテキスト・ヘルプは「ヘルプ」ビューに表示されます。ワークステーション・ウィンドウのコンテキスト・ヘルプを吹き出しヘルプで表示するには、ドロップダウン・リストから「ウィンドウのコンテキスト・ヘルプを吹き出しヘルプで表示する (**Open window context help in an infopop**)」を選択します。

4. デフォルトで、ダイアログ用のコンテキスト・ヘルプは「ヘルプ」ビューに似たダイアログのトレイに表示されます。ダイアログのコンテキスト・ヘルプを吹き出しヘルプで表示するには、ドロップダウン・リストから「ダイアログのコンテキスト・ヘルプを吹き出しヘルプで表示する (Open dialog context help in an infopop)」を選択します。
5. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
6. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
7. 「OK」をクリックして「設定」ウィンドウを閉じます。

リモート・サーバー上のヘルプ・コンテンツの組み込み

ヘルプ・システムには、ブラウザーにヘルプの内容を提供する内部サーバーが組み込まれています。この設定ページを使用して、内部サーバーが使用するインターフェースおよびポートを変更します。

このタスクについて

これらの設定は、問題が発生し、デフォルト設定ではヘルプを表示できない場合にのみ変更してください。

ヘルプ・サーバーが使用するインターフェースおよびポートを変更するには:

手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ダイアログが開きます。正符号をクリックすると、「ヘルプ」分岐が展開します。ツリーから「コンテンツ (Content)」を選択します。
2. 「リモート・インフォメーション・センターのヘルプ・コンテンツを組み込む」チェック・ボックスを選択します。「リモート・インフォメーション・センター (Remote Infocenter)」ウィンドウが有効になります。
3. 「追加」をクリックします。「新規インフォメーション・センターの追加」ウィンドウが開きます。
4. 「名前」フィールドに、サーバーが使用するローカル IP インターフェースの名前を指定します。
5. 「ホスト」フィールドに、サーバーが使用するローカル IP インターフェースのホストを指定します。
6. 「パス」フィールドに、サーバーが使用するローカル IP インターフェースの URL を指定します。
7. 「ポートを使用」を選択し、サーバーが listen する特定のポートの番号を指定します。
8. 「OK」をクリックします。「新規インフォメーション・センターの追加」ウィンドウが閉じて、制御が「設定」ウィンドウに戻ります。「リモート・インフォメーション・センター」ウィンドウに新しいインフォメーション・センターが表示されます。
9. インフォメーション・センターを編集するには、「編集」をクリックします。「[インフォメーション・センター名] インフォメーション・センターの編集」ウィンドウが開きます。

10. インフォメーション・センターを削除するには、「削除」をクリックします。選択したインフォメーション・センターがリストから削除されます。
11. 特定のインフォメーション・センターのプロパティーを表示するには、「プロパティーの表示」をクリックします。「[インフォメーション・センター名]のプロパティー」ウィンドウが開き、名前、ホスト、パス、ポート、URL が表示されます。
12. ローカル IP インターフェースへのインフォメーション・センターの接続をテストするには、「接続のテスト」をクリックします。「接続のテスト」ウィンドウが開き、テスト結果が表示されます。
13. インフォメーション・センターを削除せずに無効にするには、「使用不可」をクリックします。インフォメーション・センターが無効になり、「有効」列に表示される状況が無効に変わります。
14. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
15. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
16. 「OK」をクリックして、「設定」ウィンドウを閉じます。

JDDBC 設定

「設定」ウィンドウを使用して JDDBC ドライバー情報を設定できます。

このタスクについて

QMF アドミニストレーターは、ユーザーがすべてのデータ・ソースにアクセスするのに必要な JDDBC ドライバー情報を配布します。ほとんどの場合、使用するアプリケーション・インターフェースがインストールされるときに、管理者は事前構成された JDDBC ライブラリー設定ファイルをデプロイして、この情報を提供します。

上級者は、「設定」ウィンドウの「JDDBC ライブラリー」ページを使用して JDDBC ドライバーのロケーション情報を定義または変更することにより、アクセスされるデータベースのタイプ (Db2、Informix、Oracle など) ごとに JDDBC ドライバー情報を指定することがあります。JDDBC ドライバー・ロケーションが QMF からアクセス可能になっていることが必要です。QMF は JDDBC ドライバー情報を保持します。新しいドライバーを追加、または既存ドライバーのプロパティーを変更するには、この指定プロセスを繰り返すだけで行うことができます。

JDDBC ドライバー情報を定義するには:

手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択して「設定」ウィンドウを開きます。「JDDBC ライブラリー」を選択します。「JDDBC ライブラリー」ページが開きます。既にセットアップしたすべての JDDBC ドライバー・ライブラリーが、「JDDBC ドライバー・ライブラリー」領域にリストされます。選択したドライバー・ライブラリーに関連付けられた JAR ファイルが「ドライバー・ファイル」領域にリストされます。選択したドライバー・ライブラリーに関する追加情報が「詳細」パネルに表示されます。
2. 新規 JDDBC ドライバーを追加するには、「ドライバーの追加」を選択します。「新規ドライバー・ライブラリーの追加」ウィンドウが開きます。

3. データベースのタイプごとの JDBC ドライバー情報は、ライブラリー単位で編成されます。ライブラリーの名前を「新規ライブラリー名の入力」フィールドに入力します。ライブラリーに含める JDBC 情報を表す名前を指定することをお勧めします。例えば、Db2 データベースのアクセス用に JDBC ドライバー情報を追加している場合は、ライブラリーに Db2 という名前と付けることができます。ただし、これは記述フィールドであり、あらゆるテキストを使用できます。
4. 使用するドライバー・クラスの実際の名前を「ドライバー・クラス名」フィールドに指定します。これは JDBC ドライバーの資料に記されています。例えば、com.ibm.db2.jcc.DB2Driver などです。
5. オプション: データベースへの接続に利用可能な正しい形式の URL の汎用例を、「URL テンプレート」フィールドに指定します。例えば、Db2 データベースにアクセスするための JDBC ドライバー情報を追加する場合は、JDBC URL テンプレート jdbc:db2://host:50000/database を指定します。テンプレートに指定された汎用情報は、データ・ソースをリポジトリに追加するとき、およびリポジトリ接続を作成するときに表示されます。汎用情報を特定のデータベース情報に置き換えます。
6. 「OK」をクリックしてドライバー・ライブラリーを作成し、「新規ドライバー・ライブラリーの追加」ウィンドウを閉じます。
7. QMF for Workstation を使用している場合は、JDBC ドライバー・ファイルのロケーション情報をライブラリーに追加します。QMF for Workstation を使用している場合は、「ドライバー・ファイルの追加」をクリックします。「ファイルを [libraryname] に追加」ウィンドウが開きます。追加したい JDBC ドライバー・ファイルを探して選択します。「開く」をクリックします。JDBC ドライバー・ファイルのロケーションが、選択した JDBC ライブラリーに保存されます。
8. JDBC ドライバー情報には、以下のような変更を行うことができます。
 - JDBC ドライバー・ライブラリー情報を編集するには、リストから既存の JDBC ドライバー・ライブラリーを選択し、「ドライバーの編集」をクリックします。「ドライバー・ライブラリーの編集」ウィンドウが開き、ここで「ライブラリー名」、「ドライバー・クラス名」、および「JDBC URL テンプレート」フィールドを変更することができます。
 - QMF for Workstation を使用している場合、JDBC ドライバーを含むファイルの名前とロケーションを編集するには、JDBC ライブラリーに追加されたファイルのリストからファイルを選択し、「編集」をクリックします。
 - JDBC ドライバー・ライブラリーを除去するには、既存の JDBC ドライバー・ライブラリーをリストから選択して、「ドライバーの削除」をクリックします。ライブラリーと、その中にある JAR ファイルがすべて除去されます。
 - QMF for Workstation を使用している場合、JDBC ドライバー・ライブラリーから JAR ファイルを除去するには、既存のファイルをリストから選択して、「除去」をクリックします。JDBC ドライバー・ライブラリーから JAR ファイルを除去するには、既存のファイルをリストから選択して、「ドライバー・ファイルの削除」をクリックします。ファイルが除去されます。
9. 「OK」をクリックします。JDBC ライブラリー情報が保存されます。「設定」ウィンドウが閉じます。Informix または SQL Server などのさまざまなデータ

ベース・データ・ソースにアクセスするために使用される JDBC ドライバーのそれぞれのタイプについて、このプロセスを繰り返す必要があります。

LOB 設定

「設定」ダイアログの「LOB」ページを使用して、LOB データの取り出しと保存を制御するオプションを指定します。

このタスクについて

LOB データ (ラージ・オブジェクト・データ) とは、データベース内の大容量のテキスト・オブジェクトまたはバイナリー・オブジェクトです。LOB は、テキスト、イメージなど、大容量のストリングであることもあります。照会結果セットに大容量の LOB データが含まれている場合、リソース処理の負担が非常に大きくなる可能性があります。「LOB」設定ページには、数多くの LOB データ取得制限が用意されているので、これらを使用してリポジトリーのリソースを管理できます。LOB データの設定を指定するには、次のようにします。

手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。ツリーから「LOB」を選択します。
2. 「可能な場合に LOB オプションをオーバーライドする」にチェック・マークを付けて、自分のリソース限界グループ用に QMF アドミニストレーターが指定した LOB オプションを、自分でオーバーライドできるようにします。管理者から、リソース限界グループに LOB オプションをオーバーライドする許可を与えられている必要があります。LOB オプションをオーバーライドする許可を持たない場合、このチェック・ボックスは使用できません。
3. 「LOB 検索オプション」ラジオ・ボタンを指定して、ラージ・オブジェクト・データ (LOB) を取り出す方法を指定します。以下の 4 つの選択項目があります。
 - 「LOB 列を使用不可にする」を選択して、LOB データの検索を無効にします。このオプションを選択すると、LOB データを含む表は照会できなくなります。
 - 「LOB データの検索を不可にする」を選択して、LOB データの検索を使用不可にすると共に、LOB データを含む表の他の列に対するアクセスは許可します。このオプションを選択すると、LOB データを含む表の照会が可能になり、LOB が入っている列を除くすべての列について結果データが戻されるようになります。
 - 「要求時に LOB データを検索する」を選択して、すべての LOB データを表から検索すること、しかし LOB データの選択された列だけを照会結果に表示することを指定します。

このオプションを選択すると、LOB データを含む表を照会することが可能になり、LOB オブジェクトを含むすべての列に対して結果データが戻されます。ただし、リソースを節約するために、検索された LOB データはファイルに格納されます。照会結果に、LOB データ・オブジェクトを指すポインター (<LOB LOCATOR>) が表示されます。ポインターをクリックすると、LOB データが表示されます。

ポインターをダブルクリックして、データベースからデータをプルすることもできます。

- 「**LOB** データを自動的に検索する」を選択して、すべての LOB データを表から検索すること、および検索された LOB データを照会結果内に即時に表示することを指定します。

このオプションは、データベースからローカル・コンピューターにすべての LOB 列のすべての LOB データをプルします。実際の LOB データはグリッドおよび報告書には表示されません。代わりに、LOB データを指すポインターが表示されます。

このオプションを選択すると、ローカル・コンピューター上のリソースを大量に消費する可能性があります。

4. 「**LOB** 保存オプション」ラジオ・ボタンを使用して、ラージ・オブジェクト・データ (LOB) を保存できるかどうかを指定します。以下の 2 つの選択項目があります。
 - 「**LOB** データを使用不可にする」を選択して、LOB データのデータベース・データ・ソースへの保存を使用不可にします。
 - 「**LOB** データを使用可能にする」を選択して、LOB データのデータベース・データ・ソースへの保存を許可します。
5. LOB 列の最大サイズを「**LOB** 列の最大サイズ」フィールドに指定します。サイズはキロバイト単位で、2G (最大 LOB サイズ) まで指定できます。デフォルトは 0 で、最大サイズが存在しないことを指定します。最大サイズを超える LOB データがある表を照会すると、LOB データは戻されません (表示されません)。
6. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
7. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
8. 「**OK**」をクリックして「設定」ウィンドウを閉じます。

ログ設定

「設定」ウィンドウの「ログ」ページを使用して、QMF 処理情報を追跡するためのログ・ファイルをアクティブにします。

このタスクについて

ログ・ファイル情報はデバッグに役立ちます。

QMF セッションのログ・ファイル設定を指定するには:

手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。ツリーから「ログ」を選択します。
2. デバッグの目的でログ・ファイルをアクティブにするには、「ログを使用可能にする」にチェック・マークを付けます。このチェック・ボックスを選択すると、ログ・ファイル・オプション・フィールドが使用可能になります。どの情報を収集するかを指示するには、1 つ以上のログ・ファイル・オプションにチェック・

マークを付けます。すべてのオプションに、チェック・マークを付けたままにしておくことをお勧めします。選択可能なログ・ファイル・オプションは、以下のとおりです。

- ログ例外のスタック・トレースを印刷
 - 報告書をログ・ファイルに印刷
 - ログ・クラスおよびメソッドの印刷
3. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
 4. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
 5. 「OK」をクリックして「設定」ウィンドウを閉じます。

例

表 8. ログ・カテゴリーの名前および説明

名前	説明
log	これはルート・カテゴリーです。
log.api	このカテゴリーは、API 呼び出しに関連するメッセージまたは例外をログに記録します。Java クラス API からの情報がこのカテゴリーに追加されます。
log.api.qmfwin	このカテゴリーは、QMF API 呼び出しに関連するメッセージまたは例外をログに記録します。
log.audit	このカテゴリーは、監査システムに関連するメッセージまたは例外をログに記録します。
log.cache	このカテゴリーは、照会結果キャッシュの例外およびメッセージをログに記録します。
log.calculator	このカテゴリーは、ビジュアル・プロジェクトで使用される計算機の処理をログに記録します。
log.canvas	このカテゴリーは、キャンバスに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.config	このカテゴリーは、構成情報の読み取りまたは書き込みをログに記録します。
log.context_service	このカテゴリーは、リポジトリ・コンテキストのサービスをログに記録します。
log.database	このカテゴリーは、データベース・アクセス操作およびデータベースでの処理をログに記録します。
log.database.common_errors	このカテゴリーは、データベース・アクセス・レイヤーで発生する各種エラーをログに記録します。
log.database.connection_pool_ex	このカテゴリーは、データベース接続プールの操作をログに記録します。
log.database.connections	このカテゴリーは、接続管理に関する情報をログに記録します。

表 8. ログ・カテゴリの名前および説明 (続き)

名前	説明
log.database.descriptors	このカテゴリは、サーバー記述子情報をログに記録します。
log.database.driver	このカテゴリは、JDBC ドライバー・メッセージをログに記録し、JDBC ライブラリー・ローダーを記録します。
log.database.driverloader	このカテゴリは、JDBC ドライバー・ライブラリー・クラス・ローダーからの情報をログに記録します。これは log.database.driver と組み合わせて使用します。
log.database.edit	このカテゴリは表の編集操作をログに記録します。
log.database.jdbc	このカテゴリは、動的 SQL 照会の実行をログに記録します。
log.database.sqlj	このカテゴリは、静的 SQL パッケージおよびストアード・プロシージャの実行をログに記録します。
log.design_view	このカテゴリは、デザイン・ビューに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.displayMode	このカテゴリは、分析照会の表示モードに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.displayMode.chart	このカテゴリは、図表表示モードに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.displayMode.scenario	このカテゴリは、ドリルダウン・パスに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.drda_service	このカテゴリは、QMF JDBC サービスに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.environment	このカテゴリは、アプリケーションの環境情報をログに記録します。
log.exception	このカテゴリは、表示される例外をログに記録します。
log.export	このカテゴリは、Excel へのエクスポートに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.forecast	このカテゴリは、予測に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.formula	このカテゴリは、計算列で使用される公式に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。

表 8. ログ・カテゴリの名前および説明 (続き)

名前	説明
log.grid	このカテゴリは、照会結果グリッドに関連する実行時例外およびメッセージをログに記録します。
log.importer	このカテゴリは、インポート操作の情報をログに記録します。
log.install	このカテゴリは、ストアード・プロシージャのインストール・プロセスをログに記録します。
log.install.customizer	このカテゴリは、パッケージのカスタマイズをログに記録します。このカテゴリは Db2 システムにのみ適しています。これは、カスタマイズの進行中に外部 SQL プロファイルの処理をログに記録するためです。
log.job_scheduler	
log.js	このカテゴリは、すべての JavaScript 機能に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.js.js_api	このカテゴリは、ビジュアル・ダッシュボードのシーン・スクリプトに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.js.js_metadatalayer	このカテゴリは、JavaScript 表に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.js.js_modules	このカテゴリは、JavaScript モジュールに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.js.js_procedures	このカテゴリは、JavaScript プロシージャに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.legacy_converter	このカテゴリは、インポート時にレガシー・オブジェクトをビジュアル・プロジェクトに変換するユーティリティの実行時例外およびメッセージをログに記録します。
log.license	このカテゴリは、製品ライセンスに関連する実行時例外およびメッセージをログに記録します。
log.limits	このカテゴリは、リソース限界に関連する実行時例外およびメッセージをログに記録します。
log.limits.editor	このカテゴリは、リソース限界エディターに関連する実行時例外およびメッセージをログに記録します。
log.mailer	このカテゴリは、E メールによるアプリケーションからのデータの送信に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。

表 8. ログ・カテゴリの名前および説明 (続き)

名前	説明
log.messages	このカテゴリは、ユーザーに表示されるメッセージをログに記録します。
log.metadatalayer	このカテゴリは、仮想データ・ソースの一般機能をログに記録します。
log.metadatalayer.optimize	このカテゴリは、仮想データ・ソースの最適化システムをログに記録します。
log.metadatalayer.scheduling	このカテゴリは、仮想データ・ソースのスケジューラーの処理をログに記録します。
log.net	このカテゴリは、サーバーとクライアント間の通信に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.net_activity	このカテゴリは、サーバーとクライアントが交換するデータの量をログに記録します。
log.olap_core_logger_category	このカテゴリは、XMLA 照会および XMLA エディターの処理をログに記録します。
log.procedureDesigner	このカテゴリは、デザイン・モードでのプロシージャの処理に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.prompt_hierarchy	このカテゴリは、プロンプト階層に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.prompts	このカテゴリは、プロンプトに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.qds	このカテゴリは、QMF データ・サービスに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.qmf	このカテゴリは、QMF オブジェクトの問題をログに記録します。
log.qmfz	このカテゴリは、QMF Z Client サービスに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.qmf.command_processor	このカテゴリは、プロシージャー情報をログに記録します。
log.qmf_server_registry	このカテゴリは、QMF サーバー・レジストリーに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.queryEngine	このカテゴリは、照会に関連する実行時例外およびメッセージをログに記録します。
log.queryEngine localQueryEngine	このカテゴリは、照会のローカル部分に関するサーバー関連の実行時例外およびメッセージをログに記録します。
log.queryEngine localQueryEngine.localQEWarnings	このカテゴリは、リソース限界の警告に関連する実行時例外およびメッセージをログに記録します。

表 8. ログ・カテゴリの名前および説明 (続き)

名前	説明
log.queryEngine localQueryEngine.storedProcedures	このカテゴリは使用されません。
log.queryEngine.remoteQEServer	このカテゴリは、照会のリモート部分に関するサーバー関連の実行時例外およびメッセージをログに記録します。
log.queryEngine.remoteQEServer QERequestResponseServer	このカテゴリは、ネットワークまたは Web サービス接続の場合に照会のリモート部分とローカル部分の間で行われる要求および応答をログに記録します。
log.quick_report	このカテゴリは、即時報告書に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.report_designer	このカテゴリは、デザイン・モードのビジュアル・プロジェクトのイベントをログに記録します。
log.reporter	このカテゴリは、ビジュアル・プロジェクト・モジュールに表示される例外およびメッセージをログに記録します。
log.reporter.reporter_data_cache	このカテゴリは、ビジュアル・プロジェクトの照会結果のキャッシュ処理をログに記録します。
log.reporter.reporter_mobile_viewer	このカテゴリは、モバイル・デバイス (iPad など) からの接続を処理するモジュールをログに記録します。
log.reporter.reporter_maps	このカテゴリは、ビジュアル・プロジェクトのマップ・データをログに記録します。
log.reporter.reporter_queries	このカテゴリは、ビジュアル・プロジェクト内の照会の処理をログに記録します。
log.reporter.reporter_runtime	このカテゴリは、ビジュアル・プロジェクトでの実行時評価をログに記録します。
log.reporter.reporter_runtime reporter_canvas	このカテゴリは、キャンバスの実行時評価をログに記録します。
log.reporter.reporter_runtime reporter_queries_thread_manager	このカテゴリは、ビジュアル・ダッシュボードから実行される照会に関連したメッセージおよび例外をログに記録します。
log.reporter.reporter_runtime reporter_renderer	このカテゴリは、ビジュアル・ダッシュボードの個々のコンポーネントに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.reporter.reporter_scene_views	このカテゴリは、シーン・ビュー機能に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.repository	このカテゴリは、リポジトリの実行時例外およびメッセージをログに記録し、リポジトリと、当該リポジトリを使用する機能の両方に対応します。

表 8. ログ・カテゴリの名前および説明 (続き)

名前	説明
log.rsbi	これはすべての操作をログに記録します。特定のカテゴリを決定できない場合、ログ・データはこのカテゴリに書き込まれます。
log.runtime	このカテゴリは、UI およびユーザー・メッセージの処理によって発生する例外をログに記録します。
log.scheduler	このカテゴリは、スケジューラーに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.security	このカテゴリは、保護されたりポジトリブ・プロバイダーに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.service	このカテゴリは、内部アプリケーション・サービスおよびユーティリティの問題をログに記録します。
log.show_message	このカテゴリは、ビジュアル・プロジェクトの「メッセージの表示」アクションからのメッセージをログに記録します。
log.statistics	このカテゴリは、コンテナとしてのみ使用されます。
log.statistics.queryEngine	このカテゴリは、照会実行プロセスの別個のブロックで費やされる時間の統計をログに記録します。
log.time_trace	このカテゴリは、時間トレース機能に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.tracking	このカテゴリは、オブジェクト・トラッキングに関連する例外およびメッセージをログに記録します。
log.transformation	このカテゴリは、照会変換に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.transformation.complex	このカテゴリは、複合変換に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.transformation.simple	このカテゴリは、単純変換に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.ui	このカテゴリは、ユーザー・インターフェース操作をログに記録します。
log.value	このカテゴリは、ビジュアル・プロジェクト内の値の実行時例外およびメッセージのみをログに記録します。
log.web.ide	このカテゴリは、QMF for WebSphere の起動とその処理に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。

出力設定

「設定」ウィンドウの「出力」ページを使用して、QMF でのエラー、照会、プロシージャ、および接続についての情報を追跡する、「出力」ビューをアクティブにすることができます。

このタスクについて

「出力」ビューからの情報は、デバッグに役立ちます。情報は、「出力」ビューで報告書として提供することも、ログ・ファイルに自動的に追加することもできます。

QMF セッションの出力ファイル設定を指定するには、以下のようになります。

手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。ツリーから「出力」を選択します。
2. 「出力」ページでは、以下のオプションを指定できます。

エラーの表示

このオプションでは、すべてのエラー・テキストを「出力」ビューに表示します。

照会テキストの表示

このオプションでは、実行した照会のテキストをすべて「出力」ビューに表示します。

プロシージャ・テキストの表示

このオプションでは、実行したプロシージャのテキストをすべて「出力」ビューに表示します。

接続状況の表示

このオプションでは、データ・ソースへの接続状況を「出力」ビューに表示します。

JavaScript 機能に関するデバッグ・メッセージを表示

このオプションでは、すべての JavaScript 機能 (JavaScript プロシージャ、JavaScript モジュール、および JavaScript テーブル) に関するデバッグ・メッセージを表示します。

「出力」ビューを自動的にアクティブにする

エラーが発生するか、メッセージが表示されると、このオプションにより「出力」ビューが自動的に開きます。

3. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
4. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
5. 「OK」をクリックして「設定」ウィンドウを閉じます。

QMF サーバー・レジストリー設定

QMF サーバー・レジストリーは、QMF サーバーと QMF クライアント・コンポーネントの間の接続リンクです。QMF サーバー・レジストリーは、クライアント・コンポーネントが接続できる使用可能な QMF サーバーのリストを収集して提供します。

このタスクについて

QMF サーバー・レジストリー設定を行うには、以下の手順を実行します。

手順

1. メインメニューから「ビュー」 > 「設定」をクリックします。
2. 「設定」ウィンドウで、「**QMF** サーバー・レジストリー」をクリックします。
3. 「現行サーバー・レジストリー (**Current Server Registry**)」領域の「レジストリー・タイプ (**Registry type**)」リストから、使用するレジストリーのタイプを選択します。使用可能なタイプは次のとおりです。

なし レジストリーは使用されません。

自動 自動的に検出されたレジストリーが使用されます。「レジストリー URL」フィールドでレジストリーのアドレスを確認します。

カスタム

「カスタム・レジストリー URL」フィールドを使用して、カスタム QMF サーバー・レジストリーを指定します。

「状況」フィールドには、選択したレジストリーの可用性状況が表示されます。状況を最新表示するには、「状況を最新表示 (**Refresh Status**)」をクリックします。

4. 「適用」をクリックします。それから「OK」をクリックします。

エクスポート・アクションによって生成されたオブジェクトのディレクトリーの場所の設定

さまざまな QMF アクションから生成されたオブジェクトがローカル・ファイル・システムまたはサーバー・ファイル・システム上の特定の場所にエクスポートされるように、QMF で設定を行うことができます。

始める前に

QMF for Workstation を使用している場合は、ローカル・ファイル・システムにフォルダーを作成します。

QMF for WebSphere を使用している場合は、アプリケーション・サーバー・ファイル・システムにフォルダーを作成します。

「サーバー・サイド・ファイル・システム」の設定を行うときに、これらのいずれかのフォルダーを指定します。

このタスクについて

このタスクでは、生成されたオブジェクトがエクスポートされる場所を (設定を使用して) 指定する方法について説明します。

エクスポート・ディレクトリーの設定を行うには、以下のようになります。

手順

1. 「ビュー」>「設定」を選択し、ツリーから「サーバー・サイド・ファイル・システム」を選択します。
2. 「サーバー・ファイル・システムにアクセスできるようにする」チェック・ボックスを選択します。
3. 生成されたオブジェクトがエクスポートされる場所を示すパスを「ルート出力ディレクトリー」フィールドに入力します。

EXPORT プロシージャ、スケジュール・タスク (オブジェクトのコピーまたは実行)、またはイベント・アクション (「PDF にエクスポート」および「Excel にエクスポート」など) によってデータおよびオブジェクトが生成されると、それらは上記で指定したパスにエクスポートされます。

指定するディレクトリーは、ローカル・ファイル・システムまたはサーバー・ファイル・システムに存在していなければなりません。

4. パスを「ルート入力ディレクトリー」フィールドに入力して、dynamart ソース・ファイルのルート・ディレクトリーのパスを指定します。

注: 「ルート入力ディレクトリー」パスの指定は必須です。指定しないと設定が正しくないものになり、サーバー・サイド・ファイル・システムを使用した

EXPORT ではエラーが生じます。

5. 「適用」をクリックして、設定を保存します。
6. 設定をデフォルト値に復元するには、「デフォルトの復元」をクリックします。
7. 「OK」をクリックして、「設定」ウィンドウを閉じます。

サード・パーティー・ライブラリーの設定

「設定」ウィンドウの「サード・パーティー・ライブラリー」ページを使用して、QMF が必要とするサード・パーティー・ソフトウェアのロケーションを指定します。

このタスクについて

サード・パーティー・ライブラリー設定を指定するには:

手順

1. 「ビュー」>「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。ツリーから「サード・パーティー・ライブラリー」を選択します。
2. QMF に対してロケーションが定義されたサード・パーティー・ソフトウェアの名前、パッケージ名、ロケーションがリストされます。ほとんどの場合、サード・パーティー・ライブラリーのロケーション情報は、QMF のインストール時に指定されます。

3. サード・パーティー・ソフトウェアのロケーション情報をさらに追加するには、「追加」をクリックします。「新規サード・パーティー・ライブラリー」ウィンドウが開きます。「パス」フィールドに、ソフトウェアのパスを指定します。該当する場合は、「パッケージ (オプション)」フィールドにパッケージ名を指定します。「OK」をクリックします。ソフトウェアのパスが「サード・パーティー・ライブラリー」リストに追加されます。制御が「設定」ウィンドウに戻ります。
4. 定義済みサード・パーティー・ソフトウェアのロケーション情報を編集するには、「編集」を選択します。「ライブラリーの編集」ダイアログが開きます。「パス」フィールドで、選択されたソフトウェアのパスを変更できます。「パッケージ (オプション)」フィールドで、パッケージ名を変更できます。「OK」をクリックします。行った変更が適用されます。制御が「設定」ウィンドウに戻ります。
5. サード・パーティー・ライブラリー情報を削除するには、「サード・パーティー・ライブラリー」リスト内のサード・パーティー・ライブラリーをクリックしてから、「除去」をクリックします。そのサード・パーティー・ライブラリー情報がリストから除去されます。
6. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
7. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
8. 「OK」をクリックして、「設定」ウィンドウを閉じます。

仮想データ・ソース設定の指定

「設定」ウィンドウの「仮想データ・ソース」ページを使用して、仮想データ・ソースの自動キャッシュ・リフレッシュ・オプションを有効にします。

このタスクについて

仮想データ・ソースの自動キャッシュ・リフレッシュの有効化について詳しくは、120 ページの『仮想データ・ソースおよび JavaScript データ・ソースの自動キャッシュ・リフレッシュの有効化』を参照してください。

ビジュアル・デザイナー設定の指定

QMF for Workstation を使用している場合は、「設定」ウィンドウの「ビジュアル・デザイナー」ページを使用して、ビジュアル・プロジェクトの作成に適用する設定を指定します。

このタスクについて

ビジュアル・プロジェクトの作成に影響を与える設定を指定するには:

手順

1. 「ビュー」 > 「設定」を選択します。「設定」ウィンドウが開きます。ツリーから「ビジュアル・デザイナー」を選択します。
2. 「ビジュアル・デザイナー・ルーラー単位」ラジオ・ボタンの 1 つをクリックして、「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブ内のエディター・ウィン

ドウ上に張られるルーラーに使用されるデフォルト単位を指定します。「ピクセル」、「インチ」、「センチメートル」から選択できます。

3. 「&DATE 値のフォーマット」ドロップダウン・リストで標準の報告書の日付値に対するフォーマット・スキーマを選択します。
4. 「&TIME 値のフォーマット」ドロップダウン・リストで標準の報告書の時刻値に対する形式スキーマを選択します。
5. ビジュアル・プロジェクトが実行されるたびにグローバル変数値をリセットしてデフォルト値に戻すには、「ランタイム・モードに入るときにグローバル変数をリセット」チェック・ボックスを選択します。
6. ツリーで「ビジュアル・デザイナー」を展開し、「フォント」を選択します。
7. 別のフォント・セットをビジュアル・ダッシュボードで有効にするには、「検索ディレクトリー」フィールドでカスタム・フォント・セットへのパスを指定し、「関連の最新表示」をクリックします。
8. ツリーから「プロジェクト・エクスプローラー」を選択します。
9. 「取り消し限界」フィールドに、デザイン・エディターでアクションを取り消すことができる具体的な回数を指定します。値「0」は、アクションを取り消すことができる回数を無制限にすることを示します。
10. 「設定の名前変更」ラジオ・グループで、デザイン・エディターでオブジェクトの名前変更を試みたときに確認を求めるプロンプトを出すかどうかを指定します。選択可能なオプションは以下のとおりです。
 - 「常時プロンプトを出す」 - オブジェクトの名前変更を試みたときに常にプロンプトを出します。
 - 「参照時にプロンプトを出す」 - オブジェクトが他のオブジェクトを参照している場合にのみプロンプトを出します。
 - 「プロンプトを出さない」 - オブジェクトの名前変更を試みたときにプロンプトを出しません。
11. 「設定の削除」ラジオ・グループで、デザイン・エディターでオブジェクトの削除を試みたときに確認を求めるプロンプトを出すかどうかを指定します。選択可能なオプションは以下のとおりです。
 - 「常時プロンプトを出す」 - オブジェクトの削除を試みたときに常にプロンプトを出します。
 - 「参照時にプロンプトを出す」 - オブジェクトが他のオブジェクトを参照している場合にのみプロンプトを出します。
 - 「プロンプトを出さない」 - オブジェクトの削除を試みたときにプロンプトを出しません。
12. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
13. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
14. 「OK」をクリックして「設定」ウィンドウを閉じます。

第 8 章 QMF を FIPS-140 セキュリティー標準に切り替える

セキュリティー・プロバイダー定義を構成することで、QMF を FIPS-140 コンピューター・セキュリティー標準に切り替えることができます。

このタスクについて

FIPS-140 標準に切り替えるには、以下のようにします。

手順

1. QMF インストール・ディレクトリーで、`java.security` ファイルを編集モードで開きます。
2. `security.provider.N=` を検索して、セキュリティー・プロバイダー定義のリストを見つけます。N は番号です。
3. このリストの先頭位置に、行
`security.provider.1=com.ibm.crypto.fips.provider.IBMJCEFIPS` を挿入します。
4. リスト内の他のセキュリティー・プロバイダー定義の番号を変更します。QMF を開くと、アプリケーションは FIPS-140 モードで動作します。

第 9 章 リポジトリの構成、およびデータベースへの接続

リポジトリを構成してデータベースへの QMF 接続を定義する必要があります。

このタスクについて

リポジトリでは、QMF オブジェクト (照会、プロシージャ、ビジュアル報告書、ビジュアル・ダッシュボード) を論理的にグループ化できます。また、リポジトリには、データベース接続情報とリソース限界が含まれています。通常、リポジトリを操作するのは、アドミニストレータのみです。

リポジトリを構成してデータベースに接続するために必要となるタスクは、QMF を自分用に構成するのか複数ユーザー用に構成するのかによって異なります。

QMF を複数ユーザー用に構成する場合は、以下のタスクを実行します。

1. JDBC ドライバー・ライブラリーを定義する
2. リポジトリ・ストレージを構成する
3. 共有リポジトリを作成する
4. データベースへの接続を定義する
5. リポジトリ接続を作成する
6. 構成をユーザーにエクスポートする

リポジトリを構成してデータベースに接続するためのタスクについて以下の表で説明します。

表 9. リポジトリを構成してデータベースに接続するタスクの説明

タスク	目的	情報
JDBC ドライバー・ライブラリーの定義	QMF を使用してアクセスするデータベースのドライバー・ファイルのロケーションを定義する。	JDBC ドライバー・ライブラリーを定義して、データベース・リポジトリやデータ・ソースに接続できます。 JDBC ドライバー・ファイルは QMF に組み込まれていませんが、QMF には、最も一般的に使用されている JDBC ドライバーの構成データが含まれています。 QMF for Workstation および QMF for WebSphere がドライバーをロードして使用できるように JDBC ドライバー・ファイルを定義する必要があります。 詳しい手順については、『JDBC ドライバー・ライブラリーの定義』を参照してください。

表 9. リポジトリを構成してデータベースに接続するタスクの説明 (続き)

タスク	目的	情報
リポジトリ・ストレージの構成	開発者によって使用されるデータベース・オブジェクトだけでなくデータベース接続およびリソース限界の情報も保持するために使用されるストレージを構成する。	共有リポジトリ・ストレージの構成には、以下のタスクが含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> 接続パラメーターおよびユーザー・ログイン情報の指定 表の作成および更新 リポジトリ・ストレージ表の保護とユーザー許可の付与 最大同時データベース接続数の設定
リポジトリの作成	ユーザーが照会、報告書、および他のデータ・オブジェクトを保存できるリポジトリを作成する。	詳しい手順については、『リポジトリの作成』を参照してください。
データベースへの接続を定義	リレーショナル・データ・ソースまたはマルチディメンション・データ・ソースを追加して、データベースへの QMF 接続を定義する。 接続情報はリポジトリに保管されます。	詳しい手順については、『データベースへの接続を定義』を参照してください。
リポジトリ接続の作成	リポジトリを接続するために必要となる情報を QMF for Workstation および QMF for WebSphere に渡す。	詳しい手順については、『QMFを参照してください。
構成済み製品へのアクセスを提供	複数のユーザーが QMF for Workstation をインストールして、QMF for Workstation にアクセスしたり、Web ブラウザーから QMF for WebSphere 構成にアクセスしたりできるようにする。	詳しい手順については、『構成データをユーザーにエクスポート』を参照してください。

JDBC ドライバー構成ファイルの作成

データベース・リポジトリおよびデータ・ソースに接続するために JDBC を使用する場合は、リポジトリをホストするデータベースのタイプや、データ・ソースとしてアクセスされるデータベースのタイプごとに、QMF が JDBC ドライバー・ファイルを検索する場所を指定する必要があります。

始める前に

「管理者」パースペクティブを開いていない場合には、それを開きます。「管理者」パースペクティブを開くには、メニュー・ペインにアクセスして、「ウィンドウ」 > 「パースペクティブを開く」 > 「その他」 > 「管理者」を選択します。

特定のデータベースに接続するために必要な JDBC ドライバー・ファイルは、リポジトリおよびデータ・ソースを構成するために現在使用しているマシンにインス

トールされているか、またはそこからアクセス可能でなければなりません。 QMF には、これらのドライバーは同梱されていません。

このタスクについて

このタスクにおける手順は、必要な JDBC ドライバー・ファイルを QMF 環境構成に追加する方法を示します。

注: QMF for Workstationのマルチプラットフォーム・バージョンには、Db2 UDB for Linux, UNIX and Windows データ・ソースへの接続に使用可能な JDBC ドライバーが組み込まれています。 QMF for Workstation のマルチプラットフォーム・バージョンを使用している場合、このドライバー用に設定処理を行う必要はありません。

リポジトリをホストするデータベースのタイプや、データ・ソースとしてアクセスされるデータベースのタイプごとに、JDBC ドライバー情報を指定するは、以下の手順を実行します。

手順

1. 「ビュー」 > 「設定」をクリックして「設定」ウィンドウを開きます。 JDBC ライブラリーを選択します。「JDBC ライブラリー」ページが開きます。既にセットアップしたすべての JDBC ドライバー・ライブラリーが、「JDBC ドライバー・ライブラリー」領域にリストされます。選択したドライバー・ライブラリーに関連付けられた JAR ファイルが「ドライバー・ファイル」領域にリストされます。選択したドライバー・ライブラリーに関する追加情報が「詳細」パネルに表示されます。
2. 定義済みのライブラリー内に JDBC ドライバーがリストされていない場合、以下の方法でユーザー定義の JDBC ドライバー・ライブラリーおよびドライバー・クラス名を追加できます。
 - a. 「ドライバーの追加」を選択します。「新規ドライバー・ライブラリーの追加」ウィンドウが開きます。
 - b. JDBC ドライバー情報は、ライブラリーごとに編成されます。ドライバー・ライブラリーの名前を「新規ライブラリー名の入力」フィールドに入力します。指定する名前がライブラリーに含まれる JDBC ドライバーについて説明するものとなるようにすることをお勧めします。例えば、DB2 タイプ 2 UDB ドライバーの情報を追加する場合、そのライブラリーを DB2 タイプ 2 UDB ドライバーと名付けることができます。ただし、これは記述フィールドであり、あらゆるテキストを使用できます。
 - c. 使用するドライバー・クラスの実際の名前を「ドライバー・クラス名」フィールドに指定します。これは JDBC ドライバーの資料に記されています。例えば、DB2 タイプ 2 UDB ドライバーでは、`com.ibm.db2.jdbc.app.DB2Driver` を指定できます。
 - d. オプションで、データベースへの接続に利用可能な正しい形式の URL の汎用例を、「URL テンプレート」フィールドに指定できます。URL テンプレートを追加するには、「URL テンプレートの追加」アイコンを選択します。「新規テンプレート」というテキストが、「テンプレート」フィールドに表示されます。「新規テンプレート」というテキストを、URL の形式方法を示すサンプルに置き換えます。例えば、DB2 タイプ 2 UDB ドライバ

- 一用に JDBC ドライバー情報を追加している場合は、次の JDBC URL テンプレートを指定できます: `jdbc:db2://host:50000/database`。テンプレートに指定された汎用情報は、データ・ソースをリポジトリに追加するとき、およびリポジトリ接続を作成するときに表示されます。汎用情報を特定のデータベース情報に置き換えます。
- e. オプションで、追加の JDBC ドライバー・プロパティを URL テンプレートに追加できます。「**JDBC** ドライバーのプロパティ」をクリックします。「**拡張 JDBC 設定**」ウィンドウが開きます。JDBC を使用してデータベースに接続するとき、サポートされるかまたは使用可能なプロパティを選択します。それらは URL テンプレート内に反映されます。
 - f. 「**OK**」をクリックしてドライバー・ライブラリーを作成し、「**新規ドライバー・ライブラリーの追加**」ウィンドウを閉じます。
- 3.
- a. JAR ファイルのロケーション情報を追加するライブラリーをクリックします。
 - b. 「**ドライバー・ファイルの追加**」をクリックします。「**JARS を [libraryname] に追加**」ウィンドウが開きます。
 - c. 追加したい JDBC ドライバー・ファイルを探して選択します。
 - d. 「**開く**」をクリックします。JDBC ドライバーの JAR ファイルのロケーションが、選択した JDBC ライブラリーに保存されます。
4. 「**適用**」を選択します。指定した JDBC ライブラリー情報が、現在のマシンの `.bi.jdbc.drivers` ファイルに保存されます。さまざまなデータベース・リポジトリまたはデータ・ソースにアクセスするために使用される定義済みまたはユーザー定義のドライバーごとに、直前のステップを繰り返す必要があります。
5. JDBC ドライバー情報には、以下のような変更を行うことができます。
- ユーザー定義の JDBC ドライバー・ライブラリー情報を編集するには、リストから既存の JDBC ドライバー・ライブラリーを選択し、「**ドライバーの編集**」をクリックします。「**ドライバー・ライブラリーの編集**」ウィンドウが開き、ここで「**ライブラリー名の編集**」、「**ドライバー・クラス名**」、および「**URL テンプレート**」フィールドを変更することができます。
 - QMF for Workstation を使用している場合、JAR ファイルのロケーションを編集するには、JDBC ライブラリーに追加されたファイルのリストから JAR ファイルを選択し、「**編集**」をクリックします。「**JAR URL の編集**」ウィンドウが開きます。「**JAR ロケーションの編集**」フィールドに名前とロケーションを指定します。
 - JDBC ドライバー・ライブラリーを除去するには、既存の JDBC ドライバー・ライブラリーをリストから選択して、「**ドライバーの削除**」をクリックします。ライブラリーと、その中にある JAR ファイルがすべて削除されます。定義済みのライブラリーは除去できません。
 - QMF for Workstation を使用する場合、JDBC ドライバー・ライブラリーから JAR ファイルを除去するには、既存の JAR ファイルをリストから選択して、「**除去**」をクリックします。JAR ファイルが除去されます。
6. 「**OK**」をクリックします。「**設定**」ウィンドウが閉じます。

タスクの結果

JDBC ドライバー情報が保存され、QMF がデータベースに接続できるようになります。

注: ウィザードで入力した情報は、ファイル `.bi.jdbc.drivers` に書き込まれます。このファイルは、QMF リポジトリを構成するために使用するマシンまたはサーバーの個人設定ディレクトリに保存されます。

次のタスク

これで、データベースに共有リポジトリ・ストレージ表を作成する準備が整いました。

注: JDBC ライブラリーの構成についての詳細は、『リポジトリの作成およびそれへの接続』虎の巻を参照してください。この虎の巻は、JDBC ライブラリーの構成方法を詳しく解説し、複数のシステムに配布するために JDBC 設定ファイルをコピーする方法を説明しています。虎の巻は、QMF for Workstation の「ヘルプ」メニューからアクセスできます。虎の巻を開くには、「ヘルプ」 > 「虎の巻」を選択します。「虎の巻」ウィンドウで「リポジトリの作成および接続」を選択します。

DB2 タイプ 4 UDB JDBC ドライバーの双方向テキスト・レイアウト変換の有効化

双方向 (BiDi) テキスト・レイアウト変換を有効にすると、ドライバーは、データベースからデータを取り出すときに、右から左への書記体系を使用する言語で入力されたデータを正しく処理できます。

このタスクについて

データ・ソースの BiDi テキスト・レイアウト変換を有効にするには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」ビューで、処理するデータ・ソースを右クリックし、メニューから「プロパティ」を選択します。
2. 「プロパティ」ウィンドウの左上隅で、「接続パラメーター」をクリックします。
3. 「接続パラメーター」領域で、「拡張」をクリックします。
4. プロパティ `enableBidiLayoutTransformation`、`serverBidiStringType`、および `clientBidiStringType` を有効にします。
5. `enableBidiLayoutTransformation` プロパティの値を `true` に設定します。
6. `serverBidiStringType` プロパティおよび `clientBidiStringType` プロパティについては、データがサーバー・マシンに保管され、処理するクライアント・マシンで表される方法に一致する整数値を選択します。以下の表を参考にしてください。

表 10. *serverBidiStringType* プロパティおよび *clientBidiStringType* プロパティのプロパティ値および対応する属性

値	テキストのタイプ	テキスト方向	対称スワッピング	数表示形状	テキスト形状
4	Visual	Left-to-right	いいえ	Nominal	Shaped
5	論理	Left-to-right	はい	Nominal	Nominal
6	論理	Right-to-left	はい	Nominal	Nominal
7	Visual	Right-to-left	いいえ	Nominal	Shaped
8	Visual	Right-to-left	いいえ	Nominal	Shaped
9	論理	Right-to-left	はい	Nominal	Shaped
10	論理	Contextual left-to-right	はい	Nominal	Nominal
11	論理	Contextual right-to-left	はい	Nominal	Nominal

表 1 にリストされている属性についての以下の記述を考慮してください。

テキストのタイプ

メモリー内または外部メディア上に保管されているテキストの順序と正しい表示のための順序との間の関係を指定します。値は以下のとおりです。

- Visual – テキストは、表示されるのと同じ順序で保管されます。
- Logical – テキストは、読み取られることを意図した順序で保管されます。

テキスト方向

テキストが保管される方向を指定します。値は以下のとおりです。

- Left-to-right – テキストに左から右のマークを付けます
- Right-to-left – テキストに右から左のマークを付けます。
- Contextual left-to-right – テキスト方向は、テキスト自体を分析することによって決定されます。最初の強い文字が左から右へのスクリプトに属する場合、またはテキストに強い文字がない場合、テキストには左から右のマークが付けられます。最初の強い文字が右から左のスクリプトに属している場合、テキストには右から左のマークが付けられます。
- Contextual right-to-left – テキスト方向は、テキスト自体を分析することによって決定されます。最初の強い文字が左から右のスクリプトに属している場合、テキストには左から右のマークが付けられません。最初の強い文字が右から左のスクリプトに属する場合、またはテキストに強い文字がない場合、テキストには右から左のマークが付けられます。

対称スワッピング

暗黙の方向性の意味を持つ文字 (<, >, (,) など) をミラー・イメージで置き換えるかどうかを指定します。このオプションは、右から左の書記体系で書かれ、Visual 順序で保管されるテキストを対象としていま

す。Logical 順序で保管されるテキストについては、対称スワッピングは実行されません。値は以下のとおりです。

- Yes – 対称スワッピングは有効です
- No – 対称スワッピングは無効です

数表示形状

数字をヨーロッパ数字形状を使用して表示するか、またはアラブ・インド数字形状を使用して表示するかを指定します。値は以下のとおりです。

- Nominal – 数字は、ヨーロッパの数字形状を使用して表示されます。
- National – 数字は、アラブ・インド数字形状を使用して表示されます。

テキスト形状

アラビア語の記号のエンコードを指定します。値は以下のとおりです。

- Nominal – アラビア文字は、組み込みコード・ポイント (Unicode の「06xx」範囲) でエンコードされます。
- Shaped – アラビア文字は、Initial、Middle、Final、または Isolated の表示形式としてエンコードされます。

第 10 章 共有リポジトリ・ストレージの作成

共有リポジトリ・ストレージとは、データベース表のセットのことです。データベース接続やリソース限界の情報を保管したり、報告書作成アクションや照会アクションにユーザーが使用するデータベース・オブジェクトを保管したりするための共有リポジトリ・ストレージを作成する必要があります。

始める前に

このタスクを開始する前に、以下のことを行っておいてください。

- データベース管理システム (DBMS) をインストールして構成する。
- QMF がデータベースに接続できるように JDBC ドライバー JAR ファイルとライセンス・ファイルをインストールする。

「管理者」パースペクティブを開いていない場合には、それを開きます。「管理者」パースペクティブを開くには、メニュー・ペインにアクセスして、「ウィンドウ」 > 「パースペクティブを開く」 > 「その他」 > 「管理者」を選択します。

「リポジトリ」ビューがワークベンチで開いていることを確認します。「リポジトリ」ビューを開くには、「ウィンドウ」 > 「ビューの表示」 > 「リポジトリ」を選択します。「リポジトリ」タブがワークベンチで開きます。

このタスクについて

リポジトリ・ストレージ表を作成する作業は、複数のステップからなるプロセスです。各ステップには複数のオプションがあります。あるステップでオプションを選択すると、プロセス内の次のステップが決まります。

このトピックの手順では、リポジトリ内のデータを後でネットワークにおいて再配置したり配布したりするために取得できるようにデータベース上に共有リポジトリ・ストレージを作成するプロセスの概要を示します。使用するウィザードについて詳しくは、このセクションにある後続のトピックを参照してください。

共有リポジトリ・ストレージの作成時に表示される DDL スクリプトの行の最大長は、「一般設定」ページの「行幅」フィールドで設定された値によって決定されます。詳しくは、ユーザー・ヘルプの『一般設定』を参照してください。

データベース上にリポジトリ・ストレージを作成するには、以下のようになります。

手順

1. 「リポジトリ」ビューで右クリックします。「新規」 > 「共有リポジトリ・ストレージ」を選択します。「新規共有リポジトリ・ストレージの作成」ウィザードの「新しい共有リポジトリ・ストレージの接続パラメーターを入力します」ページが開きます。

2. 「新しい共有リポジトリ・ストレージの接続パラメーターを入力します」ページで JDBC 接続情報およびユーザー・ログイン情報を指定します。これらの情報は、リポジトリ・ストレージをホストするデータベースに接続するために使用されます。
3. 「次へ」をクリックします。ウィザードの「リポジトリ・ストレージ表を作成またはアップグレードする」ページが開きます。
4. 「リポジトリ・ストレージ表を作成またはアップグレードする」ページで、リポジトリ・ストレージにアクセスするために QMF アプリケーションが必要とするデータベース・オブジェクトを作成またはアップグレードすることを指定します。
5. 「次へ」をクリックします。必要であれば、「リポジトリ・ストレージ表のアップグレード」ページが開き、必要なリポジトリ・ストレージ表を作成または更新するために使用される SQL ステートメントがリストされます。このページが開いたら、「次へ」をクリックします。ウィザードの「リポジトリ・ストレージ表の保護」ページが開きます。
6. ウィザードの「リポジトリ・ストレージ表を保護します」ページで、データベース・リポジトリ・ストレージ表を無許可のユーザーから保護するかどうかを指定します。
7. 「終了」をクリックします。

タスクの結果

ご使用のデータベース上に共有リポジトリ・ストレージが作成されました。

次のタスク

次のステップでは、リポジトリ・ストレージ表にリポジトリを追加します。

接続パラメーターおよびユーザー・ログイン情報の指定

共有リポジトリ・ストレージを作成するための最初のステップは、リポジトリ・ストレージをホストするデータベースへのアクセスに使用される接続パラメーターおよびユーザー・ログイン情報を指定することです。

このタスクについて

リポジトリ・ストレージをホストするデータベース用の接続およびユーザー・ログイン情報を指定するには:

手順

1. 「新規共有リポジトリ・ストレージの作成」ウィザードを開いて、「新しい共有リポジトリ・ストレージの接続パラメーターを入力します」ページにナビゲートします。
2. 「JDBC ドライバー」フィールドには、リポジトリ・ストレージをホストするデータベースのアクセスに使用する JDBC ドライバーのライブラリーを指定します。JDBC ドライバー情報の設定時に定義したライブラリーのドロップダウン・リストから選択できます。このフィールドの右側にある省略符号 (...) を

使用すれば、「JDBC ドライバーの選択」ダイアログを開くことができます。このダイアログでは、追加の JDBC ドライバー・ライブラリーを作成できません。

3. 「**JDBC URL**」リストで、接続先リポジトリーのあるリポジトリー・ストレージをホストするデータベースを指す URL を指定します。

この URL の形式はリストに表示できます。

注: また、「**URL テンプレートによる URL の作成**」ダイアログ・ボックスを使用すれば、正しいストリングを形成できます。

「URL テンプレートによる URL の作成」ダイアログ・ボックスを開くには、「**URL の作成**」をクリックします。JDBC URL ドロップダウン・リストからテンプレートを選択します。表でサーバー、ポート、およびデータベース情報を指定して、「**OK**」をクリックします。結果の URL ストリングが JDBC URL リストに追加されます。

4. 「**拡張**」をクリックして、リポジトリー・ストレージ表をホストするデータベースのために使用されるドライバー特定の接続ストリング・キーワードおよびその値を指定します。使用可能な拡張プロパティのリストは、使用されるドライバーのタイプと、そのドライバーのバージョンの両方によって変わります。選択したデータベース・ドライバーに必要なキーワードについては、当該ドライバーの資料を参照してください。

注: DB2 Type 4 UDB ドライバーおよび DB2 Universal JDBC ドライバーの場合、拡張 SQL 例外エラー・メッセージを受け取るには、「**拡張 JDBC 設定**」ウィンドウの「**retrieveMessagesFromServerOnGetMessage**」オプションにチェック・マークを付けます。

5. ユーザー情報を指定します。「ユーザー情報の設定」ボタンをクリックして、「ユーザー情報」ダイアログを開きます。
6. 「ユーザー情報」ダイアログで「ユーザー ID とパスワードが必要」を選択し、リポジトリー・ストレージをホストしているデータベースにアクセスするときにユーザー ID とパスワードを使用することを要求します。リポジトリー・ストレージをホストしているデータベースがユーザー ID およびパスワードを使用しないアクセスを許可している場合、このオプションを選択するとその許可がオーバーライドされて、リポジトリー・ストレージ表へのアクセスにユーザー ID およびパスワードが必要になります。
7. 「ユーザー ID」および「パスワード」フィールドに、データベースのアクセスに使用するユーザー ID とパスワードを指定します。ホスト・リポジトリーへの接続時に指定したユーザー ID とパスワードを使用して、そのリポジトリーにおける権限が付与されます。指定するユーザー ID とパスワードは、ホスト・データベースでリポジトリー・ストレージ表を作成するための管理者特権を持っている必要があります。このモードは Db2 でのみ使用できます。
8. 指定したユーザー ID を使用してデータベースに接続するたびにこのパスワードを使用するには、「このパスワードを保存」チェック・ボックスを選択します。
9. 「**接続のテスト**」をクリックして、データベースへの接続をテストします。正しくない情報を指定した場合は、接続できません。

10. 「次へ」をクリックします。ウィザードの「リポジトリ・ストレージ表の作成またはアップグレード」ページが開きます。

表の作成および更新

共有リポジトリ・ストレージを作成するための 2 番目のステップは、リポジトリ・ストレージにアクセスするために QMF アプリケーションが必要とするデータベース・オブジェクトを、作成するかまたは更新するかを指定することです。

このタスクについて

データベース上に作成される共有リポジトリ・ストレージをサポートするには、いくつかのデータベース表が必要です。表が存在しているか、または更新が必要かを QMF がチェックするかどうかを指定する必要があります。

リポジトリ・ストレージ表を作成または更新するには:

手順

1. 「新規共有リポジトリ・ストレージの作成」ウィザードを開いて、「リポジトリ・ストレージ表を作成またはアップグレードする」ページにナビゲートします。
2. 以下のオプションの 1 つを選択する。
 - このステップを迂回するには「リポジトリ・ストレージ表はすでに作成済み」をクリックします。すべてのリポジトリ・ストレージ表が既に存在し、その表が変更されていなければ、このオプションを選択できます。このような状況の例として、リポジトリ・ストレージのオプションを編集して、パッケージを再バインドするかまたはリポジトリ・ストレージ表のストアド・プロシージャを再実行したい場合があります。「次へ」をクリックします。ウィザードの「リポジトリ・ストレージ表の保護」ページが開きます。
 - 表が作成済みであるのか、または表を更新する必要があるのかを確認する場合は、「リポジトリ・ストレージ表を作成またはアップグレードする」をクリックします。
3. Db2 データベースを操作する場合は、オプションで所有者名を「所有者 ID」フィールドに入力できます。この所有者 ID により、SYSADM 権限なしのログインで操作を行うユーザーに管理者特権が付与されます。
4. リポジトリ・ストレージ表を作成していない場合、「データベース・オブジェクト名のカスタマイズを可能にする」チェック・ボックスを選択すると、データベース・オブジェクトの命名方法をカスタマイズできるウィンドウが開きます。
5. 「次へ」をクリックします。表の状況に応じて、以下のように続行します。
 - すべての表が作成され、変更されていない場合は、メッセージが出されます。メッセージ・ダイアログの「OK」をクリックします。ウィザードの「リポジトリ・ストレージ表の保護」ページが開きます。
 - 表の作成または更新が必要で、「データベース・オブジェクト名のカスタマイズの有効化」チェック・ボックスを選択していなかった場合は、「置換変数値の入力」ウィンドウが開きます。「値」列にカスタマイズしたデータベース・オブジェクト名を入力してから、「OK」をクリックします。Db2 for

z/OS® 以外のデータベースの場合、このページは開きません。その場合は、ウィザードの「リポジトリ・ストレージ表の更新」ページが開き、必要なリポジトリ・ストレージ表を作成または更新するために使用される SQL ステートメントがリストされます。このページの説明に従って、SQL ステートメントを変更することができます。「次へ」をクリックします。「リポジトリ・ストレージ表の保護」ページが開きます。

- 「データベース・オブジェクト名のカスタマイズの有効化」チェック・ボックスを選択してある場合に、表を作成する必要があるときは、「置換変数値の入力」ウィンドウが開きます。「値」列にカスタマイズしたデータベース・オブジェクト名を入力してから、「OK」をクリックします。

注: ウィンドウの「値」列には、各データベース・オブジェクトのデフォルト名が表示されます。作成されるオブジェクトを検討し、必要であれば名前変更することができます。例えば、すべての索引名の前に「IX」を付けることもできます。

「置換変数値の入力」ウィンドウが閉じて、ウィザードの「リポジトリ・ストレージ表の更新」ページが開きます。

「次へ」をクリックします。「リポジトリ・ストレージ表の保護」ページが開きます。

リポジトリ・ストレージ表の保護とユーザー許可の付与

共有リポジトリ・ストレージを作成するための最後のステップは、共有リポジトリ・ストレージ表が無許可ユーザーから保護されるようにするかどうかを指定することです。

このタスクについて

リポジトリ・ストレージ内のいくつかの表は、QMF によって処理情報を格納するために使用されます。これらの表の中には、許可表などのように、機密性の高い情報が保管されているものもあります。デフォルトでは、すべてのユーザーがこれらのリポジトリ・ストレージ表にアクセスし、表に変更を加えられるようになっています。リポジトリ・ストレージ表には、表を保護するオプションがあります。保護モードでは、ストアード・プロシージャや静的 SQL パッケージ (そのリポジトリ・ストレージのホスト・データベースが何をサポートしているかによって異なる) の集合を使用してリポジトリ・ストレージ表にアクセスします。このため、リポジトリ・ストレージのユーザーにストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを実行するための許可を付与する必要があります。

リポジトリ・ストレージ表を保護するには:

手順

1. 「新規共有リポジトリ・ストレージの作成」ウィザードを開いて、「リポジトリ・ストレージ表を保護します」ページにナビゲートします。
2. 共有リポジトリ・ストレージ表を無許可のユーザーから保護するかどうかを指定します。デフォルトでは、「保護方式」チェック・ボックスは選択されていません。つまり、すべてのユーザーは、リポジトリ・ストレージ表にアクセスでき、どの表でも変更できる、ということになります。リポジトリ・ストレージ

ジ表を保護するよう指定するには、「保護方式」チェック・ボックスを選択してください。保護方式の指定に使用するフィールドが使用可能になります。

3. 以下のいずれかの保護方式を選択します。
 - 「ストアード・プロシージャ」を選択し、リポジトリ・ストレージ表を保護するためにストアード・プロシージャを使用することを指定します。このオプションは、リポジトリ・ストレージ表が以下のデータベースにある場合に選択できます。
 - Informix
 - DB2 UDB LUW V9 以降
 - DB2 iSeries (IBM Toolbox JDBC ドライバーを使用してアクセスする場合)
 - Microsoft SQL Server
 - 「静的 SQL パッケージ」を選択し、リポジトリ・ストレージ表を保護するために静的 SQL パッケージを使用することを指定します。このオプションは、リポジトリ・ストレージ表が、JDBC 用 IBM DB2 Universal ドライバーを使用して接続する Db2 データベース上にある場合にのみ選択できます。
4. ストアード・プロシージャや静的 SQL パッケージの集合の識別に使用する名前を「集合 ID」フィールドに入力するか、ドロップダウン・リストから選択します。
5. Db2 データベースを操作する場合は、オプションで所有者名を「所有者 ID」フィールドに入力できます。この所有者 ID により、SYSADM 権限なしのログインで操作を行うユーザーに管理者特権が付与されます。
6. 「作成」をクリックします。ストアード・プロシージャが作成されるか、静的 SQL パッケージがバインドされます。いずれかの処理が成功したことを通知するメッセージが出されます。「削除」ボタンを使用して、ストアード・プロシージャやパッケージの集合を除去することもできます。
7. このデータベース上のリポジトリ・ストレージ表に対してストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを実行する許可をどのユーザーに付与するかを指定します。すべてのユーザーに許可を付与するには、「ユーザー ID」フィールドに PUBLIC と入力して、「付与」をクリックします。特定のユーザーに許可を付与するには、フィールドにユーザー ID を入力し、「付与」をクリックします。選択されたユーザー ID にストアード・プロシージャまたはパッケージを実行するための許可が付与されたことを通知するメッセージが出されます。

オプションとして、「ユーザー ID」リスト・ボックスにリストされたユーザーのストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを実行する許可を取り消すことができます。1 人以上のユーザーの許可を取り消すには、1 つ以上のユーザー ID を強調表示して、「取り消し」をクリックします。ストアード・プロシージャや静的 SQL パッケージを実行する許可が、選択したユーザー ID から取り消されたことを通知するメッセージが出されます。
8. 「終了」をクリックします。リポジトリ・ストレージ表が作成されます。新しいリポジトリ・ストレージ表のロケーションが、「リポジトリ」ビューにリストされます。共有リポジトリ・ストレージをデータベースに作成後、スト

レージを共有する 1 つ以上のリポジトリを追加できます。作成する各リポジトリには、それ自体の独立オブジェクト、セキュリティー・モデル、およびユーザーを含めることができます。

最大同時データベース接続数の設定

リポジトリ・ストレージ表の作成において拡張機能を使用すると、最大同時データベース接続数を指定できます。

このタスクについて

Workstation と WebSphere のどちらにも備えられているこの拡張機能には、リポジトリ・ストレージ・データベースに対する並行アクセスを制限する機能が含まれています。

最大同時データベース接続数を設定するには、以下のようにします。

手順

1. 「リポジトリ」ビューで、作業するリポジトリ・ストレージを右クリックします。ポップアップ・メニューから「編集」を選択します。「リポジトリ・ストレージの編集」ウィンドウが開きます。
2. 「拡張」タブをクリックします。
3. 「最大同時データベース接続数」フィールドにデータベース接続数を指定します。デフォルト値は 10 です。
4. 「OK」をクリックします。リポジトリ・ストレージ表に、最大同時データベース接続数が設定されます。

第 11 章 リポジトリー

リポジトリーは、QMF オブジェクトおよびデータベース接続情報のストレージです。

QMF は、パーソナル・リポジトリーと共有リポジトリーをサポートします。Administrator コンポーネントには、リポジトリーを作成、管理、および保守するためのツールが用意されています。

リポジトリーの主な機能は以下のとおりです。

- リポジトリーは、アクセス可能なすべてのデータ・ソースおよびオブジェクトをツリー構造で編成します。
- リポジトリーは、セキュリティー・モデルを使用してコンテンツに対するユーザー・アクセスを制御します。
- リポジトリーは、最も一般的に使用されるデータベースに格納できます。リポジトリー表を、実動データと同じデータベースに配置するか、リポジトリーでの作業専用で作成されたスタンドアロン・データベース内に配置するかを選択できます。
- リポジトリーは、Db2 on LUW、Informix、Oracle、SQL Server、MySQL などの分散データベースによるサービスを受けることができます。

リポジトリー・セキュリティー

個々のユーザーおよびユーザー・グループに関してリポジトリーへのアクセスを制御するために、管理者は共有リポジトリーにセキュリティー・モデルを割り当てます。例えば、グループ A のユーザーがデータ・ソース A、B、および C を、グループ B のユーザーがデータ・ソース A、D、および E を表示できるようにすることができます。許可は、すべての QMF オブジェクト (照会、ダッシュボード、個々のワークスペース・フォルダーなど) に対して適用できます。

以下のセキュリティー・モデルを使用できます。

- LDAP/Active Directory:

QMF は、Active Directory などの LDAP ベースのサービスを使用してユーザーを認証し、ユーザーおよびグループのリストを取得します。

- データベース・セキュリティー:

QMF は、セキュリティー・モデルの基盤としてユーザーのデータベース・ログインを使用します。このセキュリティー・モデルは、リポジトリーのリポジトリー・ストレージが Db2 または Oracle のデータベースに置かれている場合にのみ使用できます。

- 内部セキュリティー:

この方式を使用すると、ユーザーおよびグループを QMF 自体の中で定義し、リポジトリー内に直接保存できます。

パーソナル・リポジトリ

パーソナル・リポジトリは、単一ユーザーにサービスを提供し、リレーショナル・データベースなしでローカル・ワークステーション上にコンテンツを保管することを可能にします。

QMF を個人用に構成する場合は、ユーザー・ヘルプの『個人用リポジトリの作成』トピックでパーソナル・リポジトリの作成方法に関する詳細情報を参照してください。

QMF には、*Samples* という名前の、事前構成されたパーソナル・リポジトリが含まれています。この *Samples* リポジトリには、サンプル・コンテンツに接続するためのリレーショナル・データ・ソースが含まれています。

作成するパーソナル・リポジトリは、QMF を実行しているマシンのホーム・ディレクトリに保管されます。

パーソナル・リポジトリではセキュリティー・モデルはサポートされません。

共有リポジトリ

共有リポジトリにセキュリティー・モデルが割り当てられている場合、共有リポジトリを管理できるユーザー数は限られます。割り当てられていない場合は、すべてのユーザーが管理者権限を持ちます。共有リポジトリでは、セキュリティー機能およびワークスペース機能がサポートされています。管理者はこれらの機能を使用して、エンタープライズ・リソースのビューを個々のユーザー単位またはグループ単位で制御できます。さらに、ログイン・マッピング機能と、ネットワーク接続または Web サービス・リポジトリ接続もサポートされています。ユーザーはこれらの機能を使用して、別のシステム上で設定されている接続を介してデータベースにアクセスできます。

QMF を複数ユーザー用に構成する場合は、共有リポジトリを作成します。

注: QMF for Workstation および QMF for WebSphere V1.2 フィックスパック 2 以降では、以下の変更が加えられました。

- データベース・ベース・リポジトリは、共有リポジトリと呼ばれるようになりました。
- ファイル・ベース・リポジトリは、パーソナル・リポジトリに置き換えられました。今後ファイル・ベース・リポジトリを作成することはできません。ただし、V1.2 フィックスパック 2 より前に作成されたどのファイル・ベース・リポジトリにも、引き続き接続することはできます。

リポジトリをリポジトリ・ストレージ表に追加

リポジトリをリポジトリ・ストレージ表に追加できます。リポジトリは、特定のデータ・ソース・セットに対してデータの集約 (照会、プロシージャ、書式、ダッシュボード、報告書など) が実現される中心地として機能します。作成する各リポジトリには、それ自体の独立オブジェクト、セキュリティー・モデル、およびユーザーを含めることができます。

始める前に

「リポジトリ」ビューがワークベンチで開いていることを確認します。「リポジトリ」ビューを開くには、「ウィンドウ」 > 「ビューの表示」 > 「リポジトリ」を選択します。「リポジトリ」タブがワークベンチで開きます。

このタスクについて

このトピックでは、データベース上のリポジトリ・ストレージ表内にリポジトリを追加する方法について説明します。

リポジトリを追加する手順の一環として、リポジトリにアクセスするための許可を定義します。この許可によって、リポジトリにアクセスできるユーザーやユーザー・グループが決まります。

リポジトリをリポジトリ・ストレージ表に追加するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「リポジトリ」ビューで、リポジトリを追加するリポジトリ・ストレージを右クリックします。ポップアップ・メニューから「新規」 > 「共有リポジトリ」を選択します。「新規共有リポジトリの作成」ウィザードが開きます。
2. 「名前」フィールドに、リポジトリを識別するために使用する名前を指定します。
3. オプションで、リポジトリを説明するコメントを「コメント」フィールドに入力します。このコメントは、リポジトリのプロパティとともに表示されます。
4. リポジトリに適用するセキュリティのタイプを選択します。「セキュリティ・プロバイダー」ドロップダウン・リストから以下のいずれかを選択します。
 - なし: リポジトリをホストするデータベースによって提供されるもの以外に、追加のセキュリティが適用されないことを指定します。すべてのユーザーは、リポジトリの内容への全アクセス権限を持ちます。
 - 内部: データベース・レベルで提供されるもの以外に、セキュリティのレイヤーが適用されることを指定します。このレベルのセキュリティを使用すると、ユーザーおよびグループを定義することができ、リポジトリへのアクセス許可を割り当てることができます。このセキュリティ・レベルで、リポジトリに接続したときにユーザーまたはグループがどのオブジェクトにアクセスしたり表示したりすることができるかも制御できます。ユーザーおよびグループ定義、およびそれらの割り当てはリポジトリ内に保管されます。ユーザーは定義されたユーザー ID とパスワードを使って QMF for Workstation または QMF for WebSphere にログオンします。QMF 管理者から割り当てられた許可に基づいて、リポジトリまたはリポジトリ・オブジェクトへのアクセス権が付与されます。
 - **LDAP**: データベース・レベルで提供されるもの以外に、セキュリティのレイヤーが適用されることを指定します。このレベルのセキュリティを使用すると、リポジトリへのアクセスが許可されたユーザーおよびグループを制御することができます。このセキュリティ・レベルで、リポジトリに接続したときにユーザーまたはグループがどのオブジェクトにアクセスした

り表示したりできるかも知れません。LDAP セキュリティー・オプションを選択すると、ユーザーはユーザー ID とグループ所属を既存の LDAP サーバーから取得します。ユーザーは LDAP ユーザー名とパスワードを使って QMF for Workstation または QMF for WebSphere にログオンします。QMF 管理者から割り当てられた許可に基づいて、リポジトリまたはリポジトリ・オブジェクトへのアクセス権が付与されます。

- データベース・ベース: これは、ホスト・データベースのセキュリティ設定が共有リポジトリの保護に使用されるように指定します。
5. 「内部」または「LDAP」セキュリティを選択した場合は、「次へ」をクリックします。以下のウィザード・ページのいずれかが開きます。
- 「内部」セキュリティを選択した場合、「内部セキュリティ・プロバイダー・オプション」ページが開きます。QMF 管理者アカウントを識別するユーザー名とパスワードを指定します。QMF 管理者アカウントは、追加の管理アカウントを作成することに加えて、別のユーザーやグループにセキュリティ権限レベルを適用するのに使用されます。
 - 「LDAP」セキュリティを選択した場合、「LDAP セキュリティー・プロバイダー・オプション」ページが開きます。LDAP の各フィールドに 1 つ以上の値を指定します。これらのフィールドは、すべての LDAP ユーザーとグループを取得するのに使用します。QMF 管理者アカウントを表すディレクトリー内の既存の LDAP グループを指定するよう求められます。このグループに属するすべての LDAP アカウントは QMF 管理者特権を持ち、別のユーザーおよびグループにセキュリティ許可レベルを適用することに加え、追加の管理アカウントを作成することができます。
6. 「終了」をクリックします。

タスクの結果

リポジトリが作成されて、共有リポジトリ・ストレージ内に含まれる使用可能なリポジトリのリストに追加されました。

次のタスク

次のステップはリポジトリ内のデータ・ソース情報の構成です。

「内部」セキュリティをリポジトリに適用した場合、リポジトリにアクセスできるユーザーおよびグループの作成を、この時点で実行するかまたはデータ・ソース情報を構成した後に行うかを選択できます。LDAP セキュリティーをリポジトリに割り当てた場合は、LDAP サーバーから取得されたすべてのユーザーとグループがリポジトリにアクセスできます。「内部」および「LDAP」のどちらのタイプの保護リポジトリであっても、リポジトリ・オブジェクトにアクセスするためのユーザーおよびグループ許可の割り当ては、ご使用環境の必要と変化に合わせて継続的に行います。

リポジトリを作成するだけの場合は、リポジトリ内のオブジェクトに対してユーザーまたはグループが持つアクセス・レベルを指定する前に、リポジトリにデータ・ソース情報を設定する必要があります。

内部セキュリティ・フィールドの指定

「内部」セキュリティが指定されたリポジトリの場合、QMF 管理者アカウントを識別するユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

管理者ログイン

このフィールドに、QMF 管理者を識別するユーザー名を指定します。QMF 管理者アカウントは、追加の管理アカウントや、新規ユーザーおよびグループのアカウントを作成するために使用されます。さらに管理者アカウントでのみ、ユーザーおよびグループにセキュリティ許可を適用することが可能です。

管理者パスワード

このフィールドを使用して、「管理者ログイン」フィールドで指定したユーザー ID とともに使用するパスワードを指定します。

管理者パスワードの確認

このフィールドを使用して、「管理者パスワード」フィールドで指定したパスワードを確認します。

パスワード満了日数 (0 - 期限なし)

このフィールドは、パスワードの有効期限が切れるまでの日数を指定するために使用します。値ゼロ (0) は、パスワードの有効期限が切れないことを示します。

パスワード満了日前に警告する日数

このフィールドは、パスワードを変更するようにとの警告が出される満了日前の日数を指定するために使用します。

内部セキュリティ・オプションのユーザーおよびグループの指定

「内部」セキュリティ・オプションを指定するには、リポジトリにアクセスできるユーザーおよびグループを特定する必要があります。

このタスクについて

作成するリポジトリごとに、アクセスを許可されるユーザーおよびグループの異なるセットを指定できます。リポジトリへのアクセスを許可されるユーザーおよびグループを特定した後、それらのユーザーやグループにリポジトリ内の特定のオブジェクトにアクセスする許可を割り当てることができます。

「内部」セキュリティのあるリポジトリにアクセス可能なユーザーおよびグループを設定するには:

手順

1. 「ウィンドウ」 > 「ビューの表示」 > 「ユーザーおよびグループ」を選択して、「ユーザーおよびグループ」ビューを開きます。
2. このリポジトリにアクセス可能な新しいユーザーを追加するには、「ユーザー」ノードを右クリックして、ポップアップ・メニューから「新規」 > 「ユーザー」を選択します。「新規リポジトリ・ユーザー」ウィンドウが開きます。新しいユーザー情報を指定します。

3. このリポジトリにアクセス可能な新しいグループを追加するには、「グループ」ノードを右クリックして、ポップアップ・メニューから「新規」>「グループ」を選択します。「新規リポジトリ・グループ」ウィンドウが開きます。新しいグループ情報を指定します。
4. ユーザーのパスワードを編集するには、ツリーにあるユーザー名を右クリックして、ポップアップ・メニューから「パスワードの設定」を選択します。「ユーザーのパスワードを設定」ウィンドウが開きます。「パスワード」フィールドに新規パスワードを指定します。
5. ユーザーまたはグループを削除するには、ツリーにあるユーザーまたはグループの名前を右クリックして、ポップアップ・メニューから「削除」を選択します。選択したユーザーまたはグループが削除されます。
6. ユーザー名およびグループ名のリストを最新表示するには、ビューのどこか、またはツリーにあるいずれかのエレメントを右クリックして、ポップアップ・メニューから「最新表示」を選択します。リストが更新されます。
7. ユーザーのプロパティ、またはグループのプロパティを編集するには、ツリーにあるユーザーまたはグループの名前を右クリックして、ポップアップ・メニューから「プロパティ」を選択します。ユーザーを選択した場合は「[ユーザー]のプロパティ」ウィンドウが、グループを選択した場合は「[グループ]のプロパティ」ウィンドウが開きます。変更するフィールドを編集して、「OK」をクリックします。
8. 「ユーザーおよびグループ」ビューを開いたままにしておくか、またはクローズ・アイコンをクリックしてビューを閉じることができます。内部セキュリティのあるリポジトリ用にユーザーおよびグループを設定するための次のステップは、リポジトリ・オブジェクトを使用する許可を割り当てることです。

ユーザーの作成

「内部」セキュリティ・オプションを割り当てられたリポジトリへのアクセスが許可される、それぞれのユーザーを定義する必要があります。

このタスクについて

「内部」セキュリティを持つリポジトリへのアクセスが許可される新しいユーザーを作成するには:

手順

1. 「新規リポジトリ・ユーザー」ウィンドウを開きます。それには、「ユーザーおよびグループ」枝までリポジトリ・ツリーを展開し、「ユーザー」を右クリックして、「新規」>「ユーザー」を選択します。
2. ユーザーがリポジトリの接続に使用する ID を「ユーザー名」フィールドに指定します。
3. ユーザーのフルネームを「フルネーム」フィールドに指定します。
4. ユーザー名のパスワードを「パスワード」フィールドに指定します。
5. ユーザー名のパスワードを「パスワードの確認」フィールドに再入力します。
6. オプションで、「説明」フィールドにユーザーの説明を入力できます。この記述はユーザーのプロパティとともに表示されます。

7. ユーザーのデフォルト・ホーム・ワークスペースを自動的に作成するには、「ホーム・ワークスペースの使用」チェック・ボックスを選択します。
8. 「グループ・メンバーシップ」チェック・ボックスを使用して、新しいユーザーをグループに追加します。作成した各グループがリストされます。1 つ以上のグループのチェック・ボックスを選択できます。ユーザーは、チェック・ボックスが選択された各グループに追加されます。ユーザーを追加するグループがリストにない場合には、そのグループを定義する必要があります。
9. 「終了」をクリックします。ユーザー ID が作成されて、リポジトリへのアクセスが許可されます。リポジトリへのアクセスを可能にする新規ユーザーごとに、このプロセスを繰り返します。リポジトリにアクセス可能なユーザーおよびグループを指定した後の次のステップは、それらのユーザーやグループにリポジトリ・オブジェクトを使用する許可を割り当てることです。

新規グループの作成

「内部」セキュリティ・オプションを割り当てられたリポジトリへのアクセスが許可される、それぞれのグループを定義する必要があります。

このタスクについて

「内部」セキュリティを持つリポジトリへのアクセスが許可される新しいグループを作成するには:

手順

1. 「新規リポジトリ・グループ」ウィンドウを開きます。それには、「ユーザーおよびグループ」枝までリポジトリ・ツリーを展開し、「グループ」を右クリックして、「新規」>「グループ」を選択します。
2. 「グループ名」フィールドにグループの名前を指定します。
3. 「メンバー」チェック・ボックスを使用して、ユーザーを新しいグループに追加します。作成した各ユーザーがリストされます。1 人以上のユーザーのチェック・ボックスを選択することができます。
4. 「親」フィールドを使用して、新しいグループの親フォルダーを指定します。現在のグループ階層が表示されます。ツリーから、新しいグループの親になるグループを選択します。
5. オプションで、「説明」フィールドにグループの説明を入力できます。この記述はグループのプロパティとともに表示されます。
6. 「終了」をクリックして、新規グループを作成します。

ユーザー・プロパティの編集

「内部」セキュリティ・オプションを割り当てられたリポジトリへのアクセスが許可される、それぞれのユーザーに対して指定したプロパティは編集できます。

このタスクについて

ユーザーのプロパティを編集するには:

手順

1. 「ウィンドウ」 > 「ビューの表示」 > 「ユーザーおよびグループ」 > 「その他」を選択して、「ユーザーおよびグループ」ビューを開きます。QMF ワークベンチを展開して、「ユーザーおよびグループ」を選択します。ツリーにあるユーザー名を右クリックして、ポップアップ・メニューから「プロパティ」を選択します。「[ユーザー] のプロパティ」ウィンドウが開きます。
2. 「[ユーザー] のプロパティ」ウィンドウの「ユーザー (一般)」ページで、選択されたユーザーの名前が「ユーザー名」フィールドに表示されます。このページで以下のユーザー・フィールドを編集できます。
 - ユーザー名に対する変更を「ユーザー名」フィールドに入力します。
 - ユーザーのフルネームに対する変更を「フルネーム」フィールドに入力します。
 - 「記述」フィールドに、記述の変更を入力します。
 - 「パスワードの設定」ボタンをクリックして、ユーザーの新規パスワードを指定します。「[ユーザー] のパスワードの設定」ウィンドウが開き、ここで新しいパスワードを指定できます。
3. 「[ユーザー] のプロパティ」ウィンドウの「ユーザー (メンバーシップ)」ページで、グループにユーザーを追加したり、グループからユーザーを削除したりできます。リポジトリに作成したすべてのグループが「所属グループ」リスト・ボックスにリストされます。各グループには、対応するチェック・ボックスがあります。このチェック・ボックスは、ユーザーがそのグループに属する場合には選択されていて、ユーザーがそのグループに属さない場合にはクリアされています。ユーザーをグループに追加するには、グループの対応するチェック・ボックスを選択します。ユーザーをグループから除去するには、グループの対応するチェック・ボックスの選択を解除します。
4. 「OK」をクリックします。ユーザーのプロパティに対して行われた変更が保存されます。

グループ・プロパティの編集

内部的に保護されたりリポジトリにアクセス可能な各グループのプロパティを編集できます。

このタスクについて

グループのプロパティを編集するには:

手順

1. 「ウィンドウ」 > 「ビューの表示」 > 「ユーザーおよびグループ」 > 「その他」を選択して、「ユーザーおよびグループ」ビューを開きます。QMF ワークベンチを展開して、「ユーザーおよびグループ」を選択します。ツリーにあるグループ名を右クリックして、ポップアップ・メニューから「プロパティ」を選択します。「[グループ] のプロパティ」ウィンドウが開きます。
2. 「プロパティ」ウィンドウの「グループ (一般)」ページの「グループ名」フィールドには、選択されたグループの名前が表示されます。このフィールドで、グループの名前を変更できます。
3. 選択されたグループの親グループが、「親グループ」フィールドに表示されます。選択されたグループの親グループを変更するには、「変更」をクリックしま

す。「親グループの編集」ウィンドウが開きます。選択されたグループを追加するグループが表示されるまで、「グループ」ツリーの枝を展開します。「親として設定」をクリックします。選択されたグループが、新しい親グループに移動します。

4. グループについての説明は、「説明」フィールドに表示されます。新しいテキストをフィールドに直接入力することによって、説明テキストを編集できます。
5. 「適用」をクリックして、変更した「グループ (一般)」プロパティを適用します。
6. 「[グループ] のプロパティ」ウィンドウの「グループ・メンバーシップ」ページを使用して、選択されたグループに対してユーザーを追加および除去することができます。リポジトリに定義されているすべてのユーザーが「メンバー」リスト・ボックスにリストされます。対応するチェック・ボックス (ユーザーごと) は、ユーザーがそのグループに属する場合には選択されていて、ユーザーがそのグループに属さない場合にはクリアされています。ユーザーをグループに追加するには、グループの対応するチェック・ボックスを選択します。ユーザーをグループから除去するには、グループの対応するチェック・ボックスの選択を解除します。
7. 「適用」をクリックして、変更した「グループ・メンバーシップ」プロパティを適用します。
8. 「OK」をクリックします。グループのプロパティに対して行った変更が保存されます。

LDAP セキュリティー・フィールドの指定

リポジトリに LDAP セキュリティー・オプションを指定した場合、ユーザー ID とグループ所属を LDAP サーバーから取得するために LDAP セキュリティー・パラメーターを指定する必要があります。

このタスクについて

注: LDAP サーバーで定義されたすべてのユーザーとグループが取得され、リポジトリにアクセスするための許可が付与されます。ユーザーおよびグループが持つリポジトリに対するアクセスのタイプを指定するには、リポジトリのセキュリティー・プロパティを編集して、許可レベルを各ユーザーまたはグループに割り当てます。

LDAP メイン・フィールドの指定

データベース・リポジトリに対して LDAP セキュリティーを選択した場合は、LDAP のメイン・フィールドを指定する必要があります。

「ホスト」

このフィールドは、LDAP サーバーの IP アドレスを指定するために使用します。

「ポート」

このフィールドに、LDAP サーバーで使用される接続ポートを指定します。例えば、LDAP プロトコルは、TCP/IP ポート番号 389 を LDAP 用を使用することを指定します。ただしこの値は、ご使用の環境で指定された内容によって異なります。

LDAP サーバーとの通信に Secure Sockets Layer (SSL) プロトコルを使用するには、「**SSL の使用**」チェック・ボックスを選択し、「ポート」フィールドに適切な SSL ポート番号を指定します。

注: 使用する LDAP サーバーは SSL を使用するように構成されていなければなりません。

認証タイプ

このフィールドに、このリポジトリに対して行われる LDAP 認証のタイプを指定します。ユーザーを匿名ユーザーとして LDAP サーバーに対して認証できるようにするには、「なし」を選択します。識別名 (DN) とパスワードによってユーザーを LDAP サーバーに対して認証することを要求するには、「単純」を選択します。

ユーザー DN

このフィールドには、LDAP ディレクトリーにアクセスするために使用できるユーザー識別名を指定します。このフィールドが使用可能なのは、LDAP ディレクトリーにアクセスするために認証が必要で、かつ「認証タイプ」フィールドに「単純」を指定した場合だけです。

パスワード

このフィールドには、「ユーザー DN」フィールドで指定したユーザーの識別名に関連付けられたパスワードを指定します。

基本 DN

このフィールドは、LDAP ディレクトリーの中で、すべてのユーザーとグループの検索先となる項目に導く識別名を指定 (あるいはドロップダウン・リストから選択) するために使用します。識別名は、ご使用の LDAP ディレクトリーにおける項目の固有名です。例えば、ou=people、o=eastcoast などです。

アカウントが必須

マスター・アカウントを使用して LDAP リポジトリ設定を編集できるように指定するには、このチェック・ボックスを選択します。

ログイン

マスター・アカウントとして使用するログインを指定します。

パスワード

マスター・アカウント用に使用するパスワードを指定します。

LDAP グループ・フィールドの指定

データベース・リポジトリに対して LDAP セキュリティーを選択した場合は、LDAP グループの各フィールドを指定する必要があります。

基本 RDN

このフィールドに、グループの相対識別名を指定します。例えば、o=Sales などです。

検索有効範囲

ディレクトリー検索で可能な有効範囲を指定します。以下のいずれかを指定できます。

- **1 レベル**: 基本オブジェクトを除き、基本 **RDN** レベルより 1 レベル下を検索します。

- サブツリー: 基本オブジェクトとそのすべての子オブジェクトを含め、基本 **RDN** レベルをルートとするサブツリー全体を検索します。

オブジェクト・クラス

グループが属するオブジェクト・クラスを指定します。例:

`objectclass:posixGroup` は、基本 **RDN** の下の全項目が `posixGroup` クラスに属することを示します。

名前属性

グループ名を指定する値を持つ属性の名前を指定します。

記述属性

グループの記述を指定する値を持つ属性の名前を指定します。

名前フィルター

このフィールドは、名前によるグループの検索に使用される、標準の検索ストリングを指定します。このフィールドは、「名前属性」および「オブジェクト・クラス」フィールドで指定する値を基にして生成されます。

すべてのグループ・フィルター

このフィールドは、基本 **RDN** の下にあるすべてのグループを戻す、標準の検索ストリングを指定します。このフィールドは、「名前属性」および「オブジェクト・クラス」フィールドで指定する値を基にして生成されます。

ユーザーのグループ

このフィールドに、メンバーが属するグループを指定します。

管理者のグループ

このフィールドを使用して、メンバーに **QMF** 製品のコンテンツに対する管理者権限が付与されるグループを指定します。

メンバー属性

グループ内のメンバーシップを指定する値を持つ、グループ項目の属性の名前を指定します。ユーザー項目またはユーザーの名前を参照する **RDN** を指定できます。

メンバー・タイプ

「メンバー属性」フィールドで指定した内容を基にして、メンバー・タイプを指定します。「メンバー属性」フィールドに **RDN** を指定した場合、メンバー・タイプは「**DN**」です。「メンバー属性」フィールドにユーザー名を指定した場合、メンバー・タイプは「**Value**」です。

ID タイプ

グループを識別するために使用する属性と、グループがリポジトリに対して持つアクセス権限のタイプを指定します。識別属性を使用すると、グループが名前変更された場合、または **LDAP** ディレクトリー内の別のフォルダーに移動された場合に、グループに付与されたりリポジトリに対する許可は確実に保持されます。指定できる値は以下のとおりです。

- **DN** (デフォルト値)。グループの識別名が識別に使用されることを示します。
- カスタム属性。「カスタム属性」フィールドに指定された属性の名前が識別に使用されることを示します。

カスタム属性

このフィールドは、「カスタム属性」ID タイプを選択した場合にのみ使用できます。グループの識別に値が使用される属性の名前を指定します。

LDAP ユーザー・フィールドの指定

データベース・リポジトリに対して LDAP セキュリティーを選択した場合は、LDAP ユーザーの各フィールドを指定する必要があります。

基本 RDN

このフィールドに、ユーザーの相対識別名を指定します。例えば、uid=Mike などです。

検索有効範囲

ディレクトリー検索で可能な有効範囲を指定します。以下のいずれかを指定できます。

- **1 レベル:** 基本オブジェクトを除き、基本 RDN レベルより 1 レベル下を検索します。
- **サブツリー:** 基本オブジェクトとそのすべての子オブジェクトを含め、基本 RDN レベルをルートとするサブツリー全体を検索します。

オブジェクト・クラス

ユーザーが属するオブジェクト・クラスを指定します。例:
objectclass:sales は、基本 RDN の下にある全項目が sales クラスに属することを示します。

名前属性

ユーザー名を指定する値を持つ属性の名前を指定します。

記述属性

ユーザーの記述を指定する値を持つ属性の名前を指定します。

名前フィルター

このフィールドは、名前によるユーザーの検索に使用される、標準の検索ストリングを指定します。このフィールドは、「名前属性」および「オブジェクト・クラス」フィールドで指定する値を基にして生成されます。

すべてのユーザー・フィルター

このフィールドは、基本 RDN の下にあるすべてのユーザーを戻す、標準の検索ストリングを指定します。このフィールドは、「名前属性」および「オブジェクト・クラス」フィールドで指定する値を基にして生成されます。

フルネーム属性

このフィールドに、ユーザーのフルネームを含む属性の名前を指定します。

ログイン属性

ユーザーのログインを指定する値を持つ属性の名前を指定します。

ID タイプ

ユーザーを識別するために使用する属性と、ユーザーがリポジトリに対して持つアクセス権限のタイプを指定します。識別属性を使用すると、ユーザーが名前変更された場合、または LDAP ディレクトリー内の別のフォルダーに移動された場合に、ユーザーに付与されたりリポジトリに対する許可は確実に保持されます。指定できる値は以下のとおりです。

- **DN** (デフォルト値)。ユーザーの識別名が識別に使用されることを示します。
- **>ログイン属性**。「ログイン属性」フィールドに指定された属性の名前が識別に使用されることを示します。
- **カスタム属性**。「カスタム属性」フィールドに指定された属性の名前が識別に使用されることを示します。

カスタム属性

このフィールドは、「カスタム属性」ID タイプを選択した場合にのみ使用できます。ユーザーの識別に値が使用される属性の名前を指定します。

注: ユーザーとグループが同じ値の識別属性を持つ場合、ユーザーとグループは、リポジトリ内の異なるセキュリティー・オブジェクトとして判別されます。

LDAP 認証子のフィールドの指定

データベース・リポジトリに対して LDAP セキュリティーを選択した場合は、LDAP 認証の各フィールドを指定する必要があります。

認証子タイプ

このフィールドに、行う認証のタイプを指定します。以下の方法から選択できます。

- **バインド**: LDAP バインド操作を使用します。
- **比較**: 「パスワード属性」の値とユーザーの項目の値を比較するストリングを使用します。

ユーザーのパスワード属性

このフィールドに、ユーザー項目内でパスワードとして検索される属性を指定します。このフィールドは、「認証子タイプ」フィールドで「比較」を指定した場合にのみ使用されます。

基本 DN の付加

このチェック・ボックスを選択して、ユーザーの認証時に基本 DN をユーザーの RDN に付加することを指定します。このフィールドは、「認証子タイプ」フィールドで「バインド」を指定した場合にのみ使用されます。

空のパスワードを許可

このチェック・ボックスを選択して、空のパスワードを許可します。

第 12 章 データ・ソース

管理者として、データベース接続情報を保管するデータ・ソースを作成します。

データ・ソースは、それが表すデータベースのタイプ別に分類されます。

表 11. データ・ソース・タイプ

データ・ソース	データベース
リレーショナル	データはリレーショナル・データベースに保管されます。
マルチディメンション	データはマルチディメンション・データベースに保管されます。
Hive	データは Apache Hive™ データウェアハウスに保管されます。
フォルダー	データはローカル・ファイル・システムに保管されます。
仮想	データは仮想表および JavaScript テーブルに保管されます。
JavaScript	データはオンライン・サービスによって提供されます。データは JavaScript テーブルに保管されます。

フォルダー・データ・ソースを除き、データ・ソースの作成時の最初のステップは、可用性タイプの選択です。共有データ・ソースを作成すると、データ・ソースは、現在作成しているリポジトリに保管され、すべてのユーザーが使用できるようになります。パーソナル・データ・ソースの作成を選択すると、データ・ソースはローカル・ファイル・システムに保管されます。パーソナル・データ・ソースは、それらを作成したユーザーのみが使用できます。

多くの構成シナリオでは、データベースへの接続を作成するユーザーがデータ・ソースの認証要件を把握しています。

QMF カタログ機能を使用可能にする

リポジトリ内のリレーショナル・データ・ソースを構成して、QMF カタログを使用できるようにすることができます。QMF カタログへのアクセスを使用可能にすると、ユーザーは QMF カタログ内に保存されているオブジェクトへのアクセスが可能になり、必要に応じて新規オブジェクトを QMF カタログに保存できます。

このタスクについて

QMF カタログは、保存されたオブジェクト (照会、プロシージャ、書式)、ユーザー・リソース限界とプロファイル、報告書、およびその他の各種設定と情報が入っているデータベース表のセットです。QMF カタログは、Db2 データベースをホストするデータベース・サーバー上にあります。

注: QMF カタログは、QMF 11 以降ではリポジトリに置き換えられています
が、QMF オブジェクトを QMF for TSO/CICS、または QMF 分散製品の以前の
バージョンで共有するユーザーのために残されています。QMF バージョン 11 リポ
ジトリはより柔軟性があり、ユーザーは強力な QMF バージョン 11 のすべての
機能を活用できるようになります。

QMF カタログへアクセスするようにデータ・ソースを構成することにより、ユー
ザーは、既存の QMF カタログに保存されている任意の QMF オブジェクトを取得で
きます。また、ユーザーは、作成した QMF オブジェクトを QMF カタログに保存
することもできます。これにより、ユーザーは、QMF オブジェクトを作成するた
めに使用されたアプリケーションのバージョンまたはプラットフォームに関係なく、
オブジェクトを共有および使用できます。

さらに、QMF カタログへアクセスするようにデータ・ソースを構成すると、デー
タ・ソースおよびユーザーに設定され、QMF カタログに保存されたリソース限界に
よって、リソースの使用を制御できます。

データ・ソースを構成して、QMF カタログにアクセスできるようにするには:

手順

1. 「QMF カタログ・ウィザード」を開きます。
2. 「QMF カタログ・ウィザード」の「カタログ・オブジェクトを作成または更新
します」ページを使用して作成するカタログ・オブジェクトのタイプを指定しま
す。
3. 「次へ」をクリックします。
4. QMF カタログ表のセットがデータ・ソースで作成されなかったことが分かった
場合は、「オブジェクト・リスト・オプションを選択します」ページが開きま
す。オプションを選択して、「次へ」をクリックします。ウィザードの「オブ
ジェクトの作成」ページが開きます。カタログ表を作成する SQL が表示されま
す。SQL に対して変更を加えることができます。QMF カタログ表のセット
がこのデータ・ソースにすでに作成され、必要な更新がない場合、このステップ
は迂回されます。
5. 「次へ」をクリックします。
6. ウィザードの「QMF カタログ表の保護」ページが開きます。「QMF カタログ
表の保護」ページで、QMF カタログ表を無許可のユーザーから保護するかど
うかを指定します。さらに、それらのストアード・プロシージャーまたは SQL
パッケージを使用するためのユーザー許可を指定します。
7. 「次へ」をクリックします。
8. ウィザードの「QMF カタログの選択」ページが開きます。「QMF カタログの
選択」ページで、データ・ソースが使用する QMF カタログを選択します。
9. 「終了」をクリックします。「QMF カタログ・ウィザード」が閉じます。制御
が「リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードの「データ・ソース・
プラグインを使用可能にします」ページに戻ります。

QMF カタログ・オブジェクトの作成または更新

QMF カタログ機能を使用可能にするための最初のステップは、現在のデータ・ソース上で QMF カタログ・オブジェクトを作成するか更新するかを選択することです。

このタスクについて

QMF カタログのデータベース・オブジェクトを作成または更新するには:

手順

1. 「リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードの「データ・ソース・プラグインを使用可能にします」ページで「**QMF** カタログ・プラグイン」、「プラグインを使用可能にする」チェック・ボックスを選択します。「**QMF** カタログ・ウィザード」の「カタログ・オブジェクトを作成または更新します」ページが開きます。
2. 「カタログ・オブジェクトを作成または更新します」ページで、**QMF** カタログ表のセットがデータ・ソースで作成されたことがあるかどうかということと、既存の **QMF** カタログや、作成される **QMF** カタログで現在サポートされている、または今後サポートされるオブジェクト名 (長い名前または短い名前) の種類を指定します。以下のいずれかを選択します。
 - **QMF** カタログ表がこのデータ・ソース上に既に存在する場合、「カタログ表はすでに作成されている」を選択します。カタログ表のセットは、データ・ソースがリポジトリ内に、または前バージョンのアプリケーションによって最初に構成されたときに、作成された可能性があります。このオプションは、表が既に作成済みであることが分かっている、ストアド・プロシージャを再実行するだけか、またはカタログ・パッケージを再バインドするだけの場合に選択します。
 - 「短い名前をサポートするようにカタログ表を作成または更新」オプションは、**QMF** カタログ表をインストールしたことの無い新規のデータ・ソースを構成していて、オブジェクトに短い名前しか使用しない場合、または旧バージョンのアプリケーションからアップグレードしていて、既存の **QMF** カタログ表でこれからもオブジェクトの短い名前のみをサポートする場合に選択します。データ・ソース上に既存の **QMF** カタログ表がない場合は、新しい **QMF** カタログ表が作成されます。新しいバージョンにアップグレードしていて、表のセットがデータ・ソース上に存在する場合、それらが検査されて必要に応じて更新または追加されます。表の作成に使用される SQL ステートメントは確認および変更できます。既存のカタログ表内のすべてのデータは保持されます。
 - 「長い名前をサポートするようにカタログ表を作成または更新」は、初めてデータ・ソースを構成していて長い名前を使用する **QMF** カタログ表のセットを作成する場合、アプリケーションの以前のバージョンからアップグレードしていて既存の **QMF** カタログ表がこれからもオブジェクトの長い名前だけをサポートする場合、または短い名前をサポートする既存のカタログ表を長い名前をサポートするカタログ表に変換する場合に選択します。このオプションを選択するためには、構成するデータ・ソースが長い名前をサポートする必要があります。長い名前をサポートする **QMF** カタログ表を作成する

ように選択した場合は、バージョン 8.1 よりも前の QMF アプリケーションでは、長い名前の QMF カタログ表を使用できません。

データ・ソース上に QMF カタログ表がない場合は、長い名前をサポートする QMF カタログ表が作成されます。長い名前をサポートする QMF カタログ表のセットがデータ・ソースで検出された場合、それらは必要に応じて更新または追加されます。短い名前を使用する既存の QMF カタログ表セットがデータ・ソース上で検出された場合、それらは長い名前をサポートするように変換されます。データ・ソースは検査されて、長い名前のサポートが使用可能であることが確認されます。QMF カタログ表で長い名前を使用する必要はありません。データ・ソースで長い名前が使用されている場合でも、QMF カタログ表では短い名前を使用できます。変換が行われると、8.1 以降の QMF アプリケーションでしか、これらの QMF カタログ表を使用できなくなります。

表の作成または更新に使用する SQL ステートメントは確認および変更できます。既存のカタログ表内のすべてのデータは保持されます。

- このデータ・ソースの QMF カタログ表のセットを作成したくない場合は、「カタログ表を作成しない」を選択します。構成しているデータ・ソースが QMF カタログをホストしない場合、異なるデータ・ソースにある QMF カタログ表のセットを使用する場合、あるいはこのデータ・ソースの QMF カタログ表のセットが既に作成されていて、異なる QMF カタログを選択するだけの場合は、このオプションを選択します。
3. カタログ表が作成されていない場合は、「データベース・オブジェクト名のカスタマイズの有効化」チェック・ボックスを選択して、データベース・オブジェクトの命名方法をカスタマイズできるウィンドウを開くことができます。
 4. 「次へ」をクリックして、ウィザードの次のページを開きます。次に選択の例を示します。
 - 「カタログ表はすでに作成されている」オプションを選択した場合は、ウィザードの「QMF カタログ表の保護」ページが開きます。
 - 「短い名前をサポートするようにカタログ表を作成または更新」または「長い名前をサポートするようにカタログ表を作成または更新」オプションを選択した場合、「データベース・オブジェクト名のカスタマイズを可能にする」チェック・ボックスにチェック・マークを付けないと、ウィザードの「オブジェクト・リスト・オプションを選択してください」ページが開きます。オプションを選択して、「次へ」をクリックします。「オブジェクトの作成」ページが開きます。このページで、SQL ステートメントに行う変更を入力し、「次へ」をクリックします。「QMF カタログ表の保護」ページが開きます。
 - 「短い名前をサポートするようにカタログ表を作成または更新」オプションまたは「長い名前をサポートするようにカタログ表を作成または更新」オプションを選択し、「データベース・オブジェクト名のカスタマイズを可能にする」チェック・ボックスにチェック・マークを付けた場合、ウィザードの「オブジェクト・リスト・オプションを選択します」ページが開きます。オプションを選択して、「次へ」をクリックします。「置換変数値の入力」ウィンドウが開きます。ダイアログの「値」列には、各データベース・オブジェクトのデフォルト名が表示されます。作成されるオブジェクトを検討し、

必要であれば名前変更することができます。例えば、すべての索引名の前に IX を付けることもできます。「値」列にカスタマイズしたデータベース・オブジェクト名を入力してから、「OK」をクリックします。「オブジェクトの作成」ページが開きます。このページで、SQL ステートメントに行う変更を入力し、「次へ」をクリックします。「QMF カタログ表の保護」ページが開きます。

- 「カタログ表を作成しない」オプションを選択した場合は、ウィザードの「QMF カタログ表の保護」ページが開きます。

QMF カタログのデータベース・オブジェクトの作成

QMF カタログ機能を使用可能にするための第 2 ステップは、QMF カタログ用データベース・オブジェクトの作成に使用する SQL を確認および実行することです。

このタスクについて

プロセスのこのステップは、カタログ・オブジェクトがデータ・ソース上で作成された場合、または既存のカタログ・オブジェクトを更新する必要がある場合にのみ必要です。

必要なデータベース・オブジェクトの作成または更新に使用する SQL ステートメントを変更するには:

手順

1. カタログ表の作成または更新を選択した場合、「QMF カタログ・ウィザード」の「オブジェクト・リスト・オプションを選択します」ページが開きます。
2. ラジオ・グループから、オブジェクト・リスト・オプションを選択します。
 - すべてのオブジェクトを組み込む - このオプションを選択すると、ユーザーのアクセス権限に関わりなく、データ・ソース内に保存されているすべてのオブジェクトが組み込まれます。
 - ユーザーの 1 次または現行許可 ID によってアクセス可能なオブジェクトのみを組み込む
 - ユーザーの 1 次または 2 次許可 ID のいずれかによってアクセス可能なオブジェクトのみを組み込む
3. 「次へ」をクリックします。「QMF カタログ・ウィザード」の「オブジェクトの作成」ページが開きます。
4. 表の作成または更新に使用される SQL が、フィールドに表示されます。SQL ステートメントに行いたい変更を直接、フィールドに入力します。SQL ステートメントはどれも、パラメーターをカスタマイズするために変更できます。オブジェクトの名前は変更できません。複数のステートメントを区切るには、セミコロン (;) を使用します。変更することが本当に必要でない限り、この SQL は表示されたとおりに実行することをお勧めします。

注: RDBI.PROFILES 表または Q.PROFILES 表を SQL で指定することにより、RDBI.PROFILE_VIEW でこれらの表が使用されるように切り替えることができます。表を切り替える場合は、各 CREATOR の ENVIRONMENT 列に正しい値を指定する必要があります。

- 特定の CREATOR の既存の表の行で <NULL> を指定して、QMF for TSO/CICS と QMF for Workstation または QMF for WebSphere の両方で作成者を有効にします。
 - 特定の作成者の既存の表の行をコピーして、TSO または CICS を WINDOWS で置き換えます。QMF for TSO/CICS と QMF for Workstation または QMF for WebSphere の両方で作成者が有効です。
5. 「次へ」をクリックします。このステップを実行すると、「デフォルト」という名前の QMF カタログが作成されます。ウィザードの「QMF カタログ表の保護」ページが開きます。

カタログ表の保護とユーザー許可の付与

リレーショナル・データ・ソースが QMF カタログを使用するように構成するための 3 番目のステップは、QMF カタログ表を無許可のユーザーから保護するかどうかを指定すること、およびそれらの表にアクセスする許可を付与するユーザーを指定することです。

このタスクについて

QMF カタログ内のいくつかの表には、公開すべきではない機密情報が保管されています。QMF カタログ表には、表を保護するオプションがあります。保護モードでは、ストアード・プロシージャまたは SQL パッケージ (その QMF カタログをホストするデータベースが何をサポートしているかによって異なる) の集合を使用して QMF カタログ表にアクセスします。このため、QMF カタログのユーザーにストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを実行するための許可を付与する必要があります。

QMF カタログ表を保護するには:

手順

1. 「QMF カタログ・ウィザード」の「QMF カタログ表の保護」ページを開きます。
2. QMF カタログ表に適用される保護のタイプを指定するには、「保護モードを使用して接続」ラジオ・グループから以下のいずれかを選択します。
 - 使用しない (**Never**): このオプションを選択すると、QMF カタログ表に保護を適用しないことを指定します。この方式では、QMF カタログ表が無許可で使用できる状態になります。保護がないので、QMF カタログ表には任意のユーザーが動的照会を使用してアクセスできます。データベース管理者がユーザーにデータベース上に存在する QMF カタログにアクセスする許可を付与すると、その許可は機密情報が保管されている QMF カタログ内の表を含む、QMF カタログ全体に拡張されます。
 - 可能な場合: このオプションを選択すると、ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージのどちらかがデータ・ソースで使用可能な場合には、それを使用して QMF カタログ表が保護されることを指定します。ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを実行できるユーザーを指定します。ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージのセットが使用可能ではない場合、QMF カタログ表へのアクセスは無保護の場合と同じになります。

- 常時 (**Always**): このオプションを選択すると、QMF カタログ表が、ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージのどちらかを使用して常に保護されることを指定します。ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを実行できるユーザーを指定します。ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージのセットが使用可能ではない場合、QMF カタログ表にアクセスする照会は失敗します。
3. 「可能な場合」または「常時」を「保護モードを使用して接続」ラジオ・グループで選択した場合、「保護」チェック・ボックスが使用可能になります。
 4. 「保護」チェック・ボックスを選択します。保護方式のオプションが使用可能になります。
 5. 以下のいずれかの保護方式を選択します。
 - 「ストアード・プロシージャ」を選択し、QMF カタログ表を保護するためにストアード・プロシージャを使用することを指定します。このオプションは、リポジトリ・ストレージ表が以下のデータベースにある場合に選択できます。
 - DB2 UDB LUW V9 以降
 - DB2 iSeries (IBM Toolbox JDBC ドライバーを使用してアクセスする場合)
 - 「静的 SQL パッケージ」を選択し、QMF カタログ表を保護するために静的 SQL パッケージを使用することを指定します。このオプションは、リポジトリ・ストレージ表が、JDBC 用 IBM DB2 Universal ドライバーを使用して接続する Db2 データベース上にある場合にのみ選択できます。
 6. ストアード・プロシージャや静的 SQL パッケージの集合の識別に使用する名前を「集合 ID」フィールドに入力するか、ドロップダウン・リストから選択します。
 7. Db2 データベースを操作する場合は、オプションで所有者名を「所有者 ID」フィールドに入力できます。この所有者 ID により、SYSADM 権限なしのログインで操作を行うユーザーに管理者特権が付与されます。
 8. 「作成」をクリックします。ストアード・プロシージャが作成されるか、静的 SQL パッケージがバインドされます。いずれかの処理が成功したことを通知するメッセージが出されます。「削除」を使用して、ストアード・プロシージャや静的パッケージの集合を除去することもできます。
 9. このデータベースで QMF カタログ表のストアード・プロシージャや静的 SQL パッケージを実行する許可をどのユーザーに付与するかを指定する必要があります。すべてのユーザーに許可を付与するには、「ユーザー ID」リストの「PUBLIC」を強調表示して、「付与」をクリックします。特定のユーザーに許可を付与するには、フィールドにユーザー ID を入力し、1 つ以上のユーザー ID を強調表示して、「付与」をクリックします。選択されたユーザー ID にストアード・プロシージャまたは静的パッケージを実行するための許可が付与されたことを通知するメッセージが出されます。オプションとして、「ユーザー ID」リスト・ボックスにリストされたユーザーのストアード・プロシージャまたは SQL パッケージを実行する許可を取り消すことができます。1 人以上のユーザーの許可を取り消すには、1 つ以上のユーザー ID を強調表示して、「取り消し」をクリックします。ストアード・プロシージャや静的 SQL パッケージを実行する許可が、選択したユーザー ID から取り消されたことを通知するメッセージが出されます。

10. 「次へ」をクリックします。「QMF カタログ・ウィザード」の「QMF カタログの選択」ページが開きます。

QMF カタログの選択

QMF カタログへアクセスできるようにデータ・ソースを構成するための最後のステップは、QMF カタログを選択することです。

このタスクについて

データ・ソースのために QMF カタログを選択するには:

手順

1. 「QMF カタログ・ウィザード」の「QMF カタログの選択」ページを開きます。
2. 「データ・ソース名」リストから、構成しているデータ・ソースが使用する QMF カタログをホストするデータ・ソースを選択します。現在構成しているものと同じデータ・ソースを選択するか、またはリポジトリですでに構成済みの別のデータ・ソースを選択できます。
3. 「カタログ」リストから、構成している現行データ・ソースに使用させたいカタログを選択します。次のいずれかのタイプのカタログを選択できます。
 - デフォルト: これはメイン QMF カタログです。これは SQL ステートメントを実行してデータ・ソース上にオブジェクトを作成することの結果として、自動的に作成されます。デフォルト・カタログに保存されたすべてのオブジェクトは、共に保存されます。デフォルト・カタログは、QMF for TSO/CICS と 7.2 より前の QMF バージョンで使用可能な唯一のカタログです。
 - 拡張: 拡張カタログは、デフォルト・カタログの拡張です。データ・ソースがホスト可能なデフォルト QMF カタログは 1 つだけですが、拡張カタログの場合は複数をホスト可能です。拡張カタログは、いくつかのデータ・ソースが 1 つの QMF カタログを共有している場合に役立ちます。拡張カタログを使用しない場合、オブジェクトはすべてデフォルト QMF カタログに保存されます。拡張カタログによって、各データ・ソースはそれ自身の保存されたオブジェクトを特定のカタログ拡張に分離して入れることができます。
4. オプション: 現在のデータ・ソース上に新しい拡張カタログを作成するには、「追加」アイコンを選択します。「カタログの追加」ウィンドウが開きます。
5. オプション: 既存の拡張 QMF カタログの名前または CCSID を編集するには、「編集」アイコンを選択します。「カタログの編集」ウィンドウが開きます。このウィンドウを使用して、デフォルト QMF カタログの CCSID を編集することもできます。
6. オプション: 現在のデータ・ソースから既存の拡張カタログを削除するには、「除去」アイコンを選択します。QMF for Workstation は、他のデータ・ソースが拡張カタログを使用するように構成されているかどうかにかかわらず、拡張カタログとその内容をすべて削除するため、拡張カタログを削除するときは注意が必要です。
7. オプション: 「リスト最新表示」を選択して、リスト・ボックス内の使用可能な拡張カタログのリストを最新表示します。

8. 現行データベースで作業するとき、ユーザーが常に現行 QMF カタログを使用するには、「現在のサーバーにアクセスするときはこのカタログ・サーバーの使用が必要」チェック・ボックスを選択します。
9. 「終了」をクリックします。「QMF カタログ・ウィザード」が閉じます。これは QMF カタログを使用するようにデータ・ソースを構成するための最後のステップです。制御が「リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードの「データ・ソース・プラグインを使用可能にします」ページに戻ります。

拡張カタログの作成

拡張 QMF カタログを作成して、全体的なデフォルトの QMF カタログ内のオブジェクトへのユーザー・アクセスを編成することができます。

このタスクについて

すべてのオブジェクトをメインのデフォルト・カタログに入れるのではなく、小さい拡張カタログに分離することができます。拡張カタログを使用する理由はたくさんあります。それらを使用して、オブジェクトに対するユーザーのビューを制御できます。それらを使用して、別のデータ・ソース上の QMF カタログを共有する 1 つのデータ・ソースからオブジェクトを分離できます。拡張カタログには、特定のデータ・ソースからの選択されたオブジェクトだけが取められます。さらに、メインのデフォルト・カタログとは異なる CCSID 設定を持つ拡張カタログも設定できます。

注: データ・ソースが使用する拡張カタログ (またはデフォルト・カタログ) が別のデータ・ソース上に存在する場合、パフォーマンス、オブジェクトに対するユーザーのビュー、および照会環境の全体的な保守が悪影響を受けることがあります。

拡張カタログを作成するには:

手順

1. 「カタログの追加」ウィンドウを開きます。
2. 「名前」フィールドに拡張カタログの固有の名前を指定します。
3. 「CCSID」リストで、拡張カタログの CCSID コード・ページを選択します。
4. オプション: カタログ・サーバーに保管されているシステム・プロファイル表に項目を作成するには、「システム・プロファイル項目の作成 (**Create system profile entry**)」チェック・ボックスを選択します。カタログ・サーバーは、QMF カタログが存在するデータベース・サーバーです。このチェック・ボックスを選択すると、QMF はユーザー・プロファイル項目を作成するので、ユーザーはユーザー独自のユーザー ID でデータベースにアクセスすることができます。このチェック・ボックスを選択しない場合は、ユーザー ID をグループに割り当てる必要があります。
5. 「OK」をクリックします。新しい拡張カタログが作成されます。

拡張カタログのプロパティの編集

拡張 QMF カタログの名前または CCSID プロパティを変更できます。また、デフォルトの QMF カタログの CCSID プロパティも変更できます。

このタスクについて

拡張またはデフォルトの QMF カタログのプロパティを編集するには:

手順

1. 「カタログの編集」ウィンドウを開きます。
2. 「名前」フィールドに拡張カタログの新しい名前を指定します。デフォルト QMF カタログの名前は変更できません。
3. 「CCSID」リストで、拡張カタログの新しい CCSID コード・ページを選択します。デフォルトの QMF カタログの CCSID を変更することができます。
4. 「OK」をクリックします。QMF カタログのプロパティ値に対する変更は保存されました。

パーソナル・データ・ソースの作成

データ・ソースの作成時に、データ・ソースをパーソナルにすることを選択できます。これにより、このデータ・ソースをローカル・ファイル・システムに保管し、リポジトリ接続を介してアクセスすることができます。パーソナル・データ・ソースにアクセスできないのは、同じ名前の別のデータ・ソースを持つリポジトリへの接続を確立した場合のみです。

このタスクについて

パーソナル・データ・ソースは、それらを作成したユーザーのみが使用できます。

パーソナル・データ・ソースを作成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」で、パーソナル・データ・ソースを追加するデータ・ソースのカテゴリを右クリックします。
2. 「新規」 > 「データ・ソース・タイプ」をクリックします。データ・ソースを作成するウィザードが開きます。
3. 可用性タイプの選択ページで、「パーソナル」を選択します。

注: このステップは、以下の場合にはスキップされます。

- フォルダー・データ・ソースを作成する場合 (フォルダー・データ・ソースは、パーソナル以外には設定できないため)。
 - リポジトリ内にパーソナル・データ・ソースを作成する権限しかない場合。
4. この特定のタイプのデータ・ソースに関するトピックの説明に従って、データ・ソースの作成手順を完了します。
 5. 「終了」をクリックします。パーソナル・データ・ソースが作成されました。パーソナル・データ・ソースは、現在、それぞれのデータ・ソース・タイプのノードの下に配置されています。作成されたパーソナル・データ・ソースは、接続先のすべてのリポジトリに表示されます。
 6. パーソナル・データ・ソースを削除するには、そのデータ・ソースを右クリックして「削除」をクリックします。削除されたデータ・ソースは、接続先のどのリポジトリにも表示されません。

パーソナル・データ・ソースのエクスポート

パーソナル・データ・ソースはエクスポートできます。

このタスクについて

パーソナル・データ・ソースをエクスポートするには、以下の手順を実行します。

手順

1. メインメニューから、「ファイル」 > 「エクスポート...」を選択します。「エクスポート」ウィザードが開きます。
2. 「パーソナル・データ・ソース」を選択して「次へ」をクリックします。ウィザードの「パーソナル・データ・ソースのエクスポート (Export personal data sources)」ページが開きます。
3. エクスポート用の .wso ファイルを指定する場合、以下のようになります。
 - デフォルトの .wso ファイルのパスと名前を変更しないままにします。
 - 別の .wso ファイルへのパスとその名前を入力するか、「参照」をクリックしてファイルにナビゲートします。
4. リストから、エクスポートするパーソナル・データ・ソースを選択します。リストをフィルタリングするには、リストの上のフィールドにフィルター・テキストを入力します。

制約事項: フォルダー・データ・ソースはエクスポートできません。

5. 「終了」をクリックします。選択したパーソナル・データ・ソースが、ローカル・ファイル・システム内の指定されたファイルにエクスポートされます。

パーソナル・データ・ソースのインポート

ローカル・ファイル・システムからパーソナル・データ・ソースをインポートできます。

このタスクについて

パーソナル・データ・ソースをインポートするには、以下の手順を実行します。

手順

1. メインメニューから、「ファイル」 > 「インポート...」を選択します。「インポート」ウィザードが開きます。
2. 「パーソナル・データ・ソース」を選択して「次へ」をクリックします。ウィザードの「パーソナル・データ・ソースのインポート (Import personal data sources)」ページが開きます。
3. 「ファイル名」フィールドに .wso ファイルへのパスと .wso ファイル名を指定するか、「参照」をクリックしてインポートする .wso ファイルにナビゲートし、それをダブルクリックします。
4. リストから、インポートするパーソナル・データ・ソースを選択します。リストをフィルタリングするには、リストの上のフィールドにフィルター・テキストを入力します。

制約事項: フォルダー・データ・ソースはインポートできません。

5. 「終了」をクリックします。

新規リレーショナル・データ・ソースの作成

すべてのリレーショナル・データ・ソースのリポジトリに、構成情報を追加する必要があります。

このタスクについて

リレーショナル・データ・ソースは、JDBC を使用してアクセスされます。リレーショナル・データ・ソースは、データベース表にデータを保管します。データベース表のそれぞれは、いくつかの列と、1 つ以上の行から構成されます。リレーショナル・データ・ソースの照会は SQL で作成されます。

新規リレーショナル・データ・ソースを作成するには、以下のようにします。

手順

1. 「リポジトリ」ビューから、リレーショナル・データ・ソース構成情報を追加するリポジトリを右クリックします。「新規」 > 「リレーショナル・データ・ソース」を選択します。「新規リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードが開きます。
2. 可用性タイプの選択ページで、「パーソナル」または「共有」を選択します。

注: データ・ソース可用性のタイプについては、93 ページの『第 12 章 データ・ソース』を参照してください。

3. 「次へ」をクリックして、ウィザードの「新しいリレーショナル・データ・ソース名と接続パラメーターを追加します」ページを開きます。
4. 「JDBC ドライバー」フィールドには、リポジトリ・ストレージをホストするデータベースのアクセスに使用する JDBC ドライバーのライブラリーを指定します。JDBC ドライバー情報の設定時に定義したライブラリーのドロップダウン・リストから選択できます。このフィールドの右側にある省略符号 (...) を使用すれば、「JDBC ライブラリー」ダイアログを開くことができます。このダイアログでは、追加の JDBC ドライバー・ライブラリーを作成できます。
5. 「JDBC URL」リストで、接続先リポジトリのあるリポジトリ・ストレージをホストするデータベースを指す URL を指定します。

この URL の形式はリストに表示できます。

注: また、「URL テンプレートによる URL の作成」ダイアログ・ボックスを使用すれば、正しいストリングを形成できます。

「URL テンプレートによる URL の作成」ダイアログ・ボックスを開くには、「URL の作成」をクリックします。JDBC URL ドロップダウン・リストからテンプレートを選択します。表でサーバー、ポート、およびデータベース情報を指定して、「OK」をクリックします。結果の URL ストリングが JDBC URL リストに追加されます。

6. 「拡張」をクリックして、この共有リポジトリへの接続時に使用されるドライバー固有の接続ストリング・キーワードとその値を指定します。選択したデータベース・ドライバーに必要なキーワードについては、当該ドライバーの資料を参照してください。

注: DB2® Type 4 UDB ドライバーの場合、拡張 SQL 例外エラー・メッセージを受け取るには、「拡張 JDBC 設定」ウィンドウの

「**retrieveMessagesFromServerOnGetMessage**」オプションにチェック・マークを付けます。

7. 「ユーザー情報の設定」をクリックする。「ユーザー情報」ウィンドウが開きます。
8. 「ユーザー ID とパスワードが必要」チェック・ボックスを選択すると、このデータ・ソースにアクセスするたびにユーザー情報が要求されるように指定します。データ・ソースがログオン情報を必要としない場合、またはログオン情報を他の何らかの方法 (Kerberos または Windows 認証など) を使用して取得する場合、このチェック・ボックスにはチェック・マークを付けなくてもよいことができます。
9. 「このデータ・ソースへの接続時にリポジトリ・ログイン/パスワードを使用」チェック・ボックスにチェック・マークを選択すると、ユーザーからログオン情報を要求する前に、現在のリポジトリ・ログインおよびパスワードを使用してデータ・ソースへの接続を試みるよう指定します (Kerberos セキュリティーの場合など)。
10. 「ユーザー名」フィールドおよび「パスワード」フィールドに、データ・ソースのアクセスに使用するユーザー ID とパスワードを指定します。「OK」をクリックします。「ユーザー情報」ウィンドウが閉じ、制御が「新規リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードに戻ります。
11. 接続をテストするには、「接続のテスト」をクリックします。
12. 「次へ」をクリックします。「新規リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードの 2 ページ目が開き、そこでデータ・ソースに対してデータベースおよび QMF カタログのプラグインを使用可能にします。

データ・ソース・プラグインを使用可能にする

リレーショナル・データ・ソースの構成における 2 番目のステップは、データ・ソースの追加機能を提供する 1 つ以上の使用可能なプラグインを使用可能にすることです。

このタスクについて

リポジトリで構成する各リレーショナル・データ・ソースごとに、そのデータ・ソースに限定して適用される追加機能を使用可能にすることができます。QMF カタログ・プラグインは、このような機能の一例です。リレーショナル・データ・ソース用の QMF カタログ・プラグインを使用可能にすると、ユーザーは、データ・ソースに接続されているときはいつでも、指定した QMF カタログにアクセスできます。QMF カタログに保存されているオブジェクトの表示およびアクセスが可能になり、必要に応じて新規オブジェクトを QMF カタログに保存できます。

リレーショナル・データ・ソースのプラグインを使用可能にするには、以下のようになります。

手順

1. 「新規リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードの「データ・ソース・プラグインを使用可能にします」ページを開きます。
2. QMF カタログを使用するようにこのデータ・ソースを構成するには、「プラグインを使用可能にする」チェック・ボックスを選択します。「QMF カタログ・ウィザード」が開きます。ウィザードの処理の完了時に、制御が「新規リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードの「データ・ソース・プラグインを使用可能にする」ページに戻ります。
3. QMF カタログが、このリレーショナル・データ・ソースに対して使用可能になります。デフォルトでは、リポジトリに表示されるとき QMF カタログのノード・ラベルは、「QMF カタログ」になります。固有の名前を指定できます。「カタログ・ラベル」フィールドに、この QMF カタログを識別するために使用する名前を入力します。オプションで、QMF カタログを説明するコメントを「コメント」フィールドに入力することができます。
4. QMF カタログ・プラグイン・パラメーターを変更するには、「パラメーター」をクリックします。「QMF カタログ・プラグイン・パラメーター」ウィンドウが開きます。パラメーター変更の完了時に、制御が「新規リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードの「データ・ソース・プラグインを使用可能にする」ページに戻ります。「QMF カタログ・プラグイン・パラメーター」ウィンドウは、「リポジトリ・エクスプローラー」ビューから、データ・ソースを右クリックして、ポップアップ・メニューから「プロパティー」を選択し、「プロパティー」リストで「プラグイン」を選択して開くこともできます。
5. デフォルトでは、リポジトリに表示されるこのリレーショナル・データ・ソースのすべてのネイティブ・データベース・オブジェクトのノード・ラベルは、「データベース」になります。固有の名前を指定できます。「ラベル」フィールドに、これらのデータベース・オブジェクトを識別するために使用させたい名前を入力します。また、「コメント」フィールドに、ネイティブ・データベース・オブジェクトについて説明するコメントを入力することもできます。
6. 「次へ」をクリックします。「新規リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードの 3 ページ目が開き、そこからデータ・ソースのリソース限界プロバイダーを選択します。

リソース限界プロバイダーの選択

リレーショナル・データ・ソースの構成における 3 番目のステップは、データ・ソースへのアクセスを制御するリソース限界を、リポジトリから提供するかまたは QMF カタログから提供するかを指定することです。

このタスクについて

リレーショナル・データ・ソースのリソース限界プロバイダーを指定するには、以下のようにします。

手順

1. 「新規リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードの「リソース限界プロバイダーを選択します」ページを開きます。
2. 「リソース限界プロバイダー」ドロップダウン・リストから、このデータ・ソースのリソース限界を定義する位置を選択します。次のような選択肢があります。

- リソース限界をリポジトリに定義する場合は、「リポジトリ」を選択します。
 - リソース限界を QMF カタログに定義する場合は、「QMF カタログ」を選択します。このオプションは、データ・ソースの QMF カタログ・プラグインを使用可能に設定した場合にのみ、使用できます。
3. 「終了」をクリックします。「リポジトリ」ビューで、「リレーショナル・データ・ソース」という名前のフォルダーの下にデータ・ソース構成情報がリストされます。各データ・ソースのオブジェクトは 2 つのフォルダーに編成されます。それは、データベース・オブジェクトおよび QMF カタログ・オブジェクト (QMF カタログが有効だった場合) です。リポジトリ内のリレーショナル・データ・ソースを構成するプロセスを完了しました。ここでデータ・ソースの機能セットをカスタマイズできます。

注: データ・ソースの「リポジトリ」ビューから、リストされたオブジェクトを表示し、移動することができます。ただし、オブジェクトを実行する場合、リポジトリに接続している必要があります。リポジトリに接続するには、リポジトリ接続情報が作成されていない場合、それを設定する必要があります。

「リポジトリ接続」ビューにリストされている、リポジトリの「リポジトリ接続情報」をクリックします。リポジトリに接続したら、「リポジトリ・エクスプローラー」ビューから実行するオブジェクトを選択します。

4. リソース限界を追加、編集、または削除するには、「リポジトリ・エクスプローラー」ビューでデータ・ソースを (作成後に) 右クリックし、ポップアップ・メニューから「プロパティ」をクリックします。「プロパティ」ツリーから「リソース限界」を選択します。リソース限界グループ、スケジュール、およびユーザー割り当てを追加、編集、および削除することができます。
5. データ・ソースの機能セットをカスタマイズするために以下のどれでも選択的に実行できます。
 - データ・ソースのログイン・マッピングを設定します。
 - データ・ソース情報をワークスペースに追加します。
 - カスタマイズ済みのワークスペースを設定し、その使用を許可するユーザーおよびグループを割り当てます。
 - 任意のリポジトリ・オブジェクトへアクセスするためのユーザーおよびグループ許可を割り当てます。
 - リソース限界グループ、スケジュール、およびリソース限界値を作成、編集、または削除します。
 - リポジトリ接続を設定します。

追加パラメーターの指定

データ・ソースの「プロパティ」ウィンドウの「情報」ページで、追加のデータ・ソース・パラメーターを指定できます。

このタスクについて

データ・ソースがデータを取得する方法を決定する追加データ・ソース・パラメーターの設定を指定する必要があります。追加パラメーターを指定するには、以下のようになります。

手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」ビューで、編集するデータ・ソースを右クリックし、「プロパティ」をクリックします。「プロパティ」ウィンドウが開きます。
2. 「情報」を選択します。「情報」ページングが開きます。
3. 「追加パラメーター」テーブルで設定を指定します。有効な追加パラメーターには次のものがあります。

ホスト QMF 列命名のエミュレート (Db2 のみ)

データ・ソースがホスト QMF カタログの列命名規則をエミュレートするかどうかを指定します。このオプションは、Db2 データ・ソースに対してのみ有効です。

地理情報拡張機能の使用可能化

データ・ソースに保管される地理情報データに対して拡張機能を使用可能にするかどうかを指定します。

スキーマ取得方式

データベースからスキーマを取得する方法を指定します。「getTables」を選択した場合、スキーマは表名別に編成されます。「getSchemas」を選択した場合、スキーマは所有者別に編成されます。

照会メタデータを取得するためにデータベースにアクセスしない

照会メタデータをホスト・データベースから取得するかどうかを指定します。

照会の実行時間を短縮し、結果セットの表示を高速化するには、このパラメーターを使用します。デフォルトは FALSE です。このパラメーターを TRUE に設定すると、アプリケーションはデータベースを参照せず、メタデータを取得しません。そのため、結果セットの表示は高速化されますが、R/W (読み取りと書き込み) 照会量は、メタデータの取得時にこのパラメーターが FALSE に設定されている場合よりも小さくなります。

4. 追加パラメーターの指定を終えたら、「適用」をクリックします。変更内容がデータ・ソースに保存されます。
5. 「OK」をクリックします。「プロパティ」ウィンドウが閉じます。

新規マルチディメンション・データ・ソースの作成

すべてのマルチディメンション・データ・ソースのリポジトリに、構成情報を追加する必要があります。

このタスクについて

マルチディメンション・データ・ソースへのアクセスには XMLA が使用されます。マルチディメンション・データは、1 つ以上のディメンションによって編成されています。マルチディメンション・データ構造体は、しばしばキューブとも呼ばれます。XMLA を使用してアクセスされるマルチディメンション・データ・ソースの照会は、MDX で作成されます。

リポジトリ内のマルチディメンション・データ・ソース情報を構成するには:

手順

1. 以下のいずれかの方法で「新規マルチディメンション・データ・ソース」ウィザードを開きます。
 - 「リポジトリ」ビューで「マルチディメンション・データ・ソース」ノードを右クリックします。「新規」を選択します。ポップアップ・メニューから「マルチディメンション・データ・ソース」を選択します。「新規マルチディメンション・データ・ソース」ウィザードが開きます。
 - 「ファイル」メニューから「新規」を選択します。ポップアップ・メニューから「その他」を選択します。「新規」ウィンドウが開きます。「リポジトリ」フォルダーを展開します。「マルチディメンション・データ・ソース」を選択します。「新規マルチディメンション・データ・ソースの作成」ウィザードが開きます。
2. 可用性タイプの選択ページで、「パーソナル」または「共有」を選択します。「次へ」をクリックします。

注: データ・ソース可用性のタイプについて詳しくは、93 ページの『第 12 章 データ・ソース』を参照してください。

3. 「データ・ソース名」フィールドに、リポジトリ内でデータ・ソースを識別するために使用される名前を入力します。任意の名前を指定できます。
4. QMF は、HTTP プロトコル経由で XML for Analysis (XMLA) を使用してマルチディメンション・データ・ソースに接続します。「HTTP URL」フィールドに、データ・ソースを指す URL を指定します。
5. このマルチディメンション・データ・ソースにアクセスするときにユーザー ID とパスワードの使用を要求するには、「ユーザー ID とパスワードが必要」を選択します。データ・ソースでユーザー ID とパスワードなしでアクセスが許可される場合は、このオプションを選択するとその許可がオーバーライドされ、データ・ソースへのアクセスにユーザー ID とパスワードが必要になります。
6. 「ユーザー名」フィールドおよび「パスワード」フィールドに、データ・ソースのアクセスに使用するユーザー ID とパスワードを指定します。接続をテストするには、「接続のテスト」ボタンをクリックします。
7. リポジトリに追加するマルチディメンション・データ・ソースを「データ・ソース」リスト・ボックスから選択します。指定された URL アドレスにあるすべてのデータ・ソースは、「データ・ソース」リスト・ボックスにリストされます。リストは、最新表示ボタンを使用して最新表示することができます。
8. オプション: 「説明」フィールドに、データ・ソースについて説明するコメントを入力します。このコメントは、データ・ソースのプロパティと一緒に表示されます。
9. 「終了」をクリックします。マルチディメンション・データ・ソースは「マルチディメンション・データ・ソース」ノードの下の「リポジトリ」ビューにリストされます。リポジトリからアクセス可能にするすべてのマルチディメンション・データ・ソースに対して、このプロセスを繰り返します。

タスクの結果

注: マルチディメンション・データ・ソースには、リソース限界やログイン・マッピングのサポートは利用できません。

Hive データ・ソースの作成

Hive データ・ソースを作成すれば、Apache Hadoop を操作できます。Apache Hadoop はオープン・ソース・ソフトウェア・フレームワークであり、データが構造化されているかどうかに関係なく大規模なボリュームのデータを確実に管理するために使用されます。

始める前に

QMF が Hive データ・ソースに接続できるように Hive ドライバー・ライブラリー JAR ファイルを必ず定義しておいてください。

このタスクについて

Hive データ・ソースとは、データ要約と随時照会を提供するデータウェアハウス・インフラストラクチャーのことです。Hive データ・ソースには、JDBC 用の特殊なドライバーを使用してアクセスされます。Hive 用の最新 JDBC インターフェースでサポートされるのは、照会の実行と結果の取り出しのみです。

Hive データ・ソースを作成するには、以下のようにします。

手順

1. 「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」 > 「リポジトリ」 > 「**Hive** データ・ソース」を選択します。「新規 Hive データ・ソースの作成」ウィザードが開きます。
2. 可用性タイプの選択ページで、「パーソナル」または「共有」を選択します。「次へ」をクリックします。

注: データ・ソース可用性のタイプについて詳しくは、93 ページの『第 12 章 データ・ソース』を参照してください。

3. 「データ・ソース名」フィールドにデータ・ソース名を入力します。
4. 必要なパラメーターを「接続パラメーター」領域で指定します。ホスト名、ポート番号、およびデータベース名を設定する必要があります。
5. 「ユーザー情報の設定」ボタンをクリックして、必要なユーザー・パラメーターを指定します。
6. 「拡張」ボタンをクリックして、インストールされた Hive ドライバーでサポートされる拡張パラメーターを選択します。
7. 「説明」フィールドには、作成したデータ・ソースの説明を入力できます。
8. 「終了」をクリックして Hive データ・ソースを作成し、「新規 Hive データ・ソースの作成」ウィザードを閉じます。

1 | フォルダー・データ・ソースの操作

1 | ファイル・システム上のデータ・ファイルに表としてアクセスするには、フォルダー
1 | ・データ・ソースを作成します。

1 | フォルダー・データ・ソースは、ユーザーにとって、個別のデータ・ソース内のデ
1 | ータ・ファイルを操作するための便利な方法です。フォルダー・データ・ソースを

作成したときに、ファイル・システム上のフォルダーを選択すれば、そこにあるサポート対象タイプのデータ・ファイルがすべてアプリケーションによって表に変換されます。

「リポジトリ・エクスプローラー」ツリーで「表」ノード構造はフォルダーとそのコンテンツの変換に基づきます。

表 12. 「表」ノードへのフォルダー・オブジェクトの変換

ファイル・システム・オブジェクト	フォルダー・データ・ソース・オブジェクト
ルート・フォルダー	Root スキーマ
<ul style="list-style-type: none">サブフォルダー (含まれている場合).xls ファイル.xlsx ファイル	スキーマ
<ul style="list-style-type: none">サポート対象タイプのデータ・ファイル (.xls、.xlsx ファイルを除く).xls または .xlsx ファイル内のスプレッドシート	表

このような表は、標準照会エディターで操作します。データ・ファイルの内容の表示を構成することもできます。

フォルダー・データ・ソースには、そのフォルダー・データ・ソースを作成したユーザーのみが、使用しているリポジトリ接続に関係なくローカル・アクセスできます。

フォルダー・データ・ソースの作成

ファイル・システムのデータ・ファイルに表としてアクセスするには、フォルダー・データ・ソースを作成します。扱うことができるファイル形式は、**xls、xlsx、csv、txt、xml、ixf、dbf、tab、ctab** です。

このタスクについて

作成された各フォルダー・データ・ソースはファイル・システムから選択されたフォルダーを表し、このフォルダーに含まれるサポート対象タイプのデータ・ファイルがすべて表に変換されます。デフォルトでは、すべてのフォルダー・データ・ソースがパーソナルです。

フォルダー・データ・ソースを作成するには、以下の手順を実行します。

手順

- 以下のいずれかの方法で「フォルダー・データ・ソースの作成」ウィザードを開きます。
 - 「リポジトリ」視点で「フォルダー・データ・ソース」ノードを右クリックします。コンテキスト・メニューから「新規」 > 「フォルダー・データ・ソース」を選択します。「フォルダー・データ・ソースの作成」ウィザードが開きます。

- 「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択します。「新規」ウィンドウが開きます。「リポジトリ」フォルダーを展開します。「フォルダー・データ・ソース」を選択します。「フォルダー・データ・ソースの作成」ウィザードが開きます。
2. 「データ・ソース名」フィールドに新規フォルダー・データ・ソースの名前を入力します。
 3. 「パラメーター」領域でフォルダー・データ・ソース・パラメーターを指定します。
 - 「ディレクトリー」フィールドで、ソース・フォルダーへのパスを指定するか、または省略符号 (...) ボタンをクリックしてソース・フォルダーを参照します。
 - 選択したソース・フォルダーにサブフォルダーを含めるには、「サブフォルダーを含める」チェック・ボックスを選択します。
 - 選択したソース・フォルダーに非表示ファイルを含めるには、「隠しファイルを含む」チェック・ボックスを選択します。
 4. 「コメント」フィールドに、作成したフォルダー・データ・ソースを説明するコメントを入力します。このコメントは、このデータ・ソースのプロパティーに表示されます。
 5. 「終了」をクリックします。

タスクの結果

フォルダー・データ・ソースが作成されました。現在、このフォルダー・データ・ソースは「フォルダー・データ・ソース」ノードの下にあります。

フォルダー・データ・ソースの編集

フォルダー・データ・ソースにあるデータ・ファイルの内容の表示を構成できます。

このタスクについて

データ・ファイルの形式に応じて、フォルダー・データ・ソースにおけるデータ表示の各種パラメーターを構成できます。フォルダー・データ・ソースにおけるデータ表示を構成するには、以下のようにします。

手順

1. 編集する表を右クリックします。
2. 「プロパティー」 > 「パラメーターのインポート」を選択します。
3. 「エンコード」リストからエンコード・タイプを選択します (選択可能な場合)。
4. 「設定」で、データ・ファイルの内容がどのように変換されて表に取り込まれるのかを指定します。「設定」で実行する手順はデータ・ファイルのタイプによって異なります。その手順は、インポートされたファイルに対する類似の手順に対応しています。詳しくは、114 ページの『フォルダー・データ・ソース内の Excel ファイルに対する変換オプションを指定』および 114 ページの

『フォルダー・データ・ソース内の CSV および TXT ファイルに対する変換オプションを指定』で、データ・ファイルをインポートする方法に関するトピックを参照してください。

5. 「メタデータ」をクリックして表フィールドを構成します。
6. 結果セットに含める列を選択するには、「フィールド名」列の左のチェック・ボックスにチェック・マークを付けます。
7. 列名を編集するには、「フィールド名」列にあるセルをクリックして新しい名前を入力します。
8. 別のデータ・タイプを指定するには、「タイプ」列にあるセルをクリックしてリストからデータ・タイプを選択します。使用可能なオプションは次のとおりです。
 - **INTEGER**: これは、-2 147 483 648 から 2 147 483 647 までの符合付き整数を格納する場合に使用できます。
 - **BIGINT**: -9 223 372 036 854 775 808 から 9 223 372 036 854 775 807 までの大きな符号付き整数を格納する場合に使用します。
 - **DOUBLE**: 浮動小数点付きの大きな数値を格納する場合に使用します。
 - **CHAR**: 固定長文字列を格納する場合に使用します。例えば、一般的に長さの固定された、従業員の電話番号などを格納することができます。
 - **VARCHAR**: 従業員名などの可変長文字列を格納する場合に使用します。
 - **DECIMAL**: 固定された精度やスケールの数値を格納する場合に使用します。このデータ・タイプは、高精度の値 (通貨など) に使用してください。
 - **DATE**: 日付のみを格納する場合に使用します。
 - **TIME**: 時刻のみを格納する場合に使用します。
 - **TIMESTAMP**: 日付と時刻の両方を格納する場合に使用します。

注: DATE、TIME、TIMESTAMP の各データ・タイプは、結果セットでの値の表示方法を定義する各種形式オプションをサポートしています。

注: サポート対象の範囲、および値の精度は、使用するデータベースによって異なる可能性があります。

9. 「長さ」フィールドに VARCHAR タイプの文字の最大数を指定します。
10. 「精度」フィールドに DECIMAL タイプの最大合計桁数を指定します。
11. 「スケール」フィールドに以下の項目の最大数を指定します。
 - DECIMAL タイプの小数桁数
 - TIMESTAMP タイプまたは TIMESTAMP WITH TIMEZONE タイプの秒の小数部分の桁数
12. 「プレビュー」ペインで、選択内容ごとに結果セットのレイアウトがどのように変化するかを追跡できます。
13. 変更を保存してダイアログを閉じるには、「OK」をクリックします。
14. ダイアログを閉じずに変更を保存するには、「適用」をクリックします。
15. オリジナルのメタデータ構成を復元するには、「デフォルトの復元」をクリックします。
16. フィールドに対する変更を取り消すには、「キャンセル」をクリックします。

フォルダー・データ・ソース内の **Excel** ファイルに対する変換オプションを指定

QMF がどのようにして Excel ファイルのデータをフォルダー・データ・ソース内の表に変換するのかを指定するには、「インポート・パラメーター」ウィザードの「設定」タブを使用します。

このタスクについて

Excel ファイルに対する変換オプションを「設定」で指定するには、以下のようになります。

手順

1. 「インポート・パラメーター」ウィザードの「設定」タブをクリックします。
2. 「先頭行番号」フィールドに、結果セットの先頭行にする Excel シートの行番号を入力します。
3. 「先頭列番号」フィールドに、結果セットの先頭列にする Excel シートの列番号を入力します。
4. 結果セット内の行の数を制限するには、「行の制限」チェック・ボックスを選択して行数を入力します。
5. 結果セット内の列の数を制限するには、「列の制限」チェック・ボックスを選択して列数を入力します。
6. Excel 文書の先頭行を結果セットの列名にする場合は、「最初の行は列名」チェック・ボックスを選択します。
7. 「プレビュー」ペインで、選択内容ごとに結果セットのレイアウトがどのように変化するのかを追跡できます。

フォルダー・データ・ソース内の **CSV** および **TXT** ファイルに対する変換オプションを指定

QMF がどのようにして CSV ファイルまたは TXT ファイルのデータをフォルダー・データ・ソース内の表に変換するのかを指定するには、「パラメーターのインポート」ウィザードの「設定」タブを使用します。

このタスクについて

CSV ファイルまたは TXT ファイルに対する変換オプションを「設定」で指定するには、以下のようになります。

手順

1. 「インポート・パラメーター」ウィザードの「設定」タブをクリックします。
2. 結果セットから特定の行を除外する場合は、「次で始まる行をスキップ」チェック・ボックスを選択し、テキスト・フィールドにストリングを指定します。
3. 「小数点」ドロップダウン・リストで、ファイル内の小数点の表示に使用する記号を選択します。
4. 作成する列の名前がファイルの最初の行にあることを指定する場合は、「最初の行は列名」チェック・ボックスを選択します。
5. 文字長の固定セットに基づいて列を作成することを指定するには、「固定幅」をクリックし、「列幅の指定」フィールドに文字長を入力して列の具体的な幅を指

定します。テキストが文字長に達するたびに、テキストの内容にかかわらず、その次の位置の文字から別個の列に入れられるようになります。

6. 特定の記号で区切ることにより列を自動的に作成することを指定するには、「区切り記号」をクリックし、下の記号チェック・ボックスにチェック・マークを付けます。結果セットが作成されるとき、こうした記号がテキストで検出されるたびに、その記号の次の文字から別個の列に入れられるようになります。
7. 隣接する複数の区切り記号によって作成される各列を 1 つの列に統合するには、「区切り記号のマージ」チェック・ボックスを選択します。例えば、「コンマ」と「スペース」を選択した場合、テキストにストリング `NAME, DEPT` があると、3 つの列が作成されます。最初の列には `NAME` が入っています。この列は、コンマが検出されたときに作成されたものです。2 番目の列は空です。この列は、スペースが検出されたときに作成されたものです。3 番目の列には `DEPT` が入っています。この列は、残りのテキストが検出されたときに作成されたものです。「区切り記号のマージ」チェック・ボックスを選択すると、コンマとスペースが検出されても列は 1 つだけ作成されるようになります。
8. 「テキストを囲む引用符」ドロップダウン・リストで、テキストであることを示すために単一引用符を使用するのか二重引用符を使用するのかを選択します。指定した引用符で囲まれたテキストは、その中に区切り記号があるかないかにかかわらず、常にそのまま表示されます。
9. 「プレビュー」ペインで、選択内容ごとに結果セットのレイアウトがどのように変化するのかを追跡できます。

仮想データ・ソースの作成

仮想データ・ソースを作成して、ユーザーがエンタープライズ・データを表示する方法を調整します。仮想データ・ソースによりデータベース・メタデータ層が導入され、これによりオプションで基礎データベース構造の複雑さを隠せるようになりました。

このタスクについて

新規仮想データ・ソースを作成するには、以下のようにします。

手順

1. 「新規仮想ソース」ウィザードを、以下のいずれかの方法で開きます。
 - 「リポジトリ」ビューで、「仮想データ・ソース」ノードを右クリックします。ポップアップ・メニューから「新規」 > 「新規仮想データ・ソース」を選択します。「新規仮想ソース」ウィザードが開きます。
 - 「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択します。「新規」ウィンドウが開きます。「リポジトリ」フォルダーを展開します。「新規仮想データ・ソース」を選択します。
「新規仮想ソースの作成」ウィザードが開きます。
2. 可用性タイプの選択ページで、「パーソナル」または「共有」を選択します。「次へ」をクリックします。

注: データ・ソース可用性のタイプについて詳しくは、93 ページの『第 12 章 データ・ソース』を参照してください。

3. 新規仮想データ・ソースの名前を「データ・ソース名」フィールドに入力します。
4. 仮想データ・ソース・パラメーターを「パラメーター」領域に指定します。
 - a. 仮想データ・ソースの作業用に内部メモリー内データベースを作成するために「メモリー内」チェック・ボックスを選択します。
 - b. その内部データベースをファイル・システム内に保存したい場合は、「シャットダウン時にサーバーをバックアップ」チェック・ボックスを選択します。この結果、アプリケーションを通常モードでシャットダウンすると、そのデータベースがファイル・システムに保存され、次のアプリケーション起動時に取得されます。
5. 「終了」をクリックします。新しい仮想データ・ソースが、「仮想データ・ソース」ノードの下にリストされます。

タスクの結果

新規仮想データ・ソースが追加されました。

新規仮想データ・ソースが「仮想データ・ソース」ノードの下に表示されます。

次のタスク

この時点で、この仮想データ・ソースに表を追加できます。

仮想データ・ソースの編集

仮想データ・ソースのコンテンツや構造を管理したりデータ・ソースに対するユーザー許可やユーザー・グループ許可を管理したりするには、仮想データ・ソース・エディターを使用します。

仮想データ・ソースを編集するには、「リポジトリ・エクスプローラー」ビューでそれを見つけてダブルクリックします。「[DataSourceName]」エディターが開きます。

「[DataSourceName]」エディターは 2 つのセクションで構成されています。

- 「構造」セクション: 仮想データ・ソースの構造を変更できます。
- 「セキュリティー」セクション: 保護されたりリポジトリに保管されているデータ・ソースに対するユーザー許可とユーザー・グループ許可を管理できます。

仮想データ・ソースの構造の変更

仮想データ・ソースの構造を変更するには、仮想データ・ソース・エディターの「構造」タブを使用します。

このタスクについて

仮想データ・ソースの構造を変更するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」ペインで、仮想データ・ソースに追加する表または照会を選択し、「選択した部分のコピー」をクリックします。仮想データ・ソースにオブジェクトが追加されました。

また、「仮想表」ウィザードを使用すれば、仮想データ・ソースに表を追加することもできます。詳しくは、ユーザー・ヘルプの『仮想表の作成』トピックを参照してください。

2. 「表」ペインで、仮想データ・ソースに保管されている表を編集します。
 - a. 表に列を追加するには、表を選択して「列の追加」をクリックします。
 - b. 計算列の式を編集するには、式を持つ列を選択して、「編集」をクリックします。
 - c. 表から列を削除するには、表を展開し、除去する列を選択して、「削除」をクリックします。
 - d. 列の位置を変更するには、表を展開し、位置変更する列を選択して、「上へ移動」または「下へ移動」をクリックします。
 - e. 表に対してキャッシュ有効期限スケジュールを指定するには、表を選択して「有効期限スケジュールの割り当て」をクリックします。
 - f. 表のソース照会を編集するには、表を右クリックして、ソース照会のタイプに応じて「表 SQL の編集 (Edit Table SQL)」または「表リンクの編集... (Edit Table Link...)」を選択します。

仮想データ・ソースの管理

保護されたりポジトリに保管されている仮想データ・ソースに対してユーザーの役割と許可を設定するには、仮想データ・ソース・エディターの「セキュリティ」タブを使用します。

このタスクについて

仮想データ・ソースを管理するには、以下の手順を実行します。

手順

1. ユーザー許可を表または列に適用するために、「表」ペインで「表」を展開して、管理する表を選択します。
2. 「グループまたはユーザーの名前」ペインでユーザーおよびユーザー・グループのリストを参照します。
 - a. このリストをフィルター処理するには、「ユーザーの表示」チェック・ボックスおよび「グループの表示」チェック・ボックスを選択またはクリアします。
 - b. ユーザーまたはユーザー・グループごとに許可を編集するには、ユーザーまたはユーザー・グループを選択して「許可」ペインにドラッグします。
3. 「許可」ペインで、所有者ごとに現在付与されている許可を編集します。許可について詳しくは、『リポジトリ・オブジェクトを使用するためのユーザーおよびグループ許可の割り当て』を参照してください。
4. 「行レベルのセキュリティ条件」ペインで特定の表の行にユーザー許可を適用します。
 - a. 行レベルでユーザー許可を適用するには、許可を付与したいユーザーを「許可」ペインで選択します。
 - b. 「行レベルのセキュリティ条件」ペインで「親の条件をオーバーライド」チェック・ボックスを選択します。

- c. エディター域で、列名 (値をフィルターとして使用する列) および条件を入力します。例えば、Q.STAFF 表を操作する場合に、特定ユーザーに対して管理者のみを表示したいのであれば、Job='MGR' と入力します。

注: 「行レベルのセキュリティー条件」ペインは、リレーショナル表に基づく仮想表に関してのみ使用できます。

5. 「適用」をクリックして設定を保存します。

仮想データ・ソースおよび JavaScript データ・ソースにキャッシュ有効期限スケジュールの設定を指定

仮想データ・ソースの「プロパティー」ウィンドウの「キャッシュ設定」ページに保管されている、仮想データ・ソースおよび表に関するキャッシングを使用可能にすることができます。

このタスクについて

仮想データ・ソースのキャッシングを使用可能にすると、その仮想データ・ソースに保管された表のレコードがキャッシュされます。これらの表のいずれかを開くと、その表のレコードは仮想データ・ソースからではなくキャッシュから取り出されます。キャッシングは、仮想データ・ソース内の個別の表について使用可能にすることもできます。

仮想データ・ソースのキャッシングを使用可能にするには、以下のようにします。

手順

1. 「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」 > 「仮想データ・ソース・スケジュール」を選択して、「新規有効期限スケジュールの作成」ウィザードを起動します。
2. 「データ・ソース」リストから、キャッシュ有効期限スケジューラーを指定するデータ・ソースを選択します。
3. 「スケジュール名」フィールドに、そのスケジュールに使用する名前を入力します。
4. 「データの有効期限」領域で、キャッシュの有効期限を指定します。使用可能なオプションは以下のとおりです。
 - a. 毎時: このオプションを選択して、同じキャッシュ・データが 1 時間使用されるように指定します。
 - b. 日次: このオプションを選択して、同じキャッシュ・データが 24 時間使用されるように指定します。
 - c. 週次: このオプションを選択して、同じキャッシュ・データが 7 日間使用されるように指定します。
 - d. 月次: このオプションを選択して、同じキャッシュ・データが 1 カ月間使用されるように指定します。
 - e. 特定の日付: このオプションを選択して、特定の日付に達するまで同じキャッシュ・データが使用されるように指定します。このオプションを選択すると、キャッシュは特定の日に更新されます。

- f. 常に有効: このオプションを選択して、同じキャッシュ・データが常に使用されるように指定します。このオプションを選択すると、キャッシュは更新されません。
 - g. 常に有効期限切れ: このオプションを選択して、この仮想データ・ソースに対して照会が実行されるたびにデータが必ず更新されるように指定します。
5. 「毎時」、「日次」、「週次」、「月次」、または「特定の日付」を選択した場合は、「次へ」をクリックします。
 6. 作成しているスケジュールのタイプにより、ウィザードの「スケジュールのプロパティを設定します」ページの次のバリエーションの内のいずれかが開きます。
 - a. 「毎時」を選択した場合は、その時間が始まる日時を「開始日」フィールドおよび「開始時刻」フィールドに指定します。「期限切れ間隔」領域で、期限切れ間隔を「時間」フィールドおよび「分」フィールドに指定します。
 - b. 「日次」を選択した場合は、24 時間が始まる日時を「開始日」フィールドおよび「開始時刻」フィールドに指定します。24 時間がいつ始まるかを「データの有効期限」領域で以下のように指定します。
 - 24 時間が毎日始まるように指定するには、「日次」を選択します。
 - 24 時間が任意の日数ごとに始まるように指定するには、「日間隔」を選択して日数をリストから選択します。
 - 24 時間が 1 つ以上の特定の曜日に始まるように指定するには、「曜日」を選択します。該当する曜日のチェック・ボックスを選択する必要があります。
 - c. 「週次」を選択した場合は、週が始まる日時を「開始日」フィールドおよび「開始時刻」フィールドに指定します。「毎週」リストから数を選択して、7 日間が任意の週数ごとに始まるように指定できます。「曜日」領域で、キャッシュが更新される特定の曜日を指定します。
 - d. 「月次」を選択した場合は、月が始まる日時を「開始日」フィールドおよび「開始時刻」フィールドに指定します。特定の日を「日」フィールドに入力することができます。あるいは、「または」フィールドで、データが月の特定の週の特定の曜日に取得されることを指定できます。「月の選択」領域で、必要な月を指定します。
 - e. 「特定の日付」を選択した場合は、データ取得が行われる日時を「日時」リストで指定します。セルをクリックすると、省略符号 (...) が表示されます。省略符号 (...) をクリックして、日時を選択するカレンダーを開きます。
 7. 「終了」をクリックします。スケジュールが作成されて、「リポジトリ・エクスプローラー」ビュー内の特定の仮想データ・ソースの「スケジュール」ノードにリストされます。

仮想データ・ソースおよび JavaScript データ・ソースのキャッシュ有効期限のスケジュール

仮想データ・ソースの「プロパティ」ウィンドウの「キャッシュ設定」ページに保管されている仮想データ・ソースおよび表に対して有効期限スケジュールを使用できます。

このタスクについて

「有効期限スケジュールの使用」チェック・ボックスにチェック・マークが付いていない場合、キャッシュ有効期限モードは、仮想データ・ソースに関して「常に有効期限切れ」と同じになります。このデータ・ソースに保管されている表のレコードは、要求があるたびに更新されます。

特定のキャッシュ・スケジュールを仮想データ・ソースまたはその表に対して指定するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「リポジトリ」または「リポジトリ・エクスプローラー」視点で仮想データ・ソースを右クリックして「プロパティ」を選択します。
2. 「[データ・ソース] のプロパティ」ウィンドウで「キャッシュ設定」を選択します。
3. 「キャッシュ設定」ページで「有効期限スケジュールの使用」チェック・ボックスを選択します。スケジュール有効期限設定が使用可能になります。
4. 「デフォルトの有効期限スケジュール」リストから、データ・ソース全体のデフォルト・スケジュールとして使用するスケジュールを選択します。

注: 作成したデータ・ソースのデフォルト設定は「常に有効期限切れ」です。

5. 特定のキャッシュ有効期限スケジュールを特定の表に割り当てるには、設定を変更する表の「スケジュール名」列をクリックして、使用できるスケジューラーのリストから必要なスケジューラーを選択します。

注: 置換変数が含まれている表には「常に有効期限切れ」有効期限スケジュールのみが適用されます。

6. アクセス許可が必要となる表がある場合は、データ・ソースの許可設定を指定する必要があります。「許可の管理」ボタンをクリックします。「許可の管理」ダイアログが開きます。
7. そのダイアログには、許可が必要となるデータ・ソースがすべてリストされています。この許可データはキャッシュの更新に使用されます。必要なデータ・ソースの「ログイン」列をクリックします。「データ・ソース・ログインの編集」ダイアログが開きます。
8. 適切な値を「ログイン」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の各フィールドに入力し、「OK」をクリックします。
9. 必要なすべてのデータ・ソースに対して許可データを指定し終わったら、「許可の管理」ダイアログで「OK」をクリックします。
10. 「適用」をクリックしてから「OK」をクリックして、「[データ・ソース] のプロパティ」ウィンドウを閉じます。

仮想データ・ソースおよび JavaScript データ・ソースの自動キャッシュ・リフレッシュの有効化

アプリケーションが仮想データ・ソースおよび JavaScript データ・ソースのキャッシュを自動的にリフレッシュできるようにすると、ユーザーは、これらのタイプのデータ・ソースに対してより迅速に照会を実行できます。

始める前に

データ・ソースの自動キャッシュ・リフレッシュ・オプションを有効にする前に、そのデータ・ソースのキャッシュ有効期限を必ずスケジュールしてください。詳しくは、管理者ヘルプの『仮想データ・ソースおよび JavaScript データ・ソースのキャッシュ有効期限のスケジュールリング』トピックを参照してください。

このタスクについて

仮想データ・ソースまたは JavaScript データ・ソースの自動キャッシュ・リフレッシュ・オプションを有効にするには、以下の手順を実行します。

手順

1. メインメニューから「ビュー」 > 「設定」を選択します。
2. 「設定」ウィンドウの左側で、「仮想データ・ソース」をクリックします。
3. 「自動キャッシュ・リフレッシュの有効化」チェック・ボックスを選択します。
4. 「適用」をクリックしてから「OK」をクリックします。
5. オプション: キャッシュを手動で無効化するには、データ・ソースを右クリックし、メニューから「データ・ソース・キャッシュの無効化 (**Invalidate Data Source Cache**)」を選択します。

JavaScript データ・ソースの操作

ネットワーク・リソースからデータを収集し、それを JavaScript データ・ソースの形式でアプリケーション内に保管することができます。

以下のトピックには、JavaScript データ・ソースに関する参照情報が含まれています。

JavaScript データ・ソースの作成

JavaScript データ・ソースを作成して、データ・ソースとして Web サービスからデータを収集し、そのデータをリレーショナル表の形式で処理します。

このタスクについて

JavaScript データ・ソースを作成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. メインメニューから「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択します。
2. 「新規」ウィンドウで、「リポジトリ」フォルダーを展開し、「JavaScript データ・ソース」を選択します。「JavaScript データ・ソースの作成」ウィザードが開きます。
3. 可用性タイプの選択ページで、「パーソナル」または「共有」を選択します。「次へ」をクリックします。

注: データ・ソース可用性のタイプについて詳しくは、93 ページの『第 12 章 データ・ソース』を参照してください。

4. 「データ・ソース名」フィールドにデータ・ソースの名前を入力します。

5. 「接続パラメーター」領域で、以下を実行します。
 - a. 「URL」フィールドに、接続してデータを取得する Web リソースの URL を入力します。
 - b. Web リソースにアクセスするたびにユーザー情報を要求するには、「ユーザー ID とパスワードが必要」チェック・ボックスを選択します。Web リソースがログオン情報を必要としない場合は、チェック・ボックスにチェック・マークを付けないままにします。
 - c. 入力したユーザー ID のパスワードをアプリケーションが記憶できるようにする場合は、「ユーザーがパスワードを保存できるようにする」チェック・ボックスを選択します。
6. 「次へ」をクリックします。ウィザードの「JavaScript パラメーター」ページで、JavaScript モジュール内の `dataSource.parameters` オブジェクトを使用してアドレス指定できるデータ・ソースのグローバル・パラメーターを指定します。他の Web リソースに接続したり他のユーザー資格情報を使用して接続したりする必要がある場合は、これらのパラメーターを簡単に変更できます。
 - a. 「パラメーターの追加」をクリックし、対応する列にパラメーター名と値を入力します。
 - b. データ・ソースからパラメーターを削除するには、パラメーターを選択して「パラメーターの削除」をクリックします。
7. 「終了」をクリックします。

タスクの結果

JavaScript データ・ソースが作成されました。認証、共通関数、および切断 の各 JavaScript モジュール用のエディターが開きます。次に、データ・ソースに JavaScript テーブルを取り込みます。

JavaScript データ・ソース内のオブジェクトおよびメソッド

`dataSource` オブジェクトを使用してパラメーターをアドレス指定し、`sendHttpRequest()` メソッドを使用して、JavaScript データ・ソース内に `RSBIHttpRequest` オブジェクトを作成します。

オブジェクト・プロパティ	可能な値	説明
<code>dataSource.parameters</code>	オブジェクト	「JavaScript データ・ソースの作成」ウィザードの 2 ページ目で JavaScript データ・ソースに対して指定されたパラメーター。 例えば、 <code>supportTeamEmail</code> パラメーターがウィザードで指定された場合、コード内で <code>dataSource.parameters.supportTeamEmail</code> を使用してアドレス指定できます。
<code>dataSource.url</code>	String	JavaScript データ・ソースに指定された URL。
<code>dataSource.userinfo.login</code>	String	JavaScript データ・ソース内のネットワーク・リソースに指定されたユーザー名。
<code>dataSource.userinfo.password</code>	String	JavaScript データ・ソース内のネットワーク・リソースに指定されたパスワード。

sendHTTPRequest() メソッド

sendHTTPRequest() メソッドを使用して、RSBIHttpRequest オブジェクトを JavaScript データ・ソースにのみ作成できます。

表 13.

パラメーター	説明
method	「GET」、「POST」、「PUT」、「DELETE」など、使用する HTTP メソッドを指定します。
url	要求の送信先となる URL を指定します。
headers	ヘッダー・フィールド定義のリストを JavaScript オブジェクトとして指定します (オプション)。
body	要求でサーバーに送信されるデータを指定します。これは、「PUT」、「PATCH」、および「POST」の各メソッドに関連します (オプション)。

注:

- sendHTTPRequest() メソッドを使用する場合、SSL 証明書は無視されます。
- url パラメーターに http 接頭部が含まれていない場合、URL は dataSource.url プロパティに指定されたものと相対的です。例えば、dataSource.url = www.example.com および url = page1 の場合、最終 URL は www.example.com/page1 です。

例

```
var request = dataSource.sendHTTPRequest("GET",url);
```

RSBIHttpRequest クラス:

HTTP 要求を行うために使用されるクラス。このクラスには、標準 JavaScript オブジェクト XMLHttpRequest 1.0 と同じ関数があります。後者もサポートされていますが、RSBIHttpRequest を使用することをお勧めします。

NTLM 認証

RSBIHttpRequest クラスの open() メソッドで追加パラメーターを指定して、NTLM 認証を使用できます。例 2 を参照してください。

パラメーター

パラメーター	説明
method	これは、「GET」、「POST」、「PUT」、「DELETE」など、使用する HTTP メソッドを指定します。
url	要求の送信先となる URL を指定します。
async	これは、操作を非同期で実行するかどうかを示すブール値を指定します。

パラメーター	説明
username	これは、NTLM 認証の場合には必須です。このパラメーターは、ユーザーの名前を指定します。
password	これは、NTLM 認証の場合には必須です。このパラメーターは、ユーザーのパスワードを指定します。
domain	これは、NTLM 認証の場合には必須です。このパラメーターは、ドメインの名前を指定します。
workstation	これは、NTLM 認証の場合にはオプションです。このパラメーターは、ワークステーションの名前を指定します。

HTTPS の使用

HTTPS プロトコルを使用して HTTP 要求を送信する場合は、まず SSL 証明書を適切に処理するように Java 仮想マシンを構成する必要があります。構成を行わない場合は、**RSBIHttpRequest.ignoreCertificates()** メソッドを使用してください。この場合、ご使用の JVM は SSL 証明書を無視するように設定され、確立された接続はセキュアではありません。

例

例 1

```
var request = new RSBIHttpRequest();
request.open('GET', 'http://example.com', false);
```

例 2

```
var req = new RSBIHttpRequest();
req.open("GET", 'http://example.com', false, "username",
"password", "domain", "workstation");
```

または

```
req.open("GET", 'http://example.com', false, "username", "password", "domain");
```

方式

getAllResponseHeaders()

`getAllResponseHeaders()` メソッドは、「`␣`」で区切られたヘッダー・フィールド定義のリストを含むストリングを返します。

getResponseHeader()

`getResponseHeader()` メソッドは、指定した名前を持つヘッダー・フィールド定義を返します。

パラメーター	説明
name	取得する HTTP ヘッダー・フィールド定義の名前を指定します。

open()

パラメーター	説明
method	これは、「GET」、「POST」、「PUT」、「DELETE」など、使用する HTTP メソッドを指定します。

パラメーター	説明
url	要求の送信先となる URL を指定します。
async	これは、操作を非同期で実行するかどうかを示すブール値を指定します。
username	これは、NTLM 認証の場合には必須です。このパラメーターは、ユーザーの名前を指定します。
password	これは、NTLM 認証の場合には必須です。このパラメーターは、ユーザーのパスワードを指定します。
domain	これは、NTLM 認証の場合には必須です。このパラメーターは、ドメインの名前を指定します。
workstation	これは、NTLM 認証の場合にはオプションです。このパラメーターは、ワークステーションの名前を指定します。

注: `RSBIHttpRequest` クラスの `open()` メソッドで追加パラメーターを指定すれば、NTLM 認証を使用できます。例 2 を参照してください。

例

```

1. var request = new RSBIHttpRequest();
   request.open('GET','http://example.com', false);
2.
   var req = new RSBIHttpRequest();
   req.open("GET", 'http://example.com', false, "username", "password", "domain", "workstation");
3.
   req.open("GET", 'http://example.com', false, "username", "password", "domain");

```

`send()`

`send()` メソッドは、Web サービスに JavaScript オブジェクトを送信します。

パラメーター	説明
data	HTTP 要求で送信するオブジェクトを指定します。

`setRequestHeader()`

`setRequestHeader()` メソッドは、ヘッダー・フィールド定義の名前と値を設定できます。

パラメーター	説明
name	送信する HTTP ヘッダー・フィールド定義の名前を指定します。
value	送信する HTTP ヘッダー・フィールド定義の値を指定します。

例 `request.setRequestHeader("Content-Type","application/x-www-form-urlencoded");`

`RSBIHttpRequest` 定数

`RSBIHttpRequest` オブジェクトの状態を指定するには、定数の代わりに以下の状態を使用します。

定数	RSBIHttpRequest オブジェクト状態
0	未初期化
1	ロード中
2	ロード済み
3	対話式
4	完了

例 必要なデータをインターネットから取得する例を確認してください。
`if(request.readyState === request.Complete)` が `if(request.readyState === 4)` の代わりに使用されます。

```
function getStockData(url)
{
  var request = new RSBIHttpRequest();
  request.open('GET',url, false);
  var response = '';
  request.onreadystatechange = function()
  {
    if(request.readyState === request.Complete)
    {
      response = request.responseText;
    }
  }
  request.send(null);
  return response;
}
```

JavaScript データ・ソース内のモジュール

以下のトピックでは、JavaScript データ・ソース内の事前設定モジュールおよびユーザー・モジュールに関する参照情報について説明しています。

ユーザーは、JavaScript データ・ソースにある以下の事前設定モジュールを操作できます。

- 認証 には、Web サービスに接続してそれを許可するためのスクリプトを含めることができます。
- 共通関数 には、他のモジュールで使用するグローバル関数を持つ共通スクリプトを含めることができます。例えば、Web サービスやキャッシュからデータを取得するための関数などです。
- 切断 には、Web サービスから切断してログアウトするためのスクリプトを含めることができます。

ユーザーは、必要に応じて JavaScript データ・ソースの機能を拡張するための追加モジュールを作成することもできます。

事前設定モジュールおよびユーザー・モジュールは、常に以下の順序で初期化されます。

1. 共通関数 モジュール
2. ユーザー・モジュール
3. 認証 モジュール

4. データ・ソースに保管されている JavaScript テーブルのデータのロード・モジュール。データのロード・モジュールは、リレーショナル表のネットワーク・リソースからのデータを処理するために使用されます。
5. 切断 モジュール

JavaScript テーブルの操作

JavaScript テーブルを使用すれば、ネットワーク・リソースからデータを収集して、そのデータをリレーショナル表の形式で処理できます。

例えば、特定期間で株式取引情報を金融ポータルから収集し、この情報を標準的なリレーショナル表として QMF で使用できるように保存する必要があるとします。

これを行うには、JavaScript テーブルを作成し、その構造を指定して、そのテーブルを JavaScript データ・ソースまたは仮想データ・ソースに保存します。

JavaScript テーブル・エディターで、HTTP または HTTPS を使用して取得される必要なデータをテーブルに追加するスクリプトを作成します。作成した JavaScript テーブルに基づいて照会を実行すると、スクリプトによってデータが取得され、照会で使用されたテーブルに保存されます。

必要に応じて、リポジトリに保存されていたり Web サーバー上に配置されていたりする別のモジュールからの外部関数および外部オブジェクトを使用できます。

JavaScript テーブルに基づいて照会を実行したり、その照会を使用して即時報告書または予測を作成したり、その照会をビジュアル・ダッシュボードに追加したりできます。

JavaScript テーブルの作成

新しい JavaScript テーブルを追加して、その構造を指定するには、「JavaScript テーブルの作成」ウィザードを使用します。

このタスクについて

JavaScript テーブルを作成するには、以下のようになります。

手順

1. 「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択します。ウィンドウが開いたら、「**JavaScript テーブル**」を選択して「次へ」をクリックします。「新規 JavaScript テーブルの作成」ウィザードが開きます。
2. 「新規 **JavaScript** テーブルの追加」ページで、作成するテーブルの名前を指定し、そのテーブルの保存先となる JavaScript データ・ソースまたは仮想データ・ソースを選択します。「次へ」をクリックします。

注: 「データ・ソース」リストには、現行リポジトリ接続からの仮想データ・ソースのみが含まれます。

3. 「**JavaScript** テーブル構造」ページで、列のリスト、列の順序、値タイプ、必須パラメーターなどのテーブル構造を定義します。また、任意の列に注釈を追加することもできます。

4. 「完了」をクリックして、ウィザードを閉じます。指定した名前と構造を持つ JavaScript テーブルが、選択した JavaScript データ・ソースまたは仮想データ・ソースに追加されます。ウィザードを閉じると、「JavaScript テーブル」エディターが開きます。
5. 「JavaScript テーブル」エディターで、必要なデータを JavaScript テーブルに追加するスクリプトを作成します。
6. スクリプトの操作が終了したら、変更を保存してエディターを閉じます。

タスクの結果

これで、作成した JavaScript テーブルを標準的なリレーショナル・テーブルとして使用できるようになりました。例えば、作成した JavaScript テーブルに基づいて照会を実行したり、その照会を使用して即時報告書または予測を作成したり、その照会をビジュアル・ダッシュボードに追加したりできます。

JavaScript テーブルにデータを設定するスクリプトの作成:

JavaScript テーブルを作成して、その構造を指定したら、必要なデータをテーブルに設定するスクリプトを作成する必要があります。

このタスクについて

「JavaScript テーブル」エディターで、一般的な JavaScript 構文規則に従ってスクリプトを作成します。「新規 JavaScript テーブルの作成」ウィザードを閉じると、エディターが自動的に開きます。

JavaScript テーブルの内容を管理するために、以下のテーブル・グローバル・オブジェクトの特殊関数を使用することもできます。

appendData()

これは、二次元配列によって指定されたデータを JavaScript テーブルの最後に挿入します。

replaceData()

JavaScript テーブルの内容を、[[<row 1 column1>, <row 1 column 2>,...], [<row 2 column 1>, <row 2 column 2>,...],...] の形式の二次元配列によって指定されたデータに完全に置き換えます。

eraseData()

これは、指定された SQL 条件を満たす JavaScript テーブル・レコードを削除します。eraseData() 関数を引数なしで呼び出したり NULL 引数を指定して呼び出したりすると、すべてのテーブル・レコードが削除されます。

setTag()

これは、JavaScript テーブルを、ストリングで指定されたいくつかの追加情報にリンクします。この情報を取得するには、getTag() メソッドを使用します。この情報を消去するには、setTag() を NULL 引数とともに使用するか、または引数を指定せずに使用します。

getTag()

これは、JavaScript テーブルに関連する追加情報を返します。

include()

include() メソッドを使用すれば、外部コードを JavaScript テーブル・スクリプトに組み込むことができます。

HTTP 要求、HTTP 応答、およびレコードのログをトレースするには、log () 関数を使用します。

スクリプトではプロンプト変数も使用できます。作成した JavaScript テーブルに基づいてユーザーが照会を実行すると、そのユーザーに変数値の入力が求められます。スクリプトでプロンプト変数を使用する場合は、以下の特性に注意してください。

- JavaScript テーブル・キャッシュは無視されます。
- JavaScript テーブルを QMF for WebSphere で操作する場合、取得されたデータはすべて、そのユーザーのみが使用できます。

事前設定モジュールを使用するかカスタム・モジュールを作成することができます。

スクリプトの操作が終了したら、変更を保存してエディターを閉じます。

手順

1. 事前設定モジュールを使用する場合はモジュールに JavaScript を追加します。モジュールについて詳しくは、126 ページの『JavaScript データ・ソース内のモジュール』を参照してください。
2. ユーザー・モジュールを追加するには、以下のようになります。
 - a. 「リポジトリ・エクスプローラー」ビューで、データ・ソースの「モジュール」ノードを右クリックし、「新規」 > 「JavaScript モジュール」をクリックします。
 - b. 「新規 JavaScript モジュール」ウィザードで、「名前」フィールドに JavaScript モジュールの名前を指定し、「終了」をクリックして JavaScript モジュール・エディターを開きます。
3. モジュールにスクリプトを入力してモジュールを保存します。

重要: 事前設定モジュールを使用する場合、実行中の名前の競合を回避するために、異なるモジュール内の変数の名前を複製しないでください。

JavaScript テーブル例:

次の例は、JavaScript テーブルの使用方法を示しています。

目的

特定期間で株式取引情報を金融ポータルから収集し、この情報を標準的なリレーショナル・テーブルとして QMF で使用できるように保存する必要があります。このテーブルを過度に更新したり、このテーブルに 30 日を超えて情報を保管したりしてはなりません。

テーブル構造の作成

スクリプトの作成を開始する前に、指定するテーブル構造が、取得しなければならないデータに対応するようにする必要があります。

スクリプト構造の計画

目的に応じて、スクリプトは、サーバーから情報を取得し、テーブルに入力されるデータを解析し、最終変更時刻を保存して検査し、古い情報を削除する必要があります。

```
var lastModificationDate = getTableModificationTime();
if (needUpdate(lastModificationDate))
{
    var raw_data = retrieveRawData(url);
    var data = parseData(raw_data);
    table.appendData(data);
    eraseOutdated();
    setTableModificationTime();
}
else
{
    log("Data is already up to date ");
}
```

以下の関数が使用されています。

- **setTableModificationTime()**: これは、最終変更時刻をテーブルに付加します。
- **getTableModificationTime()**: これは、最終テーブル変更時刻を取得します。
- **needUpdate()**: これは、最終変更時刻によっては更新が必要になるかどうかを検査します。
- **retrieveRawData()**: これは、必要なデータをポータルから取得します。
- **parseData()**: これは、テーブル構造に従って、取得したストリングを分割します。
- **eraseOutdated()**: これは、古いレコードを除去します。
- **log()**: これは、応答状況を追跡して出力ビューに情報を表示します。

インターネットからデータを取得

最初に、必要なデータをインターネットから取得する必要があります。これを行うために、**RSBIHttpRequest** クラスが使用されます。

```
function getStockData(url)
{
    var request = new RSBIHttpRequest();
    request.open('GET',url, false);
    var response = '';
    request.onreadystatechange = function()
    {
        if(request.readyState === request.Complete)
        {
            response = request.responseText;
        }
    }
    request.send(null);
    return response;
}
```

ヒント: HTTPS プロトコルを使用して JavaScript テーブルへの HTTP 要求を送信したい場合は、まず SSL 証明書を適切に処理するように Java 仮想マシンを構成する必要があります。構成を行わない場合は、**RSBIHttpRequest.ignoreCertificates()** メソッドを使用してください。この場合、ご使用の JVM は SSL 証明書を無視するように設定され、確立された接続はセキュアではありません。

getStockData() 関数は、ポータルからの必要なすべてのデータを含む応答ストリングを返します。

この関数は、HTTP 要求を形成する **retrieveRawData()** 関数から呼び出され、**log()** 関数を使用して応答情報を追跡します。また、プロンプト変数 (*symbols* 変数) をスクリプトで使用することもできます。この場合、ユーザーは照会の実行時に値を指定するように求められます。 `&DSQQW_DQ` グローバル変数が二重引用符の置換に使用されます。

```
function retrieveRawData()
{
  var symbols = &DSQQW_DQ&symbols&DSQQW_DQ;
  var url = "http://finance.yahoo.com/d/quotes.csv?s="+symbols+"&f=snl1d1t1ohgdr";
  var raw_data = getStockData(url);
  log(raw_data);
  return raw_data;
}
```

受信データの解析

次に、**appendData()** 関数または **replaceData()** 関数を使用してテーブルにデータを入力できるように、目的に従って、取得したデータを解析する必要があります。最も簡単な方法は、応答ストリングを分割する方法です。

```
function parseData(raw_data)
{
  var data = [];
  var rows = raw_data.split('\n');
  for (var i=0; i < rows.length; i++)
  {
    var row = rows[i].trim();
    if (row !== '')
    {
      var cells = row.split(',');
      data.push(cells);
    }
  }
  return data;
}
```

データ更新間隔の指定

setTag() 関数を使用して、変更時刻を (ストリング形式で任意の追加情報として) テーブルに付加できます。 **getTag()** 関数は、この情報を取得するために使用されません。

1. 現在時刻 (最終変更) をテーブル・タグとして設定:

```
function setTableModificationTime()
{
  var currentDate = new Date();
  table.setTag(currentDate.getTime());
}
```

2. 最終変更時刻を取得:

```

function getTableModificationTime()
{
  var tag = table.getTag();
  if (tag === null)
  {
    var d = new Date();
    d.setDate(-2); // to force update for the first time use
    tag = d.getTime();
  }
  else
  {
    tag = parseInt(tag);
  }
  return tag;
}

```

3. 更新が必要かどうかを検査:

```

function needUpdate(lastModificationDate)
{
  var yesterday = new Date();
  yesterday.setDate(-1);
  return lastModificationDate <= yesterday.getTime();
}

```

古い情報を除去

eraseData() 関数を使用して、古い情報をテーブルから除去できます。

```


function eraseOutdated()
{
  var expirationDate = new Date();
  expirationDate.setDate(-30);
  var day = expirationDate.getDay();
  var month = expirationDate.getMonth() + 1;
  var year = expirationDate.getYear() + 1900;
  var strDate = year + '-' + month + '-' + day;
  table.eraseData("Last Trade Date"<' + "'" + strDate + "'");
}

```

結果の表示

スクリプトの操作が終了したら、変更を保存してエディターを閉じます。

照会を実行するには、「リポジトリ・エクスプローラー」ビューで保存した JavaScript テーブルにナビゲートし、このテーブルをダブルクリックします。開かれた照会を実行します。



1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
Symbol	Name	Last Trade (Price Only)	Last Trade Date	Last Trade Time	Open	Day's High	Day's Low	Dividend/Share	P/E Ratio	
1	XOM	Exxon Mobil Corpo	90.58	2013-04-02	<NULL>	90.68	90.92	90.28	2.28	9.36
2	GE	General Electric	23.34	2013-04-02	<NULL>	23.20	23.37	23.09	0.72	17.86
3	MSFT	Microsoft Corpora	28.80	2013-04-02	<NULL>	28.61	28.85	28.52	0.86	15.72

JavaScript テーブルの編集

既に作成されている JavaScript テーブルの構造およびスクリプトを編集できます。

このタスクについて

JavaScript テーブルを編集するには、以下のようにします。

手順

1. 「リポジトリ」または「リポジトリ・エクスプローラー」ビューで、必要な JavaScript テーブルにナビゲートします。
2. JavaScript テーブルの構造を編集するには、このテーブルを右クリックして、ポップアップ・メニューから「プロパティ」を選択します。
 - a. 「プロパティ」ウィンドウで「構造」ページを開きます。
 - b. 列のリスト、列の順序、値タイプ、必須パラメーターなどのテーブル構造を変更します。また、任意の列に注釈を追加することもできます。
 - c. 未保存の変更を取り消すには、「デフォルトの復元」をクリックします。
 - d. 更新した JavaScript テーブル構造を保存するには、「適用」をクリックしてから「OK」をクリックします。

注: すべてのデータがテーブルから除去されます。

3. JavaScript テーブルのスクリプトを編集するには、このテーブルを右クリックして、ポップアップ・メニューから「ソース・スクリプトの編集」を選択します。
「JavaScript テーブル」エディターが開いたら、目的に従ってスクリプトを書き直します。ソース・スクリプトの編集を終えたら、JavaScript テーブルを保存します。

仮想データ・ソースおよび JavaScript データ・ソースのキャッシュ有効期限のスケジュール

仮想データ・ソースの「プロパティ」ウィンドウの「キャッシュ設定」ページに保管されている仮想データ・ソースおよび表に対して有効期限スケジュールを使用できます。

このタスクについて

「有効期限スケジュールの使用」チェック・ボックスにチェック・マークが付いていない場合、キャッシュ有効期限モードは、仮想データ・ソースに関して「常に有効期限切れ」と同じになります。このデータ・ソースに保管されている表のレコードは、要求があるたびに更新されます。

特定のキャッシュ・スケジュールを仮想データ・ソースまたはその表に対して指定するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「リポジトリ」または「リポジトリ・エクスプローラー」視点で仮想データ・ソースを右クリックして「プロパティ」を選択します。
2. 「[データ・ソース] のプロパティ」ウィンドウで「キャッシュ設定」を選択します。
3. 「キャッシュ設定」ページで「有効期限スケジュールの使用」チェック・ボックスを選択します。スケジュール有効期限設定が使用可能になります。
4. 「デフォルトの有効期限スケジュール」リストから、データ・ソース全体のデフォルト・スケジュールとして使用するスケジュールを選択します。

注: 作成したデータ・ソースのデフォルト設定は「常に有効期限切れ」です。

5. 特定のキャッシュ有効期限スケジュールを特定の表に割り当てるには、設定を変更する表の「スケジュール名」列をクリックして、使用できるスケジューラーのリストから必要なスケジューラーを選択します。

注: 置換変数が含まれている表には「常に有効期限切れ」有効期限スケジュールのみが適用されます。

6. アクセス許可が必要となる表がある場合は、データ・ソースの許可設定を指定する必要があります。「許可の管理」ボタンをクリックします。「許可の管理」ダイアログが開きます。
7. そのダイアログには、許可が必要となるデータ・ソースがすべてリストされています。この許可データはキャッシュの更新に使用されます。必要なデータ・ソースの「ログイン」列をクリックします。「データ・ソース・ログインの編集」ダイアログが開きます。
8. 適切な値を「ログイン」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の各フィールドに入力し、「OK」をクリックします。
9. 必要なすべてのデータ・ソースに対して許可データを指定し終わったら、「許可の管理」ダイアログで「OK」をクリックします。
10. 「適用」をクリックしてから「OK」をクリックして、「[データ・ソース]のプロパティ」ウィンドウを閉じます。

仮想データ・ソースおよび JavaScript データ・ソースにキャッシュ有効期限スケジュールの設定を指定

仮想データ・ソースの「プロパティ」ウィンドウの「キャッシュ設定」ページに保管されている、仮想データ・ソースおよび表に関するキャッシングを使用可能にすることができます。

このタスクについて

仮想データ・ソースのキャッシングを使用可能にすると、その仮想データ・ソースに保管された表のレコードがキャッシュされます。これらの表のいずれかを開くと、その表のレコードは仮想データ・ソースからではなくキャッシュから取り出されます。キャッシングは、仮想データ・ソース内の個別の表について使用可能にすることもできます。

仮想データ・ソースのキャッシングを使用可能にするには、以下のようにします。

手順

1. 「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」 > 「仮想データ・ソース・スケジュール」を選択して、「新規有効期限スケジュールの作成」ウィザードを起動します。
2. 「データ・ソース」リストから、キャッシュ有効期限スケジューラーを指定するデータ・ソースを選択します。
3. 「スケジュール名」フィールドに、そのスケジュールに使用する名前を入力します。
4. 「データの有効期限」領域で、キャッシュの有効期限を指定します。使用可能なオプションは以下のとおりです。

- a. 毎時: このオプションを選択して、同じキャッシュ・データが 1 時間使用されるように指定します。
 - b. 日次: このオプションを選択して、同じキャッシュ・データが 24 時間使用されるように指定します。
 - c. 週次: このオプションを選択して、同じキャッシュ・データが 7 日間使用されるように指定します。
 - d. 月次: このオプションを選択して、同じキャッシュ・データが 1 カ月間使用されるように指定します。
 - e. 特定の日付: このオプションを選択して、特定の日付に達するまで同じキャッシュ・データが使用されるように指定します。このオプションを選択すると、キャッシュは特定の日に更新されます。
 - f. 常に有効: このオプションを選択して、同じキャッシュ・データが常に使用されるように指定します。このオプションを選択すると、キャッシュは更新されません。
 - g. 常に有効期限切れ: このオプションを選択して、この仮想データ・ソースに対して照会が実行されるたびにデータが必ず更新されるように指定します。
5. 「毎時」、「日次」、「週次」、「月次」、または「特定の日付」を選択した場合は、「次へ」をクリックします。
6. 作成しているスケジュールのタイプにより、ウィザードの「スケジュールのプロパティを設定します」ページの次のバリエーションの内のいずれかが開きます。
- a. 「毎時」を選択した場合は、その時間が始まる日時を「開始日」フィールドおよび「開始時刻」フィールドに指定します。「期限切れ間隔」領域で、期限切れ間隔を「時間」フィールドおよび「分」フィールドに指定します。
 - b. 「日次」を選択した場合は、24 時間が始まる日時を「開始日」フィールドおよび「開始時刻」フィールドに指定します。24 時間がいつ始まるかを「データの有効期限」領域で以下のように指定します。
 - 24 時間が毎日始まるように指定するには、「日次」を選択します。
 - 24 時間が任意の日数ごとに始まるように指定するには、「日間隔」を選択して日数をリストから選択します。
 - 24 時間が 1 つ以上の特定の曜日に始まるように指定するには、「曜日」を選択します。該当する曜日のチェック・ボックスを選択する必要があります。
 - c. 「週次」を選択した場合は、週が始まる日時を「開始日」フィールドおよび「開始時刻」フィールドに指定します。「毎週」リストから数を選択して、7 日間が任意の週数ごとに始まるように指定できます。「曜日」領域で、キャッシュが更新される特定の曜日を指定します。
 - d. 「月次」を選択した場合は、月が始まる日時を「開始日」フィールドおよび「開始時刻」フィールドに指定します。特定の日を「日」フィールドに入力することができます。あるいは、「または」フィールドで、データが月の特定の週の特定の曜日に取得されることを指定できます。「月の選択」領域で、必要な月を指定します。

- e. 「特定の日付」を選択した場合は、データ取得が行われる日時を「日時」リストで指定します。セルをクリックすると、省略符号 (...) が表示されます。省略符号 (...) をクリックして、日時を選択するカレンダーを開きます。
7. 「終了」をクリックします。スケジュールが作成されて、「リポジトリ・エクスプローラー」ビュー内の特定の仮想データ・ソースの「スケジュール」ノードにリストされます。

JavaScript データ・ソースの接続パラメーターの変更

既存の JavaScript データ・ソースの URL およびログオン情報を編集できます。

このタスクについて

JavaScript データ・ソースの接続パラメーターを変更するには、以下のようになります。

手順

1. 「リポジトリ」または「リポジトリ・エクスプローラー」ビューで、パラメーターを変更する JavaScript データ・ソースを右クリックし、「プロパティ」を選択します。
2. 「接続パラメーター」領域で、以下を実行します。
 - a. 「URL」フィールドに、接続してデータを取得する Web リソースの URL を入力します。
 - b. Web リソースにアクセスするたびにユーザー情報を要求するには、「ユーザー ID とパスワードが必要」チェック・ボックスを選択します。Web リソースがログオン情報を必要としない場合は、チェック・ボックスにチェック・マークを付けずに済みます。
 - c. 入力したユーザー ID のパスワードをアプリケーションが記憶できるようにする場合は、「ユーザーがパスワードを保存できるようにする」チェック・ボックスを選択します。
3. JavaScript パラメーター・テーブルで、以下のようにしてパラメーターを追加または削除できます。
 - a. 「パラメーターの追加」をクリックし、対応する列にパラメーター名と値を入力します。
 - b. データ・ソースからパラメーターを削除するには、パラメーターを選択して「パラメーターの削除」をクリックします。
4. 未保存の変更を取り消すには、「デフォルトの復元」をクリックします。
5. 更新した JavaScript テーブル構造を保存するには、「適用」をクリックしてから「OK」をクリックします。

第 13 章 ワークスペースの設定

ワークベンチを使用して、QMF for WorkstationQMF ユーザーのワークスペースを作成します。

管理者は、QMF ユーザーがワークスペースから、あるいは直接リポジトリからリポジトリ・オブジェクトを処理するかを選択できます。作成するすべてのリポジトリには、自動的に作成されるデフォルトのワークスペースが 1 つあります。初期状態では、すべてのユーザーはデフォルトのワークスペースにアクセスできます。

ワークスペースを設定する最初のステップは、ワークスペースの内容の指定です。

ワークスペースを使用する利点

ユーザーをワークスペースからリポジトリ・オブジェクトにアクセスさせることには、いくつかの利点があります。リポジトリに対して「内部」または「LDAP」セキュリティー・オプションを選択した場合、1 つ以上のワークスペースを作成し、特定のユーザーやグループに、ワークスペース全体またはワークスペース内の特定のオブジェクトへのさまざまなアクセス・レベルを割り当てることができます。リポジトリに対して追加のセキュリティーを選択しなかった場合、1 つ以上のワークスペースをリポジトリ・オブジェクトの編成に役立てることができます。

ワークスペースの使用を選択せず、QMF ユーザーがリポジトリから直接リポジトリ・オブジェクトにアクセスするようにする場合、ユーザー・パースペクティブでデフォルトで開くビューを、ユーザーが変更するように勧めてください。デフォルトで「ワークスペース」ビューが開く代わりに、デフォルトで「リポジトリ・エクスプローラー」ビューが開くように、パースペクティブを変更します。

ワークスペースへのコンテンツの追加

ワークスペースにデータを追加するには、データ・ソース・オブジェクトやリポジトリ・オブジェクトを追加します。ワークスペースのユーザーは、追加されたデータ・ソースやリポジトリ・オブジェクトを使用できるようになります。

このタスクについて

コンテンツをワークスペースに追加するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「リポジトリ」または「リポジトリ・エクスプローラー」ビューから、ワークスペースに追加するオブジェクト（データ・ソース、フォルダー、照会、ダッシュボード、報告書など）を選択します。選択したオブジェクトは、現在接続しているリポジトリで使用可能であることが必要です。
2. マウス・ボタンを押したまま、オブジェクトをワークスペース・フォルダーにドラッグします。マウス・ボタンを離します。さらに、オブジェクトを右クリック

してポップアップ・メニューから「コピー」を選択してから、そのオブジェクトを追加するワークスペース・フォルダーを右クリックすることもできます。

3. 選択したオブジェクトのタイプに応じてポップアップ・メニューが開きます。以下のオプションの 1 つ以上が使用可能になります。
 - 「ここへコピー」：ワークスペースのオブジェクトをコピーします。
 - 「ここへ移動」：オブジェクトをリポジトリからワークスペースへ移動します。
 - 「ここにリンクを作成」：オブジェクトへのリンクを作成します。ユーザーまたはグループがオブジェクトにアクセスするたびに実際にリソースにリンクします。
 - 「オフライン項目の作成」：オブジェクトにオフライン項目を作成します。「オフライン項目の作成」ウィンドウが開きます。コピーする項目に (項目全体の中から) それぞれチェック・マークを付けます。オフライン項目を使用すると、実際にデータ・ソースにアクセスすることなく、データ・ソースのオブジェクトを操作することができます。ユーザーには、ワークスペース内のオフライン項目と、リポジトリの実際の内容との同期を保つ責任があります。
 - 「オフラインとして貼り付け」は、「オフライン項目の作成」と同じですが、オブジェクトがワークスペースにドラッグされるのではなくクリップボードにコピーされる点が異なります。

ユーザーとしてのワークスペースの追加

オプションで、ユーザーおよびグループ用の追加のワークスペースを設定できます。

このタスクについて

ユーザーとしてワークスペースを追加するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択します。「新規」ウィンドウが開きます。「リポジトリ」フォルダーを展開します。「ワークスペース」を選択します。「新規ユーザー・ワークスペースの作成」ウィザードが開きます。
2. 「名前」フィールドに新規ワークスペースの名前を入力します。
3. 「コメント」フィールドに、ワークスペースについて説明するコメントを入力します。
4. 「終了」をクリックします。ワークスペースの作成後、ワークスペースで使用可能にするデータ・ソース情報とデータ・ソース・オブジェクトを指定し、さらに、そのワークスペースの使用許可を与えるユーザーとグループについても指定します。

第 14 章 ER ダイアグラムでの作業

関連表の列間の関係を指定してその関係を保管するには、ER ダイアグラムを使用します。

例えば、会社の全従業員のスタッフ・データが表に保管されるとします。この表には、DEPT という列が含まれていて、その列には、従業員が働く部門の ID が保管されます。別の表には、会社の各部門の組織データが保管されます。この表には、DEPTNAME という列が含まれていて、その列には会社の各部門の名前が保管されます。これら 2 つの表は、簡単に結合できる列があり、関連しています。ただし、ユーザーがこれらの表のいずれかを開いても、この関係はすぐには分かりません。これら 2 つの表とその可能なすべての結合を含む ER ダイアグラムを作成することで、この関係をかなり分かりやすくすることができます。これにより、ユーザーがこれらの表を開くと、ユーザーが保存したすべての関係が ER ダイアグラム・エディターに表示されるため、ユーザーは、より効果的で動的な報告書を作成できます。

ER ダイアグラムの作成

ER ダイアグラムを使用すれば、表の列と列の間に概念的な接続を構築するために使用できるリレーショナル・データベースの抽象的で概念的な表現を作成できます。

このタスクについて

ER ダイアグラムを作成するには、以下のようになります。

手順

1. メインメニューから「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択します。「新規」ウィンドウが開きます。
2. 「QMF オブジェクト」フォルダーを展開し、「ER ダイアグラム」を選択して、「次へ」をクリックします。「新規 ER ダイアグラムの作成」ウィザードが開きます。
3. ER ダイアグラムの名前を「名前」フィールドに入力します。
4. ER ダイアグラムに関連付けるデータ・ソースを「データ・ソース」リストに入力します。「データ・ソース」リストには、リポジトリ内のすべてのデータ・ソースが追加されています。
5. 「終了」をクリックします。新規 ER ダイアグラムがデータ・ソースに追加され、「ER ダイアグラム」エディターが開き、このダイアグラムが示されます。

ER ダイアグラムの編集

ER ダイアグラムを手動で作成した場合は、エンティティ・リレーションシップに組み込む表と列の結合を指定する必要があります。

このタスクについて

使用可能な列接続を持つ表を ER ダイアグラムに組み込むと、照会や報告書を作成するプロセスがユーザーにとって非常に分かりやすいものになります。

ER ダイアグラムを編集するには、以下のようになります。

手順

1. 編集する ER ダイアグラムをダブルクリックします。ER ダイアグラム・エディターが開きます。エディターの左ペインに関連データ・ソースが表示されます。
2. 「データベース」フォルダーの「表」ノードを展開します。
3. ダイアグラムに組み込む表をそれぞれエディターの右ペインにドラッグします。追加する各表がビジュアル表示されます。
4. 表と表の間に結合条件をセットアップするには、一方の表にある列を選択し、他方の表にある列にドラッグします。結合された列同士の間には接続線が引かれます。複数の結合条件をセットアップできます。
5. 結合条件を編集するには、接続線を右クリックして「編集」を選択します。「表の結合」ウィンドウが開きます。
6. 2 つの表をリンクする結合のタイプを選択します。選択可能な結合タイプは以下のとおりです。
 - 内部結合: 両方の表で一致する値がある行のみを照会結果に含めます。
 - 左外部結合: 左の表にあるすべての行と、右の表にある行のうち左の表の行と一致する行のみを照会結果に含めます。
 - 右外部結合: 右の表にあるすべての行と、左の表にある行のうち右の表の行と一致する行のみを照会結果に含めます。
 - 完全外部結合: 両方の表の行をすべて照会結果に含めます。
7. 「変更」をクリックします。新しい結合条件が保存されます。
8. 結合条件を削除するには、接続線を右クリックして「削除」を選択します。

注: ER ダイアグラム内の 2 つの表に対して指定する結合の変更 (追加、編集、および削除) はすべて、当該データ・ソースの他の ER ダイアグラムにおけるこれらの表に自動的に適用されます。結合された表の一方のみを ER ダイアグラムに追加する場合は、ER ダイアグラムを右クリックして「リンク表の追加」を選択することで他方の表を自動的に追加できます。

9. テキスト・メモを ER ダイアグラムに追加するには、ER ダイアグラム・エディター内で右クリックして「テキストの追加」を選択します。テキスト・ボックスが表示されます。テキストを追加したり、テキスト・ボックスのサイズを変更したり、テキスト・ボックスをダイアグラム内のある位置から別の位置に移動したりできます。テキスト・メモを使用すれば、ER ダイアグラム内の表および結合に関する追加情報をユーザーに伝えることができます。
10. テキスト・ボックスを削除するには、テキスト・ボックスを右クリックして「削除」を選択します。
11. 表の列を表示したり非表示にしたりするには、表ダイアグラムで列名を右クリックして「列の非表示/表示」を選択します。「列の非表示/表示」ウィンドウが開き、使用可能な表の列がすべて示されます。

12. 列を表示するには、その列に関連するチェック・ボックスを選択します。列を非表示にするには、その列に関連するチェック・ボックスをクリアします。選択/クリア作業が終了したら「OK」をクリックします。「列の非表示/表示」ウィンドウが閉じて、表ダイアグラムに対して行った変更が表示されます。
13. 表の追加や、結合条件の構成を終えたら、「保存」アイコンをクリックします。編集された ER ダイアグラムがデータ・ソースの「ER ダイアグラム」フォルダーに保存されます。これで、対象の表を 1 つ以上含む照会をユーザーが作成するときに、構成済みの結合条件が自動的に照会に追加されて照会ビルダー・エディターに表示されます。

ER ダイアグラム・フォルダーの作成

エンティティ・リレーションシップ (ER) ダイアグラム・フォルダーは、作成してデータ・ソースに追加できます。

このタスクについて

ER ダイアグラム・フォルダーを作成するには、以下のようになります。

手順

1. メインメニューから「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択します。「新規」ウィンドウが開きます。
2. 「QMF オブジェクト (QMF Objects)」フォルダーを展開し、「ER ダイアグラム・フォルダー」を選択して、「次へ」をクリックします。「新規 ER ダイアグラム・フォルダーの作成」ウィザードが開きます。
3. ER ダイアグラム・フォルダーの属性を指定します。
 - a. ER ダイアグラム・フォルダーの名前を「名前」フィールドに入力します。
 - b. 新規 ER ダイアグラム・フォルダーの親フォルダーを「親フォルダー」フィールドに入力します。
 - c. オプション: 新規フォルダーと ER ダイアグラムを説明するコメントを追加する場合は、そのコメントを「コメント」フィールドに入力します。このコメントは、作成された ER ダイアグラム・フォルダーのプロパティに表示されます。
4. 「終了」をクリックします。「新規 ER ダイアグラム・フォルダーの作成」ウィザードが閉じて、新規 ER ダイアグラム・フォルダーがデータ・ソース内の親フォルダーの下に表示されます。

タスクの結果

新規 ER ダイアグラムを作成したり、既存の ER ダイアグラムをコピーしたり、ER ダイアグラムをグループ化するために ER ダイアグラム・フォルダーに移動したりできます。ER ダイアグラム・フォルダーに ER ダイアグラムを自動的に追加することもできます。

ER ダイアグラムを自動的に取り込む

結合を自動的に作成するときの結合先の表を指定できます。そうすると、QMF は、その表の ER ダイアグラムを既存の ER ダイアグラム・フォルダーに追加します。

始める前に

ER ダイアグラムの追加先となる ER ダイアグラム・フォルダーが必要です。

このタスクについて

ER ダイアグラムを取り込むには、以下のようにします。

手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」視点で、ER ダイアグラムの追加先となる ER ダイアグラム・フォルダーを右クリックし、「データの設定」を選択します。
2. 「名前フィルターの設定」ウィンドウで以下の基準を指定できます。
 - a. 「オブジェクト所有者」フィールドに、ER ダイアグラムで結合する表を所有する ID を指定します。ID の正しい形式で所有者を指定する必要があります。このフィールドでは、複数の所有者と一致させるために、ワイルドカード文字を指定したパターンを使用できます。
 - b. 「オブジェクト名」フィールドに、ER ダイアグラム内の表結合を指定する ID を指定します。ID の正しい形式で名前を指定する必要があります。複数の名前と一致させるために、ワイルドカード文字を指定した突き合わせパターンを指定できます。
3. 「OK」をクリックして「名前フィルターの設定」ウィンドウを閉じ、追加処理を開始します。

タスクの結果

ER ダイアグラムは作成されると「ER ダイアグラム」エディターに表示されます。作成された ER ダイアグラムの編集について詳しくは、『ER ダイアグラムの編集』トピックを参照してください。

第 15 章 環境のセットアップ

環境とは、データ・ソース定義を集めたものです。

環境を使用すれば、リポジトリ・オブジェクト自体を変更せずにリポジトリ・オブジェクトを別のデータ・ソースに向けることができます。これは、実動データに対してオブジェクトをテストすることが推奨されない場合のテスト用に役立つ可能性があります。テスト・データ・ソースを指すテスト環境を定義して、その環境を開発用に使用できます。ユーザーは、すべてのオブジェクトのテスト後に実稼働環境を使用できます。

常にデフォルト環境が 1 つ存在します。この環境は削除できません。

新たに作成された環境は、デフォルト環境からデータ・ソース定義を読み取ります。その際、この定義は、別の場所を指すように変更できます。

複数の環境が使用可能な場合は、それらを切り替えることができます。

新規環境の作成

「新規環境の作成」ウィザードを使用すれば、新規環境を作成できます。

このタスクについて

新規環境を作成するには、以下のようになります。

手順

1. 管理者パースペクティブから「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」を選択します。「新規」ウィンドウが開きます。
2. 「環境」フォルダーを展開して、「環境」を選択し、「次へ」をクリックします。「新規環境の作成」ウィザードが開きます。
3. 環境の名前を「環境名」フィールドで指定して、「次へ」をクリックします。
4. チェック・ボックスを使用して、環境に組み込むデータ・ソースを「環境の内容」テーブルから選択します。チェック・マークが付いていない項目に関しては、オリジナルのデータ・ソース定義 (デフォルト環境で定義されたもの) が使用されます。
5. 指定する接続ストリングを選択して、「接続のテスト」をクリックします。「データ・ソースにログオン」ウィンドウが開きます。「接続の設定」ウィザードが開きます。
6. ユーザー名を「ユーザー名」フィールドに指定し、パスワードを「パスワード」フィールドに指定して、「OK」をクリックします。システムから「データ・ソースへの接続が確立されました」と表示されます。
7. データ・ソースの接続ストリングを変更するには、編集する接続ストリングを選択し、省略符号 (...) をクリックします。「接続の設定」ウィザードが開きます。

8. 新規 JDBC URL を「**JDBC URL**」フィールドに指定するか、または「**JDBC URL の作成**」フィールドを使用して JDBC URL を作成します。
9. 「**拡張**」をクリックして、追加 JDBC 設定を指定します。「**拡張 JDBC 設定**」ウィザードが開きます。
10. このデータ・ソースに必要なドライバー固有の接続ストリング・キーワードを入力して、「**OK**」をクリックします。

注: 選択したドライバーが要求する、またはサポートするキーワードの詳細については、ドライバーの資料を参照してください。

11. 「**OK**」をクリックします。「**接続の設定**」ウィンドウが閉じて、制御が「**新規環境の作成**」ウィザードに戻ります。
12. 「**終了**」をクリックします。「**新規環境の作成**」ウィザードが閉じて、「**環境**」ノードの下に新規環境がリストされます。

環境接続設定の編集

「**環境の編集**」ダイアログを使用すれば、接続設定を編集したり、データ・ソースを環境に追加したりできます。

このタスクについて

既存環境の接続設定を編集するには、以下のようになります。

手順

1. 「**リポジトリ**」ビューで「**環境**」フォルダーを展開し、編集する環境を右クリックして、「**編集**」を選択します。「**環境の編集**」ウィンドウが開きます。
2. チェック・ボックスを使用して、環境に組み込むデータ・ソースを「**環境の内容**」テーブルから選択します。チェック・マークが付いていない項目に関しては、オリジナルのデータ・ソース定義 (デフォルト 環境で定義されたもの) が使用されます。
3. 指定する接続ストリングを選択して、「**接続のテスト**」をクリックします。「**データ・ソースにログオン**」ウィンドウが開きます。「**接続の設定**」ウィザードが開きます。
4. ユーザー名を「**ユーザー名**」フィールドに指定し、パスワードを「**パスワード**」フィールドに指定して、「**OK**」をクリックします。システムから「**データ・ソースへの接続が確立されました**」と表示されます。
5. データ・ソースの接続ストリングを変更するには、編集する接続ストリングを選択し、省略符号 (...) をクリックします。「**接続の設定**」ウィザードが開きます。
6. 新規 JDBC URL を「**JDBC URL**」フィールドに指定するか、または「**JDBC URL の作成**」フィールドを使用して JDBC URL を作成します。
7. 「**拡張**」をクリックして、追加 JDBC 設定を指定します。「**拡張 JDBC 設定**」ウィザードが開きます。
8. このデータ・ソースに必要なドライバー固有の接続ストリング・キーワードを入力して、「**OK**」をクリックします。

注: 選択したドライバーが要求する、またはサポートするキーワードの詳細については、ドライバーの資料を参照してください。

9. 「OK」をクリックします。「接続の設定」ウィンドウが閉じて、制御が「環境の編集」ウィンドウに戻ります。
10. 「OK」をクリックします。「環境の編集」ウィンドウが閉じて、環境に対して行った変更が保存されます。

第 16 章 QMF 用のリポジトリ接続の作成

QMF では、アプリケーション・データ (リポジトリ名別にグループ化されています) へのアクセス方法を認識し、ユーザーがそのデータにアクセスできるようにする必要があります。この接続データを QMF に提供する方法として、QMF 接続ウィザードを使用して接続データを作成します。

このタスクについて

各リポジトリの接続情報を作成する必要があります。リポジトリ接続情報は、共有リポジトリにアクセスする方法を指定します。環境を設定する方法に応じて、作成する接続のタイプを決めます。

リポジトリ接続情報は、`settings.xml` という名前のファイルに保存されます。このファイルは、アプリケーション・インターフェースを実行しているマシンの個人設定ディレクトリに保存されます。このファイルを使用して、QMF のすべてのユーザー用に環境を設定するプロセスを簡素化できます。

リポジトリ接続情報を作成するには、次のようにします。

手順

1. 「リポジトリ接続」ビューの任意の場所を右クリックし、「新規」 > 「リポジトリ接続」を選択して「新しいリポジトリ接続の作成」ウィザードを開きます。
2. 作成する接続のタイプを、次のラジオ・ボタンの中から 1 つ選択します。
 - **共有リポジトリ:** クライアント/サーバー JDBC 接続を使用して、共有リポジトリへのリポジトリ接続を作成します。クライアント/サーバー・アクセスでは、ユーザーのワークステーションが、ローカルにインストールされた JDBC ドライバーを使用してリポジトリ・データベースへの直接接続を確立します。このタイプの接続では、QMF for Workstation を実行する各ワークステーション、および QMF for WebSphere を実行するサーバー (ワークステーション) に、JDBC ドライバーがインストールされている必要があります。
 - **ファイル・ベース・リポジトリ:** 指定の場所に保管されたファイル・ベース・リポジトリへのリポジトリ接続を作成します。(QMF for Workstation のみ)
 - **ネットワーク・リポジトリ:** 直接ネットワーク・アクセスを使用して共有リポジトリへのリポジトリ接続を作成します。ネットワーク接続の場合、ユーザーは、ワークステーションからデータベースに直接接続することなく共有リポジトリにアクセスできます。ネットワーク接続を使用してリポジトリに接続すると、中央サーバーでのデータ・アクセスの統合が可能になり、QMF for Workstation を実行しているデスクトップごとに JDBC ドライバーを配布する必要がなくなります。
 - **Web サービス・リポジトリ:** HTTP または HTTPS 接続を使用して、QMF for WebSphere Web サービス API を介した共有リポジトリへのリ

ポジトリー接続を作成します。Web サービス接続の場合、ユーザーは、ワークステーションからデータベースに直接接続することなく共有リポジトリーにアクセスできます。Web サービス接続を使用してリポジトリーに接続すると、中央サーバーでのデータ・アクセスの統合が可能になり、QMF for Workstation を実行しているデスクトップごとに JDBC ドライバーを配布する必要がなくなります。

3. 「次へ」をクリックします。「新しいリポジトリー接続の作成」ウィザードの 2 ページ目が開きます。ウィザードの 2 ページ目は、定義しているリポジトリー接続のタイプに応じて異なります。

共有リポジトリー接続の作成

共有リポジトリー接続を作成することにより、ユーザーがクライアント/サーバー JDBC 接続を使用して、データベースにある共有リポジトリーに接続できるようにするための情報を設定します。

このタスクについて

このタスクの手順では、共有リポジトリー接続の作成方法について説明します。

注: 共有リポジトリー接続の接続モード は、「リポジトリー・ストレージの編集」ウィンドウの「保護」タブの設定によって決まります。

共有リポジトリー接続の作成プロセスを完了するには、次のようにします。

手順

1. 「新しいリポジトリー接続の作成」ウィザードの 2 ページ目を開きます。
2. 「接続名」フィールドに、リポジトリー接続の名前を指定します。この名前は、「リポジトリー接続」ビューに表示されたときに、接続を識別するために使用されます。任意の名前を入力できますが、この接続情報が適用されるリポジトリーを識別できる名前を使用することをお勧めします。
3. 「即時に接続」チェック・ボックスを選択すると、共有リポジトリーにただちに接続されます。このチェック・ボックスが選択されていないと、接続情報が作成されて保存され、「リポジトリー接続」ビューに表示されますが、リポジトリーへの即時接続は行われません。
4. 「JDBC ドライバー」フィールドには、リポジトリー・ストレージをホストするデータベースのアクセスに使用する JDBC ドライバーのライブラリーを指定します。JDBC ドライバー情報の設定時に定義したライブラリーのドロップダウン・リストから選択できます。このフィールドの右側にある省略符号 (...) を使用すれば、「JDBC ライブラリー」ダイアログを開くことができます。このダイアログでは、追加の JDBC ドライバー・ライブラリーを作成できます。
5. 「JDBC URL」リストで、接続先リポジトリーのあるリポジトリー・ストレージをホストするデータベースを指す URL を指定します。

この URL の形式はリストに表示できます。

注: また、「URL テンプレートによる URL の作成」ダイアログ・ボックスを使用すれば、正しいストリングを形成できます。

「URL テンプレートによる URL の作成」ダイアログ・ボックスを開くには、「URL の作成」をクリックします。JDBC URL ドロップダウン・リストからテンプレートを選択します。表でサーバー、ポート、およびデータベース情報を指定して、「OK」をクリックします。結果の URL スtringが JDBC URL リストに追加されます。

6. 「拡張」をクリックして、この共有リポジトリへの接続時に使用されるドライバー固有の接続ストリング・キーワードとその値を指定します。選択したデータベース・ドライバーに必要なキーワードについて詳しくは、当該ドライバーの資料を参照してください。

注: DB2® Type 4 UDB ドライバーの場合、拡張 SQL 例外エラー・メッセージを受け取るには、「拡張 JDBC 設定」ウィンドウの「retrieveMessagesFromServerOnGetMessage」オプションにチェック・マークを付けます。

7. 「JDBC ドライバー」フィールドには、リポジトリをホストするデータベースへのアクセスに使用する JDBC ドライバーのライブラリーを指定します。JDBC ドライバー情報の設定時に定義したライブラリーのドロップダウン・リストから選択します。省略符号 (...) をクリックして、追加の JDBC ドライバー・ライブラリーを作成できる「JDBC ライブラリー」ウィンドウを開きます。
8. 「JDBC URL」フィールドで、接続先リポジトリのあるリポジトリ・ストレージをホストするデータベースを指す URL を指定します。JDBC ライブラリーのセットアップ時に例を指定した場合は、URL の形式をフィールドに表示できます。
9. オプション: 直接 DRDA 接続を使用して初めてリポジトリに接続する場合は、直接 DRDA パッケージをバインドする必要があります。これを行うには、以下の手順を完了します。
 - a. 「パッケージのバインド」をクリックします。
 - b. 「所有者 ID」フィールドに、バインディング・プロセスに必要な権限を持つ特権 SQLID を入力します。このフィールドの値が指定されていない場合は、「ユーザー情報の設定」ダイアログのユーザー名が使用されます。
 - c. 「インストール」をクリックします。
10. 「ユーザー情報の設定」をクリックして、リポジトリへの接続に使用されるユーザー情報を指定します。「ユーザー情報の設定」ウィンドウが開きます。
 - a. 「ユーザー ID とパスワードが必要」チェック・ボックスを選択して、この共有リポジトリへの接続が行われるたびにユーザー情報が要求されるよう指定します。場合によっては、このチェック・ボックスのチェックを外すことで、ユーザーは自分のユーザー情報を明確に指定することなくリポジトリにアクセスできるようになります。
 - b. 「ユーザー名」および「パスワード」フィールドに、指定されたりポジトリ・データベースへのアクセスに使用するユーザー ID とパスワードを入力します。
 - c. パスワードを保存するには、「パスワードを保存」チェック・ボックスを選択します。

「パスワードを保存」チェック・ボックスを選択していない場合、「リポジトリ接続の編集」ウィザードを開くと常に、ユーザー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトがシステムから出されます。

- d. 使い捨てパスワード・モード を有効にするには、「拡張」をクリックして、「有効」を選択します。

「リポジトリ・ストレージ接続タイムアウト」フィールドに、使い捨てパスワード・モード機能が、(未使用時に) アプリケーションによって閉じられることなく有効な状態になっている時間を分単位で入力します。

注: 値ゼロ 0 を指定すると、接続タイムアウトに対して無制限のアイドル状態が設定されます。すなわち、接続はセッションの終了時にのみ閉じられます。

使い捨てパスワード・モード 機能を有効にすることにより、ユーザーはそのユーザー ID およびパスワードを再入力することなくセッション全体のリポジトリにログインできるようになります。

11. 「OK」をクリックして、「ユーザー情報」ウィンドウを閉じます。
12. 「Web サービス・クライアントから非表示」を選択して、QMF for WebSphere の「リポジトリ接続名」フィールドで使用可能な接続のリストからこの接続を除外します。

このチェック・ボックスは、QMF for WebSphere ユーザー・インターフェースでのみ表示されます。QMF for Workstation ユーザー・インターフェースで操作している場合は、「Web サービス・クライアントから非表示」はオプションとして表示されません。

このチェック・ボックスを選択すると、ユーザーはこのリポジトリ接続に対して Web サービス接続を確立できません。

13. 「リポジトリ名」フィールドで、接続先のリポジトリを選択します。リポジトリがリストされていない場合は、「最新表示」をクリックします。
14. 「終了」をクリックします。

作成したばかりのリポジトリ接続が「リポジトリ接続」ビューに表示されます。

「即時に接続」チェック・ボックスを選択した場合は、このリポジトリに接続されます。このリポジトリ接続情報は、接続設定ファイルに入力されます。リポジトリ接続情報を作成するための次のステップは、QMF for Workstation を実行する各ユーザー、または QMF for WebSphere を実行するサーバー (ワークステーション) にこの情報を配布することです。

ファイル・ベース・リポジトリ接続の作成

QMF for Workstation を使用している場合、ファイル・リポジトリ接続を作成することにより、ローカルまたはネットワーク・ドライブ上に格納されたファイル・ベース・リポジトリに接続できるようにするための情報を設定できます。

このタスクについて

ファイル接続は、旧ファイル・ベース・リポジトリに対してのみ作成できます。より新しいバージョンの QMF for Workstation および QMF for WebSphere では、ファイル・ベース・リポジトリがパーソナル・リポジトリに置き換わっています。

ファイル・ベース・リポジトリ接続の作成を完成させるには:

手順

1. 「新しいリポジトリ接続の作成」ウィザードの 2 ページ目を開きます。
2. 「接続名」フィールドに、リポジトリ接続の名前を指定します。この名前は、「リポジトリ接続」ビューに表示されたときに、接続を識別するために使用されます。任意の名前を入力できますが、この接続情報が適用されるリポジトリを識別できる名前を使用することをお勧めします。
3. 「即時に接続」チェック・ボックスを選択すると、ファイル・ベース・リポジトリにただちに接続されます。このボックスが選択されていないと、接続情報が作成されて保存され、「リポジトリ接続」ビューに表示されますが、リポジトリへの即時接続は行われません。
4. 「終了」をクリックします。

作成したばかりのリポジトリ接続が「リポジトリ接続」ビューに表示されません。

「即時に接続」チェック・ボックスを選択した場合は、このリポジトリに接続されます。このリポジトリ接続情報は、接続設定ファイルに入力されます。

リポジトリ・キャッシングの構成

ご使用のリポジトリにキャッシング機能を構成できます。リポジトリでキャッシングを有効にすると、リポジトリの内容 (ダッシュボード、照会、ビジュアル報告書、およびその他のオブジェクト) が、ワークステーション・クライアントまたは Web サーバー (QMF for WebSphere を使用している場合) 上のメモリーに保存されます。

このタスクについて

このタスクでは、リポジトリ・キャッシングの構成方法について説明します。

考慮事項:

- キャッシングは、QMF for Workstation を使用している場合はご使用のマシン上のローカル・メモリーで、QMF for WebSphere を使用している場合は Web サーバー上のメモリーで行われます。

これ以降、次にリポジトリ・オブジェクトにアクセスするときは、情報は (リポジトリに要求を送信せずに) メモリーから取り出されます。これにより、情報の取得時間が短縮されます。

以下の内容がキャッシュされます。

- オブジェクトの内容

- オブジェクトへのパス
- 表のメタデータ
- キャッシュされたリポジトリ・オブジェクトを変更すると、キャッシュがリフレッシュされて変更内容が反映されます。
- QMF for Workstation では、マシンをシャットダウンするかアプリケーションを閉じると、必ずリポジトリ・キャッシュがクリアされます。
- QMF for Workstation では、ユーザーはマシンで実行中のアプリケーションのバージョンに対応してリポジトリ・キャッシング・パラメーターを設定できます。
- QMF for WebSphere では、リポジトリ・キャッシングは同じリポジトリ接続ログインを使用して行われたすべての接続間で共有されます。
- QMF for WebSphere では、ユーザーはリポジトリ接続設定を変更するために、管理者権限を持っている必要があります。

リポジトリ・キャッシングを構成するには、以下のようにします。

手順

1. 「新しいリポジトリ接続を作成」ウィザードまたは「リポジトリ接続の編集」ウィザードの 2 ページ目を開きます。
2. 「リポジトリ・キャッシュ」領域で、「使用可能」チェック・ボックスを選択して、キャッシュ構成オプションをアクティブにします。

事前定義されたキャッシュ検証用のラジオ・ボタンが「事前定義されたモード」セクションで使用可能になります。

事前定義キャッシュ検証モードを実装するには、関連付けられたラジオ・ボタンを選択します。各事前定義モードのキャッシュ検証処理は次のとおりです。

- 低い関連性 - 高パフォーマンス

これが選択されている場合、キャッシュ検証は実行されません。

- 関連性とパフォーマンスの平衡状態

これが選択されている場合、キャッシュ検証は 5 分ごとに実行されます。これがキャッシュ検証のデフォルト設定です。

- 高い関連性 - 低パフォーマンス

これが選択されている場合、キャッシュ検証は 60 秒 (1 分) ごとに実行されます。

3. カスタム・キャッシュ検証を実装するには、「カスタム・キャッシュ設定の使用」チェック・ボックスを選択します。

「カスタム・キャッシュ設定の使用」チェック・ボックスを選択すると、事前定義キャッシュ検証モード用のオプションは使用不可になります。

「カスタム...」をクリックして、「リポジトリ・キャッシュ設定」ウィザードを起動します。

このウィザードを使用して、キャッシュ・サイズ情報を指定し、検証間隔を設定します。

このウィザードは、以下の 2 つのペインで構成されています。

- 左側の「リポジトリ・キャッシュ」ペイン

このペインには、キャッシュに入れる特定タイプのリポジトリ関連データがリストされます。

- 右側の「リポジトリ・キャッシュ設定」ペイン

このペインではキャッシング・パラメーターを設定します。

一般的なキャッシング用のパラメーター値を設定できます。これらのパラメーター値は、各タイプのリポジトリ関連データに適用されます。

また、異なるタイプのリポジトリ関連データのパラメーター値を設定することもできます。これらのタイプには以下のものが含まれます。

- コンテンツ・キャッシュ
- サーバー・メタデータ・キャッシュ
- 構造キャッシュ
- 表メタデータ・キャッシュ

- a. 一般キャッシュ設定を行うには、リスト・ペインで「リポジトリ・キャッシュ」をクリックし、「キャッシュ検証時間 (分)」フィールドに値を設定します。

入力した値は、当該キャッシュ検証が行われる頻度 (分数) を表します。

入力した値によって、キャッシュ内のオブジェクトが変更されていないことをキャッシュが検証する頻度が決定されます。システムでは、リポジトリに保管されている各キャッシュ・オブジェクトの最終更新日を検査します。

デフォルト値は 5 分です。

変更されたオブジェクトはすべてキャッシュから削除されます。

指定された時間内にアクセスされなかったオブジェクトは、いずれもキャッシュから削除されません。

キャッシュをリフレッシュしない場合は、0 (ゼロ) を入力します。これは、静的コンテンツを持つリポジトリの場合に便利です。

- b. 異なるタイプのリポジトリ関連データのパラメーター値を設定するには、「リポジトリ・キャッシュ」を展開し、構成するデータのタイプを選択します。リポジトリ関連データのタイプとその構成パラメーターは以下のとおりです。

- コンテンツ・キャッシュ

次のパラメーターが含まれています。

- コンテンツ・サイズ (メガバイト): キャッシュ・コンテンツに許可される最大サイズ (メガバイト単位) を指定します。

入力した値は、すべてのオブジェクトの総合計サイズを表します。これらは、キャッシュに保管され、QMF for Workstation を使用している場合はご使用のマシン上の、QMF for WebSphere を使用している場合は Web サーバー上のメモリーに保存されたオブジェクトです。

サイズが最大許容サイズに達したキャッシュに新規オブジェクトが追加されると、システムでは、新規オブジェクトを収容するために十分なスペースが確保されるまでオブジェクトが削除されます。

最も長期間にわたってアクセスされていないオブジェクトが最初に削除されます。

- サーバー・メタデータ・キャッシュ

以下のパラメーターが含まれています。

- 存続時間限度 (分)

レコードがキャッシュに保持される最大時間 (分数) を設定するパラメーターです。存続時間は、各レコードについて、その作成時点から計算されます。指定された存続時間が過ぎると、レコードはキャッシュから強制的に除去されます。

- 非アクティブ期間 (分)

レコードが参照されずにキャッシュに保持される最大時間 (分数) を設定するパラメーターです。非アクティブ期間は、各レコードについて、それが最後に使用された時点から計算されます。指定された非アクティブ期間が過ぎると、レコードはキャッシュから強制的に除去されます。

- 構造キャッシュ

以下のパラメーターが含まれています。

- 存続時間限度 (分)

レコードがキャッシュに保持される最大時間 (分数) を設定するパラメーターです。存続時間は、各レコードについて、その作成時点から計算されます。指定された存続時間が過ぎると、レコードはキャッシュから強制的に除去されます。

- 非アクティブ期間 (分)

レコードが参照されずにキャッシュに保持される最大時間 (分数) を設定するパラメーターです。非アクティブ期間は、各レコードについて、それが最後に使用された時点から計算されます。指定された非アクティブ期間が過ぎると、レコードはキャッシュから強制的に除去されます。

- 表メタデータ・キャッシュ

以下のパラメーターが含まれています。

- 存続時間限度 (分)

レコードがキャッシュに保持される最大時間 (分数) を設定するパラメーターです。存続時間は、各レコードについて、その作成時点から計算されます。指定された存続時間が過ぎると、レコードはキャッシュから強制的に除去されます。

– 非アクティブ期間 (分)

レコードが参照されずにキャッシュに保持される最大時間 (分数) を設定するパラメーターです。非アクティブ期間は、各レコードについて、それが最後に使用された時点から計算されます。指定された非アクティブ期間が過ぎると、レコードはキャッシュから強制的に除去されます。

4. 「完了」をクリックして、ウィザードを終了します。

タスクの結果

リポジトリ・キャッシングを有効にして、キャッシュの動作を制御するパラメーターを設定しました。各設定は製品構成に保存されます。

システムでは、キャッシュ設定ファイルの読み取りおよび書き込み (保存) をユーザーに許可し、そのファイルを使用して、現在の設定を直接キャッシュに設定します。すべての設定は、構成レコードのセット内でサービスごとにグループ化されません。

ネットワーク・リポジトリ接続の作成

ネットワーク・リポジトリ接続を作成することにより、ユーザーが直接のネットワーク・アクセスを使用して、共有リポジトリに接続できるようにするための情報を設定します。

このタスクについて

ネットワーク接続の場合、ユーザーは、ワークステーションからデータベースに直接接続することなく共有リポジトリにアクセスできます。ネットワーク接続を使用してリポジトリに接続すると、中央サーバーでのデータ・アクセスの統合が可能になり、QMF for Workstation を実行しているデスクトップごとに JDBC ドライバーを配布する必要がなくなります。

QMF for Workstation ユーザーは、QMF ネットワーク・リポジトリ・サービスを実行する中央制御マシンを経由してリポジトリに接続できます。ネットワーク接続は、Web ベースのアプローチに似た機能を提供しますが、作動させるために Web アプリケーション・サーバーを必要としません。ネットワーク接続を使用するには、ネットワーク・リポジトリ・サービスを設定および開始する必要があります。

注: QMF for Workstation (クライアント) でネットワーク・リポジトリ接続を作成する場合は、ネットワーク・リポジトリ・サービス (サーバー) のバージョンは同じリリース・レベルでなければなりません。(クライアントとサーバー間の) リリース・レベルが一致しないと、ネットワーク・リポジトリ接続は機能しません。

ネットワーク・リポジトリ接続の作成を完成させるには:

手順

1. ネットワーク・リポジトリ・サービスを設定および開始します。
2. 「新しいリポジトリ接続の作成」ウィザードの 2 ページ目を開きます。
3. 「接続名」フィールドに、リポジトリ接続の名前を指定します。この名前は、「リポジトリ接続」ビューに表示されたときに、接続を識別するために使用されます。任意の名前を入力できますが、この接続情報が適用されるリポジトリを識別できる名前を使用することをお勧めします。
4. 「即時に接続」チェック・ボックスを選択すると、リポジトリにただちに接続されます。このチェック・ボックスが選択されていないと、接続情報が作成されて保存され、「リポジトリ接続」ビューに表示されますが、リポジトリへの即時接続は行われません。
5. ネットワーク・サービスを実行しているサーバー (またはワークステーション) の名前または IP アドレスを、「サーバー・ホスト」フィールドに指定します。
6. ネットワーク・サーバーの接続ポートを「ポート」フィールドに指定します。
7. 「最新表示」をクリックします。

指定したネットワーク・リポジトリ・サービス用の選択可能なリポジトリ接続が取り込まれます。使用するリポジトリ接続を使用可能なリポジトリ接続のリストから選択します。

8. 「終了」をクリックします。

作成したばかりのリポジトリ接続が「リポジトリ接続」ビューに表示されません。

「即時に接続」チェック・ボックスを選択した場合は、このリポジトリに接続されます。このリポジトリ接続情報は、接続設定ファイルに入力されます。

ネットワーク・リポジトリ・サービスの設定

QMF for Workstation ユーザーは、QMF のネットワーク・リポジトリ・サービスを実行する集中マシンを使用して共有リポジトリに接続できます。

このタスクについて

QMF のネットワーク・リポジトリ・サービスをセットアップするには、次のようにします。

手順

1. QMF for Workstation のインストール時に、*.jar ファイルはすべて API インストール・ディレクトリに配置されます。そのファイルをサーバー・マシン上の必要なディレクトリにコピーします。
2. 製品ライセンス・ファイルを、1 で参照されるサーバー・マシン上のディレクトリにコピーします。製品ライセンス・ファイルは、QMF for WebSphere または QMF for Workstation のインストール・ディレクトリ内の WEB-INF/config の下にあります。
3. repositories.xml ファイルと .bi.jdbc.drivers ファイルを、1 で参照されるサーバー・マシン上のディレクトリにコピーします。これらのファイルはインストール時に作成され、リポジトリ接続情報でリポジトリを構成し JDBC ドラ

イバーをセットアップしたときにデータが入れます。QMF for Workstation 管理者コンポーネントを使用する場合、このファイルは QMF for Workstation インストール・ディレクトリーにあります。QMF for WebSphere 管理者アプリケーションを使用する場合、このファイルは QMF for WebSphere インストール・ディレクトリーの WEB-INF/config にあります。

4. ネットワーク・リポジトリ・サービスを開始するには、次の行を 1 つのコマンドとして実行します。

```
java -cp CLASSPATH com.ibm.bi.qmf.core.repository.RepositoryService
PORT_NUMBER PATH_TO_REPOSITORIES.XML
```

ここで:

- CLASSPATH: ステップ 1 でサーバー上のディレクトリーにコピーされたファイルのロケーションが含まれています。
- PORT_NUMBER: ネットワーク・リポジトリ・サービスが作動するポート。これは、任意選択の空き TCP/IP ポートにすることができます。
- PATH_TO_REPOSITORIES.XML: repositories.xml および .bi.jdbc.drivers ファイルが入っているパスを指定します。省略すると、ファイルは現行ディレクトリーにあると想定されます。

コマンド行の例 (次の行を 1 つのコマンドとして発行します)。

```
java -cp "$qmf_jar_file_name.jar"
com.ibm.bi.qmf.core.repository.RepositoryService
8889
```

5. QMF for Workstation ユーザーは、マシン名と「ネットワーク・リポジトリ」接続情報で定義された指定ポートを使用して、ネットワーク・リポジトリ・サービスに接続します。

Web サービス・リポジトリ接続の作成

Web サービス・リポジトリ接続を作成することにより、ユーザーが HTTP または HTTPS 接続を使用して QMF for WebSphere Web サービス API を介して共有リポジトリに接続できるようにするための情報を設定します。

このタスクについて

Web ベースの接続を使用して、ワークステーションからデータベースに直接接続することなく共有リポジトリにアクセスできます。この方法を使用してリポジトリに接続することにより、中央サーバーにデータ・アクセスを統合できるため、QMF for Workstation を実行しているデスクトップごとに JDBC ドライバーを配布する必要がなくなります。

Web ベース接続は、QMF for WebSphere の組み込みリポジトリ Web サービスにより提供されます。この機能を使用可能にするには、QMF for WebSphere が WebSphere Application Server (WAS) インスタンスにデプロイされている必要があります。さらに、リポジトリ接続情報をこのバージョンの QMF for WebSphere で使用可能にされている必要があります。QMF for Workstation ユーザーは、QMF for WebSphere サーバーに対する URL およびポートを使用してリポジトリに接続します。

注: QMF for Workstation (クライアント) で Web リポジトリ接続を作成する場合は、Web リポジトリ・サービス (サーバー) のバージョンは同じリリース・レベルでなければなりません。(クライアントとサーバー間の) リリース・レベルが一致しないと、Web リポジトリ接続は機能しません。

Web サービス・リポジトリ接続の作成を完成させるには:

手順

1. QMF for WebSphere を WebSphere Application Server (WAS) インスタンスにデプロイし、1 つ以上の共有リポジトリを構成し、リポジトリごとに共有リポジトリ接続情報を設定します。
2. 「新しいリポジトリ接続の作成」ウィザードの 2 ページ目を開きます。
3. 「接続名」フィールドに、リポジトリ接続の名前を指定します。この名前は、「リポジトリ接続」ビューに表示されたときに、接続を識別するために使用されます。任意の名前を入力できますが、この接続情報が適用されるリポジトリを識別できる名前を使用することをお勧めします。
4. 「即時に接続」チェック・ボックスを選択すると、Web サービス・リポジトリにただちに接続されます。このボックスが選択されていないと、接続情報が作成されて保存され、「リポジトリ接続」ビューに表示されますが、リポジトリへの即時接続は行われません。
5. 「Web サーバー URL」フィールドに、Web サービス API をこの接続に使用する QMF for WebSphere のインスタンスを起動する URL を指定します。これは、QMF for WebSphere のインスタンスがデプロイされたときに作成された URL アドレスです。
6. 「最新表示」をクリックします。「Web サーバー URL」フィールドで指定した QMF for WebSphere のインスタンスに対して定義されている、使用可能なリポジトリ接続が取得されます。使用可能な接続のリストから、使用するリポジトリ接続を選択します。
7. 「終了」をクリックします。

作成したばかりのリポジトリ接続が「リポジトリ接続」ビューに表示されません。

「即時に接続」チェック・ボックスを選択した場合は、このリポジトリに接続されます。このリポジトリ接続情報は、接続設定ファイルに入力されます。

タスクの結果

現在は、QMF for WebSphere クライアントが開かれると、最後にアクセスされたリポジトリに接続します。QMF for WebSphere クライアントが開かれたときに使用されるリポジトリ接続を制御するための追加の接続 URL パラメーターが追加されています。

例:

`http://host:port/QMF/user?repository=MyConnection`

接続パラメーターが、無効な接続を指すと、システムは「リポジトリの切り替え」ウィンドウを開きます。ユーザー・パラメーターおよびパスワード・パラメーターを使用して、保護されたリポジトリ接続用のログオン情報を渡すことができます。

例:

```
http://host:port/QMF/  
user?repository=MyConnection&user=userLogin&password=userPassword
```

データ・ソースのログイン・マッピングの設定

ログイン・マッピングを使用すると、ユーザーは単一のユーザー ID とパスワードを使用して、リポジトリにログインし、そのリポジトリで構成された 1 つ以上のデータベース・データ・ソースへのアクセス権を取得することができます。

このタスクについて

ログイン・マッピングによって、管理者は、ユーザーがリポジトリにログインすれば、データベース・データ・ソースに特定な別のユーザー ID およびパスワードを指定しなくても、データ・ソースにアクセスできるように設定できます。ログイン・マッピングを設定することによって、ユーザーはデータベース・データ・ソースにアクセスするたびに常にログイン情報を再入力する必要がなくなり、各データベース・データ・ソースのためのログイン情報を知る必要がなくなります。

リポジトリに含めるデータ・ソースごとに、ログイン・マッピングを設定します。ログイン・マッピングは、保護されたリポジトリに配置されるデータ・ソースに対してのみ設定できます。保護されたリポジトリとは、「内部」、**「LDAP」**、または「データベース・ベース」のセキュリティー・オプションを使用して作成されたリポジトリです。Db2 データベース・ユーザーのログイン・マッピングをセットアップする場合、トラステッド・コンテキストが管理対象データ・ソース用に作成されていれば、トラステッド接続を使用できます。この場合、アプリケーションへの指定された接続はトラステッドと認識され、データベースは個々のユーザー資格情報を必要としません。

ユーザーに複数のログインが割り当てられている場合は、それぞれに優先度を指定する必要があります。この仕組みをよりよく理解するために、以下の点を考慮してください。

- ユーザー X は、グループ A およびグループ B という 2 つのグループのメンバーです。グループ A には、グループ A に割り当てられたすべてのユーザーにデータ・ソースに対する特定のレベルのアクセス権を付与するログイン・マッピング ID およびパスワードを割り当てました。グループ B には、グループ B に割り当てられたすべてのユーザーにデータベース・データ・ソースに対するより小さいレベルのアクセス権を付与するログイン・マッピング ID およびパスワードを割り当てました。ユーザー X は両方のグループのメンバーであるので、データ・ソースにアクセスするとき、どのログイン情報を使用すべきかがはっきりしません。このユーザーをグループ A とグループ B のどちらのメンバーとしてログインさせるのかという問題です。「優先順位」フィールドは、この問題を解決します。ログイン情報に優先順位の値を割り当てることができます。例え

ば、グループ A に優先順位の 10 を割り当て、グループ B に優先順位の 5 を割り当てます。その場合、両方のグループのメンバーであるユーザーがデータ・ソースにアクセスするとき、そのユーザーがメンバーとなっているグループの中で最高の優先順位のグループのログイン情報に基づいて、アクセス権が付与されます。この例では、それはグループ A となります。このシナリオでは、複数のグループに同じ優先順位の値を割り当てることができないことに注意してください。

- ユーザー X は、グループ A およびグループ B という 2 つのグループのメンバーです。ただし、ユーザー X は、データ・ソースに対して、どちらのグループに属する他のいずれのメンバーとも異なる独特なレベルのアクセス権を持つ必要があります。「優先順位」フィールドを使用して、この問題を解決できます。グループ B にログイン・マッピングのユーザー ID およびパスワードを割り当て、マッピング情報に優先順位の値の 5 を割り当てます。グループ A にログイン・マッピングのユーザー ID およびパスワードを割り当て、マッピング情報に優先順位の値の 10 を割り当てます。ユーザー X にはログイン・マッピングのユーザー ID およびパスワードを割り当て、マッピング情報に優先順位の値の 25 を割り当てます。ユーザー X がデータ・ソースにアクセスするとき、最高の優先順位の値を持つマッピング情報が使用されます。このシナリオでは、グループおよびそのグループのメンバーである個別のユーザーに、同じ優先順位の値を割り当てることができないことに注意してください。

以下のトピックでは、トラステッド接続を使用する場合と使用しない場合のログイン・マッピングのセットアップ方法について説明します。

トラステッド接続を使用しないログイン・マッピング

このトピックでは、トラステッド接続を使用しないログイン・マッピングのセットアップ手順について説明します。

このタスクについて

トラステッド・コンテキストを使用しないデータ・ソースのログイン・マッピングをセットアップするには、以下のようになります。

手順

1. 「リポジトリ」 または「リポジトリ・エクスプローラー」ビューでデータ・ソースを右クリックします。メニューから「プロパティ」を選択します。「プロパティ」ウィンドウが開きます。ツリーから「ログイン・マッピング」を選択します。ウィンドウの「ログイン・マッピング」ページが開きます。リポジトリに定義されているすべてのユーザーおよびグループが「データ・ソース・ログイン・リスト」にリストされます。このリストは、ユーザーまたはグループを定義していない場合は空になります。
2. Db2 データベースのログイン・マッピングをセットアップする場合は、「トラステッド接続を使用する」チェック・ボックスが選択解除されていることを確認してください。
3. ユーザーまたはグループのマッピングを設定するには、ユーザーまたはグループを選択し、リスト・ボックスの上にある「データ・ソース・ログインの編集」アイコンをクリックします。「データ・ソース・ログインの編集」ウィンドウが開きます。

4. データベース・データ・ソースにログインするときに使用されるユーザー ID を、「ログイン」フィールドに指定します。
5. データベース・データ・ソースにログインするときに使用されるパスワードを、「パスワード」フィールドに指定します。
6. パスワードを「パスワードの確認」フィールドに再入力して確認します。
7. このログイン情報に対する優先順位を「優先順位」フィールドに指定します。このフィールドには、任意の数値を入力できます。最低の優先順位を示す値は 1 です。「優先順位」の値を使用して、複数のグループのメンバーであるユーザーのために呼び出されるログイン・マッピング ID およびパスワードが決まります。優先順位について詳しくは、159 ページの『データ・ソースのログイン・マッピングの設定』を参照してください。
8. 「OK」をクリックします。選択されたユーザーまたはグループのデータ・ソース・ログイン情報は、以下のように「データ・ソース・ログイン」リストにリストされます。
 - 「ログイン・マッピング所有者」に、このログインを使用してデータ・ソースにアクセスするユーザーまたはグループの名前がリストされます。これは、「ユーザーおよびグループ」リスト・ボックスに表示される名前と同じです。
 - 「認証 ID」が、ユーザーまたはグループのデータ・ソースにアクセスするために使用するログイン・ユーザー ID を指定します。
 - 「優先順位」が、ログイン情報に割り当てられた優先順位を指定します。この優先順位の値によって、複数のグループのメンバーであるユーザーのためにどのログイン情報が呼び出されるかが決まります。

ログイン・マッピング情報を設定するユーザーまたはグループごとに、このプロセスを繰り返します。

9. 既存のデータ・ソース・ログイン情報を編集するには、「データ・ソース・ログイン・リスト」表からデータ・ソース・ログイン情報を選択して、リスト・ボックスの上にある「データ・ソース・ログインの編集」ボタンをクリックします。「データ・ソース・ログインの編集」ウィンドウが開きます。任意のフィールドを変更できます。「OK」をクリックして「データ・ソース・ログインの編集」ウィンドウを閉じます。
10. 既存のデータ・ソース・ログイン情報を削除するには、「データ・ソース・ログイン・リスト」表からデータ・ソース・ログインを選択して、リスト・ボックスの上にある「データ・ソース・ログインの除去」ボタンをクリックします。
11. 「OK」をクリックします。各ユーザーまたはグループに指定したログイン・マッピング・パラメーターがデータ・ソースに対して有効になります。リポジトリ内のデータ・ソースごとに、ログイン・マッピング情報を個別に設定する必要があります。

トラステッド接続を使用した Db2 データベースのログイン・マッピング

このトピックでは、トラステッド接続を使用したログイン・マッピングのセットアップ手順について説明します。

このタスクについて

Db2 データ・ソースに接続するユーザーのログイン・マッピングをセットアップする場合、トラステッド・コンテキストを使用できます。トラステッド・コンテキストは、データベースへの接続をトラステッド接続として使用できるかどうかを決定する、データベース管理者によって作成されるエンティティです。データベースでは、このようなトラステッド接続のユーザーを認証するために個々の資格情報は必要ありません。管理者が、管理するユーザー資格情報を多数持っている場合、トラステッド・コンテキストは非常に実用的です。トラステッド・コンテキストを使用するには、トラステッドとして認識される現行接続のトラステッド・コンテキストの作成時に使用されたシステム許可資格情報を指定します。トラステッド接続を介して作業するユーザーの場合、トラステッド・コンテキストで指定された認証 ID 属性を割り当てて、データベースに接続するときの特権を定義できます。

注: このオプションは、データ・ソース用に作成されたトラステッド・コンテキストがある場合にのみ使用できます。

トラステッド接続を使用してデータ・ソースのログイン・マッピングをセットアップするには、以下のようにします。

手順

1. 「リポジトリ」 または 「リポジトリ・エクスプローラー」 ビューでデータ・ソースを右クリックします。メニューから「プロパティ」を選択します。「プロパティ」ウィンドウが開きます。ツリーから「ログイン・マッピング」を選択します。ウィンドウの「ログイン・マッピング」ページが開きます。リポジトリに定義されているすべてのユーザーおよびグループが「データ・ソース・ログイン・リスト」にリストされます。このリストは、ユーザーまたはグループを定義していない場合は空になります。
2. 「トラステッド接続を使用する (Use trusted connections)」チェック・ボックスを選択します。「システム許可資格情報」ダイアログが開きます。
3. トラステッドとして認識される接続のシステム許可資格情報を入力します。「ID」フィールドに、トラステッド・コンテキストで指定した SYSTEM AUTHID を入力します。
4. 「OK」をクリックして「システム許可資格情報」ダイアログを閉じます。

注: 入力した情報が正しくない場合は、再試行を求めるエラー・メッセージが表示されます。

5. システム許可資格情報を編集するには、「システム許可資格情報の編集」ボタンをクリックします。
6. 認証 ID が割り当てられていない場合にリポジトリ・ログインを使用する場合は、「認証 ID が指定されていない場合はリポジトリ・ログインを使用する (Use repository login if Auth ID is not specified)」チェック・ボックスを選択します。
7. 認証 ID を割り当てるか、割り当てられた認証 ID を編集するには、「データ・ソース・ログイン・リスト」表でそれらを選択し、「ユーザー・アカウント情報の編集 (Edit user account information)」をクリックします。「ユーザー・アカウント情報」ウィンドウが開きます。

8. 「認証 ID」フィールドで、トラステッド・コンテキストによって提供されるリストから認証 ID を指定します。
9. 「優先順位」フィールドで、このログイン情報に適用される優先順位を指定します。このフィールドには、任意の数値を入力できます。最低の優先順位を示す値は 1 です。「優先順位」の値を使用して、複数のグループのメンバーであるユーザーのために呼び出される認証 ID が決まります。優先順位について詳しくは、159 ページの『データ・ソースのログイン・マッピングの設定』を参照してください。
10. 「OK」をクリックします。選択されたユーザーまたはグループのデータ・ソース・ログイン情報は、以下のように「データ・ソース・ログイン・リスト」表にリストされます。
 - 「ログイン・マッピング所有者」に、このログインを使用してデータ・ソースにアクセスするユーザーまたはグループの名前がリストされます。これは、「ユーザーおよびグループ」リスト・ボックスに表示される名前と同じです。
 - 「認証 ID」は、トラステッド接続が確立されるときに使用されるログインを指定します。

注: 認証 ID が指定されていない場合は、リポジトリ・ログインが使用されます。トラステッド・コンテキストでログインが見つからない場合、接続エラーが登録され、ユーザーはログオン・ダイアログに戻ります。

 - 「優先順位」が、ログイン情報に割り当てられた優先順位を指定します。この優先順位の値によって、複数のグループのメンバーであるユーザーのためにどの認証 ID が呼び出されるかが決まります。

トラステッド・コンテキストを使用してログイン・マッピング情報を設定するユーザーまたはグループごとに、このプロセスを繰り返します。
11. 既存のデータ・ソース・ログイン情報を削除するには、「データ・ソース・ログイン・リスト」表からデータ・ソース・ログインを選択して、リスト・ボックスの上にある「データ・ソース・ログインの除去」ボタンをクリックします。
12. 「OK」をクリックします。各ユーザーまたはグループに指定したログイン・マッピング・パラメーターがデータ・ソースに対して有効になります。リポジトリ内のデータ・ソースごとに、ログイン・マッピング情報を個別に設定する必要があります。

データ・オブジェクトへの Web リンクの作成

「Web リンク」ウィザードを使用して、QMF オブジェクトへの Web リンクを作成します。これらのリンクを使用して、Web ブラウザーでオブジェクトを直接開くことができます。

始める前に

QMF for Workstation を使用している場合、「Web リンク」ウィザードは、使用可能な Web サービス・リポジトリ接続がある場合のみ使用できます。

このタスクについて

データ・オブジェクトへの Web リンクを作成するには、以下のようにします。

手順

1. メインメニューから、「ファイル」 > 「新規」 > 「その他」 > 「Web リンク」を選択して、「Web リンク」ウィザードを起動します。

注: リポジトリ・ツリーのポップアップ・メニュー・オプション「Web リンクの作成」から、このウィザードにアクセスすることもできます。この方法を使用してウィザードにアクセスする場合は、「リポジトリ・オブジェクト」フィールドおよび「ユーザー定義パラメーター」は自動的に事前入力されます。

2. 「リポジトリ・オブジェクト」フィールドから、Web リンクの作成先のオブジェクトを選択します。
3. 以下の「事前定義されたパラメーター」の設定を指定します。

- 「ツールバー」チェック・ボックスは、ツールバーを表示するか非表示にするかを示します。
- 「実行」チェック・ボックスは、オブジェクトが開かれたときにそのオブジェクトを実行するかどうかを示します。
- 「環境」チェック・ボックスは、オブジェクトを実行する際にデフォルトの環境を使用するかどうかを示します。

デフォルト環境以外の環境を使用する場合は、このチェック・ボックスを選択し、環境のリストから該当する環境を選択します。

- ビジュアル報告書の場合は、「レンダラー・モード」チェック・ボックスが選択可能です。これは、ビジュアル報告書がレンダリングされるモードを決定します。
4. 選択したリポジトリ・オブジェクトのパラメーターを表すには、「ユーザー定義パラメーター」を指定します。

「URL に組み込む」チェック・ボックスを選択することにより、生成された URL にパラメーターを追加できます。

「ツールバー」チェック・ボックスを選択する場合、URL の形式は次のようになります。

```
http://{host}:{port}/{app_context}/g?object_name&param1=value1
```

「ツールバー」チェック・ボックスをクリアする場合、ビジュアル・ダッシュボード向けの URL の形式は次のようになります。

```
http://{host}:{port}/{app_context}/go?object_name&param1=value1
```

5. 「次へ」をクリックして、「Web リンク」ウィザードの 2 ページ目を表示します。

そのページで、データ・ソースを追加できます。「データ・ソースの追加」ボタンおよび「データ・ソースの削除」ボタンを使用して、データ・ソースのリストを編集します。「ログイン」フィールドおよび「パスワード」フィールドに、追加するデータ・ソースのログインおよびパスワードを入力できます。

「**Web** リンク名」フィールドに、URL とブラウザのタブ・タイトルで使用する現行オブジェクトの名前を入力します。

例えば、「**Web** リンク名」フィールドで **NEW_OBJECT_NAME** を指定し、「ツールバー」チェック・ボックスにチェック・マークを付けると、次の URL が生成されます。

```
http://{host}:{port}/{app_context}/g?NEW_OBJECT_NAME
```

「ツールバー」チェック・ボックスがクリアされているときの URL は次のようになります。

```
http://{host}:{port}/{app_context}/go?NEW_OBJECT_NAME
```

「**Web** リンク名」フィールドを使用して、リンク名を変更することができます。

「**Web** リンク名」フィールドを空のままにしておくと、新しい名前が自動的に作成されます。

6. 「作成」をクリックして、Web リンクを生成します。

指定されたリンク名が存在する場合は、名前変更するか、「**Web** リンク名」フィールドを空のままにしておいて名前を自動作成する必要があります。

7. 「**Web** リンクを開く」をクリックして、作成した Web リンクをブラウザで開きます。
8. 「終了」をクリックして、「**Web** リンク」ウィザードを閉じます。

注:

第 17 章 構成済みアプリケーションの配布

十分に構成された操作可能なアプリケーションをユーザーに配布する作業は、アドミニストレーターが行います。

これを行うためには、アドミニストレーターは、アプリケーション実行可能ファイル、JDBC JAR ファイル、データが設定された JDBC ドライバー情報ファイル、およびデータが設定されたリポジトリ接続情報ファイルを、QMF for Workstation が実行されている各マシン、および QMF for WebSphere が実行されている各サーバー (またはワークステーション) から使用できるようにする必要があります。

第 18 章 構成データをユーザーにエクスポート

QMF 管理者は、アプリケーションの実行可能ファイル、JDBC JAR ファイル、データが追加された JDBC ドライバー情報ファイル、およびデータが追加されたリポジトリ接続情報ファイルが、QMF for Workstation が実行されている各マシン、および QMF for WebSphere が実行されている各サーバー (またはワークステーション) で使用可能にしておく責任を持ちます。

このタスクについて

以下の手順は、QMF 構成をユーザーが使用できるようにするための最も簡素化されたプロセスを示しています。

手順

1. 以下の場所で JDBC JAR ファイルが使用可能であることを確認します (JDBC ドライバー・ファイルのロケーションが各マシンで同じであることが前提です)。
 - 直接データベース接続を使用してリポジトリおよびデータ・ソースに直接接続する QMF for Workstation を実行中の各マシン。
 - 直接データベース接続を使用してリポジトリおよびデータ・ソースに直接接続する QMF for WebSphere を実行中の各サーバー (ワークステーション)。
2. QMF for Workstation インストール用実行可能ファイルを、すべてのユーザーが使用可能なディレクトリーに配置します。
3. QMF for Workstation 管理パースペクティブを使用して、共有リポジトリおよびデータベース・データ・ソースへの接続に使用される各タイプの JDBC ドライバーに関する JDBC ドライバー・ロケーション情報を指定します。
.bi.jdbc.drivers ファイルが自動的に更新されます。 JDBC ドライバー情報ファイル (.bi.jdbc.drivers) を、QMF for Workstation インストール用実行可能ファイルと一緒に配置します。
4. QMF for Workstation 管理パースペクティブを使用して、1 つ以上の共有リポジトリに接続するために必要な情報を指定します。 repositories.xml ファイルが自動的に更新されます。接続設定ファイル (repositories.xml) を、QMF for Workstation インストール用実行可能ファイルと一緒に配置します。
5. QMF for Workstation のサイレント・インストールを設定できます。サイレント・インストールは、ユーザーの介入なしで自動的に実行されます。ユーザーがインストールを監視したりダイアログ・ボックスで入力したりする必要はありません。管理者はサイレント・インストールを使用して、どの機能をユーザー・マシンにインストールするかを制御できます。サイレント・インストールをセットアップするには、サイレント・インストールのオプション・ファイルを作成し、サイレント・インストール・パラメーターが含まれるように実行可能ファイルの名前を変更し、そのファイルを QMF for Workstation インストール用実行可能ファイルとともに配置します。

6. これで、QMF for Workstation ユーザーは、実行可能ファイルを実行してアプリケーションをインストールできます。リポジトリ接続情報および JDBC ドライバー情報は、ユーザーのマシン上に自動的に設定されます。アプリケーション実行可能ファイルにサイレント・インストールのパラメーターが指定されている場合、ユーザーはダイアログ・メッセージに応答する必要がありません。ユーザーが実行可能ファイルを実行する代わりに、管理者は配布ソフトウェアを使用して各ユーザー・マシン上での QMF for Workstation のインストールを完成させることもできます。
7. QMF for WebSphere の各インスタンスを最新のリポジトリ接続および JDBC ドライバー情報で更新するには、以下のいずれかを行うことができます。
 - QMF for WebSphere を実行しているワークステーションまたはサーバーのホーム・ディレクトリーにある、リポジトリ接続ファイル (repositories.xml) および JDBC ドライバー情報ファイル (.bi.jdbc.drivers) をドロップします。これにより、リポジトリ接続および JDBC ドライバー情報が、その QMF for WebSphere アプリケーションの各ユーザーに使用可能になります。
 - QMF for Workstation を使用して、リポジトリ接続設定ファイル (repositories.xml)、JDBC ドライバー情報ファイル (.bi.jdbc.drivers)、およびオプションで JAR ドライバー・ファイルを一般的なロケーションにエクスポートします。エクスポート・ファイルの名前は settings.zip です。QMF for WebSphere アドミニストレーターを使用して、設定ファイルをインポートします。リポジトリ接続および JDBC ドライバー情報は、QMF for WebSphere を実行しているサーバー (ワークステーション) 上で更新されます。

タスクの結果

QMF 構成データがユーザーにエクスポートされました。これで、ユーザーは製品を使用し始めることができます。

次のタスク

リポジトリ接続や JDBC 情報ファイルは更新されるたびに、QMF for Workstation のすべてのユーザー、および QMF for WebSphere が実行されているすべてのサーバー (またはワークステーション) に再配布されなければなりません。

製品のサイレント・インストール

サイレント・インストールは、ユーザーの介入なしで自動的に実行されます。ユーザーはインストールをモニターしたりダイアログ・ボックスで入力したりする必要はありません。管理者はサイレント・インストールを使用して、どの機能をユーザー・マシンにインストールするかを制御できます。サイレント・インストールをセットアップするには、サイレント・インストール・オプション・ファイルを作成し、そのファイルを QMF for Workstation インストール実行可能ファイルと同じディレクトリー内に配置する必要があります。

このタスクについて

製品をサイレント・インストールするには、以下のトピックを参照してください。

応答ファイルの作成

QMF for Workstation のサイレント・インストールを実行するには、すべてのインストール・オプションが指定された応答ファイルを作成する必要があります。このファイルでは、インストール対象のフィーチャーとインストール・パスがすべて指定されなければなりません。

このタスクについて

応答ファイルを作成するには、以下のようにします。

手順

1. コマンド行でインストール・コマンドを実行します。

- 現行ディレクトリーにインストールを行う Windows の例を以下に示します。

```
setupwin32.exe -r installer.properties
```

または

```
setupwin64.exe -r installer.properties
```

`-r` はインストール・ソフトウェアが記録モードで実行されるように指定します。

- カスタム・ディレクトリーにインストールを行う Windows の例を以下に示します。

```
setupwin32.exe -r C:%drive_path%response_file.properties
```

または

```
setupwin64.exe -r C:%drive_path%response_file.properties
```

それぞれの意味は次のとおりです。

- `-r` はインストール・ソフトウェアが記録モードで実行されるように指定します。
- `C:%drive_path%response_file.properties` は作成対象の応答ファイルへのパスを指定します。

2. インストールを進めながら、この実行可能ファイルを実行する各ユーザーがそれぞれのマシンにインストールするフィーチャーを選択します。

3. インストールが完了すると、インストール中に指定したディレクトリーにアプリケーションがインストールされます。

タスクの結果

応答ファイルが作成され、現行ディレクトリーや、パスで指定されたディレクトリーに保存されます。

次のタスク

ソフトウェアのインストール先のユーザー・マシンに対象ファイルを配布してサイレント・インストールを実行します。

サイレント・インストールの実行

QMF for Workstation のサイレント・インストールを実行するには、アプリケーションのインストール先となる各ユーザー・マシンに応答ファイルを配布します。

始める前に

応答ファイルが必要です。

このタスクについて

サイレント・インストールを実行するには、以下のようにします。

手順

1. オプション: JDBC、リポジトリ・ストレージ、リポジトリ接続、およびライセンス情報をユーザー・インストールに組み込む場合は、リポジトリ接続ファイル (repositories.xml)、JDBC ドライバー・ファイル (.bi.jdbc.drivers)、ライセンス・ファイル (*.lic)、およびストレージ・ファイル (.storage) をアプリケーション・ホーム・ディレクトリーから、インストール実行可能ファイルが保管されているディレクトリーにコピーします。
2. サイレント・モードの準備を行うために、応答ファイル名を installer.properties に変更し、それを setupwin32.exe または setupwin64.exe とともに同じディレクトリーに配置します。コマンド行を使用して以下の Windows OS 用の引数を渡します。

```
setupwin32.exe -i silent
```

または

```
setupwin64.exe -i silent
```

それぞれの意味は次のとおりです。

- -i silent: これはインストール・ソフトウェアがサイレント・モードで実行されるように指定します。

注: インストール実行可能ファイルが保管されているディレクトリーとは別のディレクトリーに保管されている応答ファイルを使用する場合は、その応答ファイルへの絶対パスを引数で指定します。

```
setupwin32.exe -i silent -f C:%drive_path%response_file.properties
```

または

```
setupwin64.exe -i silent -f C:%drive_path%response_file.properties
```

タスクの結果

インストールがサイレント・インストールになります。ユーザーに通知が行われることなく製品ディレクトリーが作成されます。

JDBC ドライバーと接続情報のエクスポートおよびインポート

QMF 管理者は、repositories.xml ファイル、.bi.jdbc.drivers ファイル、およびオプションで JAR ドライバー・ファイルをエクスポートしてから、settings.zip ファイルまたは settings.xml ファイルをインポートすることにより、リポジトリ接続および JDBC ドライバーの情報を配布できます。

このタスクについて

リポジトリ接続および JDBC ドライバー情報をエクスポートしてからインポートするには、以下のようにします。

手順

1. リポジトリ接続の repositories.xml ファイルおよび JDBC ドライバー情報の .bi.jdbc.drivers ファイルに、データを設定します。
2. 「ファイル」 > 「エクスポート」を選択して、「エクスポート」ウィンドウを開きます。選択可能なエクスポート先のリストから「接続および JDBC ライブラリー設定」を選択します。
3. 「次へ」をクリックします。ウィザードの「エクスポート接続および JDBC ライブラリー設定」ページが開きます。
4. settings.zip という名前の単一のファイルがエクスポートされます。QMF for Workstation を使用している場合、「設定ファイル」フィールドに settings.zip ファイルを保存する場所を指定します。「参照」を使用して、すべてのユーザーがアクセスできるディレクトリーを探することができます。
5. エクスポートされた設定ファイルに組み込みたい接続情報を選択します。現在定義されているすべてのリポジトリ接続は、「リポジトリ接続」リスト・ボックスにリストされます。出力ファイルに含める接続の各チェック・ボックスを選択します。
6. 定義したすべての JDBC ドライバー・ライブラリーは、「JDBC ライブラリー」リスト・ボックスにリストされます。出力ファイルに含める JDBC ドライバー・ライブラリーの各チェック・ボックスを選択します。
7. オプション: 選択した JDBC ドライバーに関連付けられている JAR ファイルをエクスポートする場合は、「JAR ファイルのエクスポート (Export JAR files)」チェック・ボックスを選択します。
8. 「終了」をクリックします。QMF for WebSphere を使用している場合、Web ブラウザーは自動的に settings.zip ファイルをダウンロードします。QMF for Workstation を使用している場合、ウィザードの「エクスポート接続および JDBC ライブラリー設定」ページが閉じます。ファイルは「設定ファイル」フィールドで指定したロケーションにエクスポートされます。
9. 別のマシンまたはサーバー上にインストールされた QMF のインスタンスごとに、「ファイル」 > 「インポート」を選択して、リポジトリ接続および JDBC ドライバー情報のファイルをインポートします。「インポート」ウィンドウで、「接続および JDBC ライブラリー設定」を選択します。ウィザードの「接続および JDBC ライブラリー設定のインポート」ページが開きます。

注: リポジトリ接続および JDBC ドライバー情報ファイルは、ZIP 形式でも XML 形式でもインポートできます。以前のバージョンの QMF では、リポジ

トリー接続および JDBC ドライバー情報ファイルは XML 形式でエクスポートされたため、これは後方互換性フィーチャーとして意図されています。

10. 「設定ファイル」フィールドに、`settings.zip/settings.xml` ファイルを検出する場所を指定します。「参照」を使用して、ファイルを見つけることができます。
11. 「リポジトリ接続」チェック・ボックスを選択すると、`settings.zip/settings.xml` ファイルに含まれているリポジトリ接続をインポートします。
12. 「JDBC ライブラリー設定」チェック・ボックスを選択すると、`settings.zip/settings.xml` ファイルに含まれている JDBC ドライバー情報をインポートします。
13. 「ドライバー・ファイル」チェック・ボックスを選択すると、`settings.zip` ファイルに含まれている JAR ファイルをインポートします。次に、インポートしたドライバー・ファイルを保存するフォルダーを指定します。
14. 「矛盾の解決」ラジオ・ボタンを使用して、以前の設定ファイルとの競合を解決する方法を指定します。すべての矛盾する情報を新しい情報に置き換えるには、「既存の設定をオーバーライド」を選択します。既存の情報を新しい情報で更新しない場合は、「既存の設定を保持」を選択します。「矛盾」ウィンドウを開くには、「手動で矛盾を解決」を選択します。このダイアログで、既存の設定情報と新しい設定情報の間の競合を手動で解決します。矛盾ごとに、現在の設定を上書きするか、そのまま保持するかを指定できます。
15. 「終了」をクリックします。「接続および JDBC ライブラリー設定のインポート」ウィンドウが閉じます。リポジトリ接続設定および JDBC ドライバー情報ファイルは、QMF for Workstation を実行している現在のマシン、および QMF for WebSphere を実行している現在のサーバー (またはワークステーション) 用に更新されます。JDBC ドライバー情報またはリポジトリ接続情報が更新されるたびに、このプロセスを繰り返すことができます。

更新スクリプトのエクスポート

製品の更新をインストールする場合にすべてのリポジトリ・ストレージと QMF カタログに製品の更新を適用するには、「更新スクリプトのエクスポート」フィーチャーを使用します。

このタスクについて

「更新スクリプトのエクスポート」フィーチャーで生成されたスクリプトにより、表構造を更新したり、パッケージを再バインドしたり、ストアド・プロシージャを再作成したりするプロセスが自動化されます。

このフィーチャーで生成される DDL スクリプトの行の最大長は、「一般設定」ページの「行幅」フィールドで設定されている値によって決定します。詳しくは、ユーザー・ヘルプの『一般設定』を参照してください。

新たにインストールされた製品バージョンで更新スクリプトを生成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. メインメニューから「ファイル」 > 「エクスポート」を選択し、「更新スクリプトのエクスポート」を選び、「次へ」をクリックします。

「ストレージ更新スクリプトのエクスポート」ウィザードが開きます。

2. 「リポジトリ・ストレージ」表で、更新するリポジトリ・ストレージを選択します。場合によっては、「すべて選択」ボタンや「選択をすべて解除」ボタンを併用することで選択を楽に行えます。
3. 「設定」ペインでリポジトリ・ストレージに対して以下の設定を指定します。(選択したすべてのストレージに同じ設定を使用します。)
 - 保護のために使用する項目: ストアード・プロシージャまたは保護のために使用する項目: 静的 SQL パッケージ: 新たにインストールされたバージョンの製品用の保護方式を設定します。
 - パッケージの集合 ID: 更新するパッケージの集合 ID を設定します。
 - パッケージの所有者 ID: デフォルトを変更する必要がある場合に、更新するパッケージの所有者 ID を設定します。
 - パッケージに対する許可の付与先: 許可を付与する対象となる特定のユーザーおよびグループを指定します。ユーザーおよびグループはコンマで区切る必要があります。
 - データベース・ユーザー名: データベースへのアクセスに使用されるユーザー名を設定します。
 - データベース・パスワード: データベースへのアクセスに使用されるパスワードを設定します。
4. 「次へ」をクリックします。
5. 「QMF カタログ」テーブルで、更新する QMF カタログを選択します。場合によっては、「すべて選択」ボタンや「選択をすべて解除」ボタンを併用することで選択を楽に行えます。

デフォルトで、「リポジトリ・ストレージ」ウィザード・ページ上の設定がすべて「QMF カタログ」ページ上で複製されます。

- 保護のために使用する項目: ストアード・プロシージャまたは保護のために使用する項目: 静的 SQL パッケージ: 新たにインストールされたバージョンの製品用の保護方式を設定します。
 - パッケージの集合 ID: 更新するパッケージの集合 ID を設定します。
 - パッケージの所有者 ID: デフォルトを変更する必要がある場合に、更新するパッケージの所有者 ID を設定します。
 - パッケージに対する許可の付与先: 許可を付与する対象となる特定のユーザーおよびグループを指定します。ユーザーおよびグループはコンマで区切る必要があります。
 - データベース・ユーザー名: データベースへのアクセスに使用されるユーザー名を設定します。
 - データベース・パスワード: データベースへのアクセスに使用されるパスワードを設定します。
6. 「終了」をクリックして、リポジトリ・ストレージおよび QMF カタログを更新するファイルを生成します。

以下のファイルが生成されて、任意のディレクトリーに保管されます。

- データベース更新 SQL (.ddl ファイル)
- パッケージ・インストール・プロパティ (.bndtask) ファイル
- パッケージ・インストール・スクリプト (bind.bat および bind.sh)
- リポジトリ接続構成ファイル (repositories.xml)

このファイルは、製品の既存のインストール済み環境および更新されたインストール済み環境の構成を更新します。

注: エラーを避けるため、.ddl スクリプトは最初に実行する必要があります。
.ddl ファイル名と .bndtask ファイル名は以下のフォーマットで生成されます。

- <host>_<port>_<database>_repository.ddl
- <host>_<port>_<database>_repository.bndtask

第 19 章 リポジトリ・オブジェクトを使用するためのユーザーおよびグループ許可の割り当て

ユーザーおよびグループのセキュリティー許可レベルを割り当て、リポジトリおよびリポジトリ内の任意のオブジェクトに対するアクセスを制御できます。

このタスクについて

ユーザーおよびグループのセキュリティー許可レベルは、保護されたリポジトリ (内部または LDAP セキュリティーを設定して作成されたリポジトリ) についてのみ割り当てることができます。許可レベルは、例えば、ディレクトリー、フォルダー、ワークスペースおよび個別の照会および報告書オブジェクトなどを含む、リポジトリ内にリストされる任意のオブジェクトに対して適用できます。

QMF 管理者として識別されたユーザーだけが、セキュリティー許可レベルをユーザーおよびグループに割り当てることができます。また、完全な許可特権を付与されているユーザーは、オブジェクトに適用された許可を変更することができます。

ユーザーおよびグループにリポジトリ・オブジェクトを使用するためのさまざまなレベルの許可を割り当てるには:

手順

1. 「リポジトリ」ビュー、「リポジトリ・エクスプローラー」ビュー、または「ワークスペース」ビューにリストされた任意のリポジトリ・オブジェクトを右クリックします。ポップアップ・メニューで「プロパティー」を選択します。「プロパティー」ウィンドウが開きます。サイドバーから「セキュリティー」を選択します。ウィンドウの「セキュリティー」ページが開きます。
2. このリポジトリを使用する許可を付与されたユーザーまたはグループはそれぞれ、「グループ名またはユーザー名」リストにリストされます。ユーザーとグループを追加するには、「追加」ボタンをクリックします。「ユーザーまたはグループの選択」ウィンドウが開きます。
3. ユーザーおよびグループのそれぞれに、選択されたリポジトリ・オブジェクトに対する各種レベルの許可を割り当てることができます。使用可能な許可のレベルは、「許可」リストにリストされます。あるレベルの許可を割り当てるには、グループまたはユーザーを選択し、割り当てる許可のレベルに対応するチェック・ボックスにチェック・マークを付けます。次のような選択肢があります。
 - 「すべて」: すべての機能 (編集、表示、参照、および削除) をリポジトリ・オブジェクトに実行する許可をユーザーまたはグループに付与します。また、完全な許可があると、ユーザーはリポジトリ・オブジェクトに割り当てられた許可を変更できます。
 - 「編集」: リポジトリ・オブジェクトの変更、表示、および参照を実行する許可をユーザーまたはグループに付与します。
 - 「参照」: リポジトリ・オブジェクトの内容を表示する許可をユーザーまたはグループに付与します。例えば、リポジトリ内のディレクトリーに対

するブラウザ特権により、ユーザーはディレクトリー内にあるものを表示できます。照会オブジェクトに対するブラウザ特権により、ユーザーは照会オブジェクトを開いて実行できます。

- 表示: リポジトリー内にリストされたリポジトリー・オブジェクトを表示する許可をユーザーまたはグループに付与します。例えば、リポジトリー内のディレクトリーに対する表示特権により、ユーザーはディレクトリーの表示だけができます。ディレクトリーを開いたり、ディレクトリーの内容を表示することはできません。照会オブジェクトに対する表示特権により、ユーザーはオブジェクトのみを表示できます。ユーザーはオブジェクトを開いたり、実行することはできません。
 - 「なし」: ユーザーまたはグループに、リポジトリーに含まれるリポジトリー・オブジェクトを表示する許可を拒否します。
4. 選択したレベルの許可を、その許可が適用されているオブジェクトの下にあるすべてのフォルダーとオブジェクトに適用するには、「許可を子フォルダーとオブジェクトに適用」をクリックします。
 5. ユーザーまたはグループから許可を除去するには、「グループ名またはユーザー名」リストからユーザーまたはグループを選択します。「除去」をクリックします。ユーザーまたはグループがリストから除去されます。
 6. 「適用」をクリックします。
 7. 「OK」をクリックします。

リポジトリー・オブジェクトへのアクセスを許可されるユーザーおよびグループの選択

リポジトリー・オブジェクトへのアクセスを許可されるユーザーおよびグループを選択する必要があります。

このタスクについて

リポジトリー・オブジェクトにアクセスを許可されたユーザーおよびグループを選択するには:

手順

1. 「リポジトリー」ビュー、「リポジトリー・エクスプローラー」ビュー、または「ワークスペース」ビューにリストされた任意のリポジトリー・オブジェクトを右クリックします。ポップアップ・メニューで「プロパティ」を選択します。「プロパティ」ウィンドウが開きます。ツリーから「セキュリティ」を選択します。ウィンドウの「セキュリティ」ページが開きます。「追加」をクリックします。「ユーザーまたはグループの選択」ウィンドウが開きます。
2. 割り当てに使用できるユーザーおよびグループは、「グループ名またはユーザー名」リスト・ボックスにリストされます。これらは、「内部」リポジトリー・セキュリティを選択した場合は「ユーザーおよびグループ」ビューを使用して指定したユーザーおよびグループであり、「LDAP」リポジトリー・セキュリティを選択した場合は LDAP サーバーから取得したユーザーおよびグループです。
3. リストされるユーザーとグループをフィルター処理するには、以下を行います。
 - 「名前フィルター」フィールドを使用します。

- 「ユーザーを表示」チェック・ボックスのチェック・マークを外します。グループのみがリストされます。
 - 「グループを表示」チェック・ボックスのチェック・マークを外します。ユーザーのみがリストされます。
4. ユーザーまたはグループを選択し、このリポジトリ・オブジェクトの使用権限を付与するには、「グループ名またはユーザー名」リスト・ボックスからユーザーまたはグループを選択し、「右へ移動 (>>)」アイコンをクリックします。ユーザーまたはグループが、「選択済みオブジェクト」リスト・ボックスにリストされます。
 5. ユーザーまたはグループを「選択済みオブジェクト」リスト・ボックスから除去するには、「左へ移動 (<<)」アイコンをクリックします。
 6. 「OK」をクリックします。「ユーザーまたはグループの選択」ウィンドウが閉じます。「選択済みオブジェクト」リスト・ボックスに移動したユーザーまたはグループは、リポジトリ・オブジェクトにアクセス可能なユーザーおよびグループとして追加されます。そのユーザーまたはグループは「プロパティ」ダイアログの「グループ名またはユーザー名」リスト・ボックスにリストされます。

第 20 章 データベース・ベースのセキュリティに関するユーザーとグループの管理許可を割り当てる

データベース・ベースのセキュリティでは、ホスト・データベースのセキュリティ設定が取得され、その設定が共有リポジトリの保護に使用されます。

始める前に

必ず RSBI オブジェクトに対して操作を行ってください。

このタスクについて

QMF は、ユーザーに管理者許可があるかどうかを判別するために、RSBI.ADMIN_VIEW の内容を要求し、次の SQL ステートメントを実行します。

```
SELECT COUNT(*) FROM RSBI.ADMIN_VIEW WHERE AUTHID=:OWNER
```

OWNER はユーザー・ログインです。このステートメントから、0 より大きい値が返される場合、そのユーザーはリポジトリ管理者です。

共有リポジトリのデータベース・ベース・セキュリティには SYSADM 権限 (Db2) および DBA 権限 (Oracle) が必要です。この権限がないユーザーはリポジトリを管理できません。

Db2 データベースに関しては、RSBI.AUTHID_TABLE にユーザーおよびグループ (グループに SYSADM 権限がある場合) の PRIMARY_IDs と SECONDARY_IDs のペアを追加できます。

タスクの結果

ADMIN_VIEW には、SYSIBM.SYSUSERAUTH から取得されたリストが、AUTHID_TABLE から取得された PRIMARY_IDs とともに含まれています。また、SYSIBM.SYSUSERAUTH から取得されたリストには SECONDARY_IDs も含まれています。

例

各種サーバー・タイプでの QMF 許可プロセスを以下に例示します。

DB2 for iSeries

```
CREATE VIEW "RSBI"."ADMIN_VIEW" (  
  "AUTHID")  
AS  
SELECT "AUTHID"  
FROM "RSBI"."ADMIN_TABLE"
```

Db2 LUW

```
CREATE VIEW "RSBI"."ADMIN_VIEW" (  
  "AUTHID")  
AS  
SELECT A."GRANTEE" AS "AUTHID"  
FROM "SYSIBM"."SYSDBAUTH" A  
WHERE A."DBADMAUTH" = 'Y'  
UNION
```

```

SELECT A."PRIMARY_ID" AS "AUTHID"
FROM "RSBI"."AUTHID_TABLE" A
INNER JOIN
"SYSIBM"."SYSDBAUTH" B ON
B."GRANTEE" = A."SECONDARY_ID"

```

DB2 for z/VM

```

CREATE VIEW "RSBI"."ADMIN_VIEW" (
"AUTHID")
AS
SELECT A."NAME" AS "AUTHID"
FROM "SQLDBA"."SYSUSERLIST" A
WHERE A."AUTHOR" = ''
AND A."DBAAUTH" = 'Y'
UNION
SELECT A."PRIMARY_ID" AS "AUTHID"
FROM "RSBI"."AUTHID_TABLE" A
INNER JOIN
"SQLDBA"."SYSUSERLIST" B ON
B."NAME" = A."SECONDARY_ID"

```

Oracle

```

CREATE VIEW "RSBI"."ADMIN_VIEW" (
"AUTHID")
AS
SELECT A."GRANTEE" AS "AUTHID"
FROM "SYS"."DBA_ROLE_PRIVS" A
WHERE A."GRANTED_ROLE" = 'DBA'

```

第 21 章 QMF サーバー・オブジェクト・ノードへのオブジェクトの公開

QMF サーバーで使用可能なオブジェクトは、QMF 内で、オブジェクトのリポジトリ・ツリーの **QMF** サーバー・オブジェクト・ノードから表示できます。「QMF サーバーへの公開 (Publish to QMF Server)」ウィザードを使用して、**QMF** サーバー・オブジェクト・ノードにオブジェクトを追加 (公開) できます。

このタスクについて

1 つ以上のオブジェクトをオブジェクトのリポジトリ・ツリーの **QMF** サーバー・オブジェクト・ノードに公開するには、以下のステップを実行します。

手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」ビューで、公開するオブジェクトを選択し、選択項目を右クリックして、メニューから「**QMF** サーバーへの公開 (**Publish to QMF Server**)」を選択します。

制約事項: 現在、以下のオブジェクトを公開できます。

- 分析照会
- 複合 dynamart
- dynamart
- 予測
- 表
- 仮想表
- ビジュアル照会

プロンプトのあるオブジェクトは、**QMF** サーバー・オブジェクト・ノードに公開できないことに注意してください。

「QMF サーバーへの公開 (Publish to QMF Server)」ウィザードが開きます。

2. ウィザードで、公開するオブジェクトが「現在の表 (**Current table**)」リストから選択されていることを確認します。
3. 「新規名」フィールドに、オブジェクトが公開されたときに取得する名前を指定します。
4. 「フィールド定義」領域で、公開するオブジェクトの結果セットの構造を編集できます。
 - 列または計算列を結果セットに追加するには、「列の追加」をクリックし、リストから列を選択するか、式を入力します。
 - 結果セットから列を削除するには、「列の削除」をクリックします。
 - 結果セットの行を再配列するには、位置変更する行を選択し、「上へ移動」または「下へ移動」をクリックします。
5. 「次へ」をクリックします。

6. ウィザードの「データ・ソースのユーザー名とパスワードの指定」ページで、オブジェクトが使用するデータ・ソースを指定します。
 - データ・ソースをリストに追加するには、「データ・ソースの追加」をクリックします。
 - データ・ソースをリストから削除するには、「データ・ソースの削除」をクリックします。
 - 「ログイン」フィールドと「パスワード」フィールドに、追加するデータ・ソースのユーザー資格情報を指定します。
7. 「終了」をクリックします。

第 22 章 クイック・スタート・ウィザードを使用した JDBC ドライバーの構成およびリポジトリへの接続

QMF クイック・スタート・ウィザードを実行して、リポジトリを構成し、データベースに接続できます。

このタスクについて

QMF クイック・スタート・ウィザードは、JDBC ライブラリーを定義し、リポジトリに接続してデータ・ソースを追加することにより、データに接続するように QMF を構成します。

機能する QMF 環境を個人的に使用するために必要な時間を最小限に抑えるには、クイック・スタート・ウィザードの実行が適しています。

クイック・スタート・ウィザードは、作業用の実動構成を作成するための JDBC ドライバーおよびデータ・ソースの使用経験がほとんどないユーザーに最適です。

手順

1. メニュー・バーから、「ヘルプ」 > 「クイック・スタート」を選択します。

「クイック・スタート・ウィザードへようこそ (Welcome to the Quick Start Wizard)」ページが開きます。「次へ」をクリックします。
2. 「JDBC ライブラリーの定義 (Define JDBC libraries)」ページで、以下を実行します。
 - 提供されるリストに JDBC ドライバーを追加しない場合は、「次へ」をクリックします。
 - 特定のドライバーの JAR ファイルを追加する場合は、「ドライバーの JAR ファイルを含むディレクトリーの選択 (Select directory with driver's JAR files)」アイコンをクリックし、関連ファイルを含むディレクトリーを選択して、「OK」をクリックします。

JDBC ライブラリーは、特定の JDBC ドライバーに関する情報を提供します。ドライバーへのパス、JDBC URL、およびサポートされるプロパティのリストを定義します。詳しくは、45 ページの『JDBC 設定』を参照してください。

3. 「リポジトリ接続」ページで、以下を実行します。
 - 「サーバー」リストから、リポジトリ接続を表示する QMF サーバーを選択するか、「ローカル」を選択してローカル・マシンで使用可能なリポジトリ接続を表示します。

注: QMF サーバー ベースのリポジトリ接続を使用できるのは、QMF レジストリー クライアント用に構成された QMF のインスタンスがある場合のみです。

- 接続先のリポジトリを右クリックし、接続を確立して、「次へ」をクリックします。

- 「リポジトリへの新規接続の作成 (**Create new connection to Repository**)」アイコンをクリックして、147 ページの『第 16 章 QMF 用のリポジトリ接続の作成』の説明に従って新規リポジトリ接続を追加します。「次へ」をクリックします。
4. 「データ・ソース」ページで、以下を実行します。
- 提供されるリストにデータ・ソースを追加しない場合は、「終了」をクリックします。
 - データ・ソースを追加するには、追加するデータ・ソースのタイプに応じて、提供されたリストの上にあるアイコンのいずれかを使用します。93 ページの『第 12 章 データ・ソース』の説明に従って手順を完了します。「終了」をクリックします。

タスクの結果

JDBC ライブラリーを構成し、データ・ソースを持つリポジトリに接続しました。

次のタスク

管理者は、ユーザーが製品の使用を開始できるように、`settings.xml` ファイルを生成してユーザーにエクスポートすることができます。詳しくは、173 ページの『JDBC ドライバーと接続情報のエクスポートおよびインポート』を参照してください。

第 23 章 リソース限界の管理

リソース限界は、データベース・データ・ソースでのリソース使用量を管理する上で役立ちます。リソース限界を指定することにより、ユーザーが実行できる操作を制御したり、ユーザーが QMF を使用してデータ・ソースにアクセスするときに消費できるリソースに制限を設けたりすることができます。

リソース限界は、データ・ソースにグローバルに適用することも、いずれかのデータ・ソースにアクセスする個別の照会に適用することもできます。データ・ソースおよび照会のリソース限界により、リソース使用量を、ユーザー、グループ、曜日、または時刻ベースで制御できます。

キャッシング

QMF では、キャッシングはアプリケーションのパフォーマンスを向上させる機能である一方、データの関連性に影響を与えます。

以下のエンティティのキャッシング機能を構成できます。

- リポジトリー
- 照会
- データ・ソース
- 仮想データ・ソース
- ビジュアル・ダッシュボードおよびビジュアル報告書

リポジトリー・キャッシュ

リポジトリーのキャッシングを構成すると、アプリケーションは、すべてのオブジェクトおよびメタデータを含め、そのリポジトリーの内容を、ご使用のコンピューターのローカル・メモリー内または Web サーバー上に保存します。リポジトリー・キャッシュは、時間制限を超過するとクリアされます。

リポジトリー・キャッシュはまた、アプリケーションを終了するとクリアされます。他の QMF エンティティのキャッシュは、アプリケーションを終了してもクリアされません。

照会キャッシュ

照会のキャッシングを構成すると、その照会の初回実行後に結果がキャッシュに保存されます。後でその照会が未変更のまま再実行されると、結果はキャッシュから取得されます。照会キャッシュは時間制限を超過するとクリアされます。

データ・ソース・キャッシュ

データ・ソースのキャッシングを構成すると、そのデータ・ソース内の表からのデータがキャッシュに保存されるため、ユーザーはデータベースに直接アクセスすることなく、このデータで作業を行うことができます。データ・ソース・キャッシュは、リレーショナル・データ・ソースでのみ使用可能です。キャッシュは、時間制限を超過するとクリアされます。

仮想データ・ソース・キャッシュ

仮想データ・ソースのキャッシングを構成すると、そのデータ・ソース内の表からのレコードがキャッシュに保存されるため、ユーザーはデータベースに直接アクセスすることなく、この表の内容で作業を行うことができます。仮想データ・ソース・キャッシュは、時間制限を超過するとクリアされ、定期的に更新できます。以下の 2 つの異なる方法で、仮想データ・ソースのキャッシュを自動的に更新するようにアプリケーションを構成できます。

- 期限切れのキャッシュは、ユーザーが古いデータに対して照会を実行しようとしたときに更新できます。これは、QMF for Workstation のデフォルト・オプションですが、再構成できます。
- 期限切れのキャッシュは、スケジュールに従って定期的に更新できます。これは、QMF for WebSphere のデフォルト・オプションですが、再構成できます。

ビジュアル・ダッシュボードおよびビジュアル報告書キャッシュ

ビジュアル・ダッシュボードまたはビジュアル報告書のキャッシングを構成すると、キャッシュには、そのビジュアル・ダッシュボードまたはビジュアル報告書のデータを提供する照会の結果が保管されます。これにより、ダッシュボードまたは報告書を高速化できますが、データの関連性に影響します。ビジュアル・ダッシュボードおよびビジュアル報告書のキャッシュは時間制限を超過するとクリアされます。

QMF により、ユーザーはスケジュールを使用して、仮想データ・ソース・キャッシュとビジュアル・ダッシュボード・キャッシュの更新および期限切れを自動化することができます。

管理者権限の割り当て

QMF 管理者権限は、リポジトリの作成と管理の責任を持たせるユーザーにのみ与える必要があります。

リポジトリをデータベースに保管し、リソースを保護したい場合は、データベースの管理に習熟したユーザーにのみ QMF 管理者権限を与えるべきでしょう。多くの環境では、1 人のユーザーにリポジトリの管理責任を負わせることが、データベース・リソースに対する制御を集中化および合理化することにつながります。

QMF 管理権限のないユーザーは、QMF for Workstation 管理コンポーネントをインストールしていないため、QMF 管理者によって作成されるリポジトリに接続するために必要な情報が付与される必要があります。管理者コンポーネントがないユーザーは、パーソナル・リポジトリを作成できます。

集合 ID について

集合 ID は、特定の目的または機能を果たす静的 SQL パッケージまたはストアード・プロシージャのグループを示します。

QMF には、データベースを操作するための一連の組み込み SQL ステートメントが含まれています。これらのステートメントは、一般にバインディングと呼ばれるプロセスにより、QMF の構成中にデータベース・サーバー上に照会としてインストールされます。

照会が静的 SQL ステートメントのパッケージとしてバインドされるか (Db2 UDB データベース向け)、または一連のストアード・プロシージャとしてバインドされるか (すべてのサポート対象データベース向け、ただしこのオプションは Db2 UDB には推奨されない) は、データベース・タイプにより決定されます。インストール済みパッケージまたはストアード・プロシージャのこのグループは、集合 と呼ばれます。

各バージョンの QMF には、固有の集合があります。QMF は、データベース・サーバーに接続するときに、適正なインストール済み集合を自動的に検出し、それを使用します。ただし、ユーザーが QMF のバージョンの見分けがつくように、集合 ID 名にアプリケーションのバージョンを組み込むことは実用的な手法です。

データベースのタイプに応じて、集合 ID の長さにはいくつかの制限があります。

ストアード・プロシージャの場合、「集合」という概念は一般に、所有者 ID またはスキーマ と同義です。集合 ID フィールドの最大長は、最大スキーマ長に基づくデータベース制限によって決定されます。スキーマ長制限について詳しくは、データベースの資料を参照してください。

パッケージの集合は、Db2 データベースのみがサポートします。Db2 データベースは、その構成に応じてショート・ネームとロング・ネームのどちらのモードでも機能します。ショート・ネーム・モードでは、集合 ID フィールドに許可される最大文字数は 8 になります。

以下の Db2 データベースは、ロング・ネームをサポートするようにセットアップできます。

- iSeries V5R1 以降
- DB2 UDB V8 以降

これらの Db2 データベースの場合、集合 ID の最大長は 128 文字です。

長い名前をサポートするサーバー

QMF カタログにあるオブジェクトの名前には、長い名前が適用されます。

iSeries サーバー V5R1 以降は長い名前をサポートします。

オブジェクトの長い名前

QMF カタログにあるオブジェクトの名前には、長い名前が適用されます。

長い名前をサポートする QMF カタログ表に保存できる QMF オブジェクトの長い名前は、所有者フィールドおよび名前フィールドについては 128 文字までです。

オブジェクトの短い名前

QMF カタログにあるオブジェクトの名前には、長い名前が適用されます。

QMF カタログ表に保存できる QMF オブジェクトの短い名前は、所有者の場合は 8 文字までで、名前の場合は 18 文字までです。

データ・ソース・リソース限界の設定

個別のユーザーまたはユーザーのグループがデータ・ソースにアクセスするときにそれらのユーザーまたはグループに適用できる、リソース限界の 1 つ以上の固有セットを設定できます。

このタスクについて

「リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードは、リポジトリに追加するすべてのデータ・ソースに対してリソース限界のデフォルト・セットを作成します。リソース限界プロバイダーの選択に基づいて、データ・ソースのデフォルトのリソース限界は、リポジトリまたは QMFQMF カタログに保管されます。QMF for Workstation および QMF for WebSphere のすべてのユーザーのデータ・ソースでのリソース使用量は、デフォルト・セットのリソース限界により自動的に制御されます。デフォルトのリソース限界は、制限は設定されておらず、常時アクティブです。

デフォルトのリソース限界を変更するか、または新規で固有のリソース限界をデータ・ソースに対して設定するには、以下のようにします。

手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」ビューから、リレーショナル・データ・ソースを右クリックします。ポップアップ・メニューで「プロパティ」を選択します。「[データ・ソース] のプロパティ」ウィンドウが開きます。「リソース限界」をクリックします。「リソース限界」ウィンドウが開きます。
2. データ・ソースにすでに存在しているすべてのリソース限界グループは、「リソース限界グループ」リスト・ボックスにリストされます。すべてのデータ・ソースに、デフォルト という名前のリソース限界グループがあります。デフォルト・リソース限界グループには、すべてのユーザーが割り当てられており、リソースの制限は設定されていません。データ・ソースに存在する特定のリソース限界グループを検索するには、「名前的一致するリソース限界グループを表示する」フィールドと「リスト最新表示」ボタンを使用します。データ・ソースに存在するすべてのリソース限界グループをリストするには、「名前的一致するリソース限界グループを表示する」フィールドにパーセント (%) 記号を入力します。
3. 「追加」をクリックして、データ・ソースの新しいリソース限界グループを作成します。「新規リソース限界グループ」ウィンドウが開きます。フィールド値を指定して、「OK」をクリックします。

注: 「追加」ボタンは、QMF カタログ・リソース限界プロバイダーのデータ・ソースでは常に使用可能です。ただし、制限が QMF カタログではなくリポジトリに保管されている場合、「追加」は、保護されたリポジトリに存在するデータ・ソースに対してのみ使用可能です。

4. スケジュールを作成し、「リソース限界グループ」リスト・ボックスからリソース限界グループを選択して「編集」をクリックすることで、リソース限界グループのリソース限界値を指定します。「リソース限界グループの編集」ウィンドウが開きます。フィールド値を指定して、「OK」をクリックします。
5. 「リソース限界グループ」リスト・ボックスからリソース限界グループを選択し、「割り当て」をクリックすることで、ユーザーをリソース限界グループに割

り当てます。リポジトリをリソース限界プロバイダーとして使用している場合は、「[リソース限界グループ名]の割り当て」ウィンドウが開きます。QMFカタログをリソース限界プロバイダーとして使用している場合は、「ユーザー・プロファイルを [リソース限界グループ名] に割り当て」ウィンドウが開きます。フィールド値を指定して、「OK」をクリックします。

注: 「割り当て」ボタンは、以下のシナリオでのみ使用可能です。

- リソース限界プロバイダーとしてリポジトリを使用しており、作業中のデータ・ソースが、保護されたリポジトリに存在している。
 - QMF カatalogをリソース限界プロバイダーとして使用している。
6. リソース限界グループを削除するには、「リソース限界グループ」リスト・ボックスからグループを選択して、「削除」をクリックします。「リソース限界グループ」リスト・ボックスから、リソース限界グループが除去されます。

注: 「削除」ボタンは、QMF カatalog・リソース限界プロバイダーのデータ・ソースでは常に使用可能です。ただし、制限が QMF カatalogではなくリポジトリに保管されている場合、「削除」は、保護されたリポジトリに存在するデータ・ソースに対してのみ使用可能です。

7. 「OK」をクリックして、「プロパティ」ウィンドウの「リソース限界」ページを閉じます。

注: リソース限界が QMF サーバーのデータ・ソース・レベル、および QMF クライアントの照会レベルで設定されている場合、QMF はその 2 つのうち最も制限の厳しい限界を適用します。例えば、「取り出す最大行数」限界が照会レベルでは 150,000 行に、データ・ソース・レベルでは 100,000 行に設定されていると、QMF は、照会の実行時にデータ・ソース限界である 100,000 行を適用します。この場合、数が少ない方がより制限的な限界を意味するからです。この選択プロセスは、照会レベルとデータ・ソース・レベルの両方で設定されているリソース限界すべてで同様に行われます。

照会リソース限界の設定

個別の照会に適用できる、リソース限界の 1 つ以上の固有セットを設定できます。

このタスクについて

ユーザーがいずれかのデータ・ソースで照会を実行する度に、ユーザーに割り当てられたリソース限界がそのデータ・ソースでのリソース使用量を制御します。リソース限界の各セットにより、照会が実行される時刻または曜日に基づいて実装可能な、特定の制限を課すことができます。リポジトリ内に保存されているどの照会に対しても、リソース限界を適用できます。照会に適用できるリソース限界は、タイムアウト、LOB、およびキャッシュの各リソース限界です。

照会に対してリソース限界を設定するには、以下のようになります。

手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」または「リポジトリ」ビューから、リポジトリに保存されている照会を右クリックします。ポップアップ・メニューで

「プロパティ」を選択します。「[照会名]のプロパティ」ウィンドウが開きます。「リソース限界」フォルダーをクリックします。「リソース限界」ウィンドウが開きます。

2. 照会用に既に存在しているすべてのリソース限界グループが、「リソース限界グループ」リスト・ボックスにリストされます。すべてのデータ・ソースに、デフォルト という名前のリソース限界グループがあります。デフォルト・リソース限界グループには、すべてのユーザーが割り当てられており、リソースの制限は設定されていません。データ・ソースに存在する特定のリソース限界グループを検索するには、「名前的一致するリソース限界グループを表示する」フィールドと「リスト最新表示」ボタンを使用します。データ・ソースに存在するすべてのリソース限界グループをリストするには、「名前的一致するリソース限界グループを表示する」フィールドにパーセント (%) 記号を入力します。
3. 「追加」アイコンをクリックして、データ・ソースの新しいリソース限界グループを作成します。「新規リソース限界グループ」ウィンドウが開きます。フィールド値を指定して、「OK」をクリックします。
4. スケジュールを作成し、「リソース限界グループ」リスト・ボックスからリソース限界グループを選択して「編集」アイコンをクリックすることで、リソース限界グループのリソース限界値を指定します。「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウが開きます。フィールド値を指定して、「OK」をクリックします。
5. 「リソース限界グループ」リスト・ボックスからリソース限界グループを選択し、「割り当て」をクリックすることで、ユーザーをリソース限界グループに割り当てます。リポジトリをリソース限界プロバイダーとして使用している場合は、「[リソース限界グループ名]の割り当て」ウィンドウが開きます。QMFカタログをリソース限界プロバイダーとして使用している場合は、「ユーザー・プロファイルを [リソース限界グループ名] に割り当て」ウィンドウが開きます。フィールド値を指定して、「OK」をクリックします。
6. リソース限界グループを削除するには、「リソース限界グループ」リスト・ボックスからグループを選択して、「削除」アイコンをクリックします。「リソース限界グループ」リスト・ボックスから、リソース限界グループが除去されます。
7. 「OK」をクリックして、「プロパティ」ウィンドウの「リソース限界」ページを閉じます。

注: リソース限界が照会レベルとデータ・ソース・レベルで設定されていると、QMF はその 2 つの限界のうちより制限的な方を適用します。例えば、「取り出す最大行数」限界が照会レベルでは 150,000 行に、データ・ソース・レベルでは 100,000 行に設定されていると、QMF は、照会の実行時にデータ・ソース限界である 100,000 行を適用します。この場合、数が少ない方がより制限的な限界を意味するからです。この選択プロセスは、照会レベルとデータ・ソース・レベルの両方で設定されているリソース限界すべてで同様に行われます。

リソース限界グループの定義

リソース限界グループとは、グループに割り当てられた各ユーザーに対して、指定したスケジュールに基づいて一括して適用されるリソース限界セットのことです。リソース限界グループは任意の数だけ作成でき、各グループには、別々のスケジュールに基づいて適用される別々のリソース限界セットを設定できます。

リソース限界グループを設定する際には、さまざまな基準を組み合わせることができます。リソース限界グループを設定してリソース使用を制限するための最も一般的な方法は、次の基準を使用することです。

- データ・ソース
- ユーザー
- 曜日
- 時刻

例えば、リソース限界グループには、平日の午前 8 時から午後 6 時までの間有効である 1 セットの限界と、週末および営業時間外に有効である別の限界のセットを入れることができます。また、リソース限界グループごとに異なるユーザー群を割り当てて、これらのユーザーが、特定のデータベース・データ・ソース上で、または特定の照会の実行時に、特定の機能のみを実行できるように設定できます。

デフォルトのリソース限界グループ

初期設定では、すべてのユーザーがデフォルトのリソース限界グループに割り当てられます。これ以外のリソース限界グループに割り当てられていないユーザーは、このデフォルト・リソース限界グループで定義されている限界に基づいて管理されます。

デフォルト・リソース限界グループには、デフォルトのリソース限界セットとデフォルトのスケジュールが割り当てられています。デフォルトのリソース限界は制限的なものではなく、デフォルトのスケジュールでは、リソース限界はすべての曜日で 24 時間適用されます。デフォルト・リソース限界グループを編集して、リソース限界とスケジュールを変更できます。

注: リソース限界は常にアクティブです。リソース限界グループを設定していない場合でも、デフォルトのリソース限界に基づいた管理が行われます。このため、デフォルト・リソース限界グループに設定されている限界を調べて、デフォルト・グループに基づいて管理されている未割り当てユーザーに、意図しているよりも広範囲または制限的な限界が適用されていないことを確認する必要があります。

リソース限界グループのセキュリティの確保

各ユーザーに指定された限界を保護するために、QMF カタログ・ベースのリソース限界グループは、QMF カタログの一部である、データベース・サーバー上の `RDBI.RESOURCE_TABLE` という表に安全に保管されています。

リソース限界グループに変更を加えるには、データベース・サーバー上で QMF アプリケーションのパッケージを実行する許可が必要です。これにより、許可のないユーザーがリソース限界を変更することが防止されます。

リソース限界の表には、`RDBI.RESOURCE_VIEW` という名前のビューが定義されています。QMF アプリケーションはこのビューを使用してリソース限界情報にアクセスするため、この表は変更されず元の状態のままです。

注: デフォルト・リソース限界グループのリソース限界情報は、データベース・サーバー上の `RDBI.RESOURCE_TABLE` ではなく、リポジトリに保管されています。このため、リポジトリにアクセスできるユーザーであれば、デフォルト・リソース限界グループのリソース限界に変更を加えることができます。

リソース限界グループの作成

リソース限界グループとは、グループに割り当てられた各ユーザーに対して、一括して適用されるリソース限界セットのことです。

このタスクについて

リポジトリに追加するデータ・ソースごとに、1 つ以上のリソース限界グループを作成できます。リソース限界グループは、以下のシナリオで作成できます。

- リソース限界プロバイダーとしてリポジトリを使用しており、作業中のデータ・ソースが、保護されたリポジトリに存在している。
- QMF カタログをリソース限界プロバイダーとして使用している。

リソース限界グループを作成するには:

手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」ビューから、データ・ソースを右クリックします。ポップアップ・メニューで「プロパティ」を選択します。「[データ・ソース] のプロパティ」ウィンドウが開きます。「リソース限界」をクリックします。「リソース限界」ウィンドウが開きます。「リソース限界グループ」リスト・ボックスから、リソース限界グループを選択します。「追加」アイコンをクリックします。「新規リソース限界グループ」ウィンドウが開きます。
2. 「グループ名」フィールドにグループの名前を入力します。名前には何も制限はありません。
3. オプション:「コメント」フィールドに、このリソース限界グループについて説明するコメントを 80 文字以内で入力できます。
4. デフォルト・グループと同じスケジュールを持つリソース限界グループを作成する場合は、「デフォルト・グループのスケジュールを使用してこのグループを作成する」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスがクリアされている場合は、新規リソース限界グループにスケジュールはありません。リソース限界グループのスケジュールは、「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウを使用して作成または変更できます。
5. 「OK」をクリックします。「新規リソース限界グループ」ウィンドウが閉じます。新しいリソース限界グループが作成されます。制御が「リソース限界」ウィンドウに戻ります。リソース限界を設定するために実行する次のステップは、リソース限界グループのスケジュールの作成または編集です。

リソース限界グループ・スケジュールの設定

リソース限界グループ・スケジュールに基づいて、グループに設定されたリソース限界がいつ有効になるのかが決定されます。リソース限界グループのスケジュールは、必要な数だけ作成できます。各スケジュールは、固有のリソース限界セットを適用するように設定できます。

1 つのリソース限界グループに対する複数のスケジュールの指定

1 つのリソース限界グループに対して複数のスケジュールを使用して、さまざまな時間帯のリソース限界を指定します。

ユーザーがデータ・ソースにアクセスすると、そのユーザーが割り当てられているリソース限界グループが特定されます。特定されたグループのスケジュールが検証されて、現在有効なリソース限界が判別されます。ユーザーは、それぞれ複数のスケジュールが設定された複数のリソース限界グループに割り当てることが可能なため、スケジュールの期間が重複し、理論的には複数のリソース限界セットが有効になる可能性があります。

スケジュールが重複する場合は、固有のスケジュール番号に基づいて有効となるスケジュールが決定されます。最も小さい番号のスケジュールが優先されます。

例えば、1 つのリソース限界グループに次の 4 つのスケジュールが設定されているとします。

表 14. リソース限界グループのスケジュール

スケジュール番号	1	2	3	4
開始曜日	水曜日	月曜日	月曜日	日曜日
終了曜日	水曜日	金曜日	金曜日	土曜日
開始時刻	10:30	9:00	17:00	00:00
終了時刻	11:30	17:00	9:00	24:00

この表から分かるように、スケジュール 1 の期間はスケジュール 2 の期間に含まれており、スケジュール 1、2、3 の期間はスケジュール 4 の期間に含まれています。ユーザーがこのデータ・ソースに水曜日の 11:00 にアクセスする場合は、スケジュール 1、2、および 4 が有効となりえます。すなわち、この番号が最も小さいスケジュールが使用されます。

リソース限界グループのスケジュールを作成する場合は、各番号の間を空ける（連続させない）ことをお勧めします。これにより、必要に応じて追加のスケジュールを挿入したり、他に影響を与えずにスケジュールを削除したりできます。スケジュール番号は、連続している必要はありませんが、いったん割り当てると変更できません。

スケジュールの時間範囲および曜日範囲はすべて、指定されている数字から有効になります。すなわち、開始時刻が 8:00 の場合、スケジュールはちょうど 8:00 に有効になります。終了時刻が 17:00:00 の場合、スケジュールは 16:59:59 まで有効になります。開始時刻と終了時刻は午前 0 時をまたがって設定でき、開始曜日と終了曜日は週末をまたがって設定できます。

ユーザーが時間帯の異なるデータ・ソースにアクセスする場合、時刻の判別にはアクセス先のデータ・ソースの時計が使用されます。例えば、ニューヨーク時間の月曜日午前 9 時にニューヨークのユーザーがカリフォルニアのデータ・ソースにアクセスするとします。このデータ・ソースの時計はカリフォルニア時間の午前 6 時を示しているので、上記のスケジュール例に基づいた場合、スケジュール 3 が有効になっています。

有効なリソース限界スケジュールの判別

リソース限界グループ・スケジュールにはそれぞれ、スケジュールの優先順位を指定するための固有の番号が付けられます。

リソース限界グループ・スケジュールでは、ユーザーのグループに対し設定されている限界を指定します。それぞれのリソース限界グループごとに、複数のスケジュールを割り当てることができます。通常、指定されている限界はスケジュールごとに異なり、各スケジュールの有効期間も異なります。しかし、スケジュールの限界は異なっても、有効である期間が重なることがあります。期間が重なる場合、QMF は一意のスケジュール番号を使用して、どちらのスケジュールが有効であるかを判別します。最も小さい番号のスケジュールが優先されます。

例えば、リソース・グループに次の 4 つのスケジュールがあるとします。

スケジュール番号	1	2	3	4
開始曜日	日曜日	月曜日	水曜日	月曜日
終了曜日	土曜日	金曜日	水曜日	金曜日
開始時刻	00:00	09:00	10:30	17:00
終了時刻	24:00	17:00	11:30	09:00

スケジュール 1 は、番号が最も小さいので、常に有効です。上記のこれらのスケジュールの番号付けには意味がありません。定義によると、スケジュール 3 の時間枠は常にスケジュール 1 内に収まるため、スケジュール 3 は決して有効にならず、スケジュール 1 が常に優先されます。スケジュールに番号を割り当てる場合は、主に次の点を考慮してください。

スケジュールを作成する際、管理者は 1 から 99 の番号をスケジュールに割り当てることができます。選択時間の制約が最も厳しいスケジュールに、最も小さい番号を割り当て、時間の幅が最も広いスケジュールに、最も大きい番号を割り当てることをお勧めします。

このロジックに従って、前述のスケジュールをより適切に番号付けすると、次のようになります。

スケジュール番号	1	2	3	4
開始曜日	水曜日	月曜日	月曜日	日曜日
終了曜日	水曜日	金曜日	金曜日	土曜日
開始時刻	10:30	09:00	17:00	00:00
終了時刻	11:30	17:00	09:00	24:00

この場合、水曜日の午前 10:30 では、スケジュール 1 が有効になります。月曜日の午前 10:30 にはスケジュール 2 が有効であり、月曜日から金曜日までの午前 9:00 から午後 5:00 まではスケジュール 2 が有効で、午後 5:00 から午前 9:00 まではスケジュール 3 が有効です。金曜日の夕方から真夜中までは、スケジュール 3 が有

効です。土曜日 (午前) の真夜中から、スケジュール 4 に切り替わります。日曜日の午前 10:30 では、スケジュール 4 が有効になります。

その他に、スケジュールを作成する場合は次の点も考慮してください。

- スケジュールには連続した番号を付ける必要はありません。スケジュールの番号は、一度割り当てると変更できないので、必要に応じて追加スケジュールを挿入したり、影響を与えずに削除したりできるように、番号と番号の間を空けて付けることをお勧めします。
- スケジュールの時間範囲および曜日範囲はすべて、指定されている数字から有効になります。つまり、開始時刻が 08:00 の場合、スケジュールは 08:00:00 ちょうどから有効となります。終了時刻が 17:00 の場合、スケジュールは 16:59:59 まで有効となります。
- 開始時刻と終了時刻は深夜をまたぐことができ、開始曜日と終了曜日は週をまたぐことができます。
- ユーザーが別の時間帯のサーバーにアクセスする場合、時刻の判別には、アクセス先のサーバーに常駐するクロックが使用されます。例えば、ニューヨークのユーザーがニューヨーク時間の月曜日午前 9 時にカリフォルニアのサーバーにアクセスするとします。スケジュール例に基づく、サーバーに従って、現在の時刻はカリフォルニア時間の午前 6:00 になるので、スケジュール 3 が有効となります。

リソース限界グループ・スケジュールの作成

1 つのリソース限界グループについて、それぞれ異なるリソース限界セットが設定された 1 つ以上のスケジュールを作成できます。このスケジュールに基づいて、関連するリソース限界セットがいつ有効になるのかが決定されます。

このタスクについて

リソース限界セットでは、スケジュールが有効になっているときに、どの操作とリソース使用が許可されるのかが指定されます。

リソース限界グループ・スケジュールを作成または編集するには:

手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」ビューから、データ・ソースを右クリックします。ポップアップ・メニューで「プロパティ」を選択します。「[データ・ソース] のプロパティ」ウィンドウが開きます。「リソース限界」をクリックします。「リソース限界」ウィンドウが開きます。「リソース限界グループ」リスト・ボックスから、リソース限界グループを選択します。「編集」アイコンをクリックします。「リソース限界グループの編集」ウィンドウが開きます。
2. 選択したリソース限界グループは、「グループ名」フィールドで識別されます。
3. グループの作成時に指定したコメントが、「コメント」フィールドに表示されます。コメント・テキストを変更するには、フィールドに直接新しいテキストを入力します。
4. このリソース限界グループに定義されたすべてのスケジュールが、「スケジュール・リスト」リスト・ボックスにリストされます。

5. 「状況」ラジオ・ボタンは、「スケジュール・リスト」にリストされるすべてのスケジュールが、集合的にアクティブであるか非アクティブであるかを示します。「スケジュール・リスト」にリストされたすべてのスケジュールをアクティブにする場合は、「アクティブ」を選択します。すべてのスケジュールはアクティブになります。「スケジュール・リスト」にリストされているすべてのスケジュールを非アクティブにするには、「非アクティブ」をクリックします。これにより、デフォルト・スケジュール以外のすべてのスケジュールが無効になります。スケジュールは保存されて、いつでも活動化できます。
6. 新しいリソース限界グループ・スケジュールを作成する場合は、「追加」をクリックします。「新規リソース限界グループ・スケジュール」ウィンドウの「メイン」ページが開きます。「新規リソース限界グループ・スケジュール」ウィンドウの各ページを使用して、スケジュールに対して個別のリソース限界を指定します。

注: 「デフォルト」リソース限界の場合、「追加」ボタンは使用不可です。

7. リソース限界グループのスケジュールを編集する場合は、「スケジュール・リスト」からスケジュールを選択し、「編集」をクリックします。「デフォルト」リソース限界の場合、「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「タイムアウト」ページが開きます。作成されたリソース限界グループについては、「メイン」ページが開きます。「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの各ページを使用して、スケジュールに対して個別のリソース限界を指定します。
8. リソース限界グループのスケジュールを削除する場合は、「スケジュール・リスト」からスケジュールを選択し、「削除」をクリックします。選択していたリソース限界グループ・スケジュールが削除されます。

注: 「デフォルト」リソース限界の場合、「削除」ボタンは使用不可です。

9. 「OK」をクリックします。「リソース限界グループの編集」ウィンドウが閉じます。新しいリソース限界グループ・スケジュールが作成され、リソース限界パラメーターに加えたすべての変更が保存されます。制御が「リソース限界」ウィンドウに戻ります。リソース限界を設定するために実行する次のステップは、リソース限界グループ・スケジュールの値を指定することです。

リソース限界の値の指定

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウで、当該スケジュール期間中に有効にするリソース限界を入力します。

このタスクについて

個々のリソース限界を指定するには、以下を実行します。

手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」ビューから、データ・ソースを右クリックします。ポップアップ・メニューで「プロパティ」を選択します。「[データ・ソース]のプロパティ」ウィンドウが開きます。「リソース限界」をクリックします。「リソース限界」ウィンドウが開きます。「リソース限界グループ」リスト・ボックスから、リソース限界グループを選択します。「編集」アイ

コンをクリックします。「リソース限界グループの編集」ウィンドウが開きます。「スケジュール・リスト」からスケジュールを選択します。「編集」をクリックします。「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウが開きます。

- 次に示す「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの各ページで、選択したリソース限界グループ・スケジュールのリソース限界を設定するためのパラメーターを指定します。

- 「メイン」ページを選択して、スケジュールに優先順位を割り当て、スケジュールを有効にする時刻と曜日を指定します。これらのパラメーターは、新しいスケジュールの作成時に指定する必要があります。「デフォルト」リソース限界グループの場合、このページは使用できません。
- 「タイムアウト」ページを選択して、アイドル照会、アイドル接続、サーバー応答時間のそれぞれの警告限界とキャンセル限界を指定します。
- 「限界」ページを選択して、検索可能な最大行数と最大データ・バイト数の警告限界とキャンセル限界を指定します。さらに、このページでは、同時に確立できるデータベース・サーバーへの最大接続数も指定します。
- 「SQL 動詞」ページを選択して、このリソース限界グループに割り当てられているユーザーが、このスケジュールが有効になっているときに使用できるSQL 動詞を制限します。
- 「オプション」ページを選択して、アクセスのオプションを指定します。指定するオプションには、次のようなものがあります。QMF for Workstation または QMF for WebSphere のユーザー・インターフェースやプログラミング・インターフェースを使用したデータベース・データ・ソース・アクセス。データベース更新の確認。ユーザー照会の分離レベル。必須のアカウント情報。すべての行の自動取り出し、データのエクスポート、表の編集、保存済み照会のみの実行などを行う機能。
- 「データの保存」ページを選択して、このスケジュールを使用している、このリソース限界グループに割り当てられたユーザーに対して、データベース・サーバーにデータを保存することを許可します。
- 「バインド」ページを選択して、このスケジュールを使用している、このリソース限界グループに割り当てられたユーザーに対して、照会のための静的パッケージをバインドまたは除去することを許可します。
- 「オブジェクト・トラッキング」ページを選択して、QMF for Workstation または QMF for WebSphere のオブジェクト・トラッキングをオンにします。有効なオブジェクト・トラッキング報告書を得るためには、オブジェクト・トラッキングをオンにする必要があります。
- 「LOB オプション」ページを選択して、このリソース限界グループに割り当てられていてこのスケジュールを使用するユーザーに対し、ラージ・オブジェクト・データ (LOB) を含む表へのアクセスを許可します。
- 「レポート・センター」タブを選択して、リソース限界グループのメンバーに許可される QMF for Workstation/WebSphere レポート・センター機能のレベルを指定します。
- 「キャッシュ」ページを選択して、ユーザーごとのキャッシング・オプションを制御します。

- 「オブジェクト・リスト」ページを選択して、データ・ソース・オブジェクトのフィルター処理に使用されるデフォルト所有者名を定義して、デフォルト名とは別にデータ・ソース・オブジェクトのフィルター処理に使用できる具体的な所有者名リストを指定します。
3. 「OK」をクリックします。「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウが閉じます。リソース限界パラメーターに加えたすべての変更が保存されます。「リソース限界グループの編集」ウィンドウは開いたままです。「リソース限界グループ」ウィンドウからリソース限界を設定するために実行する次のステップは、リソース限界グループへのユーザーの割り当てです。

メイン・リソース限界の指定

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「メイン」ページで、スケジュールが有効になる日時を指定します。

メイン・リソース限界は、以下のとおりです。

番号 このリソース制限は、「新規リソース限界グループ・スケジュール」ウィンドウでのみ使用可能です。このテキスト・フィールドには、1 から 99 までの番号を設定します。この番号はスケジュールの識別に使用され、スケジュールの優先順位を表します。番号は、スケジュールが作成されたときのみ、スケジュールに割り当てられます。スケジュール番号は固有でなければなりません。いったん割り当てられると、スケジュール番号および割り当てられた優先順位を変更できません。

スケジュールの優先順位番号は、スケジュールが重なる場合、どちらのスケジュールが有効であるかを判別するために使用されます。リソース限界グループ内の 2 つのスケジュールが、同一時間枠に重なる場合は、番号の低いスケジュールが優先されます。

日付範囲

ドロップダウン・リストから、スケジュールの開始日となる曜日、および終了日となる曜日を選択します。スケジュールがアクティブになるのは、開始日から終了日まで（開始日と終了日を含む）となります。週末にまたがる日付範囲を指定することができます。例えば、金曜日から月曜日までを選択すると、スケジュールが金曜日、土曜日、日曜日、および月曜日までアクティブになります。逆に、月曜日から金曜日までを選択すると、スケジュールが月曜日、火曜日、水曜日、木曜日、および金曜日までアクティブになります。

時刻範囲

ドロップダウン・リストから、スケジュールを開始および終了する時刻を選択します。スケジュールがアクティブになるのは、開始時刻から終了時刻まで（終了時刻を含む）となります。時刻は 24 時間表示を使用して指定されます。深夜にまたがる時刻範囲を指定することができます。例えば、23:00 から 7:00 までを選択すると、スケジュールが夜の 11:00 から朝の 7:00 までアクティブになります。逆に、7:00 から 23:00 までを選択すると、スケジュールが朝の 7:00 から夜の 11:00 までアクティブになります。

状況 これらのラジオ・ボタンを使用すると、個々のスケジュールの状況を設定できます。リソース限界グループ全体の状況は、「リソース限界グループの編

集」ウィンドウの「状況」ボタンを使用して設定し、個々のスケジュール状況より優先されます。状況には、以下の 2 つの選択項目があります。

- 「アクティブ」を選択して、このスケジュールをアクティブにします。
- 「非アクティブ」を選択して、このスケジュールを非アクティブにします。非アクティブなスケジュールは、それをアクティブにするまで、またはスケジュールをリソース限界グループから削除するまで、定義されたまま残ります。スケジュールはいつでもアクティブにすることができます。

タイムアウト・リソース限界の指定

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「タイムアウト」ページで、アイドル照会、アイドル接続、およびデータ・ソース応答時間のタイムアウト警告限界とタイムアウト取り消し限界を設定します。

「アイドル照会タイムアウト」および「サーバー応答タイムアウト」リソース限界は、データ・ソースと個々の照会の両方について設定できます。「アイドル接続タイムアウト」リソース限界はデータ・ソースについてのみ設定できます。個々の照会には設定できません。「タイムアウト」リソース限界は、以下のとおりです。

アイドル照会タイムアウト

これらのフィールドは、照会がアイドル状態を維持できる時間を指定します。「警告限界」フィールドは、ユーザーに通知が出され、照会を取り消すかどうかの確認が行われるまでの、照会がアイドルの状態でいられる秒数を表示します。「取り消し限界」フィールドは、照会が自動的に取り消されるまでの、照会がアイドルの状態でいられる秒数を表示します。

サーバー応答タイムアウト

これらのフィールドは、データベースからの応答の待機に費やすことができる時間を指定します。「警告限界」フィールドは、ユーザーに通知が出され、データベース要求を取り消すかどうかの確認が行われるまでの、経過時間 (秒単位) を指定します。「取り消し限界」フィールドは、データベース要求が自動的に取り消されるまでの経過時間 (秒単位) を指定します。

注: タイムアウト限界を短くすると、実行時間が長いランナウェイ照会を防止できます。タイムアウト限界を大きくすると、リソースの競合などが原因でデータベース・サーバーの処理が遅い場合でも、データベース要求を完了することができます。

アイドル接続タイムアウト

このフィールドは、データベース・データ・ソースへのアイドル接続が保持される時間を指定します。「取り消し限界」フィールドは、アイドル接続が自動的に閉じられるまで保持される秒数を指定します。

注: タイムアウト限界を低くすると、アイドル接続によりデータベースで使用されるリソースが最小化されます。タイムアウト限界を高くすると、接続の確立に要するオーバーヘッドが最小化されます。

限界リソース限界の指定

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「限界」ページで、データベース・データ・ソースから取り出せる最大行数と最大データ・バイト数の警告限界と取り消し限界を設定します。また、データ・ソースに対して確立できる最大同時接続数も指定できます。

「限界」リソース限界は、データ・ソースについてのみ設定できます。「限界」リソース限界は、以下のとおりです。

取り出す最大行数

これらのフィールドには、照会の実行時にデータベース・データ・ソースから検索できるデータの行数の限界を指定します。「警告限界」フィールドは、限界行数に達したことがユーザーに通知されるまでに、データ・ソースから検索できる行数を指定します。ユーザーには、データをさらに取り出すか照会を取り消すかを選択するようプロンプトが出されます。「取り消し限界」フィールドには、限界行数に達するまでに、データ・ソースから検索できる行数が表示されます。照会は自動的に取り消されます。

取り出す最大バイト数

これらのフィールドには、照会の実行時にデータベース・データ・ソースから検索できるデータのバイト数の限界を指定します。「警告限界」は、限界バイト数に達したことがユーザーに通知されるまでに、データ・ソースから検索できるバイト数を指定します。その後ユーザーには、データをさらに取り出すか照会を取り消すかを選択するようプロンプトが出されます。「取り消し限界」には、限界バイト数に達するまでに、データ・ソースから検索できるバイト数が表示されます。照会は自動的に取り消されます。

最大接続数

このフィールドは、データベース・データ・ソースに対して確立できる同時接続数の限界を指定します。「取り消し限界」は、次の接続を要求する照会が自動的に取り消されるまでに、データ・ソースに対して確立できる同時接続数を指定します。限界を 0 に設定すると、接続の限界数が設定されません。

一般に、データベース・データ・ソースへの接続は再利用されます。あるデータ・ソースで 1 つの照会を実行し、その後に同じデータ・ソースで別の照会を実行する場合、必要な接続は 1 つだけです。ただし、この 2 つの照会を同時に実行する場合は、2 つの接続が必要となります。データ・ソースとの別の接続を必要とする場合にこの限界に達すると、エラーが戻されて操作は実行されません。

注: 表の編集を可能にするには、2 つ以上の同時接続が許可されていることを指定する必要があります。

SQL 動詞リソース限界の指定

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「SQL 動詞」ページで、このリソース限界グループに割り当てられているユーザーが、このスケジュールが有効な場合に使用できる SQL 動詞を指定します。

ユーザーが不許可動詞が含まれた照会を実行しようとした場合は、データ・ソースに SQL が送信されずに、照会が取り消されます。「SQL 動詞」リソース限界は、データ・ソースについてのみ設定できます。

以下の SQL 動詞の使用を制御できます。

- ACQUIRE
- ALTER
- CALL
- COMMENT
- CREATE
- DELETE
- DROP
- EXPLAIN
- GRANT
- INSERT
- LABEL
- LOCK
- REFRESH
- RENAME
- REVOKE
- SET
- SELECT
- UPDATE

オプション・リソース限界の指定

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「オプション」ページで、データ・ソースとデータ・ソース・オブジェクトに対してユーザーが持つアクセス・レベルを指定します。

「オプション」リソース限界は、データ・ソースについてのみ設定できます。オプション・リソース限界は以下のとおりです。

ユーザー・インターフェースからデータ・ソースへアクセスを許可

このフィールドは、現在のリソース限界グループ・スケジュールが有効な場合に、QMF for Workstation ユーザー・インターフェースからデータ・ソースにアクセスする許可がユーザーにあるかどうかを指定します。

プログラミング・インターフェースからデータ・ソースへアクセスを許可

このフィールドは、現在のリソース限界グループ・スケジュールが有効な場合に、QMF for Workstation アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) からデータ・ソースにアクセスする許可がユーザーにあるかどうかを指定します。

すべての行を自動的に取り出す

このフィールドは、データ・ソースが照会結果データをアプリケーションに送信する方法を指定します。デフォルトでは、照会結果の表示の必要に応じ

て、データ・ソースからデータを要求します。例えば、照会結果ウィンドウが 20 行でいっぱいになる場合、データ・ソースには 20 行しか要求されません。ユーザーがスクロールダウンして 21 行目が表示されるようにすると、さらにデータが要求されます。ユーザーが照会を実行してからスクロールダウンするまで時間がある場合、その待ち時間の間も照会はアクティブのままであり、その間データ・ソースのリソースを消費していることとなります。このパラメーターを使用可能にすると、ユーザーのスクロール要求に関係なく、すべてのデータが受信されるまで繰り返しデータが要求されます。

データベース更新を確認

このフィールドは、実行した照会や表の編集時のアクションの結果として生じたデータ・ソースの変更をすべて確認する必要があるかどうかを指定します。このチェック・ボックスを選択した場合は、データ・ソースが変更される前に、確認のプロンプトが出されます。このチェック・ボックスをクリアすると、確認なしでデータ・ソースの変更が行われます。

プロシージャー・コマンドに確認パラメーターを使用することで、このリソース限界設定をオーバーライドできます。以下の表は、指定された値に応じたパラメーターの相関を示しています。

「データベース更新を確認」の値	プロシージャーのパラメーター値	確認ダイアログの動作
選択	CONFIRM=YES	表示
選択	CONFIRM=NO	表示されない
選択	未指定	表示
クリア	CONFIRM=YES	表示
クリア	CONFIRM=NO	表示されない
クリア	未指定	表示されない

データのエクスポートを可能にする

このフィールドは、「ファイル」メニューの「エクスポート」コマンド、または「**EXPORT DATA**」プロシージャー・コマンドを使用して、ユーザーが照会結果データをファイルにエクスポートできるかどうかを指定します。

表の編集を可能にする

このフィールドは、表エディター・フィーチャーを使用して表を編集できるかどうかを指定します。

保存済みの照会のみ実行を許可

このフィールドは、新しい照会を作成してデータベース・データ・ソースに保存できるかどうかを指定します。チェック・マークを付けた場合は、データベース・データ・ソースに保存済みの照会のみ実行できます。クリアされている場合は、データベース・データ・ソースにある照会を実行できるだけでなく、新しい照会を作成してデータベース・データ・ソースに保存することもできます。

照会の分離レベル

「照会の分離レベル」パラメーターは、トランザクションをサポートするデータベースにのみ適用されます。

このフィールドは、ユーザーの照会に適用される、トランザクションの分離レベルを指定します。さまざまな分離レベルがあり、レベルごとにデータベースでのトランザクション処理に与える影響の度合いが異なります。

データベース管理者に問い合わせるか、データベース・サーバーの資料を参照し、使用中のデータベース・サーバーがトランザクション処理をサポートするように構成されているかどうかを判別してください。

有効な値は以下のとおりです。

- 「デフォルト」は、照会の分離レベルがすべてのアプリケーションに指定されるデフォルトになることを指定します。
- 「反復可能読み取り」は、照会の分離レベルが「反復可能読み取り (RR)」になることを指定します。RR 分離レベルは、他のアプリケーションから最も強固に保護します。
- 「すべて (RS)」は、照会の分離レベルが「読み取り固定 (RS)」になることを指定します。
- 「カーソル固定 (CS)」は、照会の分離レベルが「カーソル固定 (CS)」になることを指定します。CS 分離レベルは、データ保全性と共に最大の並行性を提供します。
- 「変更 (UR)」は、照会の分離レベルが「非コミット読み取り (UR)」になることを指定します。これは、アプリケーションが非コミット・データを読み取ることを可能にします。
- 「コミットしない (NC)」は、照会の分離レベルが「コミットしない (NC)」になることを指定します。分離レベル NC で実行されるアプリケーションは、データベースの永続的な変更を行うことはできません。

アカウント

このフィールドは、データ・ソースに接続するときはそのデータ・ソースに送信されるデフォルトのアカウント情報を指定します。

アカウントをオーバーライド可能にする

このフィールドは、「アカウント」フィールドで指定されたデフォルトのアカウント情報、データ・ソースに接続するときオーバーライドできるかどうかを指定します。これを選択した場合は、「ユーザー情報の設定」ウィンドウを使用して、新しいアカウント・ストリングを入力できます。これがクリアされていると、新しいアカウント情報を入力できません。そのため、自分のリソース限界グループが所有していないデータ・ソース・オブジェクトにアクセスできない場合があります。

アカウント情報の要求

このフィールドは、このスケジュールが有効な場合、データベースに接続する前に、「ユーザー情報の設定」ウィンドウに有効なアカウント・ストリングを指定しなければならないかどうかを指定します。

印刷を許可

データ・ソースに保管されているオブジェクトを印刷するためには、このチェック・ボックスを選択する必要があります。

データの保存リソース限界の指定

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「データの保存」ページで、このリソース限界グループに割り当てられているユーザーで、このスケジュールを使用しているユーザーが、データベース・データ・ソースにデータを保存できるかどうかを指定します。

「データの保存」リソース限界は、データ・ソースについてのみ設定できます。「データの保存」リソース限界は、以下のとおりです。

データの保存コマンドを許可

このフィールドは、データベース・データ・ソースにデータを保存できるかどうかを指定します。データの保存は、リソースをかなり消費する可能性があります。そのため、データの保存によって、データベースやネットワークに重大な影響を与えるおそれがあります。

デフォルト表スペース

このフィールドは、データの保存コマンドで作成される表に使用されるデフォルトの表スペース名を指定します。このフィールドは、「データの保存コマンドを許可」が選択されている場合のみ使用可能です。指定する表スペース名の構文は、表スペース名に関するデータベース規則に従わなければなりません。指定した値は、データを新しい表に保存するときに行われる CREATE TABLE SQL ステートメントの一部として使用されます。アスタリスク (*) を入力すると、デフォルトの表スペースの取得が、ユーザーのプロファイルが作成されたときに管理者によって指定された RDBI.PROFILE_TABLE または Q.PROFILES にある同プロファイルから行われることを指定します。

デフォルト表スペースをオーバーライド可能にする

このフィールドは、デフォルトの表スペースをオーバーライドできるかどうかを指定します。これを選択した場合は、データベース・セキュリティ権限に従って表スペース名を指定できます。このチェック・ボックスを選択しない場合は、「デフォルト表スペース」フィールドで指定した表スペース名を使用する必要があります。

既存のデータを置換できるようにする

このフィールドは、オブジェクトがデータベースとの間でエクスポートまたはインポートされたときに、ユーザーが既存データをオーバーライドできるかどうかを指定します。このオプションが選択されている場合、ユーザーはデータベース内の新規データで既存データを置換できます。このチェック・ボックスにマークが付いていない場合、ユーザーは新規データを既存データに追加することのみが可能です。

バインド・リソース限界の指定

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「バインド」ページで、このリソース限界グループに割り当てられていて、かつこのスケジュールを使用しているユーザーが、照会の静的パッケージをデータ・ソースにバインドしたり、データ・ソースから除去したりできるかどうかを指定します。

「バインド」リソース限界は、データ・ソースについてのみ設定できます。「バインド」リソース限界は、以下のとおりです。

パッケージのバインドを許可

このフィールドは、データベース・データ・ソースに照会の静的パッケージをバインドできるかどうかを指定します。

パッケージの除去を許可

このフィールドは、データベース・データ・ソースから静的パッケージを除去できるかどうかを指定します。

デフォルト集合 ID

このフィールドは、バインドする静的パッケージのデフォルト集合 ID を指定します。

デフォルト集合 ID をオーバーライド可能にする

このフィールドは、デフォルト集合 ID を使用しなければならないかどうかを指定します。このチェック・ボックスが選択された場合は、データベース・セキュリティ権限に従って集合 ID を指定できます。このチェック・ボックスがクリアされている場合は、「デフォルト集合 ID」フィールドで指定されたデフォルトの集合 ID を使用する必要があります。

デフォルト分離レベル

このフィールドは、バインドする静的パッケージのデフォルトの分離レベルを指定します。以下の分離レベルのいずれか 1 つを選択できます。

- 「反復可能読み取り」は、静的パッケージのデフォルト分離レベルが「反復可能読み取り (RR)」になることを指定します。RR 分離レベルは、リクエスターが読み取りおよび変更する行 (幻像読み取り行を含む) に対する同時ユーザーのアクションから、静的パッケージの SQL ステートメントを分離します。RR 分離は、最も高い保護レベルを提供します。
- 「すべて (RS)」は、静的パッケージのデフォルト分離レベルが「読み取り固定 (RS)」になることを指定します。RS 分離レベルは、リクエスターが読み取りおよび変更する行に対する同時ユーザーのアクションから、静的パッケージの SQL ステートメントを分離します。
- 「カーソル固定 (CS)」は、静的パッケージのデフォルト分離レベルが「カーソル固定 (CS)」になることを指定します。CS 分離レベルは、リクエスターが行う変更に対する同時ユーザーのアクションから、静的パッケージの SQL ステートメントおよびデータベース・カーソルが位置付けられている現在行を分離します。
- 「変更 (UR)」は、静的パッケージのデフォルト分離レベルが「非コミット読み取り (UR)」になることを指定します。UR 分離レベルは、リクエスターが行う変更に対する同時ユーザーのアクションから、静的パッケージの SQL ステートメントを分離します。
- 「コミットしない (NC)」は、静的パッケージのデフォルト分離レベルが「コミットしない (NC)」になることを指定します。NC 分離レベルは、リクエスターが行う変更に対する同時ユーザーのアクションから、静的パッケージの SQL ステートメントを分離しません。

デフォルト分離レベルをオーバーライド可能にする

このフィールドは、「デフォルト分離レベル」フィールドに指定した分離レベルをオーバーライドできるかどうかを指定します。このチェック・ボックスが選択された場合は、パッケージのバインド時に任意の分離レベルを指定

できます。このチェック・ボックスが選択されていない場合は、「デフォルト分離レベル」フィールドで指定されたデフォルトの分離レベルを使用して静的パッケージをバインドする必要があります。

オブジェクト・トラッキング・リソース限界の指定

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「オブジェクト・トラッキング」ページで、オブジェクト・トラッキングをアクティブにします。

オブジェクト・トラッキング報告書の作成に使用されるトラッキング・データを収集するためには、オブジェクト・トラッキングを使用可能にする必要があります。オブジェクト・トラッキング報告書は、未使用オブジェクトを検索したり、表や列などの頻繁にアクセスされるデータ・ソースを検索したり、潜在的な問題領域を発見したりするのに役立ちます。データ・ソースに対して「オブジェクト・トラッキング」リソース限界を設定できます。

オブジェクト・トラッキング・リソース限界は以下のとおりです。

要約オブジェクト・トラッキングを使用可能にする

このフィールドは、自分のリソース限界グループについて要約オブジェクト・トラッキングをアクティブにするかどうかを指定します。要約トラッキングは、オブジェクトの実行回数と、オブジェクトが最後に実行された時刻および変更された時刻を記録します。

明細オブジェクト・トラッキングを使用可能にする

このフィールドは、自分のリソース限界グループについて明細オブジェクト・トラッキングをアクティブにするかどうかを指定します。明細トラッキングは、オブジェクトが実行された時刻、オブジェクトの実行者、およびその結果を記録します。このオプションを選択した場合は、大量のデータが収集される可能性があります。

注: 随時 オブジェクト・トラッキングや SQL テキストのトレースを使用するには、このオプションを使用可能にする必要があります。

随時オブジェクト・トラッキングを使用可能にする

このフィールドは、各随時照会のレコードを、要約または明細オブジェクト・トラッキング表に保持するかどうかを指定します。随時照会とは、データベース・データ・ソースで名前が付いていないまたは保存されていない照会です。

注: このオプションを有効にするためには、「明細オブジェクト・トラッキングを使用可能にする」オプションを有効にする必要があります。

SQL テキスト・トラッキングを使用可能にする

このフィールドは、各照会の SQL テキストのレコードを明細トラッキング表に保持するかどうかを指定します。

注: このオプションを有効にするためには、「明細オブジェクト・トラッキングを使用可能にする」オプションを有効にする必要があります。

最終使用タイム・スタンプ・オプション

このフィールドは、データ・オブジェクトがいつ更新されるのか、およびどのコマンドにより更新されるのかを指定します。

注: オブジェクトが QMF カタログに保存される場合、データは表 **Q.OBJECT_DIRECTORY** の列 **LAST_USED** に保持されます。オブジェクトがリポジトリに保存される場合は、データは表 **RSBL.OBJECTS** の列 **LAST_USED** に保持されます。

使用可能なオプションは次のとおりです。

- オブジェクトがアクセスされたときに更新 (レガシー・モード)

オブジェクトに対して以下のいずれかのコマンドを実行したときにデータは更新されます。

- **CONVERT**
- **DISPLAY**
- **EXPORT**
- **IMPORT**
- **PRINT**
- **RUN**
- **SAVE**

- オブジェクトが実行、保存、またはインポートされたときに更新

RUN、**SAVE**、または **IMPORT** コマンドの実行後にデータは更新されます。

- オブジェクトが実行されたときにのみ更新

RUN コマンドの実行後にのみデータは更新されます。

最終使用タイム・スタンプ・オプションを上書きできる

DSQEC_LAST_RUN 変数値が無視されるかどうかを示します。

デフォルトでは、このチェック・ボックスはクリアされています。

変数値を変更してリソース限界をオーバーライドする場合は、このチェック・ボックスを選択します。

LOB オプション・リソース限界の指定

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「LOB オプション」ページでは、ラージ・オブジェクト (LOB) が含まれる表へのアクセス、これらの表からのデータ検索、およびこれらの表へのデータ保存について、ユーザーが行える操作を制御します。

ラージ・オブジェクト (LOB) とは、Db2 for Linux, UNIX, and Windows のデータ・タイプであり、テキスト、マルチメディア、画像、ビデオ、写真、音声といった特殊なデータ、または任意の大規模データ・ファイルをデータベース表内に格納するためのデータ・タイプです。LOB データを検索または保存する際には、大量のリソースが消費されることがあります。場合によっては、LOB データが含まれた表にアクセスするだけでも、多くのリソースが消費されます。「LOB オプション」リソース限界を使用すると、LOB データを含むデータベース・データ・ソース上の表へのアクセスを制御できます。「LOB オプション」リソース限界は、データ・ソースと個々の照会の両方に適用できます。

「LOB オプション」リソース限界は、以下のとおりです。

LOB 検索オプション

このフィールドは、このスケジュールが有効な場合に、ラージ・オブジェクト (LOB) データをユーザーが検索できるかどうかを指定します。以下のいずれかを選択できます。

- 「LOB 列を使用不可にする」は、ユーザーは LOB データを検索できないこと、および LOB データが含まれる表に対して照会もアクセスもできないことを指定します。
- 「LOB データの検索を不可にする」は、ユーザーは LOB データを検索できないが、LOB データが含まれる表を照会できることを指定します。照会結果データは、LOB データが含まれる列以外の、表のすべての列について戻されます。
- 「要求時に LOB データを検索する」は、LOB データが含まれている表をユーザーが照会でき、LOB オブジェクトが含まれている列を含むすべての列に対する結果データが戻されることを指定します。ただし、LOB 列の結果データは、実際に列には表示されません。ポインターが表示されます。ユーザーがポインターを選択すると、照会結果に LOB データが表示されます。

ポインターをダブルクリックすることにより、データベースからデータをプルすることもできます。

- 「LOB データを自動的に検索する」は、LOB データが含まれている表をユーザーが照会でき、LOB オブジェクトが含まれている列を含むすべての列に対する結果データが戻されることを指定します。

このオプションは、すべての LOB 列のすべての LOB データをデータベースからローカル・コンピューターにプルします。

このオプションを使用すると、大量のリソースと時間を消費する可能性があります。実際の LOB データは、グリッドや報告書には表示されません。代わりに、LOB データへのポインターが表示されます。

LOB データの保存を可能にする

このフィールドは、LOB データをデータベース・データ・ソースに保存できるかどうかを指定します。

LOB 列の最大サイズ

このフィールドには、LOB 列の最大サイズ (KB 単位) を指定します。2G (最大 LOB サイズ) まで指定できます。デフォルトは 0 (最大サイズ無し) です。最大サイズを超える LOB データがある表をユーザーが照会すると、LOB データは戻されません (表示されません)。

LOB オプションをオーバーライド可能にする

このフィールドは、ユーザーがグループに対して指定されているデフォルトの LOB オプション・リソース限界をオーバーライドできるかどうかを指定します。

レポート・センター・リソース限界の指定

リソース限界グループのメンバーに許可されている QMF レポート・センター機能のレベルを制御することができます。

QMF レポート・センターで、データベース・サーバーに保管されている共有の照会、書式、プロシージャー、および表を使用して、カスタム報告書を生成することができます。その後、そのカスタム報告書を各種アプリケーションで表示および操作することができます。

リソース限界グループに許可されるレポート・センター機能を制御するには、「リソース限界グループの編集」ウィンドウの「レポート・センター」ページで各設定を指定します。

「レポート・センター」リソース限界は以下のとおりです。

すべてのオブジェクト・タイプの表示を許可

このチェック・ボックスを選択すると、このリソース限界グループのメンバーは、QMF レポート・センター報告書に使用されるオブジェクトへのアクセスが許可されます。

QMF レポート・センターのアプリケーションの使用または報告書の実行に、特別な許可は必要ありません。ただし、新しい報告を作成するには、保管オブジェクトにアクセスする必要があります。一部のユーザーは、これらのオブジェクトにアクセスするための権限を持っていない場合があります。このチェック・ボックスを選択すると、このリソース限界グループのメンバーは、データベース・サーバーに保管されているオブジェクトにアクセスして、新しい報告書を作成することを許可されます。

注: デフォルトでは、「すべてのオブジェクト・タイプの表示を許可」チェック・ボックスが選択されています。

ルート・ノードの管理を許可

このチェック・ボックスを選択すると、このリソース限界グループのメンバーに QMF レポート・センターのアプリケーションで使用されるルート・フォルダーの「共通のお気に入り」にフォルダーを追加することを許可します。「共通のお気に入り」フォルダーは、データベース・サーバーに保管されています。

QMF レポート・センターは、「個人用お気に入り」と「共通のお気に入り」の 2 つの最上位フォルダーを使用してユーザーの報告書を保管します。各フォルダーには、データベース・サーバーにあるオブジェクトを指す報告書が含まれています。オブジェクトは、フォルダー内には含まれていません。

個人のお気に入り フォルダーは、ユーザーのマシン上にローカルに存在します。このフォルダーとそれに含まれている報告書には、作成者であるユーザーしかアクセスできません。

「共通のお気に入り」フォルダーは、データベース・サーバー上にあります。このフォルダーには、QMF レポート・センターのすべてのユーザーが(潜在的に) アクセスできます。ただし、第 1 レベルのサブフォルダーを「共通のお気に入り」フォルダーに追加するには、許可が必要です。このオプションは、それを行う許可を、このリソース限界グループのメンバーに与えます。

第 1 レベルのサブフォルダーを作成する許可を与えられた場合には、リソース限界グループのメンバーは、QMF レポート・センターの機密保護オブ

ションを使用して、フォルダー内にある報告書を実行または修正できるユーザーを制御することができます。「共通のお気に入り」フォルダーは、最大 50 の第 1 レベルのサブフォルダーを保持できます。

注: デフォルトでは、「ルート・ノードの管理を許可」チェック・ボックスはクリアされています。

ノードの所有権の取得を許可

このチェック・ボックスを選択すると、このリソース限界グループのすべてのメンバーに、「共通のお気に入り」フォルダー内のフォルダーまたは報告書の所有権を取得する権限を許可します。

このチェック・ボックスが選択されている場合、ユーザーは、QMF レポート・センターの機密保護に基づくアクセス権が付与されているかどうかに関係なく、「共通のお気に入り」フォルダー内の任意の報告書またはフォルダーにアクセスできます。

注: デフォルトでは、「ノードの所有権の取得を許可」チェック・ボックスはクリアされています。

キャッシュ・リソース限界の指定

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「キャッシュ」ページで、照会結果のキャッシングをアクティブにします。

このリソース限界を有効にすると、照会の実行時に結果がキャッシュされます。照会が再実行され、何も変更されていない場合、結果はデータ・ソースで再実行されるのではなく、キャッシュされた結果から取得されます。「キャッシュ」リソース限界は、データ・ソースと個々の照会の両方に適用できます。

「キャッシュ」リソース限界は、以下のとおりです。

キャッシュが使用可能

このフィールドは、結果セット・データのキャッシングを使用可能にするかどうかを指定します。デフォルトでは、キャッシングは使用不可に設定されています。キャッシングを使用可能にすると、照会の結果データがキャッシュに入れられ (保管され)、データ・ソースのこのデータにアクセスする同じ特権を持った他のユーザーがキャッシュ内の照会結果を使用できるようになります。結果セット・データのキャッシングは、リソース消費の軽減やパフォーマンスの向上にかなり効果がある場合があります。キャッシュ内の結果セット・データは、自動的にリフレッシュされません。

データの自動取り出しが使用可能

このフィールドは、キャッシュされたデータ行を取り出す方法を指定します。このリソース限界は、「キャッシュが使用可能」が選択されている場合に使用可能になります。このオプションを選択すると、キャッシュから照会結果セットが取り出される場合に、結果セット全体が渡されるようになります。このオプションを選択しない場合は、照会結果セットの 100 行 (デフォルト) が渡されます。

データ期限切れ間隔

このフィールドは、照会結果セット・データをキャッシュに残しておく期間

を指定します。期間は、日数、時間数、および分数を指定することにより設定できます。この期間を過ぎると、キャッシュされた照会結果セット・データは更新されます。

キャッシュ・オプションを上書きできる

このフィールドは、キャッシュ・オプションをオーバーライド可能にするかどうかを指定します。

オブジェクト・リスト・リソース限界の指定

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「オブジェクト・リスト」ページで、データ・ソースのデフォルトの所有者名および許可された所有者名を指定します。

「オブジェクト・リスト」リソース限界を使用して、データ・ソース・オブジェクトのフィルター処理に使用するデフォルトの所有者名を定義できます。デフォルト名の他に、データ・ソース・オブジェクトのフィルター処理に使用できる所有者名の特定のリストを指定することもできます。

「オブジェクト・リスト」リソース限界は以下のとおりです。

デフォルト所有者名

このフィールドは、データ・ソース・オブジェクト・リストのフィルター処理に使用するデフォルトの所有者名を指定します。

デフォルト所有者名を上書きできます

このチェック・ボックスにより、ユーザーは現在のデフォルトの所有者名をオーバーライドできるようになります。

許可された所有者の名前

このフィールドは、データ・ソース・オブジェクト・リストのフィルター処理に使用できる追加の所有者名のリストを指定します。所有者名は、コンマで区切る必要があります。

<USERNAME> を許可

このチェック・ボックスにより、現行ユーザーの所有者名を、データ・ソース・オブジェクト・リストのフィルター処理に使用できるようになります。

<SQLID> を許可

このチェック・ボックスにより、現行ユーザーの SQLID を、データ・ソース・オブジェクト・リストのフィルター処理に使用できるようになります。

リソース限界グループへのユーザーの割り当て

ユーザーは、具体的にリソース限界グループに割り当てする必要があります。

このタスクについて

割り当てると、各ユーザーが QMF for Workstation および QMF for WebSphere を使用して実行できる操作は、割り当て先のリソース限界グループのスケジュールに基づいて決定されます。どのリソース限界グループにも割り当てられていないユーザーはすべて、デフォルト という名前のデフォルト・リソース限界グループに自動的に割り当てられます。デフォルト・リソース限界グループのスケジュールには、制限は設定されていません。

ユーザーをリソース限界グループに割り当てるには、そのユーザーを QMF for Workstation および QMF for WebSphere に定義するための情報をまず指定する必要があります。ユーザーをアプリケーションに対して定義し、次いでユーザーをリソース限界グループに割り当てるというプロセスは、データ・ソースに対して選択されたリソース限界プロバイダーによっていくらか異なります。

リポジトリ・リソース限界グループへのユーザーの割り当て

ユーザーをリポジトリ・ベースのリソース限界グループに割り当てるには、保護されたリポジトリの作成時にアクセスを付与されている、選択可能なユーザーおよびグループのリストから直接選択します。

このタスクについて

選択可能であるユーザーおよびグループは、リポジトリに選択されたセキュリティのタイプに基づいて定義されていました。LDAP セキュリティーが選択された場合、ユーザーおよびグループは LDAP サーバーから取得されました。内部セキュリティが選択された場合、「ユーザーおよびグループ」ビューを使用してユーザーおよびグループ情報を定義します。リポジトリにセキュリティが指定されておらず、リソース限界がリポジトリ・ベースである場合は、リソース限界グループを作成し、割り当てを行う権限はありません。

ユーザー情報またはリソース限界グループを作成する順番はどちらが先でもかまいません。ユーザー情報を先に作成してからリソース限界グループを作成することもできます。あるいは、リソース限界グループを先に作成してからユーザー情報を作成することもできます。このような柔軟性が備えられているのは、ユーザー情報とリソース限界グループの割り当ての作成と編集というものが、組織のニーズの変化に伴って継続していく作業であるためです。

ユーザーをリポジトリ・ベースのリソース限界グループに割り当てるには、以下のようにします。

手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」ビューから、データ・ソースを右クリックします。ポップアップ・メニューで「プロパティー」を選択します。「[データ・ソース] のプロパティー」ウィンドウが開きます。「リソース限界」をクリックします。「リソース限界」ウィンドウが開きます。これには 2 つのページがあります。「リソース限界」タブをクリックします。タブで、「リストの最新表示」をクリックします。 選択可能なリソース限界グループのリストから、リソース限界グループを選択します。「割り当て」をクリックします。「[リソース限界グループ名] への割り当て」ウィンドウが開きます。
2. データ・ソースに対して定義済みで、割り当て可能なユーザーの中で、まだ選択されたリソース限界グループに割り当てられていないユーザーは、「割り当てなし」リスト・ボックスにリストされます。選択されたリソース限界グループに割り当てられているユーザーは、「割り当て済み」リスト・ボックスにリストされます。「割り当てなし」リストにリストされているユーザーをフィルターに掛けるには、特定のユーザーのユーザー ID またはワイルドカード文字を「名前フィルター」フィールドに指定します。パーセント記号 (%) を指定すると、データ・ソースに対して定義されているすべてのユーザーのリストが生成されます。

リストされていない場合、そのユーザーまたはグループは定義されていません。新規ユーザーまたはグループを定義し、次いでリストを再度フィルターに掛けることができます。

3. 「割り当てなし」リストから、リソース限界グループに割り当てるユーザーを選択します。「割り当て」をクリックします。このユーザーが「割り当て済み」リストに移動されます。
4. リソース限界グループからユーザーを除去する場合は、「割り当て済み」リストからそのユーザーを選択します。「割り当て解除」をクリックします。このユーザーが「割り当てなし」リストに移動されます。「割り当て済み」リストからすべてのユーザーを除去し、それらを「割り当てなし」リストへ移動する場合は、「すべて割り当て解除」をクリックします。
5. 「OK」をクリックします。リソース限界グループのユーザー割り当てへの追加または変更が保存されます。

タスクの結果

注: リソース限界グループへのユーザー割り当ては、「リソース限界」ウィンドウの「割り当て」ページで行うこともできます。

すべてのリポジトリ・リソース限界グループのユーザー割り当ての管理

データ・ソースに定義されている各ユーザーおよびグループは、1 つ以上のリポジトリ・リソース限界グループに割り当てることができます。

このタスクについて

「リソース限界」ウィンドウの「割り当て」ページには、データ・ソースに定義されている各ユーザーまたはグループと、データ・ソースに定義されている各リソース限界グループがリストされます。このウィンドウで、単一のダイアログからユーザーを 1 つ以上のリソース限界グループに割り当てることができます。

1 つのダイアログからすべてのリソース限界グループにユーザー割り当てを行うには、以下のようにします。

手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」ビューから、データ・ソースを右クリックします。ポップアップ・メニューで「プロパティ」を選択します。「[データ・ソース] のプロパティ」ウィンドウが開きます。「リソース限界」をクリックします。「リソース限界」ウィンドウが開きます。これには 2 つのページがあります。「割り当て」タブをクリックします。
2. データ・ソースに定義されているユーザーおよびグループは、「ユーザーおよびグループ」フィールドにリストされます。すべてのグループを表示するには、「グループ」フォルダーを展開します。すべてのユーザーを表示するには、「ユーザー」フォルダーを展開します。
3. 各「ユーザーおよびグループ」セルには、対応する「リソース・グループ」ドロップダウン・リスト・ボックスがあります。「リソース・グループ」リストには、データ・ソースに定義されているすべてのリソース限界グループが表示されます。リソース限界グループを選択するには、ユーザーまたはグループの「リソ

ース・グループ」セルをクリックし、下矢印をクリックし、選択可能なリソース限界グループのリストから新規リソース限界グループを選択します。

4. 「保存」または「OK」をクリックします。新しい割り当てが行われます。

QMF カタログ・ベース・リソース限界グループへのユーザーの割り当て

ユーザーを QMF カタログ・ベースのリソース限界グループに割り当てるには、まずそのユーザーにユーザー・プロファイルを定義し、次いでそのユーザー・プロファイルのリソース限界グループに割り当てる必要があります。

ユーザー・プロファイルまたはリソース限界グループを作成する順番はどちらが先でもかまいません。ユーザー情報を先に作成してからリソース限界グループを作成することもできます。あるいは、リソース限界グループを先に作成してからユーザー情報を作成することもできます。このような柔軟性が備えられているのは、ユーザー情報とリソース限界グループの割り当ての作成と編集というものが、組織のニーズの変化に伴って継続していく作業であるためです。

QMF カタログ・ユーザー・プロファイルの登録の許可

ユーザーがデータ・ソースに接続すると、そのユーザー ID の適切なユーザー・プロファイルが検出され、ユーザーの登録状況が検証されて、使用するリソース限界グループが決定されます。

データ・ソースに対するアクセスは、次に示すユーザー ID 登録の種類に基づいて許可されます。

- 制限付き登録。ユーザー ID に対応するユーザー・プロファイルが存在する場合にだけ、データ・ソースへのアクセスが許可されます。
- オープン登録。各ユーザー ID は、対応するユーザー・プロファイルが存在する場合は、そのユーザー・プロファイルでデータ・ソースにアクセスできます。対応するユーザー・プロファイルがない場合は、SYSTEM という名前のデフォルトのユーザー・プロファイルに自動的に分類されます。

オープン登録を使用すると、各ユーザーが SYSTEM ユーザー・プロファイルにアクセスでき、すべてのユーザーはデータ・ソースにアクセスできるようになります。一部のユーザーには固有のプロファイルを作成し、他のユーザーには SYSTEM デフォルト・プロファイルの使用を許可する、ということが可能です。

制限付き登録を使用する場合は、データ・ソースにアクセスするすべてのユーザーに対し、固有のユーザー・プロファイルを作成する必要があります。制限付き登録を設定するときは、SYSTEM プロファイルを削除して、固有のプロファイルを持たないユーザーがデータ・ソースにアクセスできないようにします。

使用する QMF カタログ・ユーザー・プロファイルの決定

ユーザーに代わってデータ・ソースに QMF for Workstation または QMF for WebSphere が接続すると、最初に、ユーザーが指定したユーザー ID とパスワードがデータ・ソースによって検証されます。ユーザー情報が有効であれば、ユーザー・プロファイル表 `RDBI.PROFILE_TABLE` でユーザー ID が検索されます。

RDBI.PROFILE_TABLE はインストール時に作成されます。インストール時に Q.PROFILES 表に存在するすべてのユーザー ID が、RDBI.PROFILE_TABLE に含まれます。

注: インストール時に Q.PROFILES がコピーされた後、Q.PROFILES に直接追加したユーザー ID が RDBI.PROFILE_TABLE に自動的に追加されることはありません。新しいユーザー ID は、QMF 管理者製品 (Workstation または WebSphere) を使用して追加する必要があります。

RDBI.PROFILE_TABLE には以下の列があります。

表 15. リソース限界の決定

CREATOR	ENVIRONMENT	TRANSLATION	RESOURCE GROUP
ユーザー ID	WINDOWS	English	TECH
ユーザー ID	NULL	English	SALES
SYSTEM	WINDOWS	English	BASIC
SYSTEM	NULL	English	SYSTEM

新しいユーザー・プロファイルを作成すると、入力したユーザー ID に対する項目がテーブルに作成されます。「Creator」列には入力したユーザー ID が設定され、「Environment」および「Translation」列は、ホスト・システムの環境と言語に基づいて自動的に設定されます。「Resource Group」列には、そのユーザーが割り当てられるリソース限界グループが入ります。

QMF カタログのユーザー・プロファイルによるデータベース・アクセスの決定

QMF for Workstation および QMF for WebSphere は、RDBI.PROFILE_TABLE からユーザーのプロファイルを見つけ、表の「Resource Group」列でリソース限界グループの名前を取得し、リソース限界とスケジュールが格納されている RDBI.RESOURCE_TABLE でそのリソース限界グループを検索するという手順で、使用するリソース限界グループを決定します。

環境用にユーザー・プロファイルをセットアップするときは、いろいろな組み合わせを使用してデータ・ソース・アクセスを制御できます。以下は、使用できる組み合わせのうちのいくつかをまとめたものです。

制限付き登録の場合:

- ユーザー ID がユーザー・プロファイルと一致する。ユーザー・プロファイルでリソース限界グループが指定されている。リソース限界グループが存在する。この場合は、そのグループに対するリソース限界とスケジュールに基づいて、データ・ソースへのアクセスが許可されます。
- ユーザー ID がユーザー・プロファイルと一致しない。SYSTEM という名前のデフォルト・ユーザー・プロファイルがない。この場合は、そのユーザーによるデータ・ソースへのアクセスは拒否されます。

オープン登録の場合:

- ユーザー ID がユーザー・プロファイルと一致する。ユーザー・プロファイルでリソース限界グループが指定されている。リソース限界グループが存在する。この場合は、そのグループに対するリソース限界とスケジュールに基づいて、データ・ソースへのアクセスが許可されます。
- ユーザー ID がユーザー・プロファイルと一致しない。SYSTEM という名前のデフォルト・ユーザー・プロファイルがある。デフォルト・ユーザー・プロファイル SYSTEM でリソース限界グループが指定されている。リソース限界グループが存在する。この場合は、そのグループに対するリソース限界とスケジュールに基づいて、データ・ソースへのアクセスが許可されます。
- ユーザー ID がユーザー・プロファイルと一致する。リソース限界グループが割り当てられていない。この場合は、デフォルト・リソース限界グループに対して設定されている限界に基づいて、データ・ソースへのアクセスが許可されます。
- ユーザー ID がユーザー・プロファイルと一致しない。SYSTEM という名前のデフォルト・ユーザー・プロファイルがある。SYSTEM ユーザー・プロファイルに対して定義されているリソース限界グループがない。この場合は、デフォルト・リソース限界グループに対して設定されている限界に基づいて、データ・ソースへのアクセスが許可されます。

QMF カタログ・リソース限界グループへのユーザーの割り当て

ユーザーを QMF カタログ・ベースのリソース限界グループに割り当てるには、まずそのユーザーにユーザー・プロファイルを定義し、次いでそのユーザー・プロファイルをリソース限界グループに割り当てる必要があります。

このタスクについて

ユーザー・プロファイルまたはリソース限界グループを作成する順番はどちらが先でもかまいません。ユーザー情報を先に作成してからリソース限界グループを作成することもできます。あるいは、リソース限界グループを先に作成してからユーザー情報を作成することもできます。このような柔軟性が備えられているのは、ユーザー情報とリソース限界グループの割り当ての作成と編集というものが、組織のニーズの変化に伴って継続していく作業であるためです。

注: 指定の <NULL> 値または <WINDOWS> 値を ENVIRONMENT 列に持つユーザー、および「設定」の「言語ユーザー・インターフェース (Language User Interface)」の値と一致する値を TRANSLATION 列に持つユーザーは、リソース限界グループに割り当てることができます。詳しくは、216 ページの『使用する QMF カタログ・ユーザー・プロファイルの決定』を参照してください。

QMF カタログ・リソース限界グループにユーザーを割り当てるには、以下のようにします。

手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」ビューから、データ・ソースを右クリックします。ポップアップ・メニューで「プロパティ」を選択します。「[データ・ソース] のプロパティ」ウィンドウが開きます。「リソース限界」フォルダーをクリックします。「リソース限界」ウィンドウが開きます。これには 2 つのページがあります。「リソース限界」タブをクリックします。「リスト最新表示」をクリックします。選択可能なリソース限界グループのリストから、リソ

ース限界グループを選択します。「割り当て」をクリックします。選択したリソース限界グループが「デフォルト」でない場合は、「[リソース限界グループ名]へのユーザー・プロファイルの割り当て」ウィンドウが開きます。

2. 「リスト最新表示」をクリックします。データ・ソースに対して作成され、割り当てに使用できるユーザー・プロファイルが、「割り当てなし」リスト・ボックスにリストされます。このリストには、SYSTEM ユーザー・プロファイルも含まれます。「作成者」の一致するユーザー・プロファイルを表示」フィールドを使用して、リストされているユーザー・プロファイルを変更できます。このフィールドには、特定ユーザー・プロファイルのユーザー ID、またはワイルドカード文字を指定できます。パーセント記号 (%) を指定すると、データ・ソースに対して作成されているすべてのユーザー・プロファイルのリストが生成されます。「リスト最新表示」をクリックして検索を開始します。RDBI.PROFILE_VIEW に保管されているユーザー・プロファイルのうち、入力した値と一致するすべてのプロファイルが検出されます。ユーザー・プロファイルは RDBI.PROFILE_TABLE または Q.PROFILES から取り込むことができます。RDBI.PROFILE_TABLE 表や Q.PROFILES 表について詳しくは、97 ページの『QMF カタログのデータベース・オブジェクトの作成』を参照してください。選択されたリソース限界グループに割り当てられているユーザーは、「割り当て済み」リスト・ボックスにリストされます。
3. リソース限界グループに割り当てるユーザー ID が「割り当てなし」リストにリストされていない場合は、「新規作成」をクリックして新規ユーザー・プロファイルを作成します。「新規プロファイル」ウィンドウが開きます。「作成者」フィールドに、ユーザーの有効なユーザー ID を入力します。「OK」をクリックします。「新規プロファイル」ウィンドウが閉じます。新しいユーザー・プロファイルが作成されて、リソース限界グループに割り当てられます。制御が「[リソース限界グループ名]へのユーザー・プロファイルの割り当て」ウィンドウに戻ります。
4. 「割り当てなし」リストから、リソース限界グループに割り当てるユーザーを選択します。「割り当て」をクリックします。このユーザーが「割り当て済み」リストに移動されます。すべてのユーザーを「割り当てなし」リストから「割り当て済み」リストに移動させるには、「すべて割り当て」をクリックします。
5. リソース限界グループからユーザーを除去する場合は、「割り当て済み」リストからそのユーザーを選択します。「割り当て解除」をクリックします。このユーザーが「割り当てなし」リストに移動されます。「割り当て済み」リストからすべてのユーザーを除去し、それらを「割り当てなし」リストへ移動する場合は、「すべて割り当て解除」をクリックします。
6. 「OK」をクリックします。リソース限界グループのユーザー割り当てへの追加または変更が保存されます。

タスクの結果

注: さらに、「リソース限界」ウィンドウの「ユーザー・プロファイル」ページから、リソース限界グループへのユーザー割り当て、およびユーザー・プロファイルの作成、編集、および削除を行うこともできます。

ユーザー・プロファイルの管理

QMF カタログ・ベースのリソース限界グループに割り当てるすべてのユーザーには、ユーザー・プロファイルが作成されている必要があります。

このタスクについて

ユーザー・プロファイルを作成、編集、または削除したり、QMF カタログ・リソース限界グループに対して作成した新規ユーザー・プロファイルを割り当てたりするには、「リソース限界」ウィンドウの「ユーザー・プロファイル」ページを使用できます。

ユーザー・プロファイルを作成、編集、または削除するには以下のようにします。

手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」ビューから、データ・ソースを右クリックします。ポップアップ・メニューで「プロパティ」を選択します。「[データ・ソース] のプロパティ」ウィンドウが開きます。「リソース限界」フォルダーをクリックします。「リソース限界」ウィンドウが開きます。これには 2 つのページがあります。「ユーザー・プロファイル」タブをクリックします。
2. 「リスト最新表示」をクリックします。データ・ソースで作成され、最新の検索条件に適合したユーザー・プロファイルが、「ユーザー・プロファイル」リスト・ボックスにリストされます。このリストには、SYSTEM ユーザー・プロファイルも含まれます。「名前的一致するユーザー・プロファイルを表示する」フィールドを使用すると、リストされるユーザー・プロファイルを変更できます。このフィールドには、特定ユーザー・プロファイルのユーザー ID、またはワイルドカード文字を指定できます。パーセント記号 (%) を指定すると、データ・ソースに対して作成されているすべてのユーザー・プロファイルのリストが生成されます。「リスト最新表示」をクリックして検索を開始します。
3. 新規ユーザー・プロファイルを追加するには、「追加」をクリックします。「ユーザー・プロファイル」ウィンドウが開きます。フィールド値を指定して、「OK」をクリックします。ユーザー・プロファイルが作成され、指定したリソース・グループに割り当てられます。「ユーザー・プロファイル」ダイアログに制御が戻ります。
4. ユーザー・プロファイルを編集するには、変更するユーザー・プロファイルを選択します。「編集」をクリックします。「ユーザー・プロファイル」ウィンドウが開きます。フィールド値を変更して、「OK」をクリックします。変更が保存され、「ユーザー・プロファイル」ページに制御が戻ります。
5. ユーザー・プロファイルを削除するには、削除するユーザー・プロファイルを選択します。「削除」をクリックします。ユーザー・プロファイルがプロファイル表から削除されます。

注: 制限付き登録の使用を選択している場合は、SYSTEM ユーザー・プロファイルの削除する必要があります。

6. 「適用」または「OK」をクリックします。ユーザー・プロファイルに加えた変更が保存されます。

ユーザー・プロファイルの作成

新規ユーザー・プロファイルの作成または既存のユーザー・プロファイルの編集は、「ユーザー・プロファイル」ダイアログを使用して実行できます。

このタスクについて

新規ユーザー・プロファイルを作成する場合、同じウィンドウからその新規ユーザー・プロファイルをリソース限界グループに割り当てることができます。ユーザー・プロファイルを編集する場合は、割り当て先のリソース限界グループを変更することもできます。どちらの場合も、選択するリソース限界グループはすでに作成されている必要があります。

新規ユーザー・プロファイルを作成するか、または既存のユーザー・プロファイルを編集するには、以下のようにします。

手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」ビューから、**QMF for Workstation** を使用して、データ・ソースを右クリックします。ポップアップ・メニューで「プロパティ」を選択します。「[データ・ソース] のプロパティ」ダイアログが開きます。「リソース限界」フォルダーをクリックします。「リソース限界」ウィンドウが開きます。これには 2 つのページがあります。「ユーザー・プロファイル」タブをクリックします。「追加」をクリックします。「ユーザー・プロファイル」ウィンドウが開きます。
2. 「作成者」フィールドに、ユーザー・プロファイルに有効なユーザー ID を指定します。
3. 「リソース・グループ」フィールドで、ユーザー・プロファイルがメンバーになるリソース限界グループを指定します。特に指定しない場合、すべての新規ユーザー・プロファイルは、**SYSTEM** というデフォルトのリソース限界グループに自動的に割り当てられます。このデータ・ソースに定義されているリソース限界グループのリストを参照するには、フィールドの右にある 3 つの点が付いたボタンをクリックします。「リソース制限グループ」ウィンドウが開きます。「リソース限界グループ」ウィンドウから、ユーザー・プロファイルのリソース限界グループを選択します。「**OK**」をクリックします。ユーザー・プロファイルが、選択したリソース限界グループに割り当てられます。「ユーザー・プロファイル」ウィンドウに制御が戻ります。
4. 「スペース」フィールドで、このユーザーが **SAVE DATA** コマンドを使用してデータを保存するときに使用される表スペース名を指定します。このフィールドは、「データの保存」タブにあるリソース限界設定「デフォルト表スペースをオーバーライド可能にする」がチェックされ、ユーザーがデフォルトの表スペース名を固有の名前でオーバーライドできるようになっている場合にのみ適用されます。「**OK**」をクリックします。ユーザー・プロファイルが作成されます。

ユーザー・プロファイルを割り当てるリソース限界グループの選択

データ・ソースで定義されているリソース限界グループのリストを表示するには、「リソース限界グループ」ウィンドウを使用します。

このタスクについて

使用可能なグループのリストから、作成または編集するユーザー・プロファイルを割り当てるリソース限界グループを選択できます。

ユーザー・プロファイルのリソース限界グループを選択するには、以下のようにします。

手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」ビューから、QMF for Workstation を使用して、データ・ソースを右クリックします。ポップアップ・メニューで「プロパティ」を選択します。「[データ・ソース] のプロパティ」ウィンドウが開きます。「リソース限界」フォルダーをクリックします。「リソース限界」ウィンドウが開きます。これには 2 つのページがあります。「ユーザー・プロファイル」タブをクリックします。「追加」をクリックします。「ユーザー・プロファイル」ウィンドウが開きます。3 つの点が付いたボタンをクリックします。「リソース限界グループ」ウィンドウが開きます。
2. 「リソース限界グループ」リストから、ユーザー・プロファイルを割り当てるリソース限界グループを選択します。
3. 「OK」をクリックします。ユーザー・プロファイルが、選択したリソース限界グループに割り当てられます。「リソース限界グループ」ウィンドウが閉じます。「ユーザー・プロファイル」ウィンドウに制御が戻ります。

第 24 章 リポジトリの管理

管理者は、共有リポジトリと、照会および報告書作成環境の継続的な保守に責任を持ちます。

以下のタスクに、リポジトリの保守についての説明があります。

リポジトリの削除

リポジトリは共有リポジトリ・ストレージから削除できます。

このタスクについて

リポジトリを削除するには:

手順

1. 「リポジトリ」ビューは通常は開いており、「リポジトリ・エクスプローラー」ビューの次に、左側に配置されています。閉じている場合は、「表示」メニューから「リポジトリ」を選択することで、「リポジトリ」ビューを開くことができます。
2. 「リポジトリ」ビューから、削除するリポジトリを右クリックします。
3. ポップアップ・メニューから「リポジトリの削除」を選択します。確認メッセージが出されます。リポジトリを本当に削除する場合は、「OK」をクリックします。

共有リポジトリ・ストレージ・プロパティの編集

共有リポジトリ・ストレージのプロパティは編集することができます。

このタスクについて

共有リポジトリ・ストレージのプロパティを編集するには、以下のようになります。

手順

1. 「リポジトリ」ビューは通常は開いており、「リポジトリ・エクスプローラー」ビューの次に、左側に配置されています。閉じている場合は、「表示」メニューから「リポジトリ」を選択することで、「リポジトリ」ビューを開くことができます。
2. 「リポジトリ」ビューから、プロパティを変更する共有リポジトリ・ストレージを右クリックします。ポップアップ・メニューから、「編集」を選択します。複数ページの「リポジトリ・ストレージの編集」ウィンドウが開き、変更可能なプロパティを表示します。
3. JDBC 接続またはユーザー・ログイン情報を変更するには、「接続」を選択します。「接続」ページが開きます。このページから、任意の JDBC 接続またはユーザー・ログイン情報を変更できます。

4. リポジトリ・ストレージ・データベース・オブジェクトを更新するには、「オブジェクト」を選択します。「オブジェクト」ページが開きます。このページから、リポジトリ・ストレージ・データベース・オブジェクトを更新できます。
5. 「保護」を選択して、リポジトリ・ストレージ表の保護状況を変更します。「保護」ページが開きます。このページから、リポジトリ・ストレージ表の保護状況に任意の変更を加え、その表へのアクセス権をユーザーに付与したり取り消したりすることができます。
 - 無保護: 無保護モードでリポジトリに接続することを指定します。このモードでは、リポジトリのあるリポジトリ・ストレージ表への動的照会アクセスが可能です。リポジトリ・ストレージ表が接続されているユーザー ID に対して制限されている場合、接続は失敗します。リポジトリ・ストレージ表が接続されているユーザー ID に対して制限されていない場合、接続が確立して、動的照会が処理を行います。
 - 自動: ストアド・プロシージャまたは静的 SQL パッケージの集合が使用可能かどうかに応じて、保護モードが自動的に選択されるように指定します。使用可能な場合、リポジトリのあるリポジトリ・ストレージ表へのアクセスは、指定したストアド・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを使用して行われます。ストアド・プロシージャまたは静的 SQL パッケージが使用不可の場合は、動的照会アクセス (無保護モード) が使用されます。
 - 保護: 保護モードでリポジトリに接続することを指定します。このモードでは、リポジトリのあるリポジトリ・ストレージ表に、指定したストアド・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを使用してアクセスします。指定されたストアド・プロシージャまたは静的 SQL パッケージのセットが使用可能ではない場合、接続は失敗します。
6. 「OK」をクリックします。「リポジトリ・ストレージの編集」ウィンドウが閉じます。行った変更が適用されます。

接続パラメーターおよびユーザー・ログイン情報の編集

共有リポジトリ・ストレージへ接続するために使用する接続情報およびユーザー・ログイン情報を編集するには、「リポジトリ・ストレージの編集」ウィンドウの「接続」ページを使用します。

このタスクについて

共有リポジトリ・ストレージの接続パラメーターおよびログイン・ユーザー情報を編集するには、以下のようにします。

手順

1. 「共有リポジトリ・ストレージの編集」ウィンドウの「接続」ページを開きます。
2. 「JDBC ドライバー」フィールドには、リポジトリ・ストレージをホストするデータベースのアクセスに使用する JDBC ドライバーのライブラリーを指定します。JDBC ドライバー情報の設定時に定義したライブラリーのドロップダウン・リストから選択できます。このフィールドの右側にある省略符号 (...) を使用すれば、「JDBC ドライバーの選択」ダイアログを開くことができます。このダイアログでは、追加の JDBC ドライバー・ライブラリーを作成できます。

3. 「**JDBC URL**」リストで、接続先リポジトリのあるリポジトリ・ストレージをホストするデータベースを指す **URL** を指定します。

この **URL** の形式はリストに表示できます。

注: また、「**URL テンプレートによる URL の作成**」ダイアログ・ボックスを使用すれば、正しいストリングを形成できます。

「**URL テンプレートによる URL の作成**」ダイアログ・ボックスを開くには、「**URL の作成**」をクリックします。 **JDBC URL** ドロップダウン・リストからテンプレートを選択します。表でサーバー、ポート、およびデータベース情報を指定して、「**OK**」をクリックします。結果の **URL** ストリングが **JDBC URL** リストに追加されます。

4. 「**拡張**」をクリックして、リポジトリ・ストレージ表をホストするデータベースのために使用されるドライバー特定の接続ストリング・キーワードおよびその値を指定します。使用可能な拡張プロパティのリストは、使用されるドライバーのタイプと、そのドライバーのバージョンの両方によって変わります。選択したデータベース・ドライバーに必要なキーワードについて詳しくは、当該ドライバーの資料を参照してください。

注: **DB2 Type 4 UDB** ドライバーおよび **DB2 Universal JDBC** ドライバーの場合、拡張 **SQL 例外エラー・メッセージ**を受け取るには、「**拡張 JDBC 設定**」ウィンドウの「**retrieveMessagesFromServerOnGetMessage**」オプションにチェック・マークを付けます。

5. 「**ユーザー情報**」ダイアログで「**ユーザー ID とパスワードが必要**」を選択し、リポジトリ・ストレージをホストしているデータベースにアクセスするときに **ユーザー ID** と **パスワード** を使用することを要求します。リポジトリ・ストレージをホストしているデータベースが **ユーザー ID** および **パスワード** を使用しないアクセスを許可している場合、このオプションを選択するとその許可がオーバーライドされて、リポジトリ・ストレージ表へのアクセスに **ユーザー ID** および **パスワード** が必要になります。
6. 指定した **ユーザー ID** を使用してデータベースに接続するたびにこの **パスワード** を使用するには、「**このパスワードを保存**」チェック・ボックスを選択します。
7. 「**接続のテスト**」をクリックして、データベースへの接続をテストします。正しくない情報を指定した場合は、接続できません。
8. リポジトリ・ストレージ・プロパティへの変更が完了した場合は、「**OK**」をクリックします。追加の変更を加える場合は、加える変更に応じて「**オブジェクト**」タブまたは「**保護**」タブをクリックします。

データベース・オブジェクトの更新

リポジトリ・ストレージに必要なデータベース・オブジェクトの更新は、「共有リポジトリ・ストレージの編集」ダイアログの「**オブジェクト**」ページを使用して行います。

このタスクについて

データベースにあるリポジトリ・ストレージ・オブジェクトを更新するには、以下のようにします。

手順

1. 「リポジトリ・ストレージの編集」ウィンドウの「オブジェクト」ページを開きます。
2. Db2 データベースを操作する場合は、オプションで所有者名を「所有者 ID」フィールドに入力できます。この所有者 ID により、SYSADM 権限なしのログインで操作を行うユーザーに管理者特権が付与されます。
3. 「更新」をクリックして、リポジトリ・ストレージ・オブジェクトが作成済みであるのか、またはリポジトリ・ストレージ・オブジェクトを更新する必要があるのかを確認します。オブジェクトの状況に応じて、以下のように続行します。
 - すべてのオブジェクトが変更されていない場合は、メッセージが出されません。メッセージ・ダイアログの「OK」をクリックします。
 - オブジェクトの更新が必要な場合は、必要なリポジトリ・ストレージ表の更新に使用する SQL ステートメントをリストする「リポジトリ・ストレージ表の更新」ページが開きます。このページの説明に従って、SQL ステートメントを変更することができます。
4. リポジトリ・ストレージ・プロパティへの変更が完了した場合は、「OK」をクリックします。追加の変更を加える場合は、加える変更に応じて「接続」タブまたは「保護」タブをクリックします。

保護オプションの編集

リポジトリ・ストレージ表の保護オプションの更新は、「共有リポジトリ・ストレージの編集」ウィンドウの「保護」ページを使用して行います。

このタスクについて

リポジトリ・ストレージ表の保護オプションを更新するには、以下のようにします。

手順

1. 「共有リポジトリ・ストレージの編集」ウィンドウの「保護」ページを開きます。
2. 「保護方式」チェック・ボックスの現在の状況に応じて、以下のいずれかの方法でリポジトリ・ストレージ表の保護状況を変更できます。
 - リポジトリ・ストレージ表の保護状況を除去するには、「保護方式」チェック・ボックスをクリアします。つまり、すべてのユーザーは、リポジトリ・ストレージ表にアクセスでき、どの表でも変更できる、ということになります。
 - リポジトリ・ストレージ表を保護することを指定する場合は、「保護方式」チェック・ボックスを選択します。保護方式の指定に使用するフィールドが使用可能になります。
3. 以下のいずれかの保護方式を選択します。

- 「ストアード・プロシージャ」を選択し、リポジトリ・ストレージ表を保護するためにストアード・プロシージャを使用することを指定します。このオプションは、リポジトリ・ストレージ表が以下のデータベースにある場合に選択できます。
 - Informix
 - DB2 UDB LUW V9 以降
 - DB2 iSeries (IBM Toolbox JDBC ドライバーを使用してアクセスする場合)
 - Microsoft SQL Server
 - 「静的 SQL パッケージ」を選択し、リポジトリ・ストレージ表を保護するために静的 SQL パッケージを使用することを指定します。このオプションは、リポジトリ・ストレージ表が、JDBC 用 IBM DB2 Universal ドライバーを使用して接続する Db2 データベース上にある場合にのみ選択できます。
4. ストアード・プロシージャや静的 SQL パッケージの集合の識別に使用する名前を「集合 ID」フィールドに入力するか、ドロップダウン・リストから選択します。
 5. Db2 データベースを操作する場合は、オプションで所有者名を「所有者 ID」フィールドに入力できます。この所有者 ID により、SYSADM 権限なしのログインで操作を行うユーザーに管理者特権が付与されます。
 6. 「作成」をクリックします。ストアード・プロシージャが作成されるか、静的 SQL パッケージがバインドされます。いずれかの処理が成功したことを通知するメッセージが出されます。「削除」ボタンを使用して、ストアード・プロシージャやパッケージの集合を除去することもできます。
 7. このデータベース上のリポジトリ・ストレージ表に対してストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを実行する許可をどのユーザーに付与するかを指定します。すべてのユーザーに許可を付与するには、「ユーザー ID」フィールドに PUBLIC と入力して、「付与」をクリックします。特定のユーザーに許可を付与するには、フィールドにユーザー ID を入力し、「付与」をクリックします。選択されたユーザー ID にストアード・プロシージャまたはパッケージを実行するための許可が付与されたことを通知するメッセージが出されます。

オプションとして、「ユーザー ID」リスト・ボックスにリストされたユーザーのストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを実行する許可を取り消すことができます。1 人以上のユーザーの許可を取り消すには、1 つ以上のユーザー ID を強調表示して、「取り消し」をクリックします。ストアード・プロシージャや静的 SQL パッケージを実行する許可が、選択したユーザー ID から取り消されたことを通知するメッセージが出されます。
 8. リポジトリ・ストレージ・プロパティへの変更が完了した場合は、「OK」をクリックします。追加の変更を加える場合は、加える変更に応じて「オブジェクト」タブまたは「接続」タブをクリックします。

QMF カタログ・プラグイン・プロパティの編集

「QMF カタログ・プラグイン・パラメーター」ダイアログを使用して、データ・ソースの QMF カタログ・プラグイン・パラメーターを変更または更新します。

このタスクについて

QMF カタログ・プラグイン・プロパティを編集するには、以下のようになります。

手順

1. 「リポジトリ」ビューは通常は開いており、「リポジトリ・エクスプローラー」ビューの次に、左側に配置されています。閉じている場合は、「表示」メニューから「リポジトリ」を選択することで、「リポジトリ」ビューを開くことができます。
2. 「リポジトリ」ビューから、QMF カタログ・プラグイン・プロパティを変更するデータ・ソースを右クリックします。ポップアップ・メニューから、「プロパティ」を選択します。「プロパティ」ウィンドウが開きます。「プラグイン」を選択します。「プラグイン」ウィンドウが開きます。QMF カタログ・プラグインがこのデータ・ソースに対して使用可能になっている（「プラグインを使用可能にする」チェック・ボックスが選択されている）場合は、「パラメーター」ボタンが使用可能です。「パラメーター」をクリックします。「QMF カタログ・プラグイン・パラメーター」ウィンドウが開きます。
3. QMF カタログ表を更新するには、「カタログ表」を選択します。「カタログ表」ページが開きます。QMF カタログ表はこのページから更新できます。
4. QMF カタログ表の保護状況を変更するには、「保護」を選択します。「保護」ページが開きます。このページから、QMF カタログ表の保護状況に任意の変更を加え、表へのアクセス権をユーザーに付与したり取り消したりすることができます。
5. 現行のデータ・ソースが使用する QMF カタログを変更するには、「カタログ」を選択します。「カタログ」ページが開きます。このデータ・ソースに対して選択された QMF カタログに、任意の変更を加えることができます。
6. 現行のデータ・ソース用にサンプル表のセットを作成するには、「サンプル表」を選択します。「サンプル表」ページが開きます。このページからサンプル表を作成することができます。
7. 「OK」をクリックします。「QMF カタログ・プラグイン・パラメーターの編集」ウィンドウが閉じます。行った変更が適用されます。

QMF カタログ表の更新

データ・ソースの QMF カタログ表を更新するには、「QMF カタログ・プラグイン・パラメーター」ウィンドウの「カタログ表」ページを使用します。

このタスクについて

新バージョンの QMF がインストールされている場合、または QMF カタログを、短い名前をサポートするカタログから長い名前をサポートするカタログへ変更する場合は、QMF カタログ表を更新します。

手順

1. 「QMF カタログ・プラグイン・パラメーター」ウィンドウの「カタログ表」ページを開きます。
2. オブジェクトの短い名前をサポートするように QMF カタログ表のセットを更新するには、「短い名前をサポートするようにカタログ表を更新」を選択します。QMF がデータ・ソースで既存の QMF カタログ表がないかを検査し、必要に応じて既存の表を更新、または既存の表に追加します。表の作成に使用される SQL ステートメントは確認および変更できます。既存のカタログ表内のすべてのデータは保持されます。

このオプションは、以前のバージョンの QMF からアップグレードするときに選択します。これにより、既存の QMF カタログ表で引き続きオブジェクトの短い名前のみがサポートされます。

3. オブジェクトの長い名前をサポートするように QMF カタログ表のセットを更新するには、「長い名前をサポートするようにカタログ表を更新」を選択します。QMF がデータ・ソースで既存の QMF カタログ表がないかを検査し、必要に応じて既存の表を更新、または既存の表に追加します。表の作成に使用される SQL ステートメントは確認および変更できます。既存のカタログ表内のすべてのデータは保持されます。

このオプションは、以前のバージョンの QMF からアップグレードするときに選択します。これにより、既存の QMF カタログ表で引き続きオブジェクトの長い名前がサポートされます。また、QMF カタログ表が短い名前ではなく長い名前をサポートするように更新する場合も、このオプションを選択します。短い名前を使用する既存の QMF カタログ表セットがデータ・ソースで検出されると、それらの表は長い名前をサポートするように変換されます。

注: このオプションを選択するには、データ・ソースが長い名前をサポートしていなければなりません。QMF は、データ・ソースが長い名前をサポートしているかどうかを検査します。

ヒント: QMF カタログ表が更新されると、QMF は必要なオブジェクトが存在しているかどうかを検査し、データベース内の適切なロケーションにドロップされたオブジェクトを復元します。

QMF カタログとそのプロパティ値を作成するときにデータベースに生成されるオブジェクトの名前は RDBI.SERVER_INFO 表に保管されます。データベース管理者が、データベースに含まれる一部のオブジェクトの名前を変更すると、RDBI.SERVER_INFO にある情報は無効になります。QMF は、更新処理時に、名前変更されたオブジェクトを検出し、そのオブジェクトの現行名を RDBI.SERVER_INFO 表に保存します。更新処理時に RDBI.SERVER_INFO 表に対して行われた変更はログ・ファイルに表示されます。

4. 「OK」をクリックして、「QMF カタログ・プラグイン・パラメーター」ウィンドウを閉じます。QMF カタログ・プラグイン・パラメーターに対する変更がすべて保存されます。

QMF カタログ表の保護状況の更新

QMF カタログ表の保護オプションを更新するには、「QMF カタログ・プラグイン・パラメーター」ウィンドウの「保護」ページを使用します。

このタスクについて

ご使用のバージョンの QMF を更新する場合、表に指定されている保護のタイプを変更する場合、あるいは最初に指定したストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを変更する場合は、QMF カタログ表保護を更新します。さらに、QMF カタログ・パッケージを使用するためのユーザー許可をいつでも変更できます。

手順

1. 「QMF カタログ・プラグイン・パラメーター」ウィンドウの「保護」ページを開きます。
2. QMF カタログ表に適用される保護のタイプを変更するには、以下のいずれかを「保護モードを使用して接続」ラジオ・グループから選択します。
 - **使用しない (Never):** このオプションを選択すると、QMF カタログ表に保護を適用しないことを指定します。この方式では、QMF カタログ表が無許可で使用できる状態になります。保護がないので、QMF カタログ表には任意のユーザーが動的照会を使用してアクセスできます。データベース管理者がユーザーにデータベース上に存在する QMF カタログにアクセスする許可を付与すると、その許可は機密情報が保管されている QMF カタログ内の表を含む、QMF カタログ全体に拡張されます。
 - **可能な場合:** このオプションを選択すると、ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージのどちらかがデータ・ソースで使用可能な場合には、それを使用して QMF カタログ表が保護されることを指定します。ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを実行できるユーザーを指定します。ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージのセットが使用可能ではない場合、QMF カタログ表へのアクセスは無保護の場合と同じになります。
 - **常時 (Always):** このオプションを選択すると、QMF カタログ表が、ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージのどちらかを使用して常に保護されることを指定します。ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを実行できるユーザーを指定します。ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージのセットが使用可能ではない場合、QMF カタログ表にアクセスする照会は失敗します。
3. 「可能な場合」または「常時」を「保護モードを使用して接続」ラジオ・グループで選択した場合、「保護」チェック・ボックスが使用可能になります。
4. 以下のいずれかの保護方式を選択します。
 - 「ストアード・プロシージャ」を選択し、QMF カタログ表を保護するためにストアード・プロシージャを使用することを指定します。このオプションは、リポジトリ・ストレージ表が以下のデータベースにある場合に選択できます。
 - DB2 UDB LUW V9 以降

- DB2 iSeries (IBM Toolbox JDBC ドライバーを使用してアクセスする場合)
 - 「静的 SQL パッケージ」を選択し、QMF カタログ表を保護するために静的 SQL パッケージを使用することを指定します。このオプションは、リポジトリ・ストレージ表が、JDBC 用 IBM DB2 Universal ドライバーを使用して接続する Db2 データベース上にある場合にのみ選択できます。
5. ストアド・プロシージャや静的 SQL パッケージの集合の識別に使用する名前を「集合 ID」フィールドに入力するか、ドロップダウン・リストから選択します。
 6. Db2 データベースを操作する場合は、オプションで所有者名を「所有者 ID」フィールドに入力できます。この所有者 ID により、SYSADM 権限なしのログインで操作を行うユーザーに管理者特権が付与されます。
 7. 「作成」をクリックします。ストアド・プロシージャが作成されるか、静的 SQL パッケージがバインドされます。いずれかの処理が成功したことを通知するメッセージが出されます。「削除」を使用して、ストアド・プロシージャや静的パッケージの集合を除去することもできます。
 8. このデータベースで QMF カタログ表のストアド・プロシージャや静的 SQL パッケージを実行する許可をどのユーザーに付与するかを指定する必要があります。すべてのユーザーに許可を付与するには、「ユーザー ID」リストの「PUBLIC」を強調表示して、「付与」をクリックします。特定のユーザーに許可を付与するには、フィールドにユーザー ID を入力し、1 つ以上のユーザー ID を強調表示して、「付与」をクリックします。選択されたユーザー ID にストアド・プロシージャまたは静的パッケージを実行するための許可が付与されたことを通知するメッセージが出されます。オプションとして、「ユーザー ID」リスト・ボックスにリストされたユーザーのストアド・プロシージャまたは SQL パッケージを実行する許可を取り消すことができます。1 人以上のユーザーの許可を取り消すには、1 つ以上のユーザー ID を強調表示して、「取り消し」をクリックします。ストアド・プロシージャや静的 SQL パッケージを実行する許可が、選択したユーザー ID から取り消されたことを通知するメッセージが出されます。
 9. 「OK」をクリックして、「QMF カタログ・プラグイン・パラメーター」ウィンドウを閉じます。QMF カタログ・プラグイン・パラメーターに対する変更がすべて保存されます。

データ・ソースに別の QMF カタログを選択

データ・ソースに別の QMF カタログを選択するには、「QMF カタログ・プラグイン・パラメーター」ダイアログの「カタログ」ページを使用します。

このタスクについて

データ・ソースに別のカタログを選択するには:

手順

1. 「QMF カタログ・プラグイン・パラメーター」ウィンドウの「カタログ」ページを開きます。

2. 現在リポジトリに接続されている使用可能なデータ・ソースの「データ・ソース名」ドロップダウン・リストから、使用する QMF カタログをホストするデータ・ソースを選択します。
3. 「データ・ソース名」で選択したデータ・ソースで使用可能な QMF カタログのリストから、データ・ソースで使用する QMF カタログを選択します。QMF カタログがリストされていない場合、「追加」アイコンを使用して、新規拡張 QMF カタログを追加できます。また、「編集」アイコンを使用して既存の拡張 QMF カタログのプロパティを編集したり、「削除」アイコンを使用して既存の拡張 QMF カタログを削除したりすることもできます。
4. 「OK」をクリックして、「QMF カタログ・プラグイン・パラメーター」ウィンドウを閉じます。QMF カタログ・プラグイン・パラメーターに対する変更がすべて保存されます。

第 25 章 サンプルの表の使用

QMF for Workstation および QMF for WebSphere アプリケーションには 9 つのサンプルの表が付属しています。

これらのサンプルの表では、架空の電子部品製造会社についての情報が使われています。これらは、QMF for Workstation または QMF for WebSphere の使用方法を学ぶ際に役立ちます。サンプル表は、データ・ソースの QMF カタログを使用可能にした場合にのみ使用できます。

サンプルの表のアクティブ化

サンプル表はアクティブ化する必要があります。

このタスクについて

サンプル表をアクティブするには:

手順

1. 「リポジトリ・エクスプローラー」で、QMF カタログにアクセスするように構成されているデータ・ソースを右クリックします。ポップアップ・メニューで「プロパティ」を選択します。「[データ・ソース] のプロパティ」ダイアログが開きます。「プラグイン」フォルダーをクリックします。「プラグイン」ダイアログ・ボックスが開きます。プロパティ・ツリーで「プラグイン」を選択します。「プラグインを使用可能にする」のチェック・ボックスが選択されていることを確認します。「パラメーター」ボタンをクリックします。「QMF カタログ・プラグイン・パラメーター」ウィンドウが開きます。「サンプルの表」タブをクリックします。「サンプル表」ウィンドウが開きます。
2. 「サンプル表」ダイアログ・ボックスで、「作成」をクリックします。
3. 新しい表を作成すると既存のサンプル表が上書きされることを告げるメッセージが表示されたら、確認メッセージに対して「はい」をクリックします。
4. ダイアログ・ウィンドウの下部のステータス・バーに、作成中のサンプルの表が表示されます。
5. 「OK」をクリックして、「QMF カタログ・プラグイン・パラメーター」ダイアログ・ボックスを閉じます。

サンプルの表の名前と説明

このリストは、QMF アプリケーションに付属している各サンプル表の名前の一覧です。

以下のサンプル表が用意されています。

Q.APPLICANT

採用候補者

Q.INTERVIEW

採用候補者の面接スケジュール

Q.ORG

部課の構成 (部門内)

Q.PARTS

当社が提供する資材

Q.PRODUCTS

当社が生産する製品

Q.PROJECT

会社のプロジェクト

Q.STAFF

会社の従業員

Q.SALES

当社の営業情報

Q.SUPPLIER

当社に資材を提供する取引先

第 26 章 オブジェクト・トラッキング報告書の使用

オブジェクト・トラッキング報告書では、QMF for Workstation または QMF for WebSphere ユーザーによるオブジェクトの使用量に関する詳細情報と要約情報が示されます。

これらの情報を参考にして、潜在的な問題点を発見したり、リソース限界グループ・スケジュールのどの部分を変更する必要があるのかを判断することができます。オブジェクト・トラッキング報告書はデータ・ソース用に使用可能で、リポジトリまたは QMF カタログに基づくリソース限界を利用します。オブジェクトの使用量について報告するには、データ・ソースでのオブジェクト・トラッキングをアクティブ化する必要があります。

オブジェクト・トラッキングのアクティブ化

データ・ソースでのユーザーのオブジェクト使用状況を追跡するには、目的のリソース限界グループに対してオブジェクト・トラッキングを活動化する必要があります。

このタスクについて

リソース限界グループに対してデータ・ソースでのオブジェクト・トラッキングを活動化するには、リソース限界グループに対するスケジュールを定義または更新します。

注: ユーザー ID に必要な権限が与えられている場合は、QMF for Workstation または QMF for WebSphere を使用して明細および要約のトラッキング表を直接照会し、表に格納されているトラッキング情報を確認できます。

データ・ソースでのオブジェクト・トラッキングをアクティブ化するには:

手順

1. 「リポジトリ」または「リポジトリ・エクスプローラー」ビューのいずれかでデータ・ソースを右クリックします。ポップアップ・メニューで「プロパティ」を選択します。「[データ・ソース]のプロパティ」ウィンドウが開きます。「リソース限界」フォルダーをクリックします。「リソース限界」ウィンドウが開きます。これには 2 つのページがあります。「リソース限界」タブをクリックします。
2. 選択可能なリソース限界グループのリストから、リソース限界グループを選択します。「編集」をクリックします。「リソース限界グループの編集」ウィンドウが開きます。
3. このリソース限界グループに定義されたすべてのスケジュールが、「スケジュール・リスト」リスト・ボックスにリストされます。リソース限界グループのスケジュールを編集する場合は、「スケジュール・リスト」リスト・ボックスからスケジュールを選択し、「編集」をクリックします。「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウが開きます。

4. 「オブジェクト・トラッキング」タブを選択します。
5. アクティブ化したいオブジェクト・トラッキングのタイプにチェック・マークを付けます。次のような選択肢があります。
 - 要約オブジェクト・トラッキングを使用可能にする: 要約オブジェクト・トラッキングをアクティブ化するには、このチェック・ボックスを選択します。要約オブジェクト検査により、オブジェクトをトラッキングし、レコードに関連するアクションの要約レコードを保持します。
 - 明細オブジェクト・トラッキングを使用可能にする: 明細オブジェクト・トラッキングをアクティブ化するには、このチェック・ボックスを選択します。明細オブジェクト検査により、オブジェクトを使用して実行された各アクションの明細レコードを保持します。
 - 随時オブジェクト・トラッキングを使用可能にする: それぞれの随時 SQL 照会と、その照会の SQL テキストのレコードを保持するには、このチェック・ボックスを選択します。随時 オブジェクト・トラッキングを使用するには、「明細オブジェクト・トラッキング」をアクティブ化する必要があります。
 - SQL テキスト・トラッキングを使用可能にする: 各 SQL 照会の SQL テキストのレコードを保持するよう指定するには、このチェック・ボックスを選択します。SQL テキスト・トラッキングを使用するには、「明細オブジェクト・トラッキング」をアクティブ化する必要があります。
6. 「OK」をクリックします。

オブジェクト・トラッキング報告書の実行

オブジェクト・トラッキングをアクティブ化すると、任意の既存レポートの実行や、独自のレポートの作成が可能になります。

このタスクについて

オブジェクト・トラッキング報告書を実行するには、以下を実行します。

手順

1. 「リポジトリ」または「リポジトリ・エクスプローラー」ビューのいずれかでデータ・ソースを右クリックします。ポップアップ・メニューから「オブジェクト・トラッキング報告書」を選択します。「オブジェクト・トラッキング報告書」ウィンドウが開きます。
2. 選択可能なレポートのリストからレポートを選択し、「実行」をクリックします。選択可能なレポートのリストには、アプリケーションに用意されている標準のオブジェクト・トラッキング報告書、およびユーザーが追加したカスタム・オブジェクト・トラッキング報告書が表示されます。選択可能な標準のオブジェクト・トラッキング報告書は以下のとおりです。
 - ユーザーごとのキャンセル要約: この報告書は、照会がキャンセルされた回数が最も多いユーザーを示します。キャンセル率が高いユーザーには、追加のトレーニングまたはこれまでより高いレベルのリソース権限が必要となる可能性があります。

- 単一ユーザーのキャンセル詳細: この報告書は、特定のユーザーのキャンセルされた照会についての詳細情報を提供します。この情報には、照会名、SQL テキスト、およびキャンセルの理由が含まれます。
 - 照会ごとのパフォーマンス要約 (最大): この報告書は、照会のパフォーマンス・データを示します。このデータには、照会の最大経過時間と実行回数が含まれます。この報告書は降順にソートされ、リソース使用量が最も多い照会が目立つようになっています。
 - 照会ごとのパフォーマンス要約 (平均): この報告書は、照会のパフォーマンス・データを示します。このデータには、平均経過時間と実行回数が含まれます。この報告書は降順にソートされ、リソース使用量が最も多い照会が目立つようになっています。
 - 単一照会のパフォーマンス要約 (累積): この報告書では、特定の照会を実行した回数が最も多いユーザーと、照会の経過時間が示されます。問題のある照会が識別されたら、この報告書を使用して、その照会の実行回数の最も多いユーザーを判別してください。
 - 単一照会のパフォーマンス詳細: この報告書は、実行された各照会の詳細な統計を示します。実行された各照会の経過時間や取り出されたバイト数などのパフォーマンス情報が提供されます。
 - 単一ユーザーのパフォーマンス・プロファイル: この報告書は、ユーザーが実行した照会と、それらの照会で使用されたリソースを示します。この報告書は降順にソートされ、リソース使用量が最も多い照会が目立つようになっています。
 - ユーザーごとのパフォーマンス要約 (累積): この報告書は、QMF の使用度とリソース使用量が最も多いユーザーを示します。
 - ユーザーごとの時間枠パフォーマンス要約 (累積): この報告書は、ある期間内で QMF の使用度とリソース使用量が最も多かったユーザーを示します。
 - リポジトリー・ユーザーごとのキャンセル要約: この報告書は、リポジトリーに保管された照会がキャンセルされた頻度が最も高いユーザーを示します。キャンセル率が高いユーザーには、追加のトレーニングまたはこれまでより高いレベルのリソース権限が必要となる可能性があります。
 - リポジトリー照会ごとのパフォーマンス要約 (最大): この報告書は、リポジトリーに保管された照会のパフォーマンス・データを示します。このデータには、照会の最大経過時間と実行回数が含まれます。この報告書は降順にソートされ、リソース使用量が最も多い照会が目立つようになっています。
 - リポジトリー照会ごとのパフォーマンス要約 (平均): この報告書は、リポジトリーに保管された照会のパフォーマンス・データを示します。このデータには、照会の平均経過時間と実行回数が含まれます。この報告書は降順にソートされ、リソース使用量が最も多い照会が目立つようになっています。
 - リポジトリー・ユーザーごとのパフォーマンス要約 (累積): この報告書は、リポジトリーの使用度とリソース使用量が最も多いユーザーを示します。
 - リポジトリー・ユーザーごとの時間枠パフォーマンス要約 (累積): この報告書は、ある期間内でリポジトリーの使用度とリソース使用量が最も多かったユーザーを示します。
3. カスタム・オブジェクト・トラッキング報告書は、ユーザーが作成してファイルに保存したビジュアル報告書です。報告書の作成後、「オブジェクト・トラッキ

「報告書」ウィンドウの「追加」ボタンをクリックして、そのカスタム報告書を選択可能なオブジェクト・トラッキング報告書のリストに追加できます。「オブジェクト・トラッキング報告書の追加」ウィンドウが開きます。「報告書タイトル」フィールドに、使用可能なオブジェクト・トラッキング報告書のリストに表示する報告書名を指定します。オプションで、「報告書の説明」フィールドに報告書についての説明を入力できます。「報告書ファイル名」フィールドに、ビジュアル報告書を保存したファイルの名前を指定します。「報告書の照会」フィールドに、ビジュアル報告書に使用された照会のある場所を指定します。ビジュアル報告書に拡張 QMF カタログに対して実行する照会が含まれる場合、「報告書の拡張照会」フィールドに名前とその照会がある場所を指定します。「OK」をクリックします。レポートがリストに追加されます。

オブジェクト・トラッキング表の保守

詳細オブジェクト・トラッキング表と要約オブジェクト・トラッキング表を定期的に保守する必要があります。

リポジトリに基づくオブジェクトに関する詳細オブジェクト・トラッキング・データは RSBI.OBJ_ACTIVITY_DTL 表に保管され、QMF カタログに基づくオブジェクトに関する詳細オブジェクト・トラッキング・データは Q.OBJ_ACTIVITY_DTL 表に保管されます。リポジトリに基づくオブジェクトに関する要約オブジェクト・トラッキング・データは RSBI.OBJ_ACTIVITY_SUMM 表に保管され、QMF カタログに基づくオブジェクトに関する要約オブジェクト・トラッキング・データは Q.OBJ_ACTIVITY_SUMM 表に保管されます。

オブジェクトを使用するたびに、Q.OBJ_ACTIVITY_DTL 表と RSBI.OBJ_ACTIVITY_DTL 表に 1 行が追加されます。例えば、ユーザーが照会 (オブジェクト) を 20 回実行すると、表には 20 行が追加されます。

サマリー表 Q.OBJ_ACTIVITY_SUMM と RSBI.OBJ_ACTIVITY_SUMM は、オブジェクトの使用回数に関係なくオブジェクトごとに 1 行だけ追加されます。したがって、この例では、表内のオブジェクト使用カウントというフィールドの値が 20 増えていますが、新しい行の追加はありません。新しいオブジェクトが作成されたときにだけサマリー表に行が追加され、オブジェクトが削除されると行も自動的に削除されます。

サマリー表は際限なく拡大することはありませんが、明細表は拡大し続けるので、明細表の保守作業はサマリー表の場合以上に重要で、より頻繁に行う必要があります。Q.OBJ_ACTIVITY_DTL 表および RSBI.OBJ_ACTIVITY_DTL 明細表のパフォーマンスを最大限に引き出すため、以下の処理を行うことが勧められています。

- 表スペースと索引に対して RUNSTATS を実行します。
- 古いデータを定期的に削除します。

例えば、Db2 データベースの場合、次の照会を実行すれば、30 日より古いすべての行を QMF カタログ・オブジェクト明細表から削除できます (要約表と明細表にアクセスするための許可がユーザー ID にある場合)。

```
DELETE FROM Q.OBJ_ACTIVITY_DTL WHERE "DATE" (CURRENT DATE - 30 DAYS)
```

Db2 データベースの場合、次の照会を実行すれば、30 日より古いすべての行をリポジトリ・オブジェクトの明細表から削除できます (サマリー表と明細表にアクセスするための権限がユーザー ID にある場合)。

Db2 for LUW を使用している場合は、次のようにします。

```
DELETE FROM RSBI.OBJ_ACTIVITY_DTL WHERE  
( DAYS ( CURRENT DATE ) - DAYS ( DATE ('1970001') ) ) - ETIME/3600/24/1000 >30
```

注: サマリー表に保管される最初に使用された要約、最後に使用された要約、および最後に変更された要約の統計は、詳細データを削除するときに影響を受けません。

第 27 章 監査システムの使用

QMF は、ユーザー・アクションに関する詳細情報を収集する監査システムを提供します。

監査システムは、以下のカテゴリーのユーザー・アクションをカバーします。

- さまざまなタイプのリポジトリへの接続および切断
- リポジトリ・エクスプローラー・オブジェクトの処理
- QMF オブジェクトの処理
- Web API の使用
- タスク・スケジューラーの使用

監査システムの設定

「設定」ウィンドウの「監査」ページを使用して、QMF の監査システムを使用可能にして構成します。

このタスクについて

監査システムを使用可能にして構成するには、以下のようになります。

手順

1. メインメニューから「ビュー」 > 「設定」を選択します。
2. ウィンドウの左側にある「監査」をクリックします。
3. 「監査を有効にする」チェック・ボックスを選択します。
4. 失敗したイベントのみを記録するように監査システムを設定するには、「失敗したイベントのみ記録する (**Record failed events only**)」チェック・ボックスを選択します。
5. 「バックアップ間隔 (日数) (**Backup interval (days)**)」フィールドに、データベース・バックアップ・ファイルの作成頻度を定義する時間間隔を指定します。

注: バックアップ・ファイルが作成されると、元のデータベースはクリアされません。

6. 「(日数) より古いすべてのバックアップ・ファイルを削除 (**Delete all backup files older than (days)**)」フィールドに、削除するデータベース・バックアップ・ファイルの経過日数を指定します。
7. 「ユーザーの SQL ステートメントを記録する (**Record SQL statements for users**)」チェック・ボックスを選択して、データベースに対する照会のためにユーザーが作成した SQL ステートメントを記録するように監査システムを設定します。
 - すべてのユーザーが作成した SQL ステートメントを記録するには、「すべてのユーザー (**All Users**)」を選択します。
 - 「ユーザーの指定 ...(**Specify Users...**)」ボタンをクリックして「データ・ソース・ユーザー」ダイアログを開き、特定のユーザーを指定します。変更を

受け入れる場合は「OK」をクリックし、変更を保存せずにダイアログを終了する場合は「キャンセル」をクリックします。

- 「適用」をクリックして設定を適用し、ページに留まるか、「OK」をクリックして設定を適用し、ウィンドウを閉じます。

タスクの結果

監査が有効になると、監査システムによって収集されたすべての情報が H2 データベース内の AUDIT スキーマの下の表に保存されます。このデータベースは、アプリケーション・データ・フォルダーに作成されます。すべての表の要約情報が AUDIT_VIEW 表に表示されます。監査レコードの読み取りについては、241 ページの『第 27 章 監査システムの使用』を参照してください。

監査レコード表の読み取り

このトピックでは、監査システムによって収集されたすべての情報を表示する AUDIT_VIEW 表について説明します。

AUDIT_VIEW 表へのアクセス方法については、『監査レコードへのアクセス』トピックを参照してください。AUDIT_VIEW の内容は以下のとおりです。

表 16. AUDIT_VIEW

列名	説明
EVENT TIME	イベントの時刻を示します。
USER IP	アクションが実行されたシステムの IP アドレスを示します。
USER LOGIN	REPOSITORY NAME 列に示されたりポジトリーに接続するユーザーの名前を示します。
REPOSITORY STORAGE	指定されたイベントが発生したりポジトリー・ストレージの URL を示します。
REPOSITORY NAME	指定されたイベントが発生した、示されたりポジトリー・ストレージ内のリポジトリーの名前を示します。
OBJECT NAME	イベント・オブジェクトの名前を示します。
OBJECT PATH	イベント・オブジェクトのパスを示します。
OBJECT TYPE	イベント・オブジェクトのタイプを示します。
DATABASE	イベント・オブジェクトによって使用されるデータ・ソースを示します。
EXECUTION CONTEXT	イベント・オブジェクトを実行するオブジェクトへのパスを示します。例えば、プロシーチャーまたはビジュアル・ダッシュボードへのパスです。
DURATION	指定されたイベントの処理時間を示します。
CATEGORY	指定されたイベントが発生したサブシステムを示します。
EVENT TYPE	イベント・タイプを示します。

表 16. AUDIT_VIEW (続き)

ERROR CODE	指定されたイベント中に発生したエラーのコードを示します。 エラー・メッセージの完全なリストは、「Installing and managing IBM QMF Analytics for Multiplatforms」資料の『Appendix D. Messages』に記載されています。
ROWS FETCHED	データベースに対する SQL 照会によって検索された行数を示します。
ROWS UPDATED	データベースに対する UPDATE または INSERT SQL 照会の影響を受けた行数を示します。
DATABASE LOGIN	DATABASE 列に示されたデータ・ソースに接続するユーザーのログインを示します。
SQL TEXT	実行された SQL 照会のテキストへのアクセスを提供します。SQL テキストを表示するには、「LOB ロケーター」をダブルクリックします。
QUERY TYPE	実行された照会のタイプを示します。
RESULT	指定されたイベントが成功したか失敗したかを示します。

AUDIT_VIEW 表に寄与する表の説明については、『補助監査レコード表』を参照してください。

補助監査レコード表

このトピックでは、AUDIT_VIEW 表の形成に役立つ補助監査レコード・テーブルの構造について説明します。

監査システムによって収集されたデータを保管する表へのアクセス方法については、『監査レコードへのアクセス』トピックを参照してください。AUDIT スキーマの下に、以下の補助監査レコード表があります。

- AUDIT_RECORDS は、AUDIT_VIEW 表の情報を提供する基本表です。この表の内容は以下のとおりです。

表 17. AUDIT_RECORDS

列名	説明
ID	レコード ID
EVENT TIME	イベントの時刻を示します。
USER IP	アクションが実行されたシステムの IP アドレスを示します。
USER LOGIN	REPOSITORY NAME 列に示されたりポジトリーに接続するユーザーの名前を示します。
REPOSITORY STORAGE	指定されたイベントが発生したりポジトリー・ストレージの URL を示します。
REPOSITORY NAME	指定されたイベントが発生した、示されたりポジトリー・ストレージ内のリポジトリーの名前を示します。

表 17. AUDIT_RECORDS (続き)

OBJECT NAME	イベント・オブジェクトの名前を示します。
OBJECT PATH	イベント・オブジェクトのパスを示します。
OBJECT TYPE	イベント・オブジェクトのタイプを示します。
DATABASE	イベント・オブジェクトによって使用されるデータ・ソースを示します。
EXECUTION CONTEXT	イベント・オブジェクトを実行するオブジェクトへのパスを示します。例えば、プロシーチャーまたはビジュアル・ダッシュボードへのパスです。
DURATION	指定されたイベントの処理時間を示します。
CATEGORY	EVENT_CATEGORY 表に従って、指定されたイベントが発生したサブシステムの ID を示します。
EVENT TYPE	EVENT_TYPES 表に従ってイベント・タイプ ID を示します。
ERROR CODE	指定されたイベント中に発生したエラーのコードを示します。 エラー・メッセージの完全なリストは、「 <i>Installing and managing IBM QMF Analytics for Multiplatforms</i> 」資料の『 Appendix D. Messages 』に記載されています。
ROWS FETCHED	データベースに対する SQL 照会によって検索された行数を示します。
ROWS UPDATED	データベースに対する UPDATE または INSERT SQL 照会の影響を受けた行数を示します。
DATABASE LOGIN	DATABASE 列に示されたデータ・ソースに接続するユーザーのログインを示します。
SQLTEXTID	AUDIT_RECORDS_SQL 表に従って、実行された SQL 照会のテキストを含む行の ID を示します。
QUERY TYPE	QUERY_TYPE 表に従って、実行された照会タイプの ID を示します。
RESULT	EVENT_RESULTS 表に従って、指定されたイベント結果の ID を示します。

- AUDIT_RECORDS 表の **EVENT TYPE** 列のデータを提供する EVENT_TYPES 表は、以下の内容を含みます。

表 18. EVENT_TYPES

ID	NAME
1	READ
2	LOGOUT
3	DELETE
4	ENUMERATE
5	CREATE
6	UPDATE
7	RUN

表 18. *EVENT_TYPES* (続き)

8	LOGIN
---	-------

- *AUDIT_RECORDS* 表の **CATEGORY** 列のデータを提供する *EVENT_CATEGORIES* 表は以下の内容を含みます。

表 19. *EVENT_CATEGORIES*

ID	NAME
1	REPOSITORY
2	SECURITY

- *AUDIT_RECORDS* 表の **RESULT** 列のデータを提供する *EVENT_RESULTS* 表は以下の内容を含みます。

表 20. *EVENT_RESULTS*

ID	NAME
1	SUCCESS
2	FAILED
3	ACCESS DENIED
4	CANCELED

- *EVENT_OBJECT_TYPES* 表は、*AUDIT_RECORDS* 表の「**OBJECT TYPE**」列のデータを提供し、以下の構造を持ちます。

表 21. *EVENT_OBJECT_TYPES* 表の構造

列名	説明
ID	オブジェクト・タイプ ID
NAME	オブジェクト・タイプ名

- *QUERY_TYPES* 表は、*AUDIT_RECORDS* 表の **QUERY TYPE** 列のデータを提供し、以下の内容を含みます。

表 22. *QUERY TYPES*

ID	NAME
1	RENAME
2	ALTER
3	CALL
4	SET
5	CREATE
6	REVOKE
7	REFRESH
8	LOCK
9	SELECT
10	COMMENT
11	DROP
12	ACQUIRE

表 22. QUERY TYPES (続き)

13	DELETE
14	GRANT
15	EXPLAIN
16	LABEL
17	INSERT
18	UPDATE
19	UNKNOWN

- AUDIT_RECORDS_SQL 表は、AUDIT_RECORDS 表の「SQLTEXTID」列のデータを提供し、以下の構造を持ちます。

表 23. AUDIT_RECORDS_SQL 表の構造

列名	説明
ID	SQL ステートメント ID
SQLTEXT	LOB として提示される SQL ステートメント・テキスト

付録 A. アクセシビリティ

ソフトウェアのアクセシビリティ機能は、運動障害や視覚障害など身体に障害を持つユーザーがコンピューターを快適に使用できるようにサポートします。

注: QMF for Workstation アプリケーションは、最良のアクセシビリティ機能を提供します。身体に障害があり、QMF のアクセシビリティ機能を使用する必要があるユーザーは、QMF for WebSphere の代わりに、QMF for Workstation をインストールして実行する必要があります。

QMF for Workstation での標準キーボード・ナビゲーション

キー割り当てとは、マウスの代わりにキーボードを使用して、マウスと同じ操作を実行するための機能のことです。

キーボードは、マウスの代わりとして最もよく使用される操作手段です。QMF は、以下の標準キー割り当てをサポートしています。

- プルダウン・メニューのうち頻繁に使用される機能を、メニューにアクセスせずに実行するためのショートカット (アクセラレーター・キー)。以下に例を示します。
 - **Ctrl+S** (保存)
 - **Ctrl+P** (印刷)
 - **Ctrl+R** (照会の実行)

各ショートカットは、プルダウン・メニュー内の対応する操作の横に表示されています。

- メニューまたはウィンドウの各機能の実行にニーモニック (アクセス・キー) を使用できます。機能のニーモニックは、その機能の名前に含まれる下線付き文字です。例:
 - **F** を押して「ファイル」メニューを開く。
 - **O** を押して「開く」ウィンドウを開く。

Alt キーを使用してニーモニックを有効にし、**Tab** キーでキーボード・フォーカスを移動します。

詳しくは、ご使用のオペレーティング・システムの資料で、標準キー割り当ての完全なリストを参照してください。

標準キーボード・ナビゲーション

「キーボード・ナビゲーション」とは、マウスの代わりにキーを使用して画面上のアイテム間を移動することです。

この移動は、一般にオペレーティング・システムまたはアプリケーションで指定された順序に従って行われます。QMF アプリケーションでは、コントロール間を移

動するための **TAB** キーと **SHIFT+TAB** キーや、アイテム間を上下左右に移動するための矢印キーなど、キーボード・ナビゲーションで一般的に使用されるキーがサポートされています。

オペレーティング・システムのアクセシビリティ

ほとんどのオペレーティング・システムには、身体に障害を持つユーザーがシステム全体に適用される設定をカスタマイズできる、一連のアクセシビリティ・オプションが用意されています。

QMF アプリケーションは、次の特徴を備えています。

- オペレーティング・システムの設定内容がそのまま使用される
- オペレーティング・システムに組み込まれているキーボード・アクセシビリティ機能に影響を与えない

支援技術製品

QMF アプリケーションは、スクリーン・リーダーや音声合成装置などのアクセシビリティ・テクノロジー製品をサポートしています。

各 QMF アプリケーション・インターフェースでは、照会結果にスクリーン・リーダーを使用するには、特別なナビゲーションを行う必要があります。詳しくは、『QMF for Workstation でのナビゲーション』を参照してください。

QMF for Workstation でのナビゲーション

以下の表は、キー・ストロークを使用してさまざまなタスクを実現する方法を示しています。

目的:	手順:
メニューのニーモニックを活動化する	Alt キーを押します。各メニューのニーモニックがアクティブになります。
オンライン・ヘルプを表示する	F1 キーを押して特定のヘルプ・タスクを開くか、 Alt+H キーを押して「ヘルプ」メニューを開きます。メニュー選択項目間を移動するには、矢印キーを使用します。 Enter キーを押すとメニュー・コマンドが開きます。
キーボード・ショートカットを表示する	Ctrl+Shift+L を押します。
「照会のドロワー」ウィザードを表示する	Ctrl+D を押します。
開いている QMF オブジェクトのエディターのスイッチ・リストを表示し、エディターを切り替える	スイッチ・リストで順方向に移動するには Ctrl+F6 を、逆方向に移動するには Ctrl+Shift+F6 を押します。
開いている QMF オブジェクトのタブを左から右へ切り替える	Ctrl+Page Up を押します。

目的:	手順:
開いている QMF オブジェクトのタブを右から左へ切り替える	Ctrl+Page Down を押します。
エレメント間でフォーカスを移動する	順方向に移動するには Tab を、逆方向に移動するには Shift+Tab を押します。
リンクのクリックをエミュレートする	TAB キーを使用してリンク間を移動した後、 Enter キーを押すとリンクが開きます。
ボタンのクリックをエミュレートする	TAB キーを使用してボタン間を移動した後、 Space キーを押すとボタンがアクティブになります。
ウィンドウ内で、デフォルト・アクションをアクティブにする	Enter キーを押します。
ウィンドウ内でアクションを取り消す	Esc キーを押します。
ビュー間で左から右へ切り替える	Ctrl+F7 を押します。
ビュー間で右から左へ切り替える	Ctrl+Shift+F7 を押します。
パースペクティブ間で左から右へ切り替える	Ctrl+F8 を押します。
パースペクティブ間で右から左へ切り替える	Ctrl+Shift+F8 を押します。
アクティブ・エディター内のタブを左から右へ切り替える	Alt+Page Up を押します。
アクティブ・エディター内のタブを右から左へ切り替える	Alt+Page Down を押します。
コマンド・バーを活動化する	Ctrl+Shift+C を押します。

目的:	手順:
<p>照会結果にスクリーン・リーダーを使用する</p> <p>または</p> <p>ブラウザを使用して、視覚障害者向けに照会結果をハイコントラスト・モードで表示する</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 照会を実行します。 2. Alt+R を押して「結果」メニューを開きます。 3. 「エクスポート」を選択して「照会結果のエクスポート」ウィザードを開きます。 4. Tab キーを使用してコントロール間を移動します。コントロール内の選択項目間を移動するには、矢印キーを使用します。「エクスポート・タイプ」リストから「HTML」を選択します。「ファイル名」フィールドに、ファイルを保存する場所を指定します。 5. 「完了」を押します。 6. この *.htm ファイルをブラウザで開きます。 <p>または</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 照会を実行します。 2. Alt+R を押して「結果」メニューを開きます。 3. 「エクスポート」を選択して「照会結果のエクスポート」ウィザードを開きます。 4. Tab キーを使用してコントロール間を移動します。コントロール内の選択項目間を移動するには、矢印キーを使用します。「エクスポート・タイプ」リストから「CSV」を選択します。「ファイル名」フィールドに、ファイルを保存する場所を指定します。 5. 「完了」を押します。 6. この *.csv ファイルを Microsoft Excel などのサポート・ソフトウェアで開きます。
<p>オブジェクトまたは条件を追加する</p>	<p>TAB を使用して照会ビルダー・エディターのセクションを切り替え、Spacebar を押してセクションを展開します。</p>
<p>複数のオブジェクトを選択する</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. Tab キーを使ってリスト・ボックスに移動します。 2. Shift+ 矢印キーを押して、連続した行を追加選択します。 3. Shift+Enter キーを押してオブジェクトを追加します。
<p>リスト・ボックス内の行を編集する (編集可能な行のみ)</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. Tab キーを使用して「グローバル変数」ウィンドウなどのリスト・ボックスにフォーカスを移動します。 2. スペース・バーを押すか上矢印キーと下矢印キーを使用して行を選択します。 3. F2 キーを押して編集モードを開始します。 4. Tab キーを使用して列と行の間を移動します。 5. Enter キーを押して編集内容を確定します。 6. Tab キーを押して、リスト・ボックスからダイアログ内の次のコントロールにフォーカスを移動します。

目的:	手順:
照会結果を編集する	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「ワークスペース」ビューまたは「リポジトリ・エクスプローラー」ビューが強調表示されるまで Ctrl+F7 キーまたは Ctrl+Shift+F7 キーを押します。 2. 下矢印キーまたは上矢印キーを使用して、表が入っているフォルダーを選択します。 3. フォルダーを展開するには右矢印キー、フォルダーを省略するには左矢印キーを使用します。 4. 矢印キーを使用して、編集する表を表示して選択します。 5. 「メニュー」キー (右側の Ctrl キーの左にあるキー) を押します。 6. 「開く」のニーモニック・キー (h キー) を押します。 7. 下矢印キーを使用して「表エディター」を強調表示します。 8. ENTER キーを押します。表が表エディターで表示されます。
照会結果のフォントを変更する	<ol style="list-style-type: none"> 1. 照会を実行します。 2. Alt+A を押してすべてを選択します。 3. Alt+R を押して「結果」メニューを開きます。 4. F を押して「フォント」ウィンドウを開きます。

QMF for WebSphere でのナビゲーション

以下の表は、キー・ストロークを使用してさまざまなタスクを実現する方法を示しています。

目的:	手順:
エレメント間でフォーカスを移動する	順方向に移動するには Tab を、逆方向に移動するには Shift+Tab を押します。
リンクのクリックをエミュレートする	TAB キーを使用してリンク間を移動した後、 Enter キーを押すとリンクが開きます。
ボタンのクリックをエミュレートする	TAB キーを使用してボタン間を移動した後、 Space キーを押すとボタンがアクティブになります。
ダイアログ内で、デフォルト・アクションをアクティブにする	Enter キーを押します。
ダイアログ内で、アクションを取り消す	Esc キーを押します。
コマンド行にフォーカスを移動する	ALT+C キーを押します。
メインメニューにフォーカスを移動する	左側の Alt キーを押します。メニュー・コマンドをナビゲートするには、矢印キーを使用します。
コンテキスト・メニューを開く	拡張キーボードを使用している場合は、ポップアップ・メニュー・キーを押します。右の Ctrl キーを押します。メニュー・コマンドをナビゲートするには、矢印キーを使用します。

目的:	手順:
最上位メニューをアクティブにする	Shift+Ctrl+1 キーを押します (あるいは、 Shift+Ctrl+2 、 Shift+Ctrl+3 、などとします)。
開いているエディターを切り替える	Shift+Ctrl+F6 キーを押します。
開いているビューを切り替える	Shift+Ctrl+F7 キーを押します。

付録 B. QMF オブジェクトのカスタマイズ

このトピックでは、QMF オブジェクトを作成するための SQL の例を示します。また、これらの SQL に加えることができる変更も示します。

生成されるサンプル SQL

この例では、必要なデータベース・オブジェクトを作成するために生成される SQL を示しています。この SQL は案として示しているものであり、編集してもかまいません。

SQL は編集可能です。例:

```
CREATE NODEGROUP RDBING1 ON NODE (0);

CREATE NODEGROUP RDBING2 ON NODE (0);

CREATE REGULAR TABLESPACE RDBITSSC
  IN NODEGROUP RDBING1
  MANAGED BY SYSTEM USING('RDBITSSC');

CREATE TABLE RDBI.AUTHID_TABLE
(
  PRIMARY_ID CHAR(8) NOT NULL,
  SECONDARY_ID CHAR(8) NOT NULL
)
  IN RDBITSSC
  PARTITIONING KEY (SECONDARY_ID) USING HASHING
;
COMMENT ON TABLE RDBI.AUTHID_TABLE
  IS 'Secondary authorization ID table FOR RDBI';
```

iSeries 用の物理ファイルおよび論理ファイルのリスト

「オブジェクトの作成」から、iSeries 用の物理ファイルおよび論理ファイルをリストすることができます

iSeries の物理ファイルおよび論理ファイルをリストするには、以下のステップを実行します。

1. 「オブジェクトの作成」ページで、次のステートメントまでスクロールダウンする。

```
CREATE VIEW RDBI.TABLE_VIEW2
```

2. この「CREATE」ステートメントの「WHERE」文節で、物理ファイルを表す「P」と論理ファイルを表す「L」を追加する。例:

```
WHERE A.TABLE_TYPE IN ('T','V','P','L')
```

3. 「OK」をクリックしてオブジェクトを作成する。

iSeries に対する EXECUTE 特権の付与

iSeries ライブラリーに対する EXECUTE 特権を付与するには、組み込みストアード・プロシージャ **QSYS.QCINDEXC()** を使用できます。

組み込みストアード・プロシージャ `QSYS.QCMDEXC()` がターゲット・サーバーにおいて登録済みである場合、QMF は実行時にその組み込みストアード・プロシージャを検出し、QMF がインストール時に SQL DDL スクリプトを生成するときは明示的にその組み込みストアード・プロシージャを呼び出し、静的な保護方式、ストアード・プロシージャ、または静的な SQL パッケージに基づいて静的なパッケージをバインドしたりストアード・プロシージャを作成したりするときは暗黙的にその組み込みストアード・プロシージャを呼び出します。

組み込みストアード・プロシージャ `QSYS.QCMDEXC()` がターゲット・サーバーにおいて登録されていない場合、QMF はその組み込みストアード・プロシージャをまったく呼び出しません。ただし、ライブラリー `RSBI`、`Q`、`RDBI` に加えて、QMF ストアード・プロシージャや静的 SQL パッケージが作成されたライブラリーには、適切な特権が付与されていない可能性があります。この場合、データベース・アドミニストレーターは、iSeries ライブラリーに対して以下の特権付与命令を実行する必要があります。

- `GRTOBJAUT OBJ(RSBI) OBJTYPE(*LIB) USER(*PUBLIC) AUT(*EXECUTE);`
- `GRTOBJAUT OBJ(Q) OBJTYPE(*LIB) USER(*PUBLIC) AUT(*EXECUTE);`
- `GRTOBJAUT OBJ(RDBI) OBJTYPE(*LIB) USER(*PUBLIC) AUT(*EXECUTE);`
- `GRTOBJAUT OBJ(QFWPKG) OBJTYPE(*LIB) USER(*PUBLIC) AUT(*EXECUTE);`

`QFWPKG` は、QMF ストアード・プロシージャのライブラリーまたは静的 SQL のパッケージです。

オブジェクト・ビュー

オブジェクト・ビューは、リストの作成方法を決定します。

オブジェクトが作成されると、以下のビューが作成されます。

- `RDBI.TABLE_VIEW`
- `Q.RAA_OBJECT_VIEW`

これらのビューを QMF のインストール時に変更することにより、リストの構築方法をカスタマイズできます。これらのビューは Db2 プラットフォームによって異なります。

拡張カタログ用のリストは、「オブジェクトの作成」オプションを選択したときに作成されたビューに基づいて構築されます。照会、フォーム、およびプロシージャの場合は、ビュー `Q.RAA_OBJECT_VIEW_X` がキーの役割を果たし、他のビューや表と対話します。

Q.RAA_OBJ_DIR_X

`Q.RAA_OBJ_DIR_X` で `catalog_ID` および所有者名を調べ、以下の条件に基づいて、各オブジェクトを表示するか、または表示しません。

次の質問のいずれかの答えが「はい」であれば、照会、プロシージャ、またはフォームがリストに表示されます。

1. オブジェクト所有者は現在のユーザー ID に一致しますか?

2. オブジェクト所有者は現在の SQLID に一致しますか?
3. オブジェクト所有者は、同じ catalog_ID を持つ現在のユーザー ID の 2 次許可 ID に一致しますか?
4. オブジェクトは共有されていますか? (制限されている = N)
5. ユーザーは、同じ catalog_ID を持つ SYSADM ですか?

RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X

このビューは、ユーザーまたはユーザーの 2 次許可 ID が SYSADM かどうかを判別します。

RDBLADMIN_VIEW および RDBI.CATALOG_DIR_X で、次のものを検査します。

- 現行のユーザー ID または SQLID
- RDBI.CATALOG_DIR_X で同じ catalog_ID を持つ現在のユーザー ID の 2 次許可 ID

RDBLUSER.USER_AUTHID_VIEW_X

このビューは、基本表 RDBI.AUTHID_VIEW_X から、1 次 ID が現行ユーザーの ID であるすべての行を検索します。また、現行ユーザーの 2 次許可 ID をすべてリストします。

RDBLADMIN_VIEW

このビューは、基本表 SYSIBM.SYSUSERAUTH から GRANTEE のリストを取得します。SYSADMAUTH に対する G または Y を付与されている GRANTEE を取り出します。

RDBI.CATALOG_DIR_X

この表には、別個のカタログの内部 ID およびそのカタログの名前のすべての行が入っています。

RDBI_AUTHID_VIEW_X

この表には、基本表 RDBI.AUTHID_TABLE_X のすべての行がコピーされています。

SYSIBM.SYSUSERAUTH

この表には SYSUSERAUTH の情報が含まれています。

RDBI_AUTH_TABLE_X

1 次および 2 次許可 ID をリストする基本表。この表には、システム管理者またはデータベース管理者が内容を取り込む必要があります。QMF for Workstation は、管理者が設計したカスタム Db2 表にストアされているものを除いて、インストール中またはインストール後に、既存の RACF/Db2 の関係にアクセスすることはできません。

Q.RAA_OBJECT_VIEW_X

照会、フォーム、およびプロシージャーの場合は、ビュー Q.RAA_OBJECT_VIEW_X がキーの役割を果たし、以下に示すとおり、他のビューや表と対話します。

注: このビューは、オブジェクト・リスト・オプション用です。

"Include only those objects that any of the user's primary or secondary authorization IDs are authorized to access. This option requires the most database resources when producing lists."

以下の SQL ステートメントでこのビューが作成されます。

```
CREATE VIEW Q.RAA_OBJECT_VIEW_X
(
    CATALOG_ID,
    OWNER, NAME, TYPE, SUBTYPE, OBJECTLEVEL, RESTRICTED, MODEL,
    REMARKS
    DELETED_BY_USER, DELETED_BY_SQLID, DELETED_TIMESTAMP
)
AS
SELECT A.CATALOG_ID,
       A.OWNER, A.NAME, A.TYPE, A.SUBTYPE,
       A.OBJECTLEVEL, A.RESTRICTED, A.MODEL,
       B.REMARKS,
       A.DELETED_BY_USER, A.DELETED_BY_SQLID, A.DELETED_TIMESTAMP
FROM Q.RAA_OBJ_DIR_X A, Q.RAA_OBJ_REM_X B
WHERE (A.CATALOG_ID = B.CATALOG_ID AND
       A.OWNER = B.OWNER AND
       A.NAME = B.NAME AND
       A.DELETED_TIMESTAMP IS NULL AND B.DELETED_TIMESTAMP IS NULL)
AND (A.RESTRICTED = 'N'
     OR A.OWNER IN (USER, CURRENT SQLID)
     OR A.OWNER IN (SELECT C.SECONDARY_ID
                    FROM RDBI_USER_AUTHID_VIEW_X C
                    WHERE C.CATALOG_ID = A.CATALOG_ID)
     OR EXISTS (SELECT D.AUTHID
                FROM RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X D
                WHERE D.CATALOG_ID = A.CATALOG_ID))
```

RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X

これらの SQL ステートメントは、RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X 表を作成します。

```
CREATE VIEW RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X
(
    CATALOG_ID,
    "AUTHID"
)
AS
SELECT B.ID, A."AUTHID"
FROM RDBI.ADMIN_VIEW A., RDBI.CATALOG_DIR_X B
WHERE A."AUTHID" IN (USER, CURRENT SQLID)
     OR A."AUTHID" IN (SELECT C.SECONDARY_ID
                       FROM RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X C
                       WHERE B.ID = C.CATALOG_ID)
```

RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X

これらの SQL ステートメントは、RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X 表を作成します。

```

CREATE VIEW RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X
(
    CATALOG_ID,
    PRIMARY_ID,
    SECONDARY_ID
)
AS
SELECT A.CATALOG_ID, A.PRIMARY_ID, A.SECONDARY_ID
FROM RDBI.AUTHID_VIEW_X A
WHERE A.PRIMARY_ID = USER

```

RDBI.ADMIN_VIEW

これらの SQL ステートメントは、RDBI.ADMIN_VIEW 表を作成します。

```

CREATE VIEW RDBI.ADMIN_VIEW
(
    "AUTHID"
)
AS
SELECT A.GRANTEE
FROM SYSIBM.SYSUSERAUTH A
WHERE A.SYSADMAUTH IN ('Y', 'G')

```

RDBI.CATALOG_DIR_X

これらの SQL ステートメントは、RDBI.CATALOG_DIR_X 表を作成します。

```

CREATE TABLE RDBI.CATALOG_DIR_X
(
    ID SMALLINT NOT NULL
    NAME VARCHAR (128) NOT NULL
)
IN RDBIDBX.RDBITSX1
CCSID EBCDIC

```

RDBI.AUTHID_VIEW_X

これらの SQL ステートメントは、RDBI.AUTHID_VIEW_X 表を作成します。

```

CREATE VIEW RDBI.AUTHID_VIEW_X
(
    CATALOG_ID,
    PRIMARY_ID,
    SECONDARY_ID
)
AS
SELECT A.CATALOG_ID, A.PRIMARY_ID, A.SECONDARY_ID
FROM RDBI.AUTHID_TABLE_X A

```

RDBI.AUTHID_TABLE_X

これらの SQL ステートメントは、RDBI.AUTHID_TABLE_X 表を作成します。

```

CREATE TABLE RDBI.AUTHID_TABLE_X
(
    CATALOG_ID SMALL INIT NOT NULL,
    PRIMARY_ID CHAR (8) NOT NULL,
    SECONDARY_ID CHAR (8) NOT NULL
)
IN RDBIDBX.RDBITSX
CCSID EBCDIC

```

注: この表には、システム管理者またはデータベース管理者が内容を取り込む必要があります。 QMF for Workstation は、インストール中またはインストール後に、既存の RACF/Db2 の関係にアクセスすることはできません。

他の表の場合、ビュー `RDBI.TABLE_VIEW2_X` がキーの役割を果たし、以下に示すとおり、他のビューや表と相互作用します。

RDBI.TABLE_VIEW2_X

`RDBI.TABLE_VIEW2_X` は、表のリストを構成します。このビューは、まず基本表 `SYSIBM.SYSTABAUTH` にリストされている表を検索します。

`SYSIBM.SYSTABAUTH` 中のすべての表は、定義により、何らかのタイプの権限が最低 1 人のユーザーにすでに付与されています。

`SYSIBM.SYSTABAUTH` では、次の質問のいずれかの答えが「はい」になる必要があります。

1. GRANTEE は現行のユーザーですか?
2. GRANTEE は現行の SQLID ですか?
3. GRANTEE は PUBLIC ですか?
4. GRANTEE は PUBLIC* ですか?
5. GRANTEE は同じ catalog_ID を持つ現在の USER の 2 次許可 ID ですか?
6. ユーザーは、同じ catalog_ID を持つ SYSADM ですか?

表には、次の GRANTEE タイプのいずれかがなければなりません。

- ' '
- U
- G

表の GRANTEE には、次の 4 つのカテゴリのいずれかに対する Y または G 権限がなければなりません。

- DELETEAUTH
- INSERTAUTH
- SELECTAUTH
- UPDATEAUTH

RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X

このビューは、ユーザーまたはユーザーの 2 次ユーザー ID が SYSADM かどうかを判別します。

`RDBI.ADMIN_VIEW` および `RDBI.CATALOG_DIR_X` で、次のものを検査します。

- 現行のユーザー ID。
- 同じ catalog_ID を持つ現行のユーザーの 2 次ユーザー ID。

RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X

このビューは、基本表 RDBI.AUTHID_VIEW_X から、1 次 ID が現行ユーザーの ID であるすべての行を検索します。また、現行ユーザーの 2 次許可 ID をすべてリストします。

RDBI.ADMIN_VIEW

このビューは、基本表 SYSIBM.SYSUSERAUTH から GRANTEE のリストを検索します。SYSADMAUTH に対する G または Y を付与されている GRANTEE を取り出します。

注: iSeries データベースでセットアップしている場合、RDBI.ADMIN_VIEW は RDBI.ADMIN_TABLE を参照します。

RDBI.AUTHID_VIEW_X

このビューには、基本表 RDBI.AUTHID_TABLE_X のすべての行がコピーされています。

RDBI.AUTHID_TABLE_X

カタログに登録された ID、1 次許可 ID、および 2 次許可 ID をリストする基本表。

注: この表には、システム管理者またはデータベース管理者が内容を取り込む必要があります。QMF for Workstation は、管理者が設計したカスタム Db2 表にストアされているものを除いて、インストール中またはインストール後に、既存の RACF/Db2 の関係にアクセスすることはできません。

また、他の表の場合、ビュー RDBI.TABLE_VIEW2_X がキーの役割を果たし、以下に示すとおり、他のビューや表と相互作用します。

RDBI.ADMIN_TABLE

iSeries データベースにより排他的に使用される基本表で、管理特権を持つユーザー ID をリストします。

注: この表には、システム管理者またはデータベース管理者が内容を取り込む必要があります。この表は、Db2 データベースの基本 RDBI.AUTHID_TABLE を置き換えます。

また、表では、ビュー RDBI.USER_ADMIN_VIEW および RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X がキーの役割を果たし、以下に示すとおり、他のビューや表と相互作用します。

RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X

これらの SQL ステートメントは、RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X 表を作成します。

```
CREATE VIEW RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X  
(  
    CATALOG_ID,  
    "AUTHID"
```

```

)
AS
SELECT B.ID, A."AUTHID"
FROM RDBI.ADMIN_VIEW A, RDBI.CATALOG_DIR_X B
WHERE A."AUTHID" IN (USER, CURRENT SQLID)
OR A."AUTHID" IN (SELECT C.SECONDARY_ID
                  FROM RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X C
                  WHERE B.ID = C.CATALOG_ID)

```

RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X

これらの SQL ステートメントは、RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X 表を作成します。

```

CREATE VIEW RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X
(
    CATALOG_ID,
    PRIMARY_ID,
    SECONDARY_ID
)
AS
SELECT A.CATALOG_ID, A.PRIMARY_ID, A.SECONDARY_ID
FROM RDBI.AUTHID_VIEW_X A
WHERE A.PRIMARY_ID = USER

```

RDBL.ADMIN_VIEW

これらの SQL ステートメントは、RDBL.ADMIN_VIEW 表を作成します。

```

CREATE VIEW RDBI.ADMIN_VIEW
(
    "AUTHID"
)
AS
SELECT A.GRANTEE
FROM SYSIBM.SYSUSERAUTH A
WHERE A.SYSADMAUTH IN('Y', 'G')

```

RDBI.AUTHID_VIEW_X

これらの SQL ステートメントは、RDBI.AUTHID_VIEW_X 表を作成します。

```

CREATE VIEW RDBI.AUTHID_VIEW_X
(
    CATALOG_ID,
    PRIMARY_ID,
    SECONDARY_ID
)
AS
SELECT A.CATALOG_ID, A.PRIMARY_ID, A.SECONDARY_ID
FROM RDBI.AUTHID_TABLE_X A

```

RDBI.AUTHID_TABLE_X

これらの SQL ステートメントは、RDBI.AUTHID_TABLE_X 表を作成します。

```

CREATE TABLE RDBI.AUTHID_TABLE_X
(
    CATALOG_ID SMALLINT NOT NULL,
    PRIMARY_ID CHAR (8) NOT NULL,
    SECONDARY_ID CHAR (8) NOT NULL
)
IN RDBIDBX.RDBITSX2
CCSID EBCDIC

```


注: この表には、システム管理者またはデータベース管理者が内容を取り込む必要があります。 QMF for Workstation は、インストール中またはインストール後に、既存の RACF/Db2 の関係にアクセスすることはできません。

RDBI.ADMIN_TABLE

これらの SQL ステートメントは、iSeries サポート用の RDBI.ADMIN_TABLE 表を作成します。

QMF ロング・ネーム・カタログ・サポート:

```
CREATE TABLE "RDBI"."ADMIN_TABLE"
(
  "AUTHID" VARCHAR(128) NOT NULL
)
;
COMMENT ON TABLE "RDBI"."ADMIN_TABLE"
  IS 'Administrator authorization ID table for RDBI';
COMMENT ON COLUMN "RDBI"."ADMIN_TABLE"."AUTHID"
  IS 'Authorization ID (user ID)';
```

QMF ショート・ネーム・カタログ・サポート: 唯一の違いは、VARCHAR(128) が VARCHAR(8) に変わることです。

```
CREATE TABLE "RDBI"."ADMIN_TABLE"
(
  "AUTHID" VARCHAR(8) NOT NULL
)
;
COMMENT ON TABLE "RDBI"."ADMIN_TABLE"
  IS 'Administrator authorization ID table for RDBI';
COMMENT ON COLUMN "RDBI"."ADMIN_TABLE"."AUTHID"
  IS 'Authorization ID (user ID)';
```

注: この表には、iSeries システム管理者またはデータベース管理者が内容を取り込む必要があります。

付録 C. トラブルシューティング

QMF で発生した問題を診断および修正するには、以降のトピックを使用してください。

Internet Explorer 8 を使用していると QMF for WebSphere の画像の表示で問題が発生する

症状

Internet Explorer 8 を使用していると、QMF for WebSphere では、ビジュアル報告書およびビジュアル・ダッシュボードの画像が正しく表示されません。

環境

QMF for WebSphere

問題の解決

Internet Explorer ブラウザーの「インターネット一時ファイル」フォルダー内のファイルを削除します。

1. メニュー・バーから、「ツール」 > 「閲覧の履歴の削除」を選択します。「閲覧の履歴の削除」ダイアログが開きます。
2. 「インターネット一時ファイル」チェック・ボックスにチェックを付けます。
3. 「削除」をクリックします。「閲覧の履歴の削除」ダイアログが閉じて、ファイルが削除されます。
4. ビジュアル報告書または、ビジュアル・ダッシュボードを開き直します。

QMF for Workstation Win32 API が以前のバージョンの QMF for Windows に戻る

症状

QMF for Workstation バージョン 12 とともにインストールされる以前のバージョンの QMF for Windows を開くと、バージョン 12 を再度開いたとしても、API インスタンスは自動的に QMF for Windows に戻ってしまいます。

原因

QMF for Workstation バージョン 12 をインストールしたとき、システム・レジストリー内のアプリケーションのバージョン番号は更新されます。QMF for Windows の既存バージョンを開くと、このアプリケーションはシステム・レジストリー内のアプリケーションのバージョン番号を自動的に元の番号に戻ってしまいます。バージョン 12 を開いた場合は、このような自動的な名前変更は行われません。

問題の解決

QMF for Windows アプリケーションを開いたときに、API インスタンスが必ず QMF for Workstation バージョン 12 を指すようにするには、システム・レジストリー内のアプリケーションのバージョン番号を手動でリセットする必要があります。

ユーザーの処置: システム・レジストリー内のアプリケーションのバージョン番号をリセットするには、以下の操作を行います。

1. ご使用のワークステーションのディレクトリー内の次の場所に移動します。

"C:\Program Files\IBM\QMF Analytics for Multiplatforms\API

2. qmfwin.exe という名前のファイルを、ダブルクリックします

注: Win32 API はアクティブ・リポジトリ接続を使用します。アクティブ・リポジトリ接続がない場合、システムによって、すべての使用可能な接続がリストされたダイアログ・ボックスが開きます。ここで、使用する接続を選択する必要があります。

付録 D. メッセージ

このトピックでは、QMF for Workstation および QMF for WebSphere のプログラム・コンポーネントが発行するメッセージと戻りコードをリストし、説明します。

QMF for Workstation および QMF for WebSphere のメッセージには、次のような番号が付けられます。

CPT接頭部MESS番号

CPT接頭部

エラーをスローしたアプリケーション・コンポーネントの省略形です。これは、エラーを解決するための最初の手掛かりになります。

MESS番号

エラー・メッセージの固有の番号です。

例えば、次のようになります: ABC0001。

各コンポーネントのエラー・メッセージがすべてアルファベット順でリストされます。特定のエラー・メッセージについて詳細情報と解決方法を参照するには、この資料で、メッセージのコンポーネント接頭部と番号を検索してください。

注: QMF は Db2 データベースをサポートしているため、このアプリケーションでは Db2 のエラー・メッセージも含まれます。Db2 エラー・メッセージのコンポーネント接頭部は DB2 です。(例: DB20001)。このコンポーネント接頭部を持つメッセージが表示された場合は、Db2 オンライン資料 (www.ibm.com) を参照してください。DB2 Type 4 UDB ドライバーまたは DB2 Universal JDBC ドライバーを使用している場合に、拡張 SQL 例外エラー・メッセージを受け取るには、「リポジトリ接続の編集」ウィザードの「拡張 JDBC 設定」ウィンドウの「retrieveMessagesFromServerOnGetMessage」オプションにチェック・マークを付けます。

API1001 {0}

説明: これは、他のメッセージのコンテナです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

API1002 API が初期設定されません。

説明: API インスタンスが初期設定されません。これは、QMFwin API が初期化されなかったこと、またはリポジトリ接続が確立されなかったことを意味している可能性があります。

ユーザーの処置: QMFwin API ログを調べて、API インスタンスの失敗を引き起こしたエラーを判別するか、またはリポジトリ接続を確立してください。

API1003 データが見つかりません。

説明: 結果セットに存在しない行を取得しようとする試みがありました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

API1006 指定されたソース {0} は有効ではありません。

説明: initializeProc() 関数または initializeQuery() 関数の SourceType パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての initializeProc() 関数または initializeQuery() 関数の SourceType パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1007 指定されたソース名は有効ではありません。

説明: initializeProc()、initializeQuery()、または initializeStaticQuery() 関数の Source、CollectionName、PackageName、または ConsistencyToken パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての initializeProc()、initializeQuery()、または initializeStaticQuery() 関数の Source、CollectionName、PackageName、または ConsistencyToken パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1008 指定されたデータベース・サーバー {0} は有効ではありません。

説明: getServerAttributes()、getServerType()、または initializeServer() 関数で不明なデータ・ソース別名が指定されました。

ユーザーの処置: すべての getServerAttributes()、getServerType()、または initializeServer() 関数に、有効なデータ・ソース別名を指定してください。

API1009 データベース・サーバーが指定されていません。

説明: initializeServer() 関数を、初期化されたデータ・ソースを必要とする他の関数を呼び出す前に呼び出していません。

ユーザーの処置: 他のデータ・ソース依存関数を呼び出す前に、initializeServer() 関数を呼び出しておくようにしてください。

API1010 指定された限界行数 {0} は有効ではありません。

説明: open() 関数の RowLimit パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: open() 関数の場合、RowLimit パラメーターには正の値を指定してください。

API1011 指定された照会 ID {0} は有効ではありません。

説明: API 関数の QueryID パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての関連関数で QueryID パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1012 SQL 動詞 {0} は open() で使用できません。

説明: open() 関数が SELECT、VALUES、WITH、CALL の SQL 動詞のいずれも含まない照会を呼び出しました。

ユーザーの処置: open() 関数では、上記の SQL 動詞のいずれかを含む照会を呼び出すようにしてください。

API1013 SQL 動詞 {0} は execute() で使用できません。

説明: execute() 関数が SELECT、VALUES、WITH、または CALL SQL 動詞を含む照会を呼び出しました。

ユーザーの処置: execute() 関数ではこれらの SQL 動詞のいずれかを含む照会は呼び出さないようにしてください。

API1015 新しいプロシージャを作成できませんでした。すでに開いている文書が多すぎるか、メモリーが足りません。

説明: initializeProc() 関数を使用してプロシージャを作成しているときに、予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: QMFwin API ログを調べて、根本原因であるエラーを見つけてください。

API1016 新しい照会を作成できませんでした。すでに開いている文書が多すぎるか、メモリーが足りません。

説明: initializeQuery() 関数を使用して照会を作成しているときに、予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: QMFwin API ログを調べて、根本原因であるエラーを見つけてください。

API1024 指定された列区切り文字 ({0}) は有効ではありません。

説明: export() 関数の ColumnDelimiter パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての export() 関数の ColumnDelimiter パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1026 指定されたファイル名は無効です。

説明: export() 関数の FileName パラメーターに無効な値または空の値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての export() 関数の FileName

パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1027 指定されたフォーマット ({0}) は有効ではありません。

説明: export() 関数の Format パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての export() 関数の Format パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1028 指定された書式名は有効ではありません。

説明: 報告書関連の関数の Form パラメーターに無効な値または空の値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての報告書関連の関数で Form パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1029 指定された書式ソース ({0}) は有効ではありません。

説明: 報告書関連の関数の SourceType パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての報告書関連の関数で SourceType パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1030 グローバル変数名が無効です。

説明: グローバル変数関連の関数の GlobalVariableName パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべてのグローバル変数関連の関数で GlobalVariableName パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1031 指定されたホスト変数は有効ではありません。

説明: setHostVariable() 関数の Value パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての setHostVariable() 関数の Value パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1033 指定された所有者と名前 ({0}) は有効ではありません。

説明: API 関数の OwnerAndName パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての API 関連の関数の OwnerAndName パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1034 指定されたページの長さ ({0}) は有効ではありません。

説明: exportReport() 関数または exportVisualReport() 関数の PageLength パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての exportReport() 関数または exportVisualReport() 関数の PageLength パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1035 指定されたページ幅 ({0}) が無効です。

説明: exportReport() 関数または exportVisualReport() 関数の PageWidth パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての exportReport() 関数または exportVisualReport() 関数の PageWidth パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1037 指定されたプロシージャ ID ({0}) は有効ではありません。

説明: プロシージャ関連の関数の ProcID パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべてのプロシージャ関連の関数で ProcID パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1038 指定されたりソース ({0}) は有効ではありません。

説明: getResourceLimit() 関数の Resource パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての getResourceLimit() 関数の Resource パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1039 指定された行範囲と列範囲は有効ではありません。

説明: エクスポート結果セット関数の FirstRow、FirstCol、LastRow、および LastCol パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべてのエクスポート結果セット関数の FirstRow、FirstCol、LastRow、および LastCol パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1040 指定されたストリング区切り文字 (**{0}**) は有効ではありません。

説明: export() 関数の StringDelimiter パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての export() 関数の StringDelimiter パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1041 指定された表名は有効ではありません。

説明: export() 関数の TableName パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての export() 関数の TableName パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1042 指定されたターゲット・サーバーは無効です。

説明: saveData() 関数または copyQMFObject() 関数の Server パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての saveData() 関数または copyQMFObject() 関数の Server パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1044 指定された時刻 (**{0}**) は有効ではありません。

説明: getQMFOBJECTInfo() 関数の Time パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての getQMFOBJECTInfo() 関数の Time パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1045 指定されたタイプ (**{0}**) は有効ではありません。

説明: getQMFOBJECTInfo() 関数の Type パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての getQMFOBJECTInfo() 関数の Type パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1046 指定された変数 (**{0}**) は有効ではありません。

説明: setVariable() 関数の VariableName パラメーターに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: すべての setVariable() 関数の VariableName パラメーターに、有効な値を指定してください。

API1053 SQL 動詞 (**{0}**) は ExecuteStoredProcedure() では使用できません。

説明: executeStoredProcedureEx() 関数で CALL SQL 動詞を含まない照会が指定されました。

ユーザーの処置: すべての executeStoredProcedureEx() 関数で CALL 照会を指定してください。

API1054 静的セクションを準備できません。

説明: prepare() 関数で静的照会が指定されました。指定できるのは動的照会のみです。

ユーザーの処置: すべての prepare() 関数には動的照会を指定してください。

API10004 ForceDialog および SuppressDialog に指定された値は、互いに排他的です。

説明: initializeServer() 関数が呼び出されましたが、ForceDialog パラメーターと SuppressDialog パラメーターに指定されている値が相互に排他的です。

ユーザーの処置: initializeServer() 関数を呼び出しているコードを確認してください。

API10005 指定された値は有効ではありません。

説明: 関数のパラメーターに指定された値が誤っています。

ユーザーの処置: API インスタンスで呼び出されているすべての関数について、指定されたパラメーター値がすべて有効であることを確認してください。

BIC00000 内部エラー

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

BIC00001 不正な引数

説明: 指定された引数は有効ではありません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

BIC00002 NULL ポインター

説明: NULL ポインターの例外が発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

BIC00004 {0}

説明: 示された例外が発生しました。

ユーザーの処置: 示された例外を解決し、再試行してください。

BIC00005 不明な例外

説明: リソース・ストリングの取得中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

BIC00006 この機能は QMF ではサポートされません。

説明: 指定されたフィーチャーは QMF ではサポートされていません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

BIC00007 オブジェクトはQMFでサポートされていません。

説明: 示されたオブジェクトはQMFではサポートされていません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

BIC00009 子の取り出しはユーザーによって取り消されました。

説明: 操作はユーザーによって取り消されました。

ユーザーの処置: 指定されたオブジェクトを再度取り出してください。

CLC00001 {0} を数値に変換できません。

説明: 指定されたエレメントは数値に変換できません。

ユーザーの処置: 数字に変換できる有効なエレメントを指定してください。

CLC00002 linReg を評価できません。一連のデータに異なる数のエレメントがあります。

説明: x および y 変数に指定された一連のデータには、異なる数のデータ・ポイントが含まれています。

ユーザーの処置: 同じ数のデータ・ポイントを含む一連のデータを指定してください。

CLC00003 linReg を評価できません。データが不十分です。

説明: 指定された一連のデータには、線形回帰が計算できるだけの十分な行がありません。

ユーザーの処置: 複数行のデータ・ポイントを含む照会結果セットを指定してください。

CLC00004 linReg を評価できません。係数が範囲外です。

説明: linreg() 関数の nParam パラメーターに指定した値は無効です。

ユーザーの処置: nParam パラメーターには、0 または 1 のいずれかを指定してください。0 は線形回帰の傾きを返します。1 は線形回帰の切片を返します。

CLC00005 正しくないデータ行範囲が指定されました : {0} から {1}

説明: nFirstRow および nLastRow パラメーターで指定されたデータ行の範囲は無効です。

ユーザーの処置: データ行には有効な範囲を指定してください。照会結果セット内では、nFirstRow 値は、nLastRow 値よりも前の行を指定する必要があります。

CLC00006 gammaIP を計算できません。ドメイン・エラー。

説明: gammaIP 関数に無効な引数が指定されました。

ユーザーの処置: gammaIP 関数には有効な引数を指定してください。

CLC00009 "{0}" 関数は式でサポートされていますが、Lib クラスに見つかりません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

CLC00010 "{0}" 関数に正しくない引数記述がありません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

CLC00011 タイプ変換エラー: {0} タイプのオブジェクトは {1} タイプに変換できません。

説明: 示されたオブジェクトは、示されたタイプに変換できません。

ユーザーの処置: 示されたタイプに変換するための有効なオブジェクトを指定してください。

CLC00012 式の評価に失敗しました: {0}

説明: 示された式の評価に失敗しました。

ユーザーの処置: 評価ができる有効な式を指定してください。

CLC00014 式の評価に失敗しました。

説明: 指定された式の評価に失敗しました。

ユーザーの処置: 式の構文にエラーがないかどうかを確認し、再試行してください。

CLC00016 式を解析できません: {0}

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

CLC00018 不明な関数名: {0}。

説明: 示された関数名は有効ではありません。

ユーザーの処置: 有効な関数名を指定してください。

CLC00030 URL を処理できません: '{0}'

説明: 示された URL は無効です。

ユーザーの処置: 有効な URL を指定します。

CLC00034 "{0}" 関数に記述がありません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

CLC00038 LibraryFactory クラスの "{0}" ライブラリーの宣言が複数あります。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

CLC00039 LibraryFactory クラスの "{0}" ライブラリーの宣言が複数あります。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

CLC00040 LibraryFactory クラスの "{0}" ライブラリーをロードできません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

CLC00041 タイプ "{0}" と "{1}" は "{2}" 関数では受け入れられません。

説明: 関数に渡された引数のタイプが無効です。

ユーザーの処置: 式の構文にエラーがないかどうかを確認し、再試行してください。

CLC00042 タイプ "{0}" は "{1}" 関数では受け入れられません。

説明: 指定された関数は指定されたタイプのパラメーターを受け入れません。

ユーザーの処置: 式の構文にエラーがないかどうかを確認し、再試行してください。

CLC00043 情報サービスが未定義です。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

CLC00044 集約サービスが未定義です。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

CLC00045 階層サービスが未定義です。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

CLC00046 カラー・サービスが未定義です。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

CLC00047 PPI サービスが未定義です。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

CLC00048 値プロバイダーが未定義です。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

CLC00049 {1} 個の引数に対して関数 "{0}" が定義されています。

説明: 示された関数に対して無効な数のパラメーターが指定されました。

ユーザーの処置: 示された関数に対して正しい数のパラメーターを指定してください。

CLC00050 関数 "{0}" が引数 {1} に対しては未定義です。

説明: 示された関数に対して無効な数のパラメーターが指定されました。

ユーザーの処置: 示された関数に対して有効な数のパラメーターを指定してください。

CLC00051 オペランドの 1 つに計測単位がありません。

説明: 関数のオペランドの 1 つに計測単位がありません。

ユーザーの処置: 関数のすべてのオペランドには計測単位を指定してください。

CLC00052 2 つの測定値を乗算することはできません。

説明: 測定値を乗算することはできません。

ユーザーの処置: 乗算には測定値以外を指定してください。

CLC00053 "{0}" タイプの要素からリストを作成することはできません。

説明: 示されたタイプの要素からリストを作成することはできません。

ユーザーの処置: リストするには異なるタイプの要素を指定してください。

CLC00054 異なるタイプの要素をリストに入れることはできません。

説明: 指定されたリストに異なるタイプの要素を入れることはできません。

ユーザーの処置: リストするには同じタイプの要素を指定してください。

CLC00055 タイプ "{0}"、"{1}"、および "{2}" は "{3}" 関数では受け入れられません。

説明: 示された関数には指定されたタイプとの互換性がありません。

ユーザーの処置: 式の構文にエラーがないかどうかを確認し、再試行してください。

CLC00056 計測単位を持つ引数は "{0}" 関数には受け入れられません。

説明: 示された関数では計測単位を持つ引数は指定できません。

ユーザーの処置: 関数の引数からすべての計測単位を削除してください。

CLC00057 誤った索引が指定されました。

説明: LineText 関数でエラーが発生しました。

ユーザーの処置: LineText 関数で指定した引数にエラーがないか確認してください。

CLC00058 タイプ "{0}"、"{1}"、"{2}"、および "{3}" は "{4}" 関数では受け入れられません。

説明: 示された関数には指定されたタイプとの互換性がありません。

ユーザーの処置: 式の構文にエラーがないか確認し、再試行してください。

CLC00059 計算器例外が発生しました: {0}

説明: 汎用エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 式の構文にエラーがないかどうかを確認し、再試行してください。

CLC00060 変数 "{0}" の値が定義されていません。

説明: 示された変数の値が定義されていません。

ユーザーの処置: 示された変数に値を定義してください。

CLC00061 関数 "{0}" により発生したエラー: {1}

説明: 示された関数が示されたエラーを発生しました。

ユーザーの処置: 示されたエラーを訂正し、関数を再実行してください。

CLC00062 プロパティ: "{0}" に以下のエラーがあります:

説明: 示されたプロパティが示されたエラーの原因です。

ユーザーの処置: 示されたエラーを訂正し、関数を再実行してください。

CLC00063 リスト・サイズを比較できません。

説明: 加算、乗算、除算、および減算関数で、タイプ List を持つ無効なパラメーターが指定されました。

ユーザーの処置: すべての加算、乗算、除算、および減算関数で、リスト・パラメーターに、有効な値を指定してください。

CLC00066 リストが空であるため評価できません。

説明: 関数のリスト・パラメーターに値が指定されていません。

ユーザーの処置: すべての関連関数で、リスト・パラメーターに、有効な値を指定してください。

CLC00067 関数 @if に奇数個のパラメーターがあります: @if(cond1, exp1, cond2, exp2, ..., expn)。expn は真になる条件がない場合に使用されます

説明: @if 関数の構文が無効です。

ユーザーの処置: すべての @if 関数の構文のエラーを検査して、再試行してください。

DAL01001 その機能はサポートされていません。

説明: データベースでは指定されたフィーチャーはサポートされません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01002 列名 "{0}" が見つかりません。

説明: 示された列が見つかりません。

ユーザーの処置: 列名にエラーがないか確認するか、異なる列名を指定します。

DAL01004 現在行は取得および設定操作には適していません。

説明: 指定された行では、取得あるいは設定はできません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01005 データベース・カーソルはクローズされています。

説明: カーソルがクローズされていたため、要求された操作を完了できませんでした。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01006 ファイルへのアクセス中にエラーが発生しました。 {0}

説明: ファイルへのアクセス中に入出力エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01007 文字エンコード {0} はサポートされていません。

説明: 示された文字エンコードはサポートされていません。

ユーザーの処置: ご使用の現行 JVM でサポートされる文字セットを使用してください。

DAL01008 データベースへのアクセス中にエラーが発生しました。 {0}

説明: 示されたデータベースへのアクセス中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01009 内部エラーが発生しました。 {0}

説明: 示されている内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01011 クラス {0} はサーバー記述には適切ではありません

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01012 要求された操作はオフライン・モードでは使用できません

説明: 指定された操作はオフライン・モードでは使用できません

ユーザーの処置: アクティブ・オブジェクトに適用できる異なる操作を指定するか、オンライン・モードに切り替えて、再試行してください。

DAL01013 以下の原因により、サーバー '{0}' への接続を作成できません: {1}

説明: 示されたエラーにより、示されたサーバーへの接続を確立できませんでした。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、サーバーへの接続を再試行してください。

DAL01014 無効な接続パラメーターのセットが使用されています。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01016 データを構文解析できません (base64 エンコード規則違反)

説明: XML ファイルが破損しています。

ユーザーの処置: XML ファイル内のすべてのエラーを修正して、再試行してください。

DAL01017 パッケージ '{1}' に、重複した名前 '{0}' を持つ照会が検出されました。

説明: 内部エラーが発生しました。示されたパッケージには同じ名前が指定された照会が複数あります。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01018 ソース・データにターゲット表との互換性がありません。

説明: データベース表にデータを保存しようとしたが、以下の理由で失敗しました。

- 列数が一致していません。
- 列に非互換のタイプがあります。

ユーザーの処置: 互換性のあるターゲット表を選択して、再試行してください。

DAL01019 操作がサポートされていません。

説明: 内部エラーが発生しました。内部の制約のため、要求された操作を実行できません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01020 無効な SQL 型定義: '{0}'

説明: 内部エラーが発生しました。示された SQL 型定義が無効です (複数の既知のデータ・タイプにマップできません)。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01021 この製品は SQLj サポート・モジュールに含まれていません

説明: QMF は SQLj サポート・モジュールをサポートしていないか、または初期化できません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01022 ドライバー名の同じ 2 つの異なるドライバー・ライブラリーを持つことはできません。

説明: 指定されたドライバー名を持つドライバーは、別のライブラリー定義で既に定義済みです。

ユーザーの処置: 新規のドライバー・ライブラリーを作成するのではなく、既存の定義済みドライバー・ライブラリーを使用 (編集) してください。

DAL01023 ドライバー・ライブラリー・リストの保存中にエラーが発生しました: {0}

説明: ドライバー・ライブラリー・リストの保存中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

DAL01025 ドライバー・ライブラリー・リストのロード中にエラーが発生しました: {0}

説明: ドライバー・ライブラリー・リストをロードしようとしているときに、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

DAL01026 リソース限界の制限のため、操作を実行できません: {0}

説明: 示されたリソース限界の制限のため、操作を実行できませんでした。

ユーザーの処置: 「表示」メニューの「リソース限界」を選択して、現行のリソース限界を確認してください。リソース限界内の操作を指定してください。または管理者に特定の権限を要求してください。

DAL01027 ユーザー名が指定されていません。

説明: 「ユーザー情報」ダイアログの名前フィールドから、ユーザー名が欠落しています。

ユーザーの処置: ユーザー名を指定してください。

DAL01028 パスワードが指定されていません。

説明: 「ユーザー情報」ダイアログから、パスワードが欠落しています。

ユーザーの処置: パスワードを指定します。

DAL01029 JDBC URL が正しくありません: {0}。

説明: 示された JDBC URL は、QMF では処理できません。URL が正しくない可能性があります。

ユーザーの処置: JDBC URL にエラーがないか確認するか、異なる URL を指定します。

DAL01030 照会パラメーター {0} の Java タイプが正しくありません。データ・タイプ '{1}' が必要です。

説明: 照会を実行中に内部エラーが発生しました。照会パラメーターに無効なタイプが含まれています。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01031 以下の原因により、キャッシュされたサーバー記述子を復元できません: {0}

説明: 以下のエラーにより、キャッシュされたサーバー記述子を復元できません。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

DAL01032 リモート・メソッド呼び出しを行っているときにエラーが発生しました。 {0}

説明: サーバー側で操作を行っているときに、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 考えられる対応については、示されたエラーの説明を参照してください。

DAL01033 クライアント要求をリモート・サーバーで処理できません。

説明: 内部エラーが発生しました。リモート・サーバーはクライアント要求を処理できません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01034 不完全なメタデータ記述子を使用する試行が検出されました。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・デ

ータを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01035 編集はこのデータ・セットではサポートされていません。

説明: 内部エラーが発生しました。このデータ・セットは編集できません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01036 現在行は編集には不適当なです。

説明: 内部エラーが発生しました。現在行は編集できません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01037 データベース・サーバーは表の名前変更をサポートしていません

説明: このデータベース・サーバー内の表は、QMF ではリネームできません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DAL01038 編集操作が取り消されました。

説明: 表の編集操作はユーザーによって取り消されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DAL01039 レコードを更新できませんでした (編集/削除の同時操作の可能性があります)。

説明: レコードを更新できませんでした。考えられる最大の理由は、並行する編集/削除操作でレコードがロックされることです。

ユーザーの処置: 結果セットをリフレッシュして、再試行してください。

DAL01040 レコードを削除できませんでした (編集/削除の同時操作の可能性があります)。

説明: レコードを削除できませんでした。考えられる最大の理由は、並行する編集/削除操作でレコードがロックされることです。

DAL01041 • DAL01200

ユーザーの処置: 結果セットをリフレッシュして、再試行してください。

DAL01041 計算列の値が、メタデータで指定された長さを超えています

説明: 結果セット内の 1 つ以上の計算列に列定義で許されている長さを超えるデータがあったため、データをエクスポートできませんでした。

ユーザーの処置: 列の最大長を増やすか、計算列内のデータを変更してください。

DAL01042 無効なタイプ変換が検出されました。

説明: 内部エラーが発生しました。指定された操作における型変換は無効です。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01043 削除されたレコードの変更が試みられました。

説明: 内部エラーが発生しました。既に削除されたレコードに対して、変更や復元を行うことはできません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01044 次の理由で接続がブロックされています: {0}

説明: 接続を試行しましたが、示されたエラーまたは制限により、ブロックされました。

ユーザーの処置: 示された問題に応じて、示されたエラーを解決するか、管理者に制限の撤廃を要求してください。

DAL01046 この製品には、選択したデータベースの静的モード・サポート・モジュールが含まれません。

説明: この製品には、選択したデータベースの静的モード・サポート・モジュールが含まれません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01048 ドライバー・クラス名 '{0}' がロードされません。不正なドライバー・クラス名または JDBC ドライバー・ライブラリーの欠落が原因の可能性があります。

説明: 示されたドライバー・クラス名をロードできません。不正なドライバー・クラス名または JDBC ドライバー・ライブラリーの欠落が原因の可能性があります。

ユーザーの処置: 示されたドライバー・クラスを参照している JDBC ドライバー・ライブラリーの適切な定義があるか確認してください。

DAL01049 選択した保護モードはデータベースでサポートされていません。

説明: 選択された保護モードは指定されたデータベースではサポートされていません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01050 ドライバー固有の機能は以下が原因で使用できません: {0}

説明: ドライバー固有の機能は示されたエラーが原因で使用できません。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。ドライバー用の JDBC ドライバー・ライブラリーが正しく構成されているか、また必要な JAR ファイルをすべて含んでいるか確認してください。問題が持続するようであれば、「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集」を選択してサポート・データを収集し、それをカスタマー・サポートに転送してください。

DAL01200 汎用データ・アクセス・エラーが発生しました。 {0}

説明: テキスト説明のないエラーが発生しました。メッセージの後には追加情報が示される場合があります。このエラー・コードは、製品のバージョンによっては、異なるエラー状態を示している場合があります。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01201 汎用データ・アクセス・エラーが発生しました。 {0}、 {1}

説明: テキスト説明のないエラーが発生しました。メッセージの後には追加情報が示される場合があります。このエラー・コードは、製品のバージョンによっては、異なるエラー状態を示している場合があります。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01202 汎用データ・アクセス・エラーが発生しました。 {0}、 {1}、 {2}

説明: テキスト説明のないエラーが発生しました。メッセージの後には追加情報が示される場合があります。このエラー・コードは、製品のバージョンによっては、異なるエラー状態を示している場合があります。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01203 汎用データ・アクセス・エラーが発生しました。 {0}、 {1}、 {2}、 {3}

説明: テキスト説明のないエラーが発生しました。メッセージの後には追加情報が示される場合があります。このエラー・コードは、製品のバージョンによっては、異なるエラー状態を示している場合があります。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01204 汎用データ・アクセス・エラーが発生しました。 {0}、 {1}、 {2}、 {3}、 {4}

説明: テキスト説明のないエラーが発生しました。メッセージの後には追加情報が示される場合があります。このエラー・コードは、製品のバージョンによっては、異なるエラー状態を示している場合があります。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01205 汎用データ・アクセス・エラーが発生しました。 {0}、 {1}、 {2}、 {3}、 {4}、 {5}

説明: テキスト説明のないエラーが発生しました。メッセージの後には追加情報が示される場合があります。このエラー・コードは、製品のバージョンによっては、異なるエラー状態を示している場合があります。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01206 汎用データ・アクセス・エラーが発生しました。 {0}、 {1}、 {2}、 {3}、 {4}、 {5}、 {6}

説明: テキスト説明のないエラーが発生しました。メッセージの後には追加情報が示される場合があります。このエラー・コードは、製品のバージョンによっては、異なるエラー状態を示している場合があります。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01207 汎用データ・アクセス・エラーが発生しました。
{0}、 {1}、 {2}、 {3}、 {4}、 {5}、 {6}、 {7}

説明: テキスト説明のないエラーが発生しました。メッセージの後には追加情報が示される場合があります。このエラー・コードは、製品のバージョンによっては、異なるエラー状態を示している場合があります。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DAL01208 汎用データ・アクセス・エラーが発生しました。 {0}、 {1}、 {2}、 {3}、 {4}、 {5}、 {6}、 {7}、 {8}

説明: テキスト説明のないエラーが発生しました。メッセージの後には追加情報が示される場合があります。このエラー・コードは、製品のバージョンによっては、異なるエラー状態を示している場合があります。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

DDM0001 予期しないエラーが発生しました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0002 オブジェクト {0} に、コード・ポイント {1} を持つフィールドがありません

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0003 ソケットのオープン例外。 {0}

説明: TCP/IP 接続を確立できません。

ユーザーの処置: JDBC URL 内のホストとポートの詳細を確認してください。サーバーに ping を発行して、ネットワーク接続が機能しているか検査してください。

DDM0004 ソケットの書き込み例外。 {0}

説明: ドライバー・コードでネットワーク接続障害または内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: ネットワーク接続を確認してください。接続が正常に機能している場合は、エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0005 データ・フォーマット例外が検出されました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0006 無効な JDBC URL {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0007 DSS ヘッダー・フォーマットのエラーが検出されました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0008 サポートされない CCSID {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0009 暗号エラー {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0010 オブジェクト {0} に、必須フィールド {1} が含まれていません

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0011 オブジェクト {0} は値 {1} をサポートしていません

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0012 構文エラーを検出しました: {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0013 構文エラーを検出しました: {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0014 オブジェクト {0} はこれ以上の反復フィールド {1} を保持できません

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0015 正しくないポート番号値: {0}

説明: JDBC URL の **Port** フィールドには無効な値が含まれています。

ユーザーの処置: JDBC URL には正しいポート番号を指定してください。

DDM0016 {0} は、オブジェクト {2} のフィールド {1} に対して無効な長さです

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0017 不明な **FD:OCA** 記述子のタイプ ID {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0018 **NULL** 可能でないデータで **NULL** 値が検出されました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0019 **FD:OCA** {0} トリプレット・リピーティング・グループの整数を {1} バイトに設定できません

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0020 正しくない **CPT** トリプレットが検出されました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0021 オブジェクト {0} の重複フィールド {1} は正しくありません

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0022 参照先の **FD:OCA** トリプレット {0} が見つかりません

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0023 **FD:OCA** {0} トリプレットを **RLO** トリプレットから参照できません

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0024 **DRDA** で許可されるのは **1** と **0** だけですが、**RLO** トリプレットでレプリケーション係数 {0} が検出されました

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0025 **FD:OCA** {0} トリプレットを **GDA** トリプレットから参照できません

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0026 不明な **DRDA** タイプ {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0027 {0} の **RLO** ハンドラーでは、無限エレメント・カウントは許可されません

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0028 **DRDA** タイプ {0} のトリプレット・ハンドラーの構文解析中にエラーが発生しました

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0029 **JDBC** ステートメント変数 に値が指定されていません {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0030 タイプ変換が正しくありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0031 正しくない日付形式または時刻形式が検出されました: {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0032 準備済みステートメントのパラメーター・タイプ {0} (**java.sql.Type** セットからのもの) はサポートされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0033 不明な **Db2** タイプ {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0035 ステートメントは閉じています。

説明: 閉じている **Statement** オブジェクトを操作しようとしていることが検出されました。

ユーザーの処置: プログラム・コードを修正してください。

DDM0036 結果セットは閉じています。

説明: 閉じている **ResultSet** オブジェクトを操作しようとしていることが検出されました。

ユーザーの処置: プログラム・コードを修正してください。

DDM0037 オブジェクトは閉じています。

説明: 閉じているオブジェクトを操作しようとしていることが検出されました。

ユーザーの処置: プログラム・コードを修正してください。

DDM0038 現在の結果セットの状態では操作を実行できません。

説明: いかなる有効な列にも配置されていない、結果セットの **ResultSet** 列を操作しようとしていることが検出されました。

ユーザーの処置: プログラム・コードを修正してください。

DDM0039 エラー応答を受信しました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0040 {0} コマンドに対してエラー応答を受信しました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DDM0041 {0} オブジェクトの処理中にエラーを検出しました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DRL00001 サーバーへの最大接続数に達しました。

説明: サーバーへの最大接続数に達しました。

ユーザーの処置: 「リポジトリ・ストレージ」ダイアログ内の「最大接続数」パラメーターの値を増加させるか、値にゼロを設定してこの制約を取り除いてください。

DSCERRCD0001 FD:OCA トリプレットが **DRDA** 記述子で使用されていないか、タイプ・コードが無効です。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DSCERRCD0002 FD:OCA トリプレットのシーケンス・エラー。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DSCERRCD0003 配列の説明が必要ですが、それが 1 つではありません (行レイアウト (**RLO**) トリプレットが多すぎるか少なすぎます)。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DSCERRCD0004 行の説明が必要ですが、それが 1 つではありません (**RLO** トリプレットが多すぎるか少なすぎます)。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DSCERRCD0005 受信したばかりの後期環境記述子はサポートされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DSCERRCD0006 トリプレットの形式が正しくありません。必要なパラメーターが欠落しています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DSCERRCD0007 パラメーター値が許容値ではありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DSCERRCD0017 存在しているメタデータ記述子 (**MDD**) が、構造化照会言語 (**SQL**) 記述子として認識されません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DSCERRCD0018 **MDD** クラスが、有効な **SQL** クラスとして認識されません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

DSCERRCD0019 • ERM0002

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DSCERRCD0019 MDD タイプが、有効な SQL タイプとして認識されません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DSCERRCD0033 表記に SQL タイプ (以前の MDD) との互換性がありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DSCERRCD0034 CCSID はサポートされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DSCERRCD0050 グループ・データ配列 (GDA) は、スカラー・データ配列 (SDA) または GDA ではないローカル ID (LID) を参照しています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DSCERRCD0051 GDAlength オーバーライドが限界を超えています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DSCERRCD0052 GDAprecision が限界を超えています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DSCERRCD0053 GDA スケールが精度より大きいか、スケールが負の値になっています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DSCERRCD0054 GDA 長のオーバーライドが欠落しているか、データ・タイプとの互換性がありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DSCERRCD0065 RLO が、RLO または GDA ではない LID を参照しています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

DSCERRCD0066 RLO は、必須の GDA または RLO の参照に失敗しました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0001 永続エージェント・エラー。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0002 コマンド使用権限がありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0003 コマンド検査。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0004 コマンドがサポートされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0005 マネージャー従属関係エラー。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0006 マネージャー・レベルが矛盾しています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0007 会話型プロトコル・エラー。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0008 パラメーターがサポートされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0009 リソース限界に達しました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0010 データ・ストリーム構文エラー。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0011 ターゲットがサポートされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0012 パラメーター値がサポートされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0013 会話型プロトコル・エラー。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0014 RDB は現在アクセスされています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0015 「RDB アクセス失敗」応答メッセージ。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0016 RDB 使用権限がありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0017 RDB が見つかりません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0018 リソース限界に達しました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0019 データ・ストリーム構文エラー。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0020 無効な要求。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0021 作業単位の異常終了条件。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0022 RDB パッケージ・バインディング・プロセスがアクティブです。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0023 照会が開きません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0024 RDB はアクセスされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0025 データ記述子が一致しません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0026 オブジェクトがサポートされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0027 RDB パッケージ・バインディングがアクティブではありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0028 「RDB 更新」応答メッセージ。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0029 SQL エラー条件。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0030 データの終わり。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0031 照会の終わり。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0032 コミットメント要求。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0033 作業単位の終了条件。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0034 記述子が無効です。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0035 照会が開かれました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0036 照会を開くことができませんでした。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0037 照会は以前に開かれています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM0038 コマンド違反が発生しました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

ERM1200 汎用 DRDA エラーが発生しました。 {0}

説明: 示された汎用 DRDA エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示された汎用 DRDA エラーを解決して、再試行してください。

ERM1201 汎用 DRDA エラーが発生しました。
{0}、{1}

説明: 示されている 2 つの汎用 DRDA エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されている 2 つのエラーを解決し、再試行してください。

ERM1202 汎用 DRDA エラーが発生しました。
{0}、{1}、{2}

説明: 示されている 3 つの汎用 DRDA エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されている 3 つのエラーを解決し、再試行してください。

ERM1203 汎用 DRDA エラーが発生しました。
{0}、{1}、{2}、{3}

説明: 示されている 4 つの汎用 DRDA エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されている 4 つのエラーを解決し、再試行してください。

ERM1204 汎用 DRDA エラーが発生しました。
{0}、{1}、{2}、{3}、{4}

説明: 示されている 5 つの汎用 DRDA エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されている 5 つのエラーを解決し、再試行してください。

ERM1205 汎用 DRDA エラーが発生しました。
{0}、{1}、{2}、{3}、{4}、{5}

説明: 示されている 6 つの汎用 DRDA エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されている 6 つのエラーを解決し、再試行してください。

ERM1206 汎用 DRDA エラーが発生しました。
{0}、{1}、{2}、{3}、{4}、{5}、{6}

説明: 示されている 7 つの汎用 DRDA エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されている 7 つのエラーを解決し、再試行してください。

ERM1207 汎用 DRDA エラーが発生しました。
{0}、{1}、{2}、{3}、{4}、{5}、{6}、{7}

説明: 示されている 8 つの汎用 DRDA エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されている 8 つのエラーを解決し、再試行してください。

ERM1208 汎用 DRDA エラーが発生しました。
{0}、{1}、{2}、{3}、{4}、{5}、{6}、{7}、{8}

説明: 示されている 9 つの汎用 DRDA エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されている 9 つのエラーを解決し、再試行してください。

EXPT1000 エクスポート・コマンドを実行できません
: {0}

説明: 示されたエクスポート・コマンドを実行できません。

ユーザーの処置: 最初に示されているエラーを解決し、再試行してください。

EXPT1001 サポートされないデータ・タイプ {0} が
検出されました。

説明: 結果セットに、IXF370 フォーマットでサポートされていないタイプの列が含まれています。

ユーザーの処置: 結果セットに、以下のいずれかのタイプの列が含まれていないか確認してください:

BINARY、VARBINARY、ROWID、
LONGVARBINARY、CLOB、DBCLOB、BLOB、
GRAPHIC、VARGRAPHIC、または
LONGVARGRAPHIC。

EXPT1002 列 {0} の長さは {1} より小さくしなければ
なりません。

説明: 示される列の長さは、IXF フォーマットの制約のため、示される長さよりも短くしなければなりません。

ユーザーの処置: 示されたデータ列の長さが示された長さよりも短くなるようにしてください。別のフォーマット (例えば、XML) を使用したエクスポートも試行してください。

EXPT1003 列 {0} の精度は、{1} から {2} まで (両端
を含む) の間の奇数でなければなりません。

説明: 示される列の精度は、IXF フォーマットの制約のため、示される 2 つの値の間の奇数でなければなりません。

ユーザーの処置: 示されるデータ列の精度を、示される 2 つの値の間の奇数にしてください。別のフォーマット (例えば、XML) を使用したエクスポートも試行してください。

EXPT1004 CCSID {0} はサポートされていないた
め、データはエクスポートされません。

説明: 示された CCSID は、エクスポートではサポートされません。

ユーザーの処置: エクスポートで有効な CCSID を指定してください。サポートされている CCSID のリストは、「エクスポート」ダイアログ内の「CCSID」ドロップダウン・メニューから取得できます。

EXPT1005 単一バイト・コード・ページが指定されて
いないため、データはエクスポートできません。

説明: CLOB、CHAR、VARCHAR、または LONGVARCHAR の列を含む結果セットが IXF フォーマットでエクスポートされましたが、単一バイト・コード・ページを含む CCSID が指定されませんでした。

ユーザーの処置: 単一バイト・コード・ページを含む CCSID を選択してください。

EXPT1006 2 バイト・コード・ページが指定されてい
ないため、データはエクスポートできませんでした。

説明: DBCLOB、GRAPHIC、VARGRAPHIC、または LONGVARGRAPHIC の列を含む結果セットが IXF フォーマットでエクスポートされましたが、2 バイト・コード・ページを含む CCSID が指定されませんでした。

ユーザーの処置: 2 バイト・コード・ページを含む CCSID を選択してください。

EXPT1007 列 {0} の値が、dBASE ファイル形式でサポートされている最大長を超えています。

説明: 示された列の値は、dBASE ファイル・フォーマットでサポートされている文字数の制限を超えています。

ユーザーの処置: 示された列の値を短くするか、異なるファイル・フォーマットを指定して、エクスポートしてください。

EXPT1008 列 {0} のデータ・タイプは dBASE ファイルでサポートされていません。

説明: 示された列のデータ・タイプは dBASE ファイル・フォーマットでサポートされていません。

ユーザーの処置: 示された列では異なるデータ・タイプを指定するか、エクスポート用に異なるファイル・フォーマットを選択してください。サポート対象のタイプ: CHAR、VARCHAR、SMALLINT、INTEGER、DECIMAL、BIGINT、DOUBLE、FLOAT、DATE、および TIME。

EXPT1009 dBASE ファイルの行の長さは 4000 文字を超えることはできません。

説明: すべての結果セットの列の要約の長さが 4,000 文字を超えていますが、これは dBASE ファイル・フォーマットではサポートされません。

ユーザーの処置: 長さを 4,000 文字未満にするか、または異なるファイル・フォーマットを選択して、エクスポートしてください。

EXPT1010 指定されたデータ・ソースは存在しません。

説明: 存在しないデータ・ソースに対して結果セットのエクスポートが試みられました。

ユーザーの処置: 有効なデータ・ソースを指定してください。

EXPT1011 操作が取り消されました。

説明: ユーザーは、ユーザー名とパスワードのプロンプトが表示されたとき、export コマンドを取り消しました。

ユーザーの処置: export コマンドに対して、有効なユーザー名とパスワードを指定してください。

EXPT1012 名前の指定が必要です。

説明: 存在しない表に対して結果セットのエクスポートが試みられました。

ユーザーの処置: 有効なエクスポート表を指定してください。

EXPT1013 ストレージ項目が無効です。

説明: ストレージ・ファイルは破損したデータを含んでいます。

ユーザーの処置: PDF をエクスポートするために、フォントとフォント・マッピングをセットアップしてください。

EXPT1014 PDF 用フォント {0} を作成できません。

説明: PDF ファイル・フォーマットでは、示されたフォントは作成できません。

ユーザーの処置: 変換用の異なるフォントを指定するか、エクスポート用の異なるファイル・フォーマットを指定するか、PDF ファイルのエクスポート用のフォントとフォント・マッピングをセットアップします。

EXPT1015 {0} フォントがマップされていません

説明: 示されたフォント名は、物理フォント・ファイルにマップされません。

ユーザーの処置: PDF ファイルをエクスポートするために、フォントとフォント・マッピングをセットアップしてください。

FRM1001 入力行タイプが無効です。

説明: 書式が破損しています。書式ファイルの各行は、書式ファイル・フォーマットに従って、先頭が行のタイプを定義する特定の文字 (T、V、R、H、E、*) で始まるため、書式ローダーが特定の最初の文字を持つ行でハングしています。現在行の最初の文字は、不明なタイプを持っています。

ユーザーの処置: 書式の作成で使用した QMF と全く同じバージョンを使用して、再度開いて保存してみてください。

FRM1002 入力行が短すぎます。

説明: 各行のタイプでは特定の数 (T > 15、V > 11、R > 3、または H > 44) より多い文字数が必要なため、書式ローダーが行の特定の文字数のところでハングしています。現在行は短すぎます。

ユーザーの処置: 書式の作成で使用した QMF と全く

同じバージョンを使用して、再度開いて保存してみてください。

FRM1003 ブール値が無効です。有効値は **YES** または **NO** です。

説明: 破損した書式: 書式ファイル内のブール値に、YES または NO 以外のストリングが設定されています。

ユーザーの処置: 書式の作成で使用した QMF と全く同じバージョンを使用して、再度開いて保存してみてください。

FRM1004 数値が無効です。有効値は **NONE**、**COLUMNS**、**DEFAULT**、または整数値です。

説明: 破損した書式: 書式ローダーは、有効な Integer 値または定義済みのワード (NONE、COLUMNS、または DEFAULT) を想定しています。

ユーザーの処置: 書式の作成で使用した QMF と全く同じバージョンを使用して、再度開いて保存してみてください。

FRM1005 無効なコードが検出されました。

説明: 破損している書式: 書式ファイル内の各表構造が、独自の列タイプを持っています。書式ローダーは、表タイプに応じて特定の列タイプを想定しています。

ユーザーの処置: 書式の作成で使用した QMF と全く同じバージョンを使用して、再度開いて保存してみてください。

FRM1006 オブジェクト・ヘッダーが短すぎます。

説明: 各行のタイプでは特定の数 (T > 15、V > 11、R > 3、または H > 44) より多い文字数が必要なため、書式ローダーが行の特定の文字数のところでハングしています。現在行は短すぎます。

ユーザーの処置: 書式の作成で使用した QMF と全く同じバージョンを使用して、再度開いて保存してみてください。

FRM1007 オブジェクト・ヘッダーが無効です。

説明: 破損した書式: オブジェクト・ヘッダーは予期しないフィールドまたはデータを含んでいます。

ユーザーの処置: 書式の作成で使用した QMF と全く同じバージョンを使用して、再度開いて保存してみてください。

FRM1008 無効な取扱コードです。

説明: 書式ダイアログの「新規列」は、無効な取扱コードを含んでいます。

ユーザーの処置: 取扱コード・フィールドは空のままにしておくか、コンボ・ボックスから取扱コードを選択します。

FRM1009 {0} に指定された値は無効です。有効な値は {1} です。

説明: 書式ダイアログ・ページには、リスト値を入力したり、選択する場所が複数あります。無効なリスト値が入力されました。

ユーザーの処置: 有効な値をリストから入力してください。

FRM1010 列見出し "{0}" が長すぎます。

説明: 列見出しの長さは 40 文字未満でなければなりません。

ユーザーの処置: 列見出しの長さを 40 文字未満にしてください。

FRM1011 ID {0} の条件式はありません。

説明: 書式の「詳細」分岐には少数 (デフォルトは、1 つ) の明細ブロックがあり、各詳細では、詳細を使用可能または使用不可として定義する条件を使用できます。「条件」分岐には、「C1, C2, .. C999」フォーマット内でタイプが決まる条件と、索引に従う条件が存在する必要があります。

ユーザーの処置: YES、NO、または Ci を指定します。ここで、Ci は既存の条件です。

FRM1012 「固定列数」が **NONE** でない場合は、「行折り返し幅」を **NONE** にする必要があります。

説明: 書式デザイナーの「オプション」ページの「固定列数」フィールドに何らかの数字を定義している場合は、「行折り返し幅」には「なし」を設定する必要があります。

ユーザーの処置: 「行折り返し幅」フィールドと「固定列数」フィールドのいずれかに「なし」を設定してください。

FRM1013 計算 {0} の ID は、他の計算ですでに使用されています。

説明: 書式デザイナーの「計算」ページで、複数の計算が同じ ID で指定されました。

ユーザーの処置: 各計算 ID は固有なものにしてください。

FRM1014 条件 {0} の ID は、他の条件ですでに使用されています。

説明: 書式デザイナーの「条件」ページで、複数の条件が同じ ID で指定されました。

ユーザーの処置: 各条件 ID は固有なものにしてください。

FRM1015 列折り返し編集コードを使用している列がある場合は、行折り返し幅を 0 にする必要があります。

説明: 列で折り返し編集コードを使用している場合は、書式デザイナーの「オプション」ページの「行折り返し幅」には「なし」を設定する必要があります。

ユーザーの処置: 「行折り返し幅」には「なし」を設定するか、行折り返し編集コードを使用しないかのいずれかにしてください。

FRM1016 ACROSS 取扱コードを使用している場合は、報告書列の自動並べ替えは TRUE にする必要があります。

説明: 列に ACROSS 取扱コードがある場合は、書式デザイナーの「オプション」ページの「報告書列の自動並べ替え」には「TRUE」を設定する必要があります。

ユーザーの処置: 「報告書列の自動並べ替え」には「TRUE」を設定するか、ACROSS 取扱コードを使用しないかのいずれかにしてください。

FRM1017 ACROSS 取扱コードでは、GROUP および集合取扱コードを使用するために他の列を必要とします。

説明: ACROSS 取扱コードを使用している列が存在する場合、残りのすべての列では、OMIT、GROUP、または AGGREGATION 取扱コードを使用してください。

ユーザーの処置: 残りのすべての列には、OMIT、GROUP、または AGGREGATION 取扱コードを設定してください。

FRM1018 ACROSS 取扱コードは 1 つの列でしか使用できません。

説明: ACROSS 取扱コードは 1 つの列でしか使用できません。

ユーザーの処置: ACROSS 取扱コードを使用しているのは 1 つの列のみにしてください。

FRM1019 GROUP 取扱コードでは、他の列で集合取扱コードを使用する必要があります。

説明: 1 つの列で GROUP 取扱コードを使用している場合、残りのすべての列では、OMIT、GROUP、BREAK、または AGGREGATION 取扱コードを使用する必要があります。

ユーザーの処置: 残りのすべての列では、OMIT、GROUP、BREAK、または AGGREGATION 取扱コードを使用してください。

FRM1020 GROUP 取扱コードでは、他の全列で非ブランク取扱コードを使用する必要があります。

説明: 1 つの列で GROUP 取扱コードを使用している場合、残りのすべての列では、OMIT、GROUP、BREAK、または AGGREGATION 取扱コードを使用する必要があります。

ユーザーの処置: 残りのすべての列では、OMIT、GROUP、BREAK、または AGGREGATION 取扱コードを使用してください。

FRM1021 集合取扱コードは、列が数値データ・タイプの場合にのみ使用できます。

説明: SUM、CSUM、AVERAGE、STDEV、PCT、TPCT、CPCT、および TCPCT 取扱コードを使用できるのは、数値列のみです。

ユーザーの処置: 非数値列では、SUM、CSUM、AVERAGE、STDEV、PCT、TPCT、CPCT、または TCPCT 以外の取扱コードを使用してください。

FRM1022 ID {0} の計算式はありません。

説明: 書式デザイナーの「計算」ページでは、計算取扱コード ID を指定する必要があります。

ユーザーの処置: 計算取扱コードには計算 ID を指定してください。

FRM1023 "{0}" は計算に有効な編集コードではありません。

説明: 指定された編集コードは、有効な計算編集コードではありません。

ユーザーの処置: 別の計算編集コードを指定してください。

FRM1024 無効な編集コード。

説明: 指定された編集コードは無効です。

ユーザーの処置: 有効な編集コードについては、ユーザー・ヘルプの参照セクションを確認してください。

FRM1025 無効なストリング '{0}' が検出されました。構文解析は失敗しました。

説明: 書式は破損しています。あるいは、数値を表わすストリングが現行ロケールでは構文解析ができないので、別のロケールで開く必要があります。

ユーザーの処置: 書式の作成で使用した QMF と同じバージョンを使用して、開いて保存してみてください。あるいは、ロケールを変更して再オープンしてください。

FRM1026 変数 '{0}' はこのコンテキストでは無効です。

説明: 指定された変数名は、式の中で使用する場合は無効です。

ユーザーの処置: 式で有効な変数名を指定してください。

FRM1027 列 {0} がありません。

説明: 式は、存在しない列を参照する変数を含んでいません。

ユーザーの処置: 式の変数では、有効な列番号を指定してください。

FRM1028 接尾部 '_B' はこのコンテキストには無効です。

説明: 接尾部「_B」は定義済み変数では使用できません。したがって、現行変数では無効です。

ユーザーの処置: すべての定義済み変数から接尾部「_B」を削除してください。

FRM1029 リンクされたデータ・ソースを開くことができません。

説明: 書式で、リンクされたデータ・ソースを開こうとしましたが、このプロセスでエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 書式には、有効なデータ・ソース・オブジェクトを指定してください。

FRM1030 ユーザー編集コードを登録中にエラーが発生しました。

説明: FormCustomEditCode がエラーを返しました。

ユーザーの処置: FormCustomEditCode の実装資料を調べて、エラーがないか確認してください。

FRM1031 ユーザー定義の編集ルーチン・クラスが見つかりません。 {0}

説明: Classloader で、ユーザー実装クラス FormCustomEditCode をロードできません。

ユーザーの処置: className.jar の CLASSPATH を検査してください。

FRM1032 ユーザー定義の編集ルーチン・クラスを初期化中にエラーが発生しました。 {0}

説明: エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 折り返しの例外内の追加情報を参照してください。

GERR00001 汎用ドライバー・エラーが発生しました。 {0}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

GERR00002 汎用ドライバー・エラーが発生しました。 {0}、{1}、{2}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

GERR00003 汎用ドライバー・エラーが発生しました。 {0}、{1}、{2}、{3}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

GERR00004 汎用ドライバー・エラーが発生しました。
{0}、{1}、{2}、{3}、{4}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

GERR00005 汎用ドライバー・エラーが発生しました。
{0}、{1}、{2}、{3}、{4}、{5}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

GERR00006 汎用ドライバー・エラーが発生しました。
{0}、{1}、{2}、{3}、{4}、{5}、{6}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

GERR00007 汎用ドライバー・エラーが発生しました。
{0}、{1}、{2}、{3}、{4}、{5}、{6}、{7}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

GERR00008 汎用ドライバー・エラーが発生しました。
{0}、{1}、{2}、{3}、{4}、{5}、{6}、{7}、{8}

説明: ドライバー・コードで内部エラーが検出されました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

IXF01002 LOB 列索引が無効です。

説明: ファイルには、LOB 列の無効なインデックスが含まれています。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

IXF01003 LOB 列の長さが無効です。

説明: IXF ファイルには、無効な長さを持つ LOB 列が含まれています。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

IXF01004 完了前にファイルの終了を検出しました。

説明: IXF ファイルのデータをインポートしているとき、完了前にファイルの終了を検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルは破損しているか、不明なフォーマットを使用しています。

IXF01005 レコード {0} の長さが無効です。

説明: IXF ファイルからデータをインポートしているときに、破損したレコードを検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

IXF01006 レコード {0} に無効な長さのレコードがありました。

説明: IXF ファイルからデータをインポートしているときに、無効なレコード長を検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

IXF01007 レコード {0} に無効な長さの名前がありました。

説明: IXF ファイルからデータをインポートしているときに、無効な長さの列名を検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

IXF01008 レコード {0} に認識できないレコード・タイプを検出しました。

説明: IXF ファイルのデータをインポートしているとき、認識できないレコード・タイプを検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

IXF01009 レコード {0} に無効な値がありました。

説明: IXF ファイルからデータをインポートしているときに、予期しないデータ値を検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

IXF01010 レコード {0} でサポートされないデータ・タイプを検出しました。

説明: IXF ファイルからデータをインポートしているときに、サポートされないデータ・タイプを検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

IXF01011 レコード {0} にサポートされない CCSID がありました。

説明: IXF ファイルは QMF ではサポートされない CCSID でエンコードされた文字データを含んでいません。

ユーザーの処置: 別の CCSID を使用して IXF ファイルを作成し、QMF にインポートしてください。

IXF01012 列の長さが無効です。

説明: IXF ファイルからデータをインポートしているときに、無効な列名を検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

IXF01013 レコード {0} のデータ・レコード ID が負数です。

説明: IXF ファイルからデータをインポートしているときに、無効なデータ ID を検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

IXF01014 レコード {0} で列の位置が負になっています。

説明: IXF ファイルからデータをインポートしているときに、位置が無効な列を検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

IXF01015 "IXF" 識別子がレコード {0} に見つかりませんでした。

説明: インポートされた IXF ファイルに、コンテンツの先頭に必要ない「IXF」シグニチャーがありません。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

IXF01016 IXF ファイルのバージョンは {0} です。これはサポートされません。

説明: インポートされた IXF ファイル・バージョンは QMF ではサポートされていません。

ユーザーの処置: IXF ファイルがバージョン 0、1、または 2 か確認してください。これ以外のバージョンはサポートされません。

IXF01017 レコード {0} で無効なレコード・カウントを検出しました。

説明: IXF ファイルのデータをインポートしているときに、無効な列カウントを検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

IXF01018 IXF ファイルの内容が壊れています。

説明: インポートした IXF ファイルは破損しています。

ユーザーの処置: IXF ファイルを指定してインポートしているのか確認してください。

IXF01019 データ形式はホスト IXF ファイルではサポートされません。

説明: IXF ファイルからデータをインポートしているときに、サポートされない列タイプを検出しました。

ユーザーの処置: インポートされた IXF ファイルが壊れているか、不明なフォーマットが使用されています。

JOB1000 {0}

説明: これは折り返されたメッセージです。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

JOB1001 JDF ファイル・フォーマットが不明です。

説明: 旧フォーマットのジョブ・ファイル (.jdf) を新フォーマット (.jdfx) にインポートするときに、正しくないジョブ・ファイルが選択されました。

ユーザーの処置: 正しい旧フォーマットのジョブ・ファイルを選択して、インポートしてください。

JOB1002 予期しないファイルの終わりが検出されました。

説明: 旧フォーマットのジョブ・ファイル (.jdf) を新フォーマット (.jdfx) にインポートするときに、破損したジョブ・ファイルが選択されました。

ユーザーの処置: QMF バージョン 8 でジョブ・ファイルを再保存して、ファイルのインポートを再試行してください。

LIC1000 ライセンス・フィールド "{0}" に無効な日付形式があります: {1}。

説明: 指定されたフィールドの日付形式が正しくありません。

ユーザーの処置: ライセンス・ファイルに dd/mm/yyyy 形式の日付があるか確認してください。

LIC1001 必須フィールド "" が指定されていません。

説明: 示されたフィールドに値が指定されていません。

ユーザーの処置: 示されたフィールドに値を指定してください。

LIC1002 フィールド "{0}" に無効な値 "{1}" があります。有効な値は {2}0 です。

説明: 示されたフィールドに無効な値が指定されました。

ユーザーの処置: 有効なライセンス・ファイルを使用しているか確認してください。

LIC1003 ライセンス・ファイルが見つかりません: {0}

説明: ライセンス・ファイルが見つかりません。

ユーザーの処置: 「ライセンスの管理」ダイアログを使用して、製品にライセンスを追加します。

LIC1004 予期しないファイル・エラーです: {0}。

説明: ライセンス・ファイルをロードしているときに、ファイル・システムでエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

LIC1006 ライセンス署名検査が失敗しました。

説明: ライセンス・ファイルのデジタル署名の検査で失敗しました。

ユーザーの処置: 有効なライセンス・ファイルを提示してください。

LIC1007 ライセンスの期限が切れました。

説明: ライセンスの試用期間の期限が切れました。

ユーザーの処置: フル・ライセンスを購入してください。

LIC1008 予期しないエラーです。

説明: ライセンスの検証中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 正しいライセンス・ファイルを使用しているか確認してください。

LIC1009 ライセンスが正しくありません。

説明: 無効なライセンス・ファイルのため、ライセンスの検査に失敗しました。

ユーザーの処置: 元のライセンス・ファイルを使用してください。

LIC1010 ライセンス・ファイルが見つかりません。

説明: ユーザーのホーム・ディレクトリまたはアプリケーションのディレクトリに、ライセンス (*.lic ファイル) が見つかりません。

ユーザーの処置: 「ライセンスの管理」ダイアログを使用して、有効なライセンスをインポートしてください。

MAIL1000 {0}

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラーを解決し、再試行してください。

MAIL1001 SMTP サーバーの指定が必要です。

説明: プロシージャ・コマンドで、オブジェクトを含むメッセージを送信する電子メール・サーバーが指定されていません。

ユーザーの処置: MAIL TO プロシージャ・コマンドで、メッセージを送信する電子メール・サーバーを指定してください。詳細については、ユーザー・ヘルプの『MAIL TO プロシージャ・コマンド』のトピックを確認してください。

MAIL1002 不明なタイプの添付ファイルが指定されました。

説明: MAIL TO コマンドで指定されたファイルは、不明なファイル・フォーマットを持っているか、誤って入力されています。

ユーザーの処置: MAIL TO コマンドの ATTACHMENT パラメーターにエラーがないか確認するか、異なる添付ファイルを指定してください。詳細については、ユーザー・ヘルプの『MAIL TO プロシージャ・コマンド』のトピックを確認してください。

NLS00001 総称エラー #{0} がモジュール {1} で発生しました。

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

NLS00002 一般エラー #{0} がモジュール {1} ({2}) で発生しました。

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

NLS00003 一般エラー #{0} がモジュール {1} ({2}; {3}) で発生しました。

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

NLS00004 一般エラー #{0} がモジュール {1} ({2}; {3}; {4}) で発生しました。

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

NLS00005 一般エラー #{0} がモジュール {1} ({2}; {3}; {4}; {5}) で発生しました。

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

NLS00006 一般エラー #{0} がモジュール {1} ({2}; {3}; {4}; {5}; {6}) で発生しました。

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

NLS00007 一般エラー #{0} がモジュール {1} ({2}; {3}; {4}; {5}; {6}; {7}) で発生しました。

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

NLS00008 一般エラー #{0} がモジュール {1} ({2}; {3}; {4}; {5}; {6}; {7}; {8}) で発生しました。

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

NLS00009 一般エラー #{0} がモジュール {1} ({2}; {3}; {4}; {5}; {6}; {7}; {8}; {9}) で発生しました。

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

OLCQ1000 {0}

説明: これは折り返されたメッセージです。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

OLCQ1001 照会は取り消されました。

説明: 操作は取り消されました。

ユーザーの処置: 照会を再実行します。

OLCQ1002 それぞれのレベルごとに少なくとも 1 つの値を選択する必要があります。

説明: スライサー・コントロールのそれぞれのレベルごとに少なくとも 1 つの値を選択する必要があります。

ユーザーの処置: 値を選択して再試行してください。

OLCQ1005 必要なデータ・ソースが見つかりません。

説明: OLAP 照会で、存在しないデータ・ソースが指定されました。

ユーザーの処置: OLAP 照会には、有効なデータ・ソースを指定してください。

OLP1000 {0}

説明: これは折り返されたメッセージです。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

OLP1002 データベースが OLAP 機能をサポートしていません。

説明: 指定されたデータベースは OLAP 機能をサポートしていません。

ユーザーの処置: OLAP 機能をサポートしているデータベースを指定してください。

OLP1003 キューブの測定値 {0} が見つかりません。

説明: 示されたキューブ測定値がデータベースで見つかりません。

ユーザーの処置: 異なるデータベースを指定して、キューブ測定値を検索してください。

OLP1004 キューブ次元 {0} が見つかりません。

説明: 示されたキューブ・ディメンションがデータベースで見つかりません。

ユーザーの処置: 異なるデータベースを指定して、キューブ・ディメンションを検索してください。

OLP1005 {0} が見つかりません。

説明: 示された OLAP キューブがデータベースで見つかりません。

ユーザーの処置: 異なるデータベースを指定して、OLAP キューブを検索してください。

OLP1006 {0} の値を検索できません。

説明: ディメンション情報の読み取り中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されたディメンションが存在しているか確認してください。

OLP1007 現在レイアウトで使用しているどの表にも測定値や次元が関連していないため、これらを追加できません。

説明: CubeViews から OLAP データを取得する SQL 照会の作成中にエラーが発生しました。選択された測定値またはディメンションに関する情報を格納するための表が見つかりません。

ユーザーの処置: CubeView メタデータの整合性を確認してください。

OLP1008 指定した測定値やディメンションをリンクする十分な情報がありません: {0}。

説明: CubeViews から OLAP データを取得する SQL 照会の作成中にエラーが発生しました。選択された測定値またはディメンションに関する情報を格納するための表を結合できません。

ユーザーの処置: CubeView メタデータの整合性を確認してください。

OLP1009 データベース {0} に接続できません。

説明: データベースに接続できません。

ユーザーの処置: データベースへの接続を使用できることを確認するか、管理者に詳細を尋ねてください。

OLP1010 キューブ定義は、現在の照会のレイアウトに適切ではありません。

説明: OLAP 照会で定義されているキューブ構造は、現行キューブ構造に一致していません。

ユーザーの処置: OLAP 照会で定義されているキューブ構造が、現行キューブ構造に一致しているか確認してください。

OLQ1000 {0}

説明: これは折り返されたメッセージです。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

OLQ1001 内部エラー。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

OLQ1002 照会は取り消されました。

説明: 操作は取り消されました。

ユーザーの処置: 照会を再実行します。

OLQ1003 それぞれのレベルごとに少なくとも 1 つの値を選択する必要があります。

説明: スライサー・コントロールでは少なくとも 1 つの値を選択する必要があります。

ユーザーの処置: 値を選択して再試行してください。

OLQ1004 照会の保存には無効なタイプです。

説明: 照会の保存には無効なオブジェクト・タイプが選択されました。OLAP 照会は、*.oq ファイル・フォーマットでのみ保存できます。

ユーザーの処置: OLAP 照会は、*.oq ファイル拡張子を持つファイルに保存してください。

OLQ1005 照会にデータ・ソースの指定がありません。

説明: OLAP 照会で、存在しないデータ・ソースが指定されました。

ユーザーの処置: OLAP 照会には、有効なデータ・ソースを指定してください。

OLQ1006 スライサーに現れることのできるディメンション階層 {0} への参照は 1 つのみです。

説明: MDX DB2 DWE がサポートしているのは、1 つのスライサーにつき 1 つのディメンションのみです。

ユーザーの処置: 1 つのディメンションのみ選択してください。

PE00001 列 {1} で '{0}' が検出されました。次のうちの 1 つであることが期待されていました: {2}。

説明: 示された列で無効な文字が検出されました。

ユーザーの処置: 無効な文字を示された文字の 1 つで置き換えてください。

PE00002 列 {1} で '{0}' が検出されました。次が期待されていました: {2}。

説明: 示された列で無効な文字が検出されました。

ユーザーの処置: 示された文字で無効な文字を置き換えてください。

PE00003 式は値を得るために計算器を必要とします。

説明: この式は値を返しません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

PE00004 構文解析例外が発生しました。

説明: 式の構文解析中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 式の構文にエラーがないか確認し、再試行してください。

PRC1000 コマンドの構文解析中に予期しないエラーが発生しました。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

PRC1001 コマンドの構文解析中にエラーが発生しました: 予期しないトークン "{0}"。

説明: プロシーチャーの構文解析中に予期しないトークンが見つかりました。

ユーザーの処置: 資料またはコンテンツ・アシスト (Ctrl+Space キーを押して表示) を使用し、プロシーチャーのテキストに構文エラーがないことを確認してください。

PRC1002 コマンドの構文解析中にエラーが発生しました: 予期しない文字 '{0}'。

説明: プロシーチャーの構文解析中に予期しない文字が見つかりました。

ユーザーの処置: 資料またはコンテンツ・アシスト (Ctrl+Space キーを押して表示) を使用して、プロシーチャーのテキストに構文エラーがないか確認してください。

PRC1003 このコンテキストでは、パラメーター '{0}' は無効です。

説明: プロシーチャーの構文解析中に、サポートされていないパラメーター・トークンが見つかりました。

ユーザーの処置: 資料またはコンテンツ・アシスト (Ctrl+Space キーを押して表示) を使用し、プロシージ

ャーのテキストに構文エラーがないことを確認してください。

PRC1004 パラメーター '**{0}**' を 2 回指定することはできません。

説明: 示されたパラメーターは、同一プロシージャ・コマンド内で 2 回指定されています。

ユーザーの処置: 示されたパラメーターは、1 つのインスタンスのみ指定してください。

PRC1005 '**{1}**' は、パラメーター '**{0}**' では有効な値ではありません。

説明: 示された値は、示されたパラメーターでは有効ではありません。

ユーザーの処置: 示されたパラメーターには有効な値を指定してください。プロシージャ・コマンドとそのパラメーターについての詳細は、ユーザー・ヘルプの『プロシージャ・コマンド』セクションを参照してください。

PRC1006 変数 '**{0}**' の値を設定することはできません。

説明: 示された変数は手動で設定することはできません。

ユーザーの処置: 有効な変数を指定して再試行してください。

PRC1008 コマンドの構文解析中にエラーが発生しました: 予期しない行の終わり。

説明: プロシージャの構文解析中に予期しない行の終わりが見つかりました。

ユーザーの処置: 資料またはコンテンツ・アシスト (**Ctrl+Space** キーを押して表示) を使用し、プロシージャのテキストに構文エラーがないことを確認してください。

PRC1009 コマンドの構文解析中にエラーが発生しました。認識できないコマンドは '**{0}**' です。

説明: 示されたコマンドは有効ではありません。

ユーザーの処置: プロシージャ・テキストにエラーがないか確認するか、異なるコマンドを指定します。

PRC1010 行 **{0}**-**{1}** に構文解析エラーがあります (コマンド **#(2)**)。 **{3}**

説明: プロシージャの構文解析中に構文エラーが検出されました。

ユーザーの処置: 資料またはコンテンツ・アシスト (**Ctrl+Space** キーを押して表示) を使用し、プロシージャのテキストに構文エラーがないことを確認してください。

PRC1011 コマンドの構文解析中にエラーが発生しました: 無効なオブジェクト名 '**{0}**'。

説明: 示されたオブジェクト名は無効です。

ユーザーの処置: プロシージャ・テキストにエラーがないか確認し、有効なオブジェクト名を指定してください。詳細については、ユーザー・ヘルプの『プロシージャ・コマンド』セクションを参照してください。

PRC1012 オブジェクト・タイプまたはオブジェクト名を指定してください。

説明: 必須のオブジェクト・タイプまたはオブジェクト名が指定されていません。

ユーザーの処置: プロシージャ・コマンドのテキストでは、必要に応じて、有効なオブジェクト・タイプまたはオブジェクト名を指定してください。詳細については、ユーザー・ヘルプの『プロシージャ・コマンド』セクションを参照してください。

PRC1013 '**{0}**' は無効な変数名です。

説明: 示された変数名は無効です。

ユーザーの処置: 変数名に構文エラーがないか確認するか、別の有効な変数を指定してください。詳細については、ユーザー・ヘルプの『プロシージャ・コマンド』セクションを確認してください。

PRC1014 終わりに達する前に大括弧を閉じてください。

説明: プロシージャの構文解析中に予期しない閉じ大括弧が見つかりました。

ユーザーの処置: 資料またはコンテンツ・アシスト (**Ctrl+Space** キーを押して表示) を使用し、プロシージャのテキストに構文エラーがないことを確認してください。

PRC2001 {0} の検索中にエラーが発生しました。{1}

説明: 示されたオブジェクトの取得中に示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラーを解決して、プロシージャーを再実行してください。

PRC2002 {0} は存在しません。

説明: 示されたオブジェクトは存在しません。

ユーザーの処置: プロシージャー・コマンドでは有効なオブジェクトを指定してください。

PRC2003 {0} は存在しますが、タイプが誤っています。

説明: エディターで開いているウィンドウに、示されたオブジェクトは存在しますが、プロシージャー・コマンドで指定されたオブジェクト・タイプは、このオブジェクトのタイプとは一致しません。

ユーザーの処置: プロシージャー・コマンドで指定したオブジェクト・タイプが、エディターで開いているウィンドウ内のオブジェクトのタイプと一致するか確認してください。

PRC2004 {0} は存在しないか、タイプが誤っています。

説明: エディターのオープン・ウィンドウに、指定されたオブジェクト・タイプのオブジェクトが開かれていないか、オブジェクト・タイプが正しくありません。

ユーザーの処置: プロシージャー・コマンドで指定されたオブジェクト・タイプが、オープン・ウィンドウ内のオブジェクトのタイプに一致するか確認してください。

PRC2005 プロシージャーで現行オブジェクトに対してコマンドが出されましたが、正しいタイプの現行オブジェクトが存在しません。

説明: プロシージャーではオブジェクト・タイプのみを指定し、具体的なオブジェクト名を指定していません。この場合、このタイプのオブジェクトをエディターの別のウィンドウで開けば、プロシージャーは正しく動作します。指定されたタイプのオブジェクトを別のウィンドウで開けなかったために、プロシージャーは実行に失敗しました。

ユーザーの処置: 指定されたタイプのオブジェクトは別のウィンドウで開くか、具体的にオブジェクト名を指定するようにしてください。

PRC2006 {0}

説明: これは折り返されたメッセージです。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

PRC2007 **CONVERT** コマンドは照会に対してのみ発行できます。{0} には適用できません。

説明: 示されたオブジェクトは、**CONVERT** コマンドでは変換できません。

ユーザーの処置: **CONVERT** コマンドで変換する照会を指定してください。詳細については、ユーザー・ヘルプの『プロシージャー・コマンド』セクションの『**CONVERT**』トピックを参照してください。

PRC2008 操作は取り消されました。

説明: 操作はユーザーによって取り消されました。

ユーザーの処置: 操作を再実行してください。

PRC2011 {0} フォーマットでの保存はサポートされていません。

説明: オブジェクトのエクスポートでは、選択されたフォーマットはサポートされていません。報告書は、**TEXT**、**HTML**、および **PDF** フォーマットでのみエクスポートできます。

ユーザーの処置: プロシージャー・コマンドのエクスポート・データ・フォーマットを変更してください。

PRC2017 プロシージャーのネストの深さの上限を超えました。

説明: 50 レベルを超えてネスト化されたプロシージャーはサポートされていません。

ユーザーの処置: プロシージャーを再設計して、深さを減らしてください。

PRC2018 指定された照会が結果セットを戻しませんでした。

説明: 結果セットを含まない照会に対して **SAVE DATA** コマンドが発行されました。

ユーザーの処置: 保存しようとしている照会に結果セットが含まれているか確認してください。

PRC2020 サーバーへのオブジェクトを保存中にエラーが発生しました。 {0}

説明: サーバーでオブジェクトの保存中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されたエラーを解決して、プロシージャを再実行してください。

PRC2022 データが使用不可のため、操作は実行できません。

説明: データを含まないオブジェクトに対して EXPORT DATA コマンドが発行されました。

ユーザーの処置: エクスポートしようとしているオブジェクトにデータが含まれているか確認してください。

PRC2025 プロシージャは、再帰的に自身を呼び出したため、終了しました。

説明: プロシージャは、再帰的にそれ自身を呼び出しています。再帰はプロシージャではサポートされていません。

ユーザーの処置: プロシージャを書き換えて、再帰を削除してください。

PRC2026 プロシージャを実行中にエラーが発生しました。 {0}

説明: プロシージャの実行中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されたエラーを解決して、プロシージャを再実行してください。

PRC2028 {0} ファイルのインポート中にエラーが発生しました。

説明: ファイルのインポート中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: インポート中のオブジェクトがサポート対象のフォーマットか確認してください。

PRC2029 サーバー {1}: {0} に接続できませんでした。

説明: CONNECT TO コマンドで指定されたデータ・ソース別名は未定義です。

ユーザーの処置: コマンドがリポジトリ内の有効なデータ・ソースを参照しているか確認してください。

PRC2030 インポート用に指定されたオブジェクト {0} のタイプに互換性がありません。

説明: サポート対象外のタイプを持つオブジェクトに対して、IMPORT または DISPLAY コマンドが発行されました。

ユーザーの処置: インポートするオブジェクトまたは表示するオブジェクトが、有効なタイプのオブジェクトか確認してください。

PRC2031 指定されたコマンドまたはそのパラメータの一部がサポートされていません。

説明: プロシージャにはサポートされないコマンドまたはパラメータが含まれています。

ユーザーの処置: 資料またはコンテンツ・アシスト (Ctrl+Space キーを押して表示) を使用し、プロシージャのテキストに構文エラーがないことを確認してください。

PRC2032 QMF 以外のオブジェクトを QMF カタログに保存することはできません。

説明: 指定されたオブジェクトは非 QMF オブジェクトであり、QMF カタログには保存できません。

ユーザーの処置: そのオブジェクトを保存するために異なる場所を指定するか、別のオブジェクトを指定して、保存してください。

PRC2033 {0} の値を設定することはできません。

説明: 示されたパラメータの値は、SET GLOBAL コマンドで手動で設定することはできません。

ユーザーの処置: DSQ 変数の中には値を手動で設定できないものがあります (例えば、DSQAO_CONNECT_ID や DSQAO_NUM_FETCHED など)。プロシージャを書き換えて、これらの変数値を除外してください。

PRC2035 プリンター名 '{0}' は無効です。

説明: 示されたプリンター名は無効です。

ユーザーの処置: プリンター名のスペルを確認してください。または、PRINT コマンドで異なるプリンターを指定してください。

PRC2036 このデータ・ソースで表エディターを使用する権限がありません。

説明: データ・ソースの「表の編集を可能にする」リソース限界がオフになっています。そのため、データ・ソ

ースの表エディターを開くことができません。

ユーザーの処置: 管理者にこのリソース限界を使用可能にするように依頼してください。

PRC2037 このデータ・ソースの表を編集する権限がありません。

説明: データ・ソースの「表の編集を可能にする」リソース限界がオフになっています。そのため、照会のグリッド・セル内の値を編集することができません。

ユーザーの処置: 管理者にこのリソース限界を使用可能にするように依頼してください。

PROC1000 REXX プロシージャ参照を判別できません。

説明: REXX プロシージャでは、プロシージャに対する参照を作成できません。

ユーザーの処置: 「リポジトリ」ビューまたは or 「ワークスペース」ビューで参照を表示できるのは、一般プロシージャのみです。

PROC1001 置換変数の一部が定義されていません。

説明: プロシージャの置換変数の一部が定義されていません。

ユーザーの処置: プロシージャのすべての置換変数を定義しているか確認するか、コマンド行で /batch パラメーターを指定しないで、このプロシージャを実行します。この場合、QMF から必要なすべての変数の値を入力するよう求められます。

QEL00001 LOB データを戻す照会の実行は許可されていません。

説明: 大きなオブジェクト・データを含む照会の実行は許可されていません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「LOB オプション」リソース限界を確認します。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

QEL00002 取り出し行数の最大限度を超えました。現在までに {0} 行が検索されました。

説明: 「取り出す最大行数」の限界に到達しました。示された行数はこれまでに取り出された行数です。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「取り出す最大行数」リソース限界を確認します。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

QEL00003 取り出しバイト数の最大限度を超えました。現在までに {0} バイトが検索されました。

説明: 「取り出す最大バイト数」の限界に到達しました。示されたバイト数はこれまでに取り出されたバイト数です。示された行数はこれまでに取り出された行数です。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「取り出す最大バイト数」リソース限界を確認します。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

QEL00004 LOB 列の長さが最大許容長を超えています。

説明: 照会結果内の LOB 列の長さが最大許容長を超えています。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「LOB 列の最大サイズ」を確認します。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

QEL00005 SQL 動詞 '{0}' の使用は許可されていません。

説明: 示された SQL 動詞の使用は許可されていません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「SQL 動詞」限界を確認します。あるいは詳細を管理者に尋ねてください。

QEL00006 データベースへのデータの保存は許可されていません。

説明: データベースへのデータの保存は許可されていません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「データの保存」リソース限界を確認します。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

QEN00001 照会は取り消されました。

説明: アクティブな照会は取り消されました。

ユーザーの処置: 照会を再実行します。

QEN00003 予期しないトークンです: {0}

説明: ストアード・プロシージャーを呼び出している照会の構文解析中に、予期しないトークンが見つかりました。

ユーザーの処置: 照会の構文にエラーがないか確認してください。

QEN00004 予期しないトークン: {0} が期待されていましたが、{1} が見つかりました。

説明: ストアード・プロシージャーを呼び出している照会の構文解析中に、予期しない閉じ大括弧が見つかりました。

ユーザーの処置: 照会の構文にエラーがないか確認してください。

QEN00005 予期しないステートメントの終わりが検出されました。

説明: ストアード・プロシージャーを呼び出している照会の構文解析中に、予期しないステートメントの終わりが見つかりました。

ユーザーの処置: 照会の構文にエラーがないか確認してください。

QEN00006 式 {0} はストアード・プロシージャーではありません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

QEN00007 ステートメントの終わりが期待されていましたが、{0} が見つかりました。

説明: ストアード・プロシージャーを呼び出している照会の構文解析中に、ステートメントの終わりの後にトークンが見つかりました。

ユーザーの処置: 照会の構文にエラーがないか確認してください。

QEN00008 サポートされないパラメーター・データ・タイプ: {0}

説明: ストアード・プロシージャーを呼び出している照会の構文解析中に、サポートされないパラメーターが見つかりました。

ユーザーの処置: 照会の構文にエラーがないか確認してください。

QEN00009 {0} はこのタイプには無効な値です: {1}

説明: ストアード・プロシージャーのパラメーターの値についてプロンプトが出されたとき、ユーザーはそのパラメーターのタイプに有効ではない値を入力しました。

ユーザーの処置: そのパラメーターで有効な値を指定してください。

QMF1004 ''{0}'' データ・ソースから、オブジェクトを印刷する権限がありません。

説明: 示されたデータ・ソース名は、現行ユーザーによる印刷に制限を持っています。

ユーザーの処置: システム管理者に、印刷用の権限を確認してください。

QMF1005 QMF カタログ表構造が古くなりました。カタログ表を更新する必要があります。

説明: QMF カタログが古くなった構造を持っていたため、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: システム管理者に、QMF カタログをアップグレードするように依頼してください。

QMF1006 ''{0}'' データ・ソースからファイルにデータを保存する権限がありません。

説明: 示されたデータ・ソース名は、現行ユーザーによるデータの保存に制限を持っています。

ユーザーの処置: システム管理者に、データの保存用の権限を確認してください。

QRL00001 このデータ・ソースにユーザー・インターフェース・モードでアクセスする権限がありません。

説明: このデータ・ソースにユーザー・インターフェース・モードでアクセスする権限がありません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「オプション」限界を確認します。あるいは詳細を管理者に尋ねてください。

QRL00002 このデータ・ソースに自動化モードでアクセスする権限がありません。

説明: このデータ・ソースに自動化モードでアクセスする権限がありません。

QRL00003 • QRY1005

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「オプション」限界を確認します。あるいは詳細を管理者に尋ねてください。

QRL00003 未保存の照会を実行する権限がありません。

説明: 未保存の照会を実行する権限がありません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「オプション」限界を確認します。あるいは詳細を管理者に尋ねてください。

QRL00004 このデータ・ソースからファイルにデータを保存する権限がありません。

説明: このデータ・ソースからファイルにデータを保存する権限がありません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「データの保存」限界を確認します。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

QRL00005 このデータ・ソースからデータベースにデータを保存する権限がありません。

説明: このデータ・ソースからデータベースにデータを保存する権限がありません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「データの保存」限界を確認します。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

QRL00006 LOB データを検索する権限がありません。

説明: LOB データを検索する権限がありません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「LOB オプション」限界を確認します。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

QRL00008 ユーザー {0} のリソース・グループが見つかりませんでした。

説明: 示されたユーザーのリソース・グループが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: そのユーザーに有効なリソース・グループを指定してください。

QRL00009 LOB データの処理が使用不可のため、操作は実行できません。

説明: LOB データの処理が使用不可のため、操作は実行できません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して特定の許可を参照し、「LOB オプション」限界を確認します。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

QRY0999 {0}

説明: これは折り返されたメッセージです。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

QRY1001 照会は取り消されました。

説明: 操作は取り消されました。

ユーザーの処置: 照会を再実行します。

QRY1002 無効な見出しレコードがありました。

説明: 照会のロードでエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 照会を再ロードしてください。それ以外の場合、照会は破損しています。

QRY1003 照会にデータ・ソースの指定がありません。

説明: 照会にデータ・ソースの指定がありません。

ユーザーの処置: 照会にデータ・ソースを指定してください。

QRY1004 予期しない 'R' レコードがありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから R タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

QRY1005 予期しない 'T' レコードがありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから Trecord タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

QRY1006 無効な 'T' レコードがありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから T タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

QRY1007 無効な列情報を持つ 'T' レコードがありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから T タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

QRY1008 認識できない表タイプがありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルからレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

QRY1009 表 1110 の 'R' レコードに無効な値がありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから R タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

QRY1010 表 1150 の 'R' レコードに無効な値がありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから R タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

QRY1011 表 1210 の 'R' レコードに無効な値がありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから R タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

QRY1012 表 1310 の 'R' レコードに無効な値がありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから R タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

QRY1013 表 1410 の 'R' レコードに無効な値がありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから R タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

QRY1014 順序外の表 1310 の 'R' レコードがありました。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから R タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの

QRY1015 • QRY1027

収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

QRY1015 無効な 'V' レコードがありました: {0}。

説明: 指示照会構造に情報を格納するとき、指示照会ファイルから V タイプのレコードをロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

QRY1016 指示照会の表は 16 より少なくなければなりません。

説明: 指示照会エディターから呼び出す表は 16 個未満でなければなりません。

ユーザーの処置: 指示照会エディターから呼び出す表を 16 個未満にして、照会を再実行してください。

QRY1017 複数の表に同じ関連 ID がありました。

説明: 指定された関連 ID に対する PqTable オブジェクトは既に存在します。

ユーザーの処置: 指示照会エディターには別の表を選択してください。

QRY1018 無効な表関連 ID がありました。

説明: 関連 ID を取得中にエラーが検出されました。

ユーザーの処置: 指示照会エディターに照会を追加するか、「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

QRY1019 表を結合する列が、照会の複数の表にあります。

説明: 1 つの照会で複数の表を結合するとき、結合列が存在できるのは 1 つの表のみです。

ユーザーの処置: 照会内のすべての結合列が 1 つの表のみに存在しているか確認してください。

QRY1020 表を結合する列が、照会のどの表にもありません。

説明: 示された結合列が、照会のどの表にもありません。

ユーザーの処置: 結合列にエラーがないか確認するか、

異なる結合列を指定します。

QRY1021 結合表の結合列のタイプが一致しません。

説明: 2 つ以上の表を結合する列は、すべて同じ列タイプでなければなりません。

ユーザーの処置: 単一結合を構成するすべての列が、同じ列タイプか確認してください。

QRY1022 式に構文エラーがあります: {0}

説明: 示された式に構文エラーが含まれています。

ユーザーの処置: 構文エラーを訂正し、照会を再実行してください。

QRY1023 行条件に無効な結合子がありました。

説明: 行条件に無効な結合子がありました。

ユーザーの処置: すべての行条件にエラーがないか確認して、照会を再実行してください。

QRY1024 行条件に無効な式のタイプがありました。

説明: 行条件に無効な式のタイプがありました。

ユーザーの処置: 行条件内のすべての式のタイプにエラーがないか確認して、照会を再実行してください。

QRY1025 行条件に無効な演算子がありました。

説明: 行条件に無効な演算子がありました。

ユーザーの処置: 行条件内のすべての演算子にエラーがないか確認して、照会を再実行してください。

QRY1026 選択した関係演算子は数値データには無効です。

説明: 数値データに対する行条件に無効な演算子がありました。

ユーザーの処置: 行条件内のすべての演算子にエラーがないか確認して、照会を再実行してください。

QRY1027 無効なソート方向がありました。

説明: 無効なソート方向がありました。有効な方向は、「昇順」または「降順」です。

ユーザーの処置: ソートの方向が適用されるすべてのインスタンスを検査して、昇順または降順のいずれかに変更してください。

QRY1028 指示照会のフォーマットが以前のバージョンのものであり、現在のバージョンでは移行できない結合条件が含まれています。これらの結合条件は削除されました。

説明: 結合条件は、結合に関与する 2 つの表のうち上位の表にのみ指定できます。また、2 つの表の間に結合条件を持たない 3 番目の表が存在する場合、表は先行する表に結合できません。

ユーザーの処置: 結合配列の要素を再配列して、表の現行順序に一致させてください。

QRY1029 表 {0} は存在しません。

説明: 示された表が SQL コードで呼び出されていますが、データ・ソースには存在しません。

ユーザーの処置: 表名にエラーがないか確認するか、異なる表が呼び出されるように指定してください。

QRY1030 表名が指示照会エクスポート書式で許可されている最大長を超えているため、指示照会を保存できません。

説明: 表名が指示照会エクスポート書式で許可されている最大長を超えているため、指示照会を保存できません。

ユーザーの処置: 表名の長さを短縮してください。

QRY1031 結合条件で使用されている列名が指示照会エクスポート書式で許可されている最大長を超えているため、指示照会を保存できません。

説明: 結合条件で使用されている列名が指示照会エクスポート書式で許可されている最大長を超えているため、指示照会を保存できません。

ユーザーの処置: 結合列名の長さを短縮してください。

QRY1032 列式が指示照会エクスポート書式で許可されている最大長を超えているため、指示照会を保存できません。

説明: 列式が指示照会エクスポート書式で許可されている最大長を超えているため、指示照会を保存できません。

ユーザーの処置: 列式名の長さを短縮してください。

QRY1033 行条件の式が指示照会エクスポート書式で許可されている最大長を超えているため、指示照会を保存できません。

説明: 行条件の式が指示照会エクスポート書式で許可されている最大長を超えているため、指示照会を保存できません。

ユーザーの処置: 行条件の長さを短縮してください。

QRY1034 無効なレコードが検出されました。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

QRY1035 指示照会ビューで表示できるのは **SELECT** 照会のみです。

説明: 「指示照会」エディターで表示できるのは、**SELECT** 照会のみです。

ユーザーの処置: 指定された照会に **SELECT** ステートメントが含まれているか確認してください。

QRY1036 単純 **SELECT** ステートメントだけがサポートされています。

説明: 単純 **SELECT** ステートメントだけがサポートされています。

ユーザーの処置: 指定された照会は単純 **SELECT** ステートメントのみを含むか確認してください。

QRY1037 認識されない表参照。

説明: 指示照会の作成のために SQL テキストを構文解析中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: SQL テキストにエラーがないことを確認し、再試行してください。

QRY1038 指示照会ビューでは、副選択のある照会を表示することはできません。

説明: 「指示照会」エディターに表示される照会では、副選択はサポートされません。

ユーザーの処置: 指定された照会が「指示照会」エディターで表示される照会である場合は、照会には副選択を含めないでください。

QRY1039 表ロケータ参照はサポートされていません。

説明: 指示照会の作成のために SQL テキストを構文解析中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: SQL テキストにエラーがないことを確認し、再試行してください。

QRY1040 表関数はサポートされていません。

説明: 指示照会の作成のために SQL テキストを構文解析中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: SQL テキストにエラーがないことを確認し、再試行してください。

QRY1041 指示照会ビューでの結合でサポートされているのは「および」条件のみです。

説明: 「指示照会」エディターに表示される照会内の結合でサポートされるのは、AND 条件のみです。

ユーザーの処置: 指定された照会の結合が「指示照会」エディターで表示される結合である場合は、結合には AND 条件のみ含まれるようにしてください。

QRY1042 比較述部はサポートされていません。

説明: 指示照会の作成のために SQL テキストを構文解析中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: SQL テキストにエラーがないことを確認し、再試行してください。

QRY1043 「Exists」述部はサポートされていません。

説明: 指示照会の作成のために SQL テキストを構文解析中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: SQL テキストにエラーがないことを確認し、再試行してください。

QRY1044 単純 LIKE ステートメントだけがサポートされています。

説明: 単純 LIKE ステートメントだけがサポートされています。

ユーザーの処置: 指定された照会は単純 LIKE ステートメントのみを含むか確認してください。

QRY1045 単純行条件だけがサポートされています。

説明: 単純行条件だけがサポートされています。

ユーザーの処置: 指定された照会は単純行条件のみを含むか確認してください。

QRY1046 式を空にすることはできません。

説明: 照会の構成中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 照会の構文にエラーがないか確認して、再試行してください。

QRY1047 照会の保存には無効なタイプです。

説明: 照会に設定されたタイプは無効です。

ユーザーの処置: 照会に有効なタイプを指定するか、「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

QRY1048 空の照会は実行できません。

説明: 指定された照会には SQL コードが含まれていませんでした。

ユーザーの処置: 照会には少なくとも 1 つの SELECT ステートメントを設定して、再実行してください。

QRY1049 置換変数の一部が定義されていません。

説明: 照会を実行したとき、照会内の一部の置換変数に値が指定されていませんでした。

ユーザーの処置: 照会内のすべての置換変数を定義するようにしてください。

QRY1050 述部内の行の値を使用する照会を表示することはできません。

説明: 指示照会の作成のために SQL テキストを構文解析中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: SQL テキストにエラーがないことを確認し、再試行してください。

QRY1051 「XMLExists」述部はサポートされていません。

説明: 指示照会の作成のために SQL テキストを構文解析中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: SQL テキストにエラーがないことを確認し、再試行してください。

QRY1052 無効な値です: {0}。

説明: 指示照会の作成のために SQL テキストを構文解析中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: SQL テキストにエラーがないことを確認し、再試行してください。

QRY1053 複合照会では **SELECT** ステートメントのみがサポートされています。

説明: 複合照会では **SELECT** ステートメントのみがサポートされています。

ユーザーの処置: 指定された複合照会では、**SELECT** ステートメントのみが呼び出されているか確認してください。

QRY1054 照会内容は、指示照会のフォーマットと互換性がありません。

説明: 照会は指示フォーマットでは保存できません。

ユーザーの処置: 照会は別のフォーマットで保存してください。

QRY1055 ホスト変数の述部はサポートされていません。

説明: 指示照会の作成のために SQL テキストを構文解析中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: SQL テキストにエラーがないことを確認し、再試行してください。

RCO0000 内部エラー

説明: 内部プロセッサ・エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RCO0001 タイプが一致しません

説明: *.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RCO0002 関数 {0} はまだインプリメントされていません

説明: *.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RCO0003 未定義変数 {0}

説明: *.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RCO0004 変数名がありません

説明: *.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RCO0005 「{0}」に構文エラーがあります

説明: *.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RCO0006 不明な関数 {0}

説明: *.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RCO0007 不明なオブジェクト・タイプ {0}

説明: *.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの

RCO0008 • REP01007

収集 (Collect Support Data) を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RCO0008 「{0}」に無効なパラメーターがあります

説明: *.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RCO0009 データベース・オブジェクト {0} が見つかりません

説明: *.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RCO0010 データベース・エラー {0}

説明: *.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RCO0011 不明なデータベース・サーバー・タイプ {0}

説明: *.rco ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

REP01000 {0}

説明: リポジトリへのアクセス中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

REP01001 入出力エラーが発生しました: {0}

説明: リポジトリで、示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

REP01002 文字エンコードはサポートされていません: {0}

説明: データの処理中に、示されたエンコード・エラーが発生しました。

ユーザーの処置: リポジトリ・ストレージ・データベースでは、UTF-8 エンコード方式を使用してください。

REP01003 内部エラーが発生しました: {0}

説明: 示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

REP01004 データベースのアクセス中に次のエラーが発生しました: {0}

説明: データベースへのアクセス中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決して、データベースへの接続を再試行してください。

REP01005 操作がサポートされていません。

説明: リポジトリでは指定された演算はサポートされません。

ユーザーの処置: 異なる演算を指定して、再試行してください。

REP01006 そのような ID を持つオブジェクトは見つかりません。

説明: オブジェクトの検索中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 指定されたオブジェクト ID が正しいか確認してください。

REP01007 URL が「{0}」のオブジェクトまたはファイルが見つかりません。

説明: 示された URL を持つオブジェクトまたはファイルはありません。

ユーザーの処置: URL にエラーがないか確認するか、異なる URL を指定してください。

REP01008 操作を実行するための許可が十分ではありません。

説明: ご使用のユーザー ID には、指定された操作を行う権限がありません。

ユーザーの処置: 管理者に権限を確認するか、行う操作を変更してください。

REP01009 無効なオブジェクト ID のため、操作は取り消されました: {0}

説明: 示されたオブジェクト ID が無効だったので、操作は取り消されました。

ユーザーの処置: 異なるオブジェクト ID を指定して、指定された操作を再実行してください。

REP01010 接続を開くことができません: {0}

説明: リポジトリ・データベースへの接続を確認しているときに、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: リポジトリ・データベースがアクセス可能か確認してください。

REP01011 文書の少なくとも 1 行が 79 文字 (データベースにオブジェクトを保存するときにサポートされる最大値) よりも長くなっています。

説明: データベースに保存するドキュメントに許されている最大文字数は、79 文字です。このドキュメントには、79 文字を超える長さを持つ行が少なくとも 1 つ含まれています。

ユーザーの処置: ドキュメントのすべての行が 79 文字以下か確認して、ドキュメントの保存を再実行してください。

REP01012 {0} は既に存在し、別のタイプを持っています。

説明: 示されたオブジェクト名は、異なるタイプのオブジェクトとして既に存在します。データベース内の各オブジェクトは、異なる名前を持つ必要があります。

ユーザーの処置: オブジェクトに別の名前を指定し、オブジェクトの保存を再実行してください。

REP01013 {0} は存在しません。

説明: 示されたオブジェクトは、データベースに存在しないため見つかりません。

ユーザーの処置: データベース内の検索対象として、異なるオブジェクト名を指定してください。

REP01014 {0} はすでに存在します。

説明: 示されたオブジェクトは、既にデータベースに存在していたため保存できませんでした。

ユーザーの処置: オブジェクトに別の名前を指定し、オブジェクトの保存を再実行してください。

REP01015 {0} のタイプがサポートされていないため、アクセスできません。

説明: 示されたオブジェクトはサポートされないタイプです。

ユーザーの処置: すべての必須プラグインがインストールされ、使用可能になっているか確認してください。

REP01016 オブジェクトが大きすぎるため、操作を行うことができません。

説明: 指定された操作は、指定されたオブジェクトが大きすぎたため実行できませんでした。

ユーザーの処置: 異なるオブジェクトまたは異なる操作を指定して、再実行してください。

REP01017 正しくない状態または正しくない操作のエラーです。

説明: リポジトリで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

REP01018 ユーザーがリポジトリにログオンしていません。

説明: リポジトリに接続していないため、指定された操作は実行できません。

ユーザーの処置: リポジトリに接続して、再実行してください。

REP01019 実装されていません。

説明: 実装されていない機能にアクセスしようとして、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 最新バージョンの製品を使用しているか確認してください。

REP01020 予期しないエラーが発生しました。

説明: リポジトリで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

REP01021 初期化エラーが発生しました。「{0}」。

説明: リポジトリを初期化しているときにエラーが発生しました。

ユーザーの処置: リポジトリの初期化パラメーターを確認し、再試行してください。

REP01022 無効な初期化パラメーターが指定されました。「{0}」

説明: リポジトリを初期化しているときにエラーが発生しました。

ユーザーの処置: リポジトリの初期化パラメーターを確認し、再試行してください。

REP01027 リポジトリ・インスタンスが初期化されていません。

説明: 初期化されていないリポジトリにアクセスしようとして、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: リポジトリを初期化して、再試行してください。

REP01028 リポジトリ「{0}」が見つかりませんでした。

説明: 示されたリポジトリが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: リポジトリ名にエラーがないか確認するか、異なるリポジトリを指定して、再試行してください。

REP01029 オブジェクト・タイプ {0} はこのフォルダーに追加できません。

説明: 示されたタイプのオブジェクトは、指定されたフォルダーに追加できません。

ユーザーの処置: 示されたオブジェクトを追加するための異なるフォルダーを指定してください。

REP01030 {0} に関して追加認証情報が必要です。

説明: 示されたオブジェクトに関して認証情報が不十分です。

ユーザーの処置: 示されたオブジェクトに関して追加認証情報を指定し、再試行してください。

REP01031 リポジトリ・ストレージ表構造は廃止されました。リポジトリ・ストレージ管理者に連絡してください。

説明: 廃止された構造のリポジトリへアクセスを試行したために、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: システム管理者に、リポジトリ・データベース構造をアップグレードするように依頼してください。

REP01032 現行 QMF カタログの CCSID 情報が見つかりませんでした。

説明: QMF カタログから CCSID 情報を読み取ろうとしているときに、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 有効な CCSID 情報を指定して、再試行してください。

REP01034 リポジトリ名 {0} は既に存在します。

説明: 同じ名前前のリポジトリが既に存在するため、リポジトリを作成できません。

ユーザーの処置: 新規リポジトリに異なる名前を指定し、再試行してください。

REP01035 不明なオブジェクト・タイプです。

説明: サポートされないオブジェクトにアクセスしようとしているときに、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: すべての必須プラグインがインストールされ、使用可能になっているか確認してください。

REP01036 オブジェクト {0} はこのフォルダーに追加できません。

説明: 示されたオブジェクトは、指定されたフォルダーに追加できません。

ユーザーの処置: 示されたオブジェクトを追加するための異なるフォルダーを指定してください。

REP01037 リポジトリーが見つかりませんでした。

説明: 指定されたリポジトリーが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: リポジトリー名にエラーがないか確認するか、異なるリポジトリー名を指定して、再試行してください。

REP01038 リポジトリー ID が未定義か、または誤っています。

説明: 非推奨の初期化パラメーターを使用してリポジトリーを初期化しようとしているときに、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「リポジトリー接続の編集」ダイアログでリポジトリー接続プロパティを変更して、再試行してください。

REP01039 カタログがサーバーにありません

説明: 指定されたサーバーには、QMF カタログが存在しません。

ユーザーの処置: 異なるサーバーを指定して、再試行してください。

REP01042 所有者 = {0} でのオブジェクトの使用は許可されません。

説明: ご使用のユーザー ID では、示された所有者のオブジェクトを使用する権限がありません。

ユーザーの処置: 異なる所有者のオブジェクトを指定するか、管理者に詳細を尋ねてください。

REP01043 QMFはこのデータ・ソースにアクセスできません

説明: このアプリケーションはこのデータ・ソースにアクセスできません。

ユーザーの処置: ユーザー・ライセンスを確認し、再試行してください。

REP01044 QMF カタログの制限違反により、データ・ソース '{0}' へのアクセスがブロックされました。

説明: QMF カタログの保護限界で課せられた制限のため、示されたデータ・ソースへのアクセスがブロックされました。

ユーザーの処置: 異なるデータ・ソースを指定してアクセスするか、管理者に詳細を尋ねてください。

REP01045 関連する QMF カタログ・データ・ソースを見つけることができませんでした: {0}

説明: 示された QMF カタログ・データ・ソースが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: データ・ソース名にエラーがないか確認するか、異なるデータ・ソースを指定して、再試行してください。

REP01046 接続が見つかりません: {0}

説明: 示されたりポジトリー接続が見つかりませんでした。

ユーザーの処置: 異なるリポジトリー接続を指定して、再試行してください。

REP01047 データ・ソースが見つかりません: {0}

説明: 示されたデータ・ソースが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: 異なるデータ・ソース接続を指定して、再試行してください。

REP01049 オブジェクト名は {0} 文字を超えることはできません。

説明: 示されたオブジェクト名は、最大文字数の制限を超えています。

ユーザーの処置: 示されたオブジェクト名を短くして、再試行してください。

REP01050 オブジェクト・パスは {0} 文字を超えることはできません。

説明: 示されたオブジェクト・パスは、文字数の制限を超えています。

ユーザーの処置: 示されたオブジェクト・パスを短くして、再試行してください。

REP01051 リポジトリー「{0}」は、QMF の別のインスタンスで使用されているため、接続できません。別のリポジトリーを選択してください。

説明: 示されたりポジトリーは、アプリケーションの別のインスタンスで使用されているため、接続できません。

ユーザーの処置: 異なるリポジトリー接続を選択して、再試行してください。

REP01052 データ・ソース・プラグイン「{0}」は適切に初期化されませんでした。

説明: 示されたプラグインは適切に初期化されませんでした。

ユーザーの処置: プラグイン・パラメーターを変更してください。

RGEN1000 報告書の生成中にエラーが発生しました: {0}

説明: 報告書の生成中に、示されているエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決して、報告書を生成し直してください。

RGEN1001 アクションは取り消されました。

説明: 指定されたアクションは取り消されました

ユーザーの処置: 指定されたアクションを再実行してください。

RGEN1002 書式の列数が照会の列数と一致しません。

説明: 書式の列数が、関連付けられた照会の列数と一致しません。

ユーザーの処置: 書式の列数を編集して、関連付けられた照会の列数と一致させてください。

RGEN1003 内部エラー

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RGEN1004 書式の列数が照会の列数と一致しません。

説明: 書式の列数が、関連付けられた照会の列数と一致しません。

ユーザーの処置: 書式の列数を編集して、関連付けられた照会の列数と一致させてください。

RGEN1005 データ・ソース・オブジェクトが指定されていません。

説明: 報告書にデータ・ソース・オブジェクトが指定されていません。

ユーザーの処置: 報告書にデータ・ソース・オブジェクトが指定して、再試行してください。

RLE00002 タイプ {0} のリソース限界を検索できません。

説明: 示されたタイプのリソースを取得できません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RLE00003 リソース限界をリモート・サイトから検索中にエラーが発生しました: {0}

説明: リモート・サイトからリソース限界の取得中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

RLE00004 不明なリソース限界キーが限界の検索に使用されました。

説明: リソース限界を検索中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RLE00005 リソース限界の取得中にエラーが発生しました: {0}

説明: リソース限界の取得中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

RLE00006 リソース限界キーの内容が壊れているため、リソース限界を検索できません。 {0}

説明: リソース限界の取得中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

RLE00007 リソース限界の取得中に、次のエラーが発生しました: {0}

説明: リソース限界の取得中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラーを解決し、再試行してください。

RLE00008 データ・ソースにアクセスできません。

説明: ご使用のユーザー ID には、データ・ソースにアクセスする権限がありません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して、リソース限界を確認してください。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

RLE00009 LOB データの保存は拒否されます。

説明: ご使用のユーザー ID には、LOB データを含むオブジェクトを保存する権限がありません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して、「LOB オプション」リソース限界を確認してください。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

RLE00010 このサーバーで権限があるのは、保存済みの照会を実行することだけです。

説明: 現行サーバーとの接続中は、保存された照会の実行のみが許可されます。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して、「データの保存」リソース限界を確認してください。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

RLE00011 このサーバーでオブジェクトを保存する権限がありません。

説明: 現行サーバーとの接続中は、オブジェクトを保存する権限がありません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して、「データの保存」リソース限界を確認してください。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

RLE00012 データ・ソース にアクセスする権限がありません。{0}

説明: ご使用のユーザー ID では、示されたデータ・ソースにアクセスする権限がありません。

ユーザーの処置: 別のデータ・ソースに接続するか、管理者に特定の許可に関する情報を尋ねてください。

RLE00013 データ・ソース にアクセスする権限がありません。{0}

説明: ご使用のユーザー ID では、示されたデータ・ソースにアクセスする権限がありません。

ユーザーの処置: 別のデータ・ソースに接続するか、管

理者に特定の許可に関する情報を尋ねてください。

RLW00001 {0} 行が検索されました。取り出す最大行数の警告限界を超えています。

説明: 示された数の行が検索され、「取り出す最大行数」限界が警告限界に達しました。

ユーザーの処置: 「OK」をクリックして、照会を続行します。「アボート」をクリックして、照会を打ち切ります。「無視」をクリックして、警告を無視します。

RLW00002 {0} バイトが取り出されました。取り出す最大バイト数の警告限界を超えています。

説明: 示された数のバイトが取り出され、「取り出す最大バイト数」限界が警告限界に達しました。

ユーザーの処置: 「OK」をクリックして、照会を続行します。「アボート」をクリックして、照会を打ち切ります。「無視」をクリックして、警告を無視します。

RLW00003 {0},{1} から {2} 秒間応答がありません。

説明: 「サーバー応答タイムアウト」限界に到達したため、照会は取り消されました。示された長さの待機時間が経過しても、示されたサーバーから応答がありませんでした。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して「サーバー応答タイムアウト」リソース限界を確認するか、サーバーのトラフィックが軽いときにサーバーへの接続を試行してください。

RLW00004 照会は {0} 秒間アイドル状態です。

説明: 照会は示された秒数アイドル状態だったため、「アイドル照会タイムアウト」警告限界に到達しました。

ユーザーの処置: 「OK」をクリックして、照会を続行します。「アボート」をクリックして、照会を打ち切ります。「無視」をクリックして、警告を無視します。

RLW00005 アイドル照会タイムアウト限界を超えたので、照会は取り消されました。

説明: アイドル照会タイムアウト限界を超えたので、照会は取り消されました。

ユーザーの処置: サーバー・トラフィックが低下したら、照会を再実行してください。

RLW00006 LOB データの処理が使用不可のため、操作は実行できません。

説明: この操作は「LOB 検索オプション」リソース限界が使用不可になっているため実行できません。

ユーザーの処置: 「表示」メニューから「リソース限界」を選択して、「LOB 検索オプション」リソース限界を確認してください。あるいは管理者に詳細を尋ねてください。

RPT00001 レベル・コンポーネントを処理できません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT00002 報告書にメインページがありません。

説明: ビジュアル報告書にメインページがありません。

ユーザーの処置: 報告書にはメインページを含めてください。

RPT00003 グループ式 '{0}' が正しくありません。

説明: 示された式は、存在しない列を参照しています。

ユーザーの処置: 式が有効な列を参照するようにしてください。

RPT00014 BLOB ロケーターが初期化されていませんでした。

説明: BLOB ロケーターの取得中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: リポジトリに再接続して、再試行してください。

RPT00015 照会結果が初期化されていません。

説明: 照会結果が初期化されていませんでした。

ユーザーの処置: リポジトリに再接続して、再試行してください。

RPT00033 内部 swing レンダラー・エラー: 完了が早すぎます。

説明: 線オブジェクトが正しくありません。

ユーザーの処置: 線オブジェクトを削除し、それをデザイナーで再作成してください。

RPT00034 内部 swing レンダラー・エラー: セグメント・タイプが正しくありません。

説明: 線オブジェクトが正しくありません。

ユーザーの処置: 線オブジェクトを削除し、それをデザイナーで再作成してください。

RPT00035 レポーター・エンジンで内部エラーが発生しました。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT00037 無効な引数が使用されました: 行および列は正またはゼロでなければなりません。

説明: HTML または SWF レンダリング・モードで表示すると、格子内の行または列の長さがゼロ未満になっています。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

RPT00038 パラメーター {0} はすでに存在します。

説明: 指定されたパラメーターは既に存在します。

ユーザーの処置: 新規のパラメーターには新規の名前を指定してください。

RPT00039 ランタイム・コンテンツを提供するためにビジュアル・ダッシュボードで 1 つ以上の式を処理できません。

説明: レンダラーが、未定義のシーンのレンダリングを試みました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

RPT00040 選択した報告書形式のレンダラーがエラーを生成しました。出力内容は作成されていません。

説明: 選択した報告書形式のレンダラーがエラーを生成しました。出力内容が作成されませんでした。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを別のレンダリング・モードで表示するか、ビジュアル・プロジェクトを再ロードします。

RPT00041 内部エラー: レポーター・エンジンを作成できません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT00042 以前に保存されたビジュアル・プロジェクト・データを構文解析できません。

説明: ビジュアル・プロジェクトのデータが破損しています。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT00043 ビジュアル・ダッシュボード定様式ファイルが見つかりません。

説明: {CONFIG_DIR}/converter/repository/world.xml が見つからないか、読み取れません。

ユーザーの処置: QMF を再インストールしてください。

RPT00044 ビジュアル・ダッシュボード定様式ファイルを読み取ることができません。

説明: {CONFIG_DIR}/converter/repository/world.xml が見つからないか、読み取れません。

ユーザーの処置: QMF を再インストールしてください。

RPT00045 ビジュアル・ダッシュボード・シーンを読み取ることができません。

説明: ビジュアル・プロジェクトのデータが破損しています。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT00048 オブジェクト {0} をシリアル化できません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・デ

ータを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT00049 内部シリアライゼーション・エラー: {0} オブジェクト・クラスのタグがありません。

説明: シリアライゼーション・プロセスでは、示されたクラスのタグ記述が見つかりませんでした。

ユーザーの処置: QMF を再インストールしてください。

RPT00050 不明なパラメーター・タイプです。

説明: シリアライゼーション・プロセスで、不明なパラメーター・タイプが見つかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

RPT00051 無効なアクション・タイプです。

説明: ビジュアル・プロジェクトのロード中に、不明なアクション・タイプが見つかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

RPT00052 組み込みビジュアル・ダッシュボード・ピクチャーが壊れています。

説明: ビジュアル・ダッシュボード内の組み込み画像が破損しており、開くことができません。

ユーザーの処置: ビジュアル・ダッシュボード内のすべての組み込み画像を確認して、破損しているものがあれば削除してください。

RPT00053 カラー値が無効です。

説明: ColorMap または ColorSequence のロード中に破損したタグが見つかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

RPT00054 カラー・マップのしきい値が無効です。

説明: ColorMap または ColorSequence のロード中に破損したタグが見つかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

RPT00055 無効なイベント・タイプです。

説明: 不明なイベント・タイプが見つかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

RPT00056 イメージ別名が欠落しています。

説明: 不明なイメージが見つかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

RPT00057 無効な番号値です。

説明: ビジュアル・プロジェクトのロード中に、数値を含むはずのストリングに数字が含まれていないことがわかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードするか、異なるロケールで再試行してください。

RPT00058 無効な日付値です。

説明: ビジュアル・プロジェクトのロード中に、日付値を含むはずのストリングに日付値としては解析できない文字が含まれていることがわかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードするか、異なるロケールで再試行してください。

RPT00059 無効なポイント値です。

説明: ビジュアル・プロジェクトのロード中に、点の値を含むはずのストリングに点の値としては解析できない文字が含まれていることがわかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

RPT00060 ビジュアル・ダッシュボードを読み取ることができません。

説明: ビジュアル・ダッシュボードのロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ビジュアル・ダッシュボードを再ロードしてください。

RPT00061 (表示される可能性のあるメッセージは複数あります。『説明』を参照)

説明:

1. 照会別名が欠落しています。 - ビジュアル・プロジェクトのロード中に照会の NAME タグを持たない照会が見つかりました。

2. オフラインのビジュアル報告書をファイルに保存できません。 - オフライン・ビジュアル報告書をファイルに保存できません。

ユーザーの処置:

1. ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。
 2. ビジュアル報告書は、ファイルに保存する前に、オンライン報告書に変換してください。
-

RPT10001 ソース **Visionary** ワールド・ファイルが指定されていません。

説明: Visionary ワールド・ファイルが見つかりません。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルが存在し、読み取ることができるか確認してください。

RPT10002 構成ディレクトリーが指定されていません。

説明: コンバーターの構成ディレクトリーが見つかりません。

ユーザーの処置: QMF を再インストールしてください。

RPT10003 ソース **Visionary** ワールド・ファイルが見つかりません。

説明: Visionary ワールド・ファイルが見つかりません。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルが存在しているか確認してください。

RPT10004 構成ディレクトリーが見つかりません。

説明: コンバーターの構成ディレクトリーが見つかりません。

ユーザーの処置: QMF を再インストールしてください。

RPT10005 構成ファイル {0} が見つかりません。

説明: コンバーターの構成ファイルが見つかりません。

ユーザーの処置: QMF を再インストールしてください。

RPT10006 **Visionary** 接続ファイルがフォルダー {0} に見つかりません。

説明: Visionary 接続ファイルが正しいロケーションにありません。

ユーザーの処置: すべての Visionary ワールド・ファイルが正しいロケーションに保存されているか確認してください。

RPT10007 **Visionary** 照会ファイル {0} を読み取ることができません。

説明: 照会で指定された Visionary ワールド・ファイルが見つかりません。

ユーザーの処置: すべての Visionary ワールド・ファイルが正しいロケーションに保存されているか確認してください。

RPT10008 **Visionary** シーン・ファイル {0} が見つかりません。

説明: 示されたシーン・ファイルが正しいロケーションに保存されていません。

ユーザーの処置: すべての Visionary ワールド・ファイルが正しいロケーションに保存されているか確認してください。

RPT10009 イメージ・ファイル {0} を読み取ることができません。

説明: 示された名前で指定されたイメージ・ファイルが見つかりません。

ユーザーの処置: すべての Visionary ワールド・ファイルが正しいロケーションに保存されているか確認してください。

RPT10010 ピクチャー・ファイル {0} は大きすぎます。

説明: 示されたピクチャー・ファイルは大きすぎます。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトで使用できるように、もう少し小さなピクチャー・ファイルを指定してください。

RPT10011 XML 構文解析エラー。

説明: Visionary ワールドを変換しているときに、XML 構文解析エラーが見つかりました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを Visionary に保存して、再試行してください。

RPT10012 XML 読み取りエラー。

説明: XML データの読み取り中に入出力エラーが発生しました。

ユーザーの処置: XML データの変換を再試行してください。

RPT10013 ビジュアル・ダッシュボード・オブジェクトを作成できません。

説明: Visionary ワールド・ファイルの変換中に、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルの変換を再試行してください。

RPT10014 構成ファイル {0} を構文解析できません。

説明: コンバーター構成ファイルの構文解析中に、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: QMF を再インストールしてください。

RPT10015 接続用のビジュアル・ダッシュボードが指定されていません。

説明: Visionary ワールド・ファイルが正しくロードされませんでした。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

RPT10016 無効な色の記述が見つかりました。

説明: ColorMap または ColorSequence のロード中に破損したタグが見つかりました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

RPT10017 無効なカラー・マップ記述が見つかりました。

説明: ColorMap のロード中に破損したタグが見つかりました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

RPT10018 不明なタグです: {0}

説明: Visionary ワールド・ファイルを変換しているときに、不明なタグが見つかりました。

RPT10019 • RPT10032

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルの変換を再試行してください。

RPT10019 無効なシーン・テンプレート記述です。

説明: Visionary ワールド・シーン・ファイルのロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・シーン・ファイルを再ロードしてください。

RPT10020 破壊されたプロパティ値が見つかりました。

説明: プロパティ・タグに正しくないフォーマットまたは破損した値が指定されました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

RPT10021 無効な URL またはパス形式: '{0}'

説明: 示された URL またはパス形式は無効です。

ユーザーの処置: URL にエラーがないか確認するか、異なる URL を指定してください。

RPT10022 不明またはサポートされないイベント・タイプ

説明: 破損したイベント・タイプまたは不明なイベント・タイプが見つかりました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

RPT10023 式に関数名がありません

説明: 式に関数名がありません。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

RPT10024 関数の引数を構文解析できません

説明: Visionary ワールド・ファイルのロード中に、関数引数を構文解析できませんでした。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

RPT10025 無効なシーン・テンプレート記述です。

説明: Visionary ワールド・シーン・ファイルのロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

RPT10026 数値を構文解析できません: {0}

説明: Visionary ワールド・ファイルのロード中に、数値を含むはずのストリングに数字が含まれていないことがわかりました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

RPT10027 PointSet コンポーネント XML が壊れています。

説明: Visionary ワールド・ファイルのロード中に、点の値を含むはずのストリングに PointSet の値としては解析できない文字が含まれていることがわかりました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

RPT10028 不明な式タイプ {0} です。

説明: Visionary ワールド・ファイルのロード中に不明な式タイプが見つかりました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

RPT10029 1 つ以上の照会に別名がありません。

説明: Visionary ワールド・ファイルの変換中に、名前プロパティを含まない照会別名タグが見つかりました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

RPT10031 ポイント値を構文解析できません。

説明: Visionary ワールド・ファイルのロード中に、点の値を含むはずのストリングに PointSet の値としては解析できない文字が含まれていることがわかりました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

RPT10032 Visionary ワールド XML が壊れています。

説明: Visionary ワールド・ファイルのロード中に、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: Visionary ワールド・ファイルを再ロードしてください。

RPT10033 内部エラー: **Visionary** ワールドにアクセスできません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT10034 パラメーター {0} をビジュアル・ダッシュボードに追加できません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT20001 ビジュアル報告書変換中はリポジトリにアクセスできません。

説明: ビジュアル報告書変換中はリポジトリにアクセスできません。

ユーザーの処置: リポジトリに接続していないことが原因の可能性もあります。接続していることを確認して、再試行してください。

RPT20002 ソース・ビジュアル報告書ファイルが指定されていません。

説明: ソース・ビジュアル報告書ファイルが指定されていません。

ユーザーの処置: ソース・ビジュアル報告書ファイルを指定してください。

RPT20003 ソース・ビジュアル報告書ファイルが見つかりません。

説明: ソース・ビジュアル報告書ファイルが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: 有効なソース・ビジュアル報告書ファイルを指定してください。

RPT20004 ビジュアル報告書名が指定されていません。

説明: ビジュアル報告書名が指定されていません。

ユーザーの処置: ビジュアル報告書の名前を指定してください。

RPT20005 ビジュアル報告書を作成できません。

説明: ビジュアル報告書の生成中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ビジュアル報告書を再ロードしてください。

RPT20006 組み込みイメージを開くことができません。

説明: 組み込みイメージ・ファイルが見つかりません。

ユーザーの処置: ビジュアル報告書を再ロードしてください。

RPT20007 不明なセクション・タイプです: {0}

説明: ビジュアル報告書のロード中に、セクションのセットとタイプの構造が見つかりませんでした。

ユーザーの処置: ビジュアル報告書を再ロードしてください。

RPT20008 ビジュアル報告書ページ・コンポーネントを作成できません。

説明: 構文解析を行って、ページ・コンポーネントを作成しているときにエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ビジュアル報告書を再ロードしてください。

RPT20009 内部エラー: ビジュアル報告書にアクセスできません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT20011 行コントロールの行のスタイルを設定できません。

説明: ビジュアル報告書のロード中に、未定義の線種が見つかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル報告書を再ロードしてください。

RPT20012 無効なリンクされたピクチャー別名がビジュアル報告書に見つかりました。

説明: ビジュアル報告書のデータの構文解析中に、名前のないピクチャーへのリンクが見つかりました。

ユーザーの処置: ビジュアル報告書を再ロードしてください。

RPT20013 ビジュアル報告書コントロールを作成できません。

説明: プリミティブ・オブジェクトまたはコントロール・オブジェクトのロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ビジュアル報告書を再ロードしてください。

RPT20015 無効なパラメーター名 '{0}' が見つかりました。

説明: パラメーター値が無効です。

ユーザーの処置: メッセージに示されているパラメーターに対して別の名前を指定してください。

RPT20016 無効なパラメーター値 '{0}' が見つかりました。

説明: パラメーター値が無効です。

ユーザーの処置: メッセージに示されているパラメーターに対して別の値を指定してください。

RPT30001 組み込みシーンヘナビゲート: 名前 '{0}' の組み込みシーンが見つかりません。

説明: 示された組み込みシーンが見つからなかったため、「組み込みシーンヘナビゲート」アクションが失敗しました。

ユーザーの処置: 「組み込みシーンヘナビゲート」アクションに関連付けられている組み込みシーンの名前を訂正するか、または別の組み込みシーンを指定してください。

RPT30002 前のページのロード: 出口アクションを実行できません (おそらく履歴が空です)。

説明: 「前のページのロード」アクションに失敗しました。ナビゲーションの履歴が空の可能性あります。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードして、再試行してください。

RPT30021 **DesignReporter: LevelTemplate** が **NULL** です。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・デ

ータを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT30022 **DesignReporter: 不明なコンポーネント {0}** です。

説明: 実行時のレンダリングで、不明なコンポーネントを検出しました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

RPT30024 テンプレートが無効です。 **FillStyle** または **LineStyle** プロパティーが **NULL** です。

説明: Wedge テンプレートの変更のための置換規則の実行中に、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: FillStyle プロパティーおよび LineStyle プロパティーにエラーがないか確認してください。

RPT30025 テンプレートが無効です。高さ == {0}!

説明: テンプレートの変更のための置換規則の実行中に、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: Height プロパティーにエラーがないか確認してください。

RPT30026 テンプレートが無効です。幅 == {0}!

説明: テンプレートの変更のための置換規則の実行中に、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: Width プロパティーにエラーがないか確認してください。

RPT30028 パッケージ {0} およびロケール {1} のリソースをロードできません。

説明: リソースのバンドルが見つかりません。

ユーザーの処置: アプリケーションを再始動します。それでも問題が解決しない場合は、アプリケーションを再インストールしてください。

RPT30029 パッケージ {1} からのリソース・ストリング '{0}' の要求が失敗しました。

説明: リソース・ストリングの要求中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: アプリケーションを再始動します。それでも問題が解決しない場合は、アプリケーションを再インストールしてください。

RPT30035 **OutputComponentCreator** が {0} のマップにありません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT30038 {0} が見つかりませんでした。

説明: 「接続」フォルダー内のオブジェクトの 1 つが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: プロジェクトを再ロードするか、接続を削除して、再試行してください。

RPT30040 図表が照会結果セットを読み取れません。

説明: ClusterGraph、OrganizationChart、または TreeChart の作成中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: リポジトリに再接続して、ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

RPT30042 エラー - **axisLength** が無限になっています。 **totalPercentages:{0}**
m_sceneRuntimePanel.getZoomFactor()
{1}

説明: 軸の PercentageLength プロパティーの値が無効です。

ユーザーの処置: 軸の PercentageLength プロパティーの値にエラーがないか確認してください。

RPT30044 チェック・ボックスの値が不明です: {0}。

説明: UNCHECKED、CHECKED、または INDETERMINATE 以外の値が指定されました。

ユーザーの処置: チェック・ボックスに値を設定するアクションでは、そこに必ず UNCHECKED、CHECKED、または INDETERMINATE を設定するようにしてください。

RPT30045 不明な **m_style** です: {0}。

説明: ComboBox オブジェクトで、無効なスタイル・プロパティーが指定されました。

ユーザーの処置: ComboBox オブジェクトのスタイル・プロパティーのエラーについて確認してください。

RPT30047 線が水平でも垂直でもありません。

説明: ElbowConnector オブジェクトのセグメントに、垂直または水平のいずれも設定されていません。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

RPT30048 サポートされないセグメント・タイプです: {0}。

説明: ElbowConnector オブジェクトにサポートされないセグメント・タイプが検出されました。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

RPT30049 コーナー・タイプを取得できませんでした。最終: {0} 開始: {1} 終了: {2}。

説明: 線分の開始座標および終了座標が、ElbowConnector オブジェクトのコーナーを定義していません。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードするか、ElbowConnector オブジェクトを削除して、再作成してください。

RPT30050 ここに来てはいけません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT30052 不明な水平位置合わせです: {0}。

説明: オブジェクトの HorizontalAlign プロパティーに、LEFT、RIGHT、または CENTER 以外の値が見つかりました。

ユーザーの処置: オブジェクトの HorizontalAlign プロパティーの値を設定するアクションでは、そこに LEFT、RIGHT、または CENTER の値を設定するようにしてください。

RPT30053 不明な垂直位置合わせです: {0}。

説明: オブジェクトの VerticalAlign プロパティーに、TOP、BOTTOM、または CENTER 以外の値が見つかりました。

ユーザーの処置: オブジェクトの VerticalAlign プロパティーの値を設定するアクションでは、そこに TOP、

BOTTOM、または CENTER の値を設定するようにしてください。

RPT30054 不明なロケーション・アンカーです: {0}。

説明: オブジェクトの LocationAnchor プロパティに、BOTTOMLEFT、LEFTCENTER、TOPLEFT、BASELINELEFT、BOTTOMCENTER、CENTER、TOPCENTER、BASELINECENTER、BOTTOMRIGHT、RIGHTCENTER、または BASELINERIGHT 以外の値が見つかりました。

ユーザーの処置: オブジェクトの LocationAnchor プロパティの値を設定するアクションでは、そこに BOTTOMLEFT、LEFTCENTER、TOPLEFT、BASELINELEFT、BOTTOMCENTER、CENTER、TOPCENTER、BASELINECENTER、BOTTOMRIGHT、RIGHTCENTER、または BASELINERIGHT の値を設定するようにしてください。

RPT30055 不明な arrowheadStyle です: {0}。

説明: 矢印オブジェクトの MarkerShape プロパティに、NONE、TRIANGLE、CIRCLE、DIAMOND、または SWEPTPOINTER 以外の値が見つかりました。

ユーザーの処置: 矢印オブジェクトの MarkerShape プロパティの値を設定するアクションでは、そこに NONE、TRIANGLE、CIRCLE、DIAMOND、または SWEPTPOINTER の値を設定するようにしてください。

RPT30056 不明なマーカー形状です: {0}。

説明: データ・ポイント・オブジェクトの MarkerShape プロパティに、HOLLOWCIRCLE、HOLLOWDIAMOND、HOLLOWSTAR、HOLLOWTRIANGLE、HOLLOWTRIANGLE2、HOLLOWPLUS、SOLIDCIRCLE、SOLIDDIAMOND、SOLIDSQUARE、SOLIDTRIANGLE、SOLIDTRIANGLE2、SOLIDSTAR、SOLIDPLUS、CROSS、PLUS、BOXCROSS、または BOXPLUS 以外の値が見つかりました。

ユーザーの処置: データ・ポイント・オブジェクトの MarkerShape プロパティの値を設定するアクションでは、そこに HOLLOWCIRCLE、HOLLOWDIAMOND、HOLLOWSTAR、HOLLOWTRIANGLE、HOLLOWTRIANGLE2、HOLLOWPLUS、SOLIDCIRCLE、SOLIDDIAMOND、SOLIDSQUARE、SOLIDTRIANGLE、SOLIDTRIANGLE2、SOLIDSTAR、SOLIDPLUS、CROSS、PLUS、BOXCROSS、または BOXPLUS の値を設定するようにしてください。

RPT30060 不明な attachmentStyle です: {0}。

説明: コネクター・オブジェクトの AttachmentStyle プロパティに、TOPLEFT、TOPCENTER、TOP、TOPRIGHT、CENTERLEFT、CENTER、CENTERRIGHT、BOTTOMLEFT、BOTTOMCENTER、BOTTOM、または BOTTOMRIGHT 以外の値が見つかりました。

ユーザーの処置: コネクター・オブジェクトの AttachmentStyle プロパティの値を設定するアクションでは、そこに TOPLEFT、TOPCENTER、TOP、TOPRIGHT、CENTERLEFT、CENTER、CENTERRIGHT、BOTTOMLEFT、BOTTOMCENTER、BOTTOM、または BOTTOMRIGHT の値を設定するようにしてください。

RPT30061 不明な表の枠タイプ: {0}。

説明: オブジェクトの BorderType プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: オブジェクトの BorderType プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

RPT30062 不明な m_horizontalAlign です: {0}。

説明: 表セルの HorizontalAlign プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: 表セルの HorizontalAlign プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

RPT30063 不明な m_verticalAlign です: {0}。

説明: 表セルの VerticalAlign プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: 表セルの VerticalAlign プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

RPT30064 不明な表の枠タイプ: {0}。

説明: 表の Border プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: 表の Border プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

RPT30065 不明な scrollBarStyle です: {0}。

説明: オブジェクトの ScrollBarStyle プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: オブジェクトの ScrollBarStyle プロ

パーティーに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

RPT30066 不明な **AlignmentStyle** です: {0}。

説明: テキスト・ボックス・オブジェクトの **AlignmentStyle** プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: テキスト・ボックス・オブジェクトの **AlignmentStyle** プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

RPT30068 不明な **LineStylePattern** です: {0}。

説明: オブジェクトの **LineStylePattern** プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: オブジェクトの **LineStylePattern** プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

RPT30069 不明なグラジエント・タイプです: {0}。

説明: オブジェクトの **GradientType** プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: オブジェクトの **GradientType** プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

RPT30070 不明な **borderType** です: {0}。

説明: テキスト・ボックス・オブジェクトまたは組み込みシーン・オブジェクトの **BorderType** プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: テキスト・ボックス・オブジェクトまたは組み込みシーン・オブジェクトの **BorderType** プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

RPT30071 不明な **imageAnchor** です: {0}。

説明: オブジェクトの **ImageAnchor** プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: オブジェクトの **ImageAnchor** プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

RPT30072 組み込みシーン: 不明な **scrollBarStyle**。

説明: 組み込みシーン・オブジェクトの **ScrollBarStyle** プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: 組み込みシーン・オブジェクトの

ScrollBarStyle プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

RPT30073 組み込みシーン: 不明な **typeOfFind**: {0}。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (**Collect Support Data**)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT30076 クライアントによって選択されたセルが見つかりません。

説明: HTML レンダリング・モードのとき、アクションは実行できません。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

RPT30077 グリッド・セルのクリック・イベントがディスプレイできませんでした。

説明: HTML レンダリング・モードのとき、アクションは実行できません。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトを再ロードしてください。

RPT30079 不明なページ型です - {0}。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サービスに転送してください。

RPT30082 パラメーター・グループ複製問題 {0}。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (**Collect Support Data**)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT30083 クラスが {0} のマップにありません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (**Collect Support Data**)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT30088 オブジェクトをシリアル化できません:
{0}。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT30089 値は正でなければなりません: {0}。

説明: 示された値は正の整数でなければなりません。

ユーザーの処置: 示された値が正の整数になるようにしてください。

RPT30090 ズームが {0} のとき、レベルが NULL でした。

説明: 示されたズームのパーセンテージにレベルが指定されていません。

ユーザーの処置: 示されたズームのパーセンテージにレベルを指定してください。

RPT30091 図表が親列を見つけられません: {0}。

説明: 結果セットに、示された親列が見つかりませんでした。

ユーザーの処置: グループの DataLocator プロパティに有効な列名を指定してください。

RPT30092 図表が子列を見つけられません: {0}。

説明: 結果セットに、示された子列が見つかりませんでした。

ユーザーの処置: グループの DataLocator プロパティに有効な列名を指定してください。

RPT30095 階層図には DataTemplate の子が 1 つ必要です。

説明: 階層図には DataTemplate の子が 1 つ必要です。

ユーザーの処置: 「プロジェクト・エクスプローラー」を確認し、階層図のみが DataTemplate の子を 1 つ持っているか確認してください。

RPT30096 CurrentRowIndex が 0 を下回っています。

説明: 指定された行のインデックスがゼロ未満です。行

のインデックスはゼロ以上の整数でなければなりません。

ユーザーの処置: 指定された行のインデックスがゼロ以上の整数であることを確認してください。

RPT30097 不明な間隔です: {0}。

説明: オブジェクトの DateAxis プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: オブジェクトの DateAxis プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

RPT30098 未処理の間隔です: {0}。

説明: オブジェクトの DateAxis プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: オブジェクトの DateAxis プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

RPT30099 不明な dateInterval です: {0}。

説明: オブジェクトの DateAxis プロパティに無効な値がありました。

ユーザーの処置: オブジェクトの DateAxis プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

RPT30104 ここに来てはいけません -
roundIncrement: {0} power: {1}。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT30105 グループ・ヘッダーのグループ名が未定義です。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT30106 グループ・フッターのグループ名が未定義です。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT30107 `m_templateRows` に {0} が含まれていません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT30109 組み込みシーン: 名前 {0} のリンクが見つかりません。

説明: 組み込みシーンの `LinkedScene` プロパティの値が無効です。

ユーザーの処置: 組み込みシーンがリンクされたシーンが存在し、リンク・テキストが正しいか確認してください。

RPT30111 コンポーネント {0} のクローンを作成できません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT30112 コンポーネント {1} のプロパティ {0} のタイプは {2} ではないと思われます。

説明: 示されたオブジェクトのプロパティは、無効なタイプです。

ユーザーの処置: プロパティに値を設定するアクションまたは式では、有効な値を設定するようにしてください。

RPT30114 コンポーネント {0} の `swing` 出力を作成できません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・デ

ータを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT30117 コンポーネント {0} はアクション {1} をサポートしていません。

説明: 示されたコンポーネントは示されたアクションをサポートしていません。

ユーザーの処置: コンポーネントに異なるアクションを指定して、再試行してください。

RPT30118 コンポーネント {0} はプロパティ {1} をサポートしていません。

説明: 示されたコンポーネントは示されたプロパティをサポートしていません。

ユーザーの処置: 異なるプロパティを指定して、再試行してください。

RPT30120 (表示される可能性のあるメッセージは複数あります。『説明』を参照)

説明:

1. グローバル・パラメーター '{0}' は存在しない - 示されたグローバル・パラメーターは存在しません。
2. 照会 '{0}' に '{1}' という名前の列がない - 示された照会には示された列が存在しません。

ユーザーの処置:

1. グローバル・パラメーター名にエラーがないか確認するか、異なるグローバル・パラメーターを指定します。
2. 列名にエラーがないか確認するか、異なる列名を指定します。

RPT30121 照会 '{1}' の結果セット索引 '{0}' は、境界外です。

説明: レイアウト・オブジェクトの `ResultSetIndex` に無効な値が設定されました。

ユーザーの処置: レイアウト・オブジェクトの `ResultSetIndex` プロパティに値を設定するアクションでは、有効な値を設定するようにしてください。

RPT30122 キー '{0}' を持つ照会は存在しません。

説明: 示されたキーを持つ照会はリポジトリ内に存在しません。

ユーザーの処置: 「リポジトリ・エクスプローラー」または「ワークスペース」ビューで照会选择し、「プロパティ」ビューからキーの値をコピー・アンド・ペ

ーストするか、異なる照会のキーを指定します。

RPT30123 次の問題のため、コンポーネント '{0}' が作成できません: {1}

説明: 示されたエラーにより、示されたコンポーネントが作成できません。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

RPT30124 結果セット索引を定義できません。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RPT30126 セキュリティー・リスト '{0}' が見つかりません。

説明: 示されたセキュリティー・リストが見つかりません。

ユーザーの処置: セキュリティー・リスト名にエラーがないか確認するか、異なるセキュリティー・リストを指定します。

RPT30127 プロジェクト記述子が欠落しているため、ビジュアル・プロジェクト '{0}' をロードできません。

説明: プロジェクト記述子が欠落しているため、示されたビジュアル・プロジェクトをロードできません。

ユーザーの処置: ビジュアル・プロジェクトにプロジェクト記述子があるか確認して、プロジェクトのロードを再試行してください。

RSE01000 {0}

説明: リポジトリ・セキュリティー・プロバイダーへのアクセス中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

RSE04000 システム内部エラーが発生しました。エラー・ログを調べてください。

説明: システム内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ウィンドウ」メニューのコンテキスト・メニューから「出力」を選択して、エラー・ログを確認してください。

RSE04001 ユーザー {0} が見つかりません

説明: 示されたユーザーが見つかりません。

ユーザーの処置: ユーザー名にエラーがないか確認して、再試行してください。

RSE04002 ユーザー {0} はすでに存在します

説明: 示されたユーザーは既に存在します。

ユーザーの処置: 別のユーザーを指定してください。

RSE04003 グループ {0} はすでに存在します

説明: 示されたグループは既に存在します。

ユーザーの処置: 別のグループを指定してください。

RSE04004 グループ {0} が見つかりません

説明: 示されたグループが見つかりません。

ユーザーの処置: 別のグループを指定してください。

RSE04005 セキュリティー・プロバイダーとしてログインしていません。

説明: ログインしないでリポジトリへのアクセスを試みました。

ユーザーの処置: リポジトリへログインして、再試行してください。

RSE04006 ユーザー ID とパスワードが無効です

説明: 入力したユーザー ID とパスワードが無効です。

ユーザーの処置: ユーザー ID とパスワードにエラーがないか確認して、再試行してください。

RSE04007 名前 "{0}" は既存の名前と競合していません。

説明: 入力された新規の名前は既に存在します。

ユーザーの処置: 異なる名前を選択してください。

RSE04008 オブジェクト・アクセスが拒否されました

説明: 指定されたオブジェクトへのアクセスが拒否されました。

ユーザーの処置: 異なるオブジェクトを選択してアクセスするか、管理者に詳細を尋ねてください。

RSE04011 グループ {1} からユーザー {0} を削除できません

説明: 示されたグループから示されたユーザーを削除できません。

ユーザーの処置: このグループから削除する別のユーザーを選択してください。

RSE04012 ユーザー {0} を削除できません

説明: 示されたユーザーを削除できません。

ユーザーの処置: 削除する別のユーザーを選択してください。

RSE04013 グループ {0} を削除できません

説明: 示されたグループを削除できません。

ユーザーの処置: 削除する別のグループを選択してください。

RSE04014 セキュリティー・プロバイダーを初期化できません。{0}

説明: リポジトリの初期化中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

RSE04015 このセキュリティー・プロバイダーは読み取り専用です。

説明: 読み取り専用のセキュリティー・プロバイダーのプリンシパルは変更できません。

ユーザーの処置: 変更するには別のセキュリティー・プロバイダーを選択してください。

RSE04016 リポジトリ内の UID {0} に関連する名前が見つかりません

説明: 示されたりポジトリ ID は無効です。

ユーザーの処置: 有効なリポジトリ ID を指定して、再試行してください。

RSE04017 AuthType が anonymous("none") ではありません。プリンシパルと信用証明情報を指定してください

説明: LDAP セキュリティー・プロバイダーの初期化中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: リポジトリの初期化パラメーターを変更して、再試行してください。

RSE04018 LDAP 構成に正しくない値があるか、または必須の値がいくつか欠落しています。設定を確認してください ({0})

説明: LDAP セキュリティー・プロバイダーの初期化中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: リポジトリの初期化パラメーターを変更して、再試行してください。

RSE04019 LDAP サーバーに接続できません。通信が途切れたか、Directory Service が使用不可になっています。

説明: LDAP ディレクトリーへの接続中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ネットワーク接続を確認して、再試行してください。

RSE04020 ユーザーのパスワード属性を読み取ることができません (十分な権限を持っていること、または構成内の PasswordAttribute が正しいことを確認してください。)

説明: LDAP ディレクトリーからデータの読み取り中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: LDAP サービスがアクセス可能か確認してください。

RSE04021 無効な検索フィルターが LDAP 構成にあります

説明: LDAP 構成内の指定された検索フィルターは無効です。

ユーザーの処置: LDAP 構成では有効な検索フィルターを指定してください。

RSE04022 LDAP サーバーがエラーを戻しました

説明: LDAP ディレクトリーからデータの読み取り中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: LDAP サービスがアクセス可能か確認してください。

RSE04023 指定された名前 {0} が見つかりません

説明: 示されたユーザー名が見つかりません。

ユーザーの処置: 異なるユーザー名を指定してください。

RSE04024 LDAP 操作を実行するために十分な権限がありません。

説明: ご使用のユーザー ID には、LDAP 操作を実行する権限がありません。

ユーザーの処置: 特定の権限と許可について詳細は、管理者にお尋ねください。

RSE04025 LDAP 構成で指定された項目 {0} の属性が見つかりません。

説明: LDAP 構成から属性データの読み取り中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 構成パラメーターを訂正して、再試行してください。

RSE04026 UUID {0} が無効な識別名 {1}、{2} にマップされています。

説明: 示された識別名は無効です。

ユーザーの処置: 有効な識別名を指定して、再試行してください。

RSE04028 操作が正しくありません。

説明: セキュリティー・プロバイダーのプリンシパルの編集中に、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

RSE04029 セキュリティー・プロバイダーを登録できません。

説明: セキュリティー・プロバイダーをプロバイダー・レジストリーへ登録しているときにエラーが発生しました。

ユーザーの処置: プロバイダーの登録名がユニークか確認してください。

RSE04030 セキュリティー・プロバイダーが初期化されていません。

説明: セキュリティー・プロバイダー・サービスを初期化していなかったため、サービスへのアクセス中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: セキュリティー・プロバイダーを初期化して、再試行してください。

RSE04031 セキュリティー・プロバイダーが登録されていません。

説明: セキュリティー・プロバイダーを登録していなかったため、セキュリティ・プロバイダーへのアクセス中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: セキュリティー・プロバイダーを登録して、再試行してください。

RSE04032 デフォルトのアドミニストレーターは除くできません。

説明: デフォルトの管理者は削除できません。

ユーザーの処置: 削除するには異なる管理者を指定してください。

RSE04033 デフォルトのアドミニストレーターのメンバーシップは変更できません。

説明: デフォルトの管理者のメンバーシップは変更できません。

ユーザーの処置: 変更するには別の管理者のメンバーシップを指定してください。

RSE04035 アドミニストレーター・グループは名前変更できません。

説明: デフォルトの管理者グループはリネームできません。

ユーザーの処置: リネームするには異なる管理者グループを指定してください。

RSE04036 パスワードは有効期限が切れており、無効になっています。

説明: 指定されたパスワードは有効期限が切れており、無効になっています。

ユーザーの処置: 更新されたパスワードを指定して、再試行してください。

RSE04037 グループはそれ自身の親になることができませんでした。

説明: グループがそれ自身の親になることはできません。親として、異なるグループを選択する必要があります。

ユーザーの処置: 指定されたグループの親となる異なるグループを選択してください。

SPL01001 {0} の **objectClass** 属性が見つかりません

説明: 示されたオブジェクトは **objectClass** 属性を持っていません。LDAP ディレクトリー内のすべてのオブジェクトにはこの属性が必要です。

ユーザーの処置: 示されたオブジェクトに **objectClass** 属性を指定してください。

SPL01002 返された項目 {0} は **LDAP Security Provider** では受け入れられません。その **objectClass** は {1} または {2} ではありません。

説明: 示されたオブジェクトは、LDAP セキュリティー・プロバイダーでは、ユーザーとしてもグループとしても定義されていません。

ユーザーの処置: 示されたオブジェクトの **objectClass** 属性を編集して、それがユーザーかグループか指定してください。

SPL01003 グループの名前を読み取ることができません (属性: {0})

説明: LDAP ディレクトリーに、必須属性を持つオブジェクトが含まれていません。

ユーザーの処置: **groupName** 属性を編集して、それが LDAP ディレクトリー内の既存のオブジェクトを指すようにしてください。

SPL01004 ユーザーの名前を読み取ることができません (属性: {0})

説明: LDAP ディレクトリーに、必須属性を持つオブジェクトが含まれていません。

ユーザーの処置: **userName** 属性を編集して、それが LDAP ディレクトリー内の既存のオブジェクトを指すようにしてください。

SPL01005 LDAP サーバー・ホストまたはポートが指定されませんでした。

説明: LDAP サーバー・ホストまたはポートが指定されませんでした。

ユーザーの処置: LDAP サーバーおよびホストを指定してください。

SPL01006 LDAP サーバーの基本識別名が必要です。

説明: LDAP サーバーの基本識別名が指定されていませんでした。

ユーザーの処置: LDAP サーバーの基本識別名を指定してください。

SPL01007 ユーザー・プリンシパルの識別名が必要です。

説明: プリンシパル・ユーザーの識別名が指定されていませんでした。

ユーザーの処置: プリンシパル・ユーザーの識別名を指定するか、匿名認証を使用してください。

SPL01008 ユーザー項目の信用証明情報の指定が必要です。

説明: エントリー・ユーザーの資格情報が指定されていません。

ユーザーの処置: エントリー・ユーザーの資格情報を指定するか、匿名認証を使用してください。

SPL01009 アドミニストレーター・ユーザーの LDAP 項目を作成できません: {0}

説明: LDAP ディレクトリーには管理者アカウントに関連付けられたユーザーが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: LDAP ディレクトリーの管理者ユーザーを指定してください。

SPL01010 アドミニストレーター・グループ用の LDAP 項目を作成できません: {0}

説明: LDAP ディレクトリーには管理者アカウントに関連付けられたグループが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: LDAP ディレクトリーの管理者グループを指定してください。

SPL01011 すべてのユーザー・グループ用の LDAP 項目を作成できません: {0}

説明: LDAP ディレクトリーにはすべてのユーザーのアカウントに関連付けられたグループが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: LDAP ディレクトリーのすべてのユーザーのグループを指定してください。

SPL01012 ルート・グループ用の LDAP 項目を作成できません: {0}

説明: LDAP ディレクトリーには基本 DN に関連付けられたオブジェクトが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: LDAP ディレクトリーに基本 DN オブジェクトを指定してください。

SPL01013 JNDI 拡張パッケージまたは Sun の LDAP Service Provider が見つかりません。

説明: CLASSPATH に、JNDI 拡張パッケージまたは Sun の LDAP Service Provider が見つかりません。

ユーザーの処置: CLASSPATH には、JNDI 拡張パッケージと Sun の LDAP Service Provider の両方を含めてください。

SPL01014 カタログ・オブジェクトが欠落しています。

説明: カタログ・オブジェクトが設定されていません。

ユーザーの処置: カタログ・オブジェクトを指定して、再試行してください。

SPL01015 空の名前は許可されません。

説明: RDN としての名前が指定されていませんでした。

ユーザーの処置: RDN としての名前を指定してください。

SPL01016 セキュリティー・オブジェクトの RDN が正しくありません (問題のストリング: '{0}')

説明: RDN が無効です。RDN は、コンマで区切られた 1 つ以上の LDAP コンポーネントでなければなりません。

ユーザーの処置: RDN に対して有効なコンポーネントを指定してください。

SPL01017 RDN に不明な属性名 '{0}' があります。

説明: RDN の構文解析中に不明な属性が見つかりました。

ユーザーの処置: RDN の属性にエラーがないか確認してください。

SPL01101 現在 Client Authentication はサポートされていません。

説明: Client Authentication はサポートされていません。

ユーザーの処置: 匿名認証を使用してください。

SPL01103 SSL が正しく初期化されていません。

説明: セキュア・ソケット・プロトコル・ファクトリーが初期化されていません。

ユーザーの処置: アプリケーションを再始動して、再試行してください。

SPL01104 属性 {0} がありません。

説明: LDAP オブジェクトの読み取り中に、示された属性が見つかりませんでした。

ユーザーの処置: 示された属性には有効な値を指定してください。

SPL01105 オブジェクト・クラス名 '{0}' は不明です。

説明: オブジェクト名は無効なクラス名を持っています。これは qmfUser または qmfGroup のいずれかである必要があります。

ユーザーの処置: 示されたオブジェクト名には、qmfUser または qmfGroup のいずれかを指定してください。

SQM02001 パッケージ '{0}' の処理中に入出力エラーが発生しました。 {1}

説明: 示されたパッケージの処理中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

SQM02002 SQLJ カスタマイズにエラーがあります: {0}

説明: SQLJ カスタマイズの処理中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

SQM02003 SQLJ がインストールされていません

説明: SQLJ ライブラリーをロードできませんでした。

ユーザーの処置: ドライバー定義に sqlj.zip を追加してください。

SQM02004 パッケージ '{0}' のプロファイル・データの取得中にエラーが発生しました。 {1}

説明: 示されたパッケージのプロファイル・データのロード中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

SQM02005 パッケージ '{0}' のプロファイルのロード中にエラーが発生しました。

説明: 示されたパッケージのプロファイルのロード中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

SQM02006 パッケージ '{0}' の実装を備えたクラスのロード中に、次のエラーが発生しました: '{1}'。

説明: 示されたパッケージの実装を備えたクラスのロード中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: アプリケーションを再インストールして、再試行してください。

SQM02007 パッケージ '{0}' の処理中にデータベース・アクセス・エラーが発生しました。
{1}

説明: パッケージの処理中に、示されたデータベース・アクセス・エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているデータベース・アクセス・エラーを解決して、再試行してください。

SQM02008 データベース・アクセス・エラーが発生しました: {1}

説明: 示されたデータベース・アクセス・エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

SQM02009 ユーザーにはパッケージ '{0}' の照会を実行する権限がありません。元のエラーは次の通りです: {1}

説明: ユーザーには、示された理由で、パッケージにアクセスする権限がありません。

ユーザーの処置: データベース管理者に連絡してください。

SQM02010 パッケージ '{0}' のプロファイルの削除中にエラーが発生しました。 {1}

説明: 示されたパッケージのプロファイルの削除中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

SQM02011 カスタマイザー呼び出しパターンが空です
説明: 予期しないエラーのため、パッケージのカスタマイズに失敗しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

SQM02013 パッケージ '{0}' のデータのロード中にエラーが発生しました。

説明: 示されたパッケージのデータのロード中に、エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

SQM02014 カスタマイザー呼び出しパターンが正しくありません: {0}

説明: 予期しないエラーのため、パッケージのカスタマイズに失敗しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

SQM02016 以下の原因により、集合 '{0}' を作成できません: {1}

説明: 示されたエラーにより、示された集合を作成できませんでした。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

SQM02017 パッケージ '{0}' のプロファイルは、データベースで格納するには長すぎます

説明: 示されたパッケージのプロファイルは、データベースで格納するには長すぎます。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

SQM02018 集合 ID (プロファイル所有者) が指定されていません。静的モードでは続行できません。

説明: 集合 ID を指定しなければ、SQLJ パッケージはロードできません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

SQM02019 次のエラーのため、パッケージ '{1}' のステートメント '{0}' を準備できません: '{2}'

説明: 示されたエラーのため、パッケージの示されたステートメントを準備できません。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

SQM02020 パッケージ '{0}' のユーザー権限の検査中に、次のエラーが発生しました: '{1}'

説明: 示されたパッケージのユーザー権限の検査中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

SQM02021 照会パッケージ '{0}' に矛盾するプロファイル・データが検出されました。パッケージを再バインドしてください。

説明: 示された照会パッケージに矛盾するプロファイル・データが検出されました。

ユーザーの処置: パッケージを再バインドしてください。

SQM02100 必須パラメーター '{0}' が指定されていません。

説明: 示された必須パラメーターが指定されていません。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

SQM02101 接続の初期化中にエラーが発生しました。{0}

説明: 接続の初期化中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

SQM02102 {0}

説明: 示されたデータベース・アクセス・エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

SQM02103 パッケージ記述クラス '{0}' のロード中にエラーが発生しました。{1}

説明: パッケージ記述クラスのロード中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

SQM02104 パッケージ '{0}' のプロファイルのロード中にエラーが発生しました。{1}

説明: 示されたパッケージのプロファイルのロード中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

SQM02105 パッケージ '{0}' の静的モード・プロファイルが見つかりません。

説明: 示されたパッケージの静的モードが見つかりません。

ユーザーの処置: アプリケーションを再インストールして、再試行してください。

SQM02106 ディレクトリー '{0}' の作成中にエラーが発生しました。

説明: カスタマイズ・プロセス用の一時ディレクトリーを作成できませんでした。

ユーザーの処置: アプリケーションにディレクトリー作成用の権限があるか確認して、再試行してください。

SQM02107 プロファイル・ディレクトリー '{0}' の作成中にエラーが発生しました。

説明: 示されたプロファイル・ディレクトリーの作成中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: アプリケーションにディレクトリー作成用の権限があるか確認して、再試行してください。

SQM02108 パッケージ '{0}' のプロファイルの保存中にエラーが発生しました。 {1}

説明: 示されたパッケージのプロファイルの保存中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラーを解決し、再試行してください。

SQM02109 パッケージ記述ファイルの保存中にエラーが発生しました。 {0}

説明: パッケージ記述ファイルの保存中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラーを解決し、再試行してください。

SQM02110 カスタマイズの開始中にエラーが発生しました。 {0}

説明: カスタマイズを開始したときに、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラーを解決し、再試行してください。

SQM02111 パッケージ '{0}' のカスタマイズ中にエラーが発生しました。 {1}

説明: 示されたパッケージのカスタマイズ中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

SQM02112 プロファイル・データ表の作成中にエラーが発生しました。 {0}

説明: プロファイルのデータ表の作成中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

SQM02113 許可の付与または取り消し操作を行うためのユーザー ID リストが指定されていません。

説明: 許可の付与または取り消し操作を行うためのユーザー ID リストが指定されていません。

ユーザーの処置: GRANT/REVOKE 操作に対して、有効なユーザー ID リストを指定してください。

SQM02115 パッケージのアンインストール中にエラーが発生しました。 {0}

説明: パッケージのアンインストール中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

SQM02116 パッケージ記述のあるファイルが見つかりません。 {0}

説明: 以前作成したパッケージ記述ファイルに基づいてパッケージ記述を準備しているときに、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

SQM02117 パッケージ記述ファイルの読み取り中にエラーが発生しました。 {0}

説明: パッケージ記述ファイルの読み取り中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

SQM02119 パッケージ {0} のインストール中にエラーが発生しました。 {1}

説明: 示されたパッケージのインストール中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

SQM02120 パッケージ {0} のアンインストール中にエラーが発生しました。 {1}

説明: 示されたパッケージのアンインストール中に、示されたエラーが発生しました。

SYNERRCD0001 • SYNERRCD0013

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

SYNERRCD0001 DSS ヘッダー長が 6 未満です。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0002 DSS ヘッダー長が、見つかったデータのバイト数と一致していません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0003 DSS ヘッダー C バイトが D0 ではありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0004 DSS ヘッダー F バイトが認識されていないか、サポートされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0005 DSS の継続が指定されたが、見つかりません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0006 DSS チェーニングが指定されたが、DSS が見つかりません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0007 オブジェクト長が 4 未満です。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0008 オブジェクト長が、見つかったデータのバイト数と一致していません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0009 オブジェクト長が、指定できる最大長を超えています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0010 オブジェクト長が、必要最小限の長さ未満です。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0011 許可されないオブジェクト長です。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0012 ラージ・オブジェクトの拡張長さフィールドが正しくありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0013 オブジェクト・コード・ポイントの索引がサポートされていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0014 必須オブジェクトが見つかりません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0015 送信したコマンド・データ・オブジェクトが多すぎます。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0016 相互に排他的なオブジェクトが存在します。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0017 送信したコマンド・データ・オブジェクトが少なすぎます。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0018 オブジェクトが重複しています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0019 指定した要求相関関係子は無効です。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0020 必要な値が見つかりません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0021 予約済みの値は使用できません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0022 DSS 継続が 2 以下です。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0023 オブジェクトが、規定の順序になっていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0024 DSS チェーニング・ビットが 1 ではないが、DSSFMT ビット 3 が 1 に設定されています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0025 前の DSS は現在の DSS の要求相関関係子が同じであることを示したが、要求相関関係子 ID が同じではありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0026 前の DSS は現在の DSS の要求相関関係子が同じであることを示したが、要求相関関係子 ID が同じではありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0027 DSS チェーニング・ビットが 1 ではないが、エラー継続が要求されています。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0028 相互に排他的なパラメーター値を指定しました。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0029 コード・ポイントが有効なコマンドではありません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

SYNERRCD0030 atmind インスタンス変数が、アトミック EXCSQLSTT チェーン内の EXCSQLSTT コマンドで、そのデフォルト値である 0x00 に設定されていません。

説明: ドライバー・コードで内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: エラー報告を開発者に送信してください。

THM1001 CSS ファイルをコピーできません。

説明: CSS ファイルをサーバーにコピーできませんでした。

ユーザーの処置: CSS ファイル名が正しいか確認して、再試行してください。

THM1002 メイン・テーマの CSS ファイルをアーカイブから抽出できません。

説明: 指定されたアーカイブには、メイン CSS ファイルが含まれていません。

ユーザーの処置: メイン CSS ファイルをアーカイブに保存したか確認して、再試行してください。

THM1003 既に登録されています。別のテーマ名で試行してください。

説明: 同じ名前のテーマが既に存在します。

ユーザーの処置: テーマに異なる名前を指定してください。

THM1004 テーマのルート・フォルダーが既に存在します。別のテーマ名で試行してください。

説明: 同じ名前のテーマが既に存在します。

ユーザーの処置: テーマに異なる名前を指定してください。

UIM12001 内部エラーが発生しました: {0}

説明: 示されている内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

UIM12004 入出力エラーが発生しました: {0}

説明: 示された入出力エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

UIM12005 ファイルが存在しません: {0}

説明: 示されたファイルが存在しません。

ユーザーの処置: 有効なファイルを指定して、再試行してください。

VAL00001 変数 {0} が見つかりません。

説明: 示された変数が見つかりませんでした。

ユーザーの処置: 有効な変数を指定してください。

VAL00003 タイプ変換エラー: {0} タイプのオブジェクトは {1} タイプに変換できません。

説明: 示されたオブジェクトは、示されたタイプに変換できません。

ユーザーの処置: 変換には異なるタイプのオブジェクトを指定するか、オブジェクトを異なるタイプに変換してください。

VAL00004 単位変換エラー: 単位 {0} は {1} に変換できません。

説明: 示された単位は示されたタイプに変換できません。

ユーザーの処置: 変換には異なる単位を指定するか、単位を異なるタイプに変換してください。

VAL00005 式に構文エラーがあります。

説明: 入力した式に構文エラーが含まれています。

ユーザーの処置: 入力した式の構文エラーを確認してください。

VAL00006 誤った式が使用されました。

説明: 誤った式が使用されました。

ユーザーの処置: 有効な式を指定してください。

VAL00007 名前 '{0}' の位置 {1} に無効な文字があります。名前の先頭は文字にする必要があります。特殊文字を含めることはできません。無効な文字のリストについては、ヘルプを参照してください。

説明: 示された名前では、示されたカラムで無効な文字が検出されました。

ユーザーの処置: ヘルプで構文規則を確認して、無効な文字を置き換えてください。

VAL00008 名前を空にすることはできません。名前の先頭は文字にする必要があります。特殊文字を含めることはできません。無効な文字のリストについては、ヘルプを参照してください。

説明: コントロールの名前を空にすることはできません。

ユーザーの処置: コントロールに正しい名前を指定してください。

VAL00009 URL を処理できません: '{0}'

説明: 示された URL が処理できませんでした。

ユーザーの処置: URL にエラーがないか確認して、再試行してください。

VAL00010 URI を処理できません: '{0}'

説明: 示された URI が処理できませんでした。

ユーザーの処置: URI にエラーがないか確認して、再試行してください。

VAL00019 次のプロパティの定義で循環が見つかりました: {0}。

説明: 式に循環参照が含まれています。

ユーザーの処置: 式を編集して循環参照を取り除き、再試行してください。

VAL00021 プロパティを評価できません: {0}。

説明: 式を評価できませんでした。

ユーザーの処置: 式に構文エラーがないか確認して、再試行してください。

VAL00022 妥当性検査に失敗しました。{0} を {1} に設定できません。値は {2} {3} でなければなりません。

説明: このプロパティは示された値を持つことはできません。持つことができる値はエラー・メッセージにリストされています。

ユーザーの処置: プロパティの式を編集し、再試行してください。

VDS1000 {0}

説明: 仮想データ・ソースの処理中に、示されたエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 示されているエラーを解決し、再試行してください。

VDS1001 内部エラー。

説明: 内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: 「ヘルプ」 > 「サポート・データの収集 (Collect Support Data)」を選択してサポート・データを収集し、カスタマー・サポートに転送してください。

VDS1002 照会にデータ・ソースの指定がありません。

説明: 照会にデータ・ソースの指定がありません。

ユーザーの処置: 照会にデータ・ソースを指定してください。

VDS1003 構成ディレクトリーが定義されていません。

説明: 構成ディレクトリーが定義されていません。

ユーザーの処置: 構成ディレクトリーを定義してください。

VDS1004 仮想表 '{0}' のソース・データ・ソースが見つかりません。

説明: 示された仮想表のソース・データ・ソースが見つかりません。ソース・データ・ソースは移動させられたか、削除された可能性があります。

ユーザーの処置: ソース・データ・ソースのロケーションを確認し、必要に応じて、ソース表を仮想データ・ソースに再度コピーしてください。

VDS1005 表が照会で定義されていません。

説明: 表が照会で定義されていません。

ユーザーの処置: 表を照会で定義してください。

VDS1006 表 '{1}' の仮想列 '{0}' のソース表列が見つかりません。

説明: 示された仮想列は、ソース表列のいずれとも一致しません。

ユーザーの処置: 仮想表内の各列がソース表内に対応する列を持っているか確認してください。

VDS1007 仮想データ・ソースには表と照会だけを追加できます。

説明: 表または照会ではないオブジェクトを仮想データ・ソースへ移動させようとした。仮想データ・ソースへ追加できるのは、表または照会のみです。

ユーザーの処置: 仮想データ・ソースへ移動させる表または照会を指定してください。

VDS1008 指定された表がデータ・ソースで見つかりません。

説明: 仮想データ・ソースで参照されている表がソース・データ・ソースで見つかりません。ソース表は移動させられたか、削除された可能性があります。

ユーザーの処置: データ・ソース内のソース表のロケーションを確認し、必要に応じて、ソース表を仮想データ・ソースに再度コピーしてください。

VDS1009 仮想表から最後の列を除去できません。

説明: 仮想表から最後の列を削除しようとした。仮想表には少なくとも 1 つの列が必要です。

ユーザーの処置: 仮想表には少なくとも 1 つの列があるか確認してください。

VDS1010 リレーショナル・データ・ソースの照会だけを追加できます。

説明: 多次元データ・ソースへの照会を追加しようとした。仮想データ・ソースに追加できるのは、リレーショナル・データ・ソースへの照会のみです。

ユーザーの処置: 仮想データ・ソースに追加する、リレーショナル・データ・ソースへの照会を指定してください。

VDS1011 ソース表 '{0}' が見つかりません。

説明: 示されたソース表が見つかりません。ソース表は移動させられたか、削除された可能性があります。

ユーザーの処置: ソース表のロケーションを確認し、必要に応じて、ソース表を仮想データ・ソースに再度コピーしてください。

VDS1012 ソース照会 '{0}' が見つかりません。

説明: 示されたソース照会が見つかりません。ソース照会は移動させられたか、削除された可能性があります。

ユーザーの処置: ソース照会のロケーションを確認し、必要に応じて、ソース照会を仮想データ・ソースに再度コピーしてください。

VDS1013 仮想表の作成は、**SELECT** ステートメントによる **SQL** 照会の使用によるのみ行えます。

説明: **SELECT** ステートメントを含まないソース照会を使用して仮想表を作成しようとした。ソース照会として使用できるのは、**SELECT** ステートメントを含む照会のみです。

ユーザーの処置: ソース照会として **SELECT** ステートメントを含む照会を指定してください。

VDS1014 ソース照会であいまいな名前の列が返されるため、仮想表を作成できません。

説明: 仮想表が、複数の同じ名前の列を持つ結果セットを返す照会の原因になっています。

ユーザーの処置: ソース照会内の結果セットの列名を変更して、再試行してください。

VDS1015 ソース照会で名前のない **1** つ以上の列が返されるため、仮想表を作成できません。

説明: 仮想表のソース表が、無名列を返してはいけません。

ユーザーの処置: 無名列を返さないソース照会を指定してください。

VDS1016 ソース照会で複数の結果セットが返されるため、仮想表を作成できません。

説明: 仮想表を作成できるのは、単一の結果セットを返すソース表を使用した場合のみです。

ユーザーの処置: 単一の結果セットを返すソース表を指定してください。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510

東京都中央区日本橋箱崎町19番21号

日本アイ・ビー・エム株式会社

法務・知的財産

知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様自身の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
J46A/G4
555 Bailey Avenue
San Jose, CA 95141-1003
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

商標

IBM、IBM ロゴおよび [ibm.com](http://www.ibm.com)[®] は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、<http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> をご覧ください。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

製品資料に関するご使用条件

これらの資料は、以下のご使用条件に同意していただける場合に限りご使用いただけます。

適用条件: IBM Web サイトの「ご利用条件」に加えて、以下のご使用条件が適用されます。

個人使用: これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、非商業的な個人による使用目的に限り複製することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずに、これらの資料またはその一部について、二次的著作物を作成したり、配布 (頒布、送信を含む) または表示 (上映を含む) することはできません。

商業的使用: これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、お客様の企業内に限り、複製、配布、および表示することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずにこれらの資料の二次的著作物を作成したり、お客様の企業外で資料またはその一部を複製、配布、または表示することはできません。

権利: ここで明示的に許可されているもの以外に、資料や資料内に含まれる情報、データ、ソフトウェア、またはその他の知的所有権に対するいかなる許可、ライセンス、または権利を明示的にも黙示的にも付与するものではありません。

資料の使用が IBM の利益を損なうと判断された場合や、上記の条件が適切に守られていないと判断された場合、IBM はいつでも自らの判断により、ここで与えた許可を撤回できるものとさせていただきます。

お客様がこの情報をダウンロード、輸出、または再輸出する際には、米国のすべての輸出入 関連法規を含む、すべての関連法規を遵守するものとします。

IBM は、これらの資料の内容についていかなる保証もしません。これらの資料は、特定物として現存するままの状態を提供され、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任なしで提供されます。

プライバシー・ポリシーに関する考慮事項

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品 (「ソフトウェア・オファリング」) では、製品の使用に関する情報の収集、エンド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話またはその他の目的のために、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。多くの場合、ソフトウェア・オファリングにより個人情報が収集されることはありません。IBM の「ソフトウェア・オファリング」の一部には、個人情報を収集できる機能を持つものがあります。ご使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの

Cookie およびそれに類するテクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体的事項をご確認ください。

この「ソフトウェア・オファリング」は、Cookie もしくはその他のテクノロジーを使用して個人情報を収集することはありません。

この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie およびさまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人を特定できる情報を収集する機能を提供する場合、お客様は、このような情報を収集するにあたって適用される法律、ガイドライン等を遵守する必要があります。これには、エンドユーザーへの通知や同意の要求も含まれますがそれらには限られません。

このような目的での Cookie を含む様々なテクノロジーの使用の詳細については、IBM の『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント』(<http://www.ibm.com/privacy/details/jp/ja/>) の『クッキー、ウェブ・ビーコン、その他のテクノロジー』および『IBM Software Products and Software-as-a-Service Privacy Statement』(<http://www.ibm.com/software/info/product-privacy>) を参照してください。

用語集

用語集には、製品で使用される用語の要旨が記されています。

アクセシビリティ (accessibility). 運動障害や視覚障害など身体に障害を持つユーザーがコンピューターを快適に使用できるようにサポートする機能です。

ブレイクポイント (breakpoints). 色が変わる位置を指定するカラー・マップです。

計算列 (calculated columns). 照会結果に追加されるデータの列です。

標準の報告書 (classic reports). データ・ソースと書式テンプレートとして、照会結果を使用して生成される、テキスト・ベースの表形式の報告書です。

カラー・マップ (color map). カラー・マップは、オブジェクトに関連付けられた値に応じて、ビジュアル・プロジェクト・オブジェクトの色を変えるために使用できます。

カラー・シーケンス (color sequence). カラー・シーケンスを使用して、ビジュアル・プロジェクト・オブジェクトの色のプロパティを索引値に基づいて変更することができます。

コマンド・バー (command bar). QMF for Workstation インターフェースからプロシーチャー・コマンドを直接実行することができるインターフェースです。

「接続」ツール (connectivity tool). テキスト・ボックス・オブジェクトやラベル・オブジェクトなどの、非照会主導型のオブジェクト間の依存関係を定義することができるインターフェースです。接続ツールは、ビジュアル・ダッシュボードの作成時にのみ使用可能です。

キューブ構造ツリー (cube structure tree). 「キューブ構造」ツリーには、レイアウト形式で、キューブに含まれるディメンションおよび測定値がリストされます。

データ・ソース (data source). データ・ソースを使用すると、元の表の内容を変更せずにユーザーが編集および操作できる仮想表を作成できます。仮想データ・ソースは、アドミニストレーターが定義した仮想データ・ソースと物理表およびビューが含まれる基礎データ・ソースの間にメタデータ層を介在させることによって機能します。

データ・テンプレート (data templates). データ・テンプレートは、レイアウト・オブジェクト内の照会結果セット・データのビジュアル表示を作成し、制御するために使用されます。

ダイアグラム照会エディター (Diagram Query Editor). ダイアグラム照会エディターを使用して照会を作成するときは、表、結合、列、ソート、および行の情報を指定すると、ダイアグラム照会エディターによって構造化照会言語 (SQL) ステートメントが構成されます。ダイアグラム照会エディターは、QMF for WebSphere では使用できません。

照会のドロー・エディター (Draw Query Editor). 照会のドロー・エディターを使用して、指定した照会タイプと表に基づいて照会オブジェクトを自動的に作成します。

ドリルダウン (drilldown). ユーザーがオブジェクトをクリックすると、元のオブジェクトの値に特に関連する詳細情報が含まれる別のシーンにジャンプできるナビゲーション機能です。ドリルダウン・ウィザードは、照会結果データを表示するすべてのレイアウト・オブジェクトで使用可能です。

編集コード (edit codes). 編集コードは、報告書の特定の列に表示される、文字、日付、グラフィック、数値、時刻、タイム・スタンプのデータをフォーマットする方法を指定します。また、ユーザー定義の編集コードも作成できます。

組み込みシーン (embedded scene). 組み込みシーン・オブジェクトとはコンテナの 1 つで、それを使用して別のシーンのすべてまたは一部を表示した後、そのシーンにナビゲートできます。組み込みシーン・オブジェクトが置かれたシーンは、ソース・シーンと見なされません。宛先シーンは、組み込みシーンです。

イベント・アクション (event actions). オブジェクトにイベント・アクションを定義することにより、シーンが対話的になり、ナビゲートできるようになります。ダッシュボードをユーザーがナビゲートするとき、マウス・アクションにより、シーンからシーンへのジャンプ、SQL ステートメントの実行、または他のアプリケーションの起動といった事前定義のイベントが起こりません。

式デザイナー (**Expression Designer**). 式デザイナーを使用して、選択したオブジェクトに関連付けるプロパティ値を指定できます。式デザイナーは、オブジェクトのプロパティを指定する代替方法です。オブジェクトに指定可能なプロパティごとに、プロパティ値のフォーマットに利用できるテンプレートが提供されます。さらに、プロパティ値の処理や表示に使用できるスペースが増えます (式を使用した場合、このスペースは大幅に大きくなります)。

高速保存 (**fast save**). 照会結果のデータを「高速保存」方式で保存する場合は、すべての処理がデータベースで行われます。この方式では、QMF for Workstation/WebSphere インターフェースとデータベースの間でさらにデータのやり取りが行われることはありません。QMF for Workstation/WebSphere インターフェースはオリジナルの照会に SQL を追加し、照会が再実行されて、データは指定された表に直接保存されます。大量のデータを保存するときには、「高速保存」の処理を使用して照会結果データを保存すると、パフォーマンスが大幅に向上します。

ファイル・ベース・リポジトリ (**file-based repositories**). QMF for Workstation を使用している場合、ファイル・リポジトリ接続を作成することにより、ローカルまたはネットワーク・ドライブ上に格納されたファイル・ベース・リポジトリに接続できるようにするための情報を設定できます。ファイル接続は、旧ファイル・ベース・リポジトリに対してのみ作成できます。

フォーマット・オプション (**formatting options**). 照会結果をどのようにエディター・ウィンドウに表示するかをカスタマイズすることができます。列の列見出しおよびセルのそれぞれにさまざまなフォント、色、およびテキスト配置を指定することができます。列およびセルのフォーマット設定が条件式の結果に基づいて適用されるように指定することもできます。フォーマット・オプションは、列全体、個々のセル、列見出し、および要約セルに適用できます。

書式 (**forms**). 書式はオブジェクトと見なされ、リポジトリ、QMF カタログ、またはファイルに保存できます。保存された書式オブジェクトを開いたときは、報告書を生成するために書式オブジェクトを実際に実行していることとなります。書式を開くと、現在アクティブな照会結果がデータ・ソースとして自動的に使用されます。

書式変数 (**form variables**). 書式変数は、報告書に情報を表示するためにテキスト・フィールドに挿入できるコードです。例えば、毎回報告書を印刷する度に現在の日付を表示する日付変数を挿入できます。

グローバル・パラメーター (**global parameter**). グローバル・パラメーターはビジュアル・プロジェクト全体で使用でき、ビジュアル・ダッシュボードのユーザーが使用可能です。オブジェクト・プロパティの指定時、またはイベント・アクションの作成時にグローバル・パラメーターを渡すことができます。また、実行時にグローバル・パラメーターを公開して、ユーザーがアクセスできるようにするオプションもあります。

グローバル・リソース (**global resources**). グローバル・リソースは、ビジュアル報告書のすべてのページ、またはビジュアル・ダッシュボードのすべてのシーンで使用できます。グローバル・リソースを使用して、オブジェクト・プロパティを計算することができます。

グローバル変数 (**global variables**). グローバル変数は、QMF for Workstation/WebSphere の現行セッションがアクティブである期間中、アクティブであり続ける変数です。これは、オブジェクト (照会、プロシージャ、書式) の実行中のみアクティブである置換変数とは対照的です。グローバル変数を使用するオブジェクトの場合、グローバル変数に現在定義されている値が使用されます。

グループ化および集約 (**grouping and aggregation**). 照会結果列にグループ化および集約のオプションを適用して、結果データを論理グループまたは要約グループに編成できます。グループ化および集約を追加することにより、データの要約情報の取得と、データのより論理的な表示を自動的に行えます。例えば、報告書のデータを部門別にロールアップしたり、部門別の歩合を平均したりできます。

情報ズーム (**information zooming**). 情報ズームは、ユーザーがシーンまたはレイアウトのデータ・ポイントをズームインするのに合わせて、データの明細ビューを表示するナビゲーション機能です。レイアウト・オブジェクトおよびシーンはどれも、デフォルトのズーム・レベル (100% ズーム) を持っています。情報ズーム・ナビゲーションの設定は、シーン全体に対して行うことも、個別のレイアウト・オブジェクトに対して行うこともできます。レイアウト・オブジェクトに対する情報ズームを使用すると、ユーザーがレイアウト・オブジェクトにズームインするのに合わせて、各データ・ポイントに関するより詳細な照会情報を表示させることができます。各ズーム・レベルには、同じ照会結果データを使用します。シーン・レベルで情報ズームを使用すると、ズーム・レベルごとに、まったく異なるレイアウトや照会結果データを表示させることができます。

JDBC ドライバー (**JDBC drivers**). QMF for Workstation/WebSphere は JDBC を使用してすべての

データベース・リポジトリおよびデータ・ソースに接続します。QMF for Workstation/WebSphere は JDBC ドライバーを含みません。QMF for Workstation/WebSphere がリポジトリおよびデータ・ソースに接続するために使用する JDBC ドライバーの場所が定義されていなければなりません。QMF for Workstation/WebSphere アドミニストレーターは、アプリケーション・インターフェースの各インスタンスが JDBC ドライバーを見つけることができる場所を特定する必要があります。

ジョブ定義ファイル (job definition files). ジョブ定義ファイル (.jdfx) は、スケジュール済みジョブを設定するためにインポート可能なレガシー QMF ファイルです。

タスク・スケジューラー (task scheduler). QMF for Workstation/WebSphere には、プロシージャー、照会、即時報告書、およびビジュアル報告書を定期的に、繰り返し、または特定の日時に実行するようにスケジュールに入れる機能があります。オブジェクトは、ローカル・スケジューラーまたは QMF for WebSphere スケジューラーを使用して、任意の時点で実行するようにスケジュールできます。

レイアウト・オブジェクト (layout objects). ビジュアル・ダッシュボード・シーンでは、レイアウト・オブジェクトを使用して、図表、グラフ、マップ、表、およびグリッドなどのビジュアル形式で照会結果を表示します。多くのレイアウト・オブジェクトでは、複数の照会結果を単一のレイアウトで表示します。例えば、単一の XY グラフを作成し、ある照会から取得した売上高と、別の照会から取得した経費を表示させることができます。複数のレイアウト・オブジェクトをネストさせることができます。レイアウト・オブジェクトをネストすると、照会結果の情報を高いレベルのレイアウト・オブジェクトから低いレベルのレイアウト・オブジェクトに受け渡すことができます。この情報の受け渡しが可能であるため、ネストされたレイアウト・オブジェクトを使用して、特定のデータ値に関連する詳細情報を表示することができます。

「レイアウト・プロパティ」ダイアログ (**Layout Properties dialog**). 照会結果のフォーマットに使用できるすべてのオプションを設定できるインターフェースです。「レイアウト・プロパティ」ダイアログでは、ツリー構造を使用して照会結果の列を表します。照会結果で選択したのものによって、レイアウト・プロパティ・ツリーは照会結果にあるすべての列の分岐、または単一の列の分岐を表示します。フォーマット・オプションは、列全体、個々のセル、列見出し、および要約セルに適用できます。

旧 Visionary ワールド (Legacy Visionary world). 以前のバージョンの QMF Visionary を使用して作成された既存の Visionary ワールドから、新しいダッシュボードを作成できます。インポートする Visionary ワールドが、QMF for Visionary バージョン 8.1 フィックスパック 13 以降を使用して、XML ファイルとしてエクスポート済みである必要があります。

LOB データ (LOB data). ラージ・オブジェクト (LOB) とは、Db2 for Linux, UNIX®, and Windows のデータ・タイプであり、テキスト、マルチメディア、画像、ビデオ、写真、音声などの非従来型データや、あらゆる大規模データ・ファイルをデータベース表内に格納するためのデータ・タイプです。LOB データを検索または保存する際には、大量のリソースが消費されることがあります。

ネットワーク・リポジトリ (network repositories). 直接ネットワーク・アクセスを使用する、共有リポジトリに対する接続です。ネットワーク接続の場合、ユーザーは、ワークステーションからデータベースに直接接続することなく共有リポジトリにアクセスできます。ネットワーク接続を使用してリポジトリに接続すると、中央サーバーでのデータ・アクセスの統合が可能になり、QMF for Workstation を実行しているデスクトップごとに JDBC ドライバーを配布する必要がなくなります。このタイプの接続は、QMF for WebSphere ユーザーには適用されません。

OLAP 照会 (OLAP queries). OLAP 照会を使用すると、ユーザーは異なる次元のマルチディメンション・データに動的にアクセスできます。QMF for Workstation および QMF for WebSphere を使用すると、MDX を使用して照会されて XMLA を使用してアクセスされるマルチディメンション・データ・ソースに対する OLAP 照会を作成できます。

パレット・オブジェクト (palette objects). ビジュアル・プロジェクトには、「パレット」ビューにリストされているグラフィック・オブジェクトをどれでも挿入できます。ビジュアル・ダッシュボードには、「パレット」ビューのすべてのオブジェクトを挿入できます。「パレット」ビューで選択可能なオブジェクトのすべてが、ビジュアル報告書に挿入できるわけではありません。ビジュアル報告書に挿入できないオブジェクトには対話式プロパティがありますが、ビジュアル報告書は対話式ではありません。

パーソナル・リポジトリ (personal repositories). パーソナル・リポジトリは単一ユーザーのためであり、QMF for Workstation/WebSphere アプリケーション・インターフェースを実行しているワークステーション (サーバー) の個人設定ディレクトリに格納されます。

パースペクティブ (**perspectives**). データを照会し、結果をフォーマット設定するために使用するインターフェース。

プロシージャー (**procedures**). 照会の実行、報告書の印刷、データのインポートとエクスポート、および他の関数の実行が可能なコマンドのセットです。

「プロジェクト・エクスプローラー」ビュー (**Project Explorer view**). 「プロジェクト・エクスプローラー」ビューは、それぞれのビジュアル報告書とダッシュボードのエLEMENTとオブジェクトすべてを 1 つのツリー構造で詳しく表示します。

指示照会エディター (**Prompted Query editor**). 簡単な照会から複雑な照会までを作成可能なインターフェースです。指示照会エディターは、SQL ステートメントを作成するために必要な情報を入力するようにプロンプトを出します。また、指示照会エディターを使用すると、ソート条件や行条件を設定できます (QMF for Workstation のみ)

QMF カタログ (**QMF catalogs**). 保存されたオブジェクト (照会、プロシージャー、書式)、ユーザー・リソース限界とプロファイル、報告書、およびその他の各種設定と情報が含まれているデータベース表のセットです。QMF カタログは、Db2 データベースをホストするデータベース・サーバー上にあります。

照会エディター (**Query Editor**). ワークスペース内でアクセス可能なすべてのデータベース表を開くことができるインターフェースです。

照会パラメーター (**query parameters**). 照会パラメーターには、照会に送信され、実行時に使用される値が含まれます。

通常保存 (**regular save**). 照会結果のデータを「通常保存」方式で保存する場合は、使用中のインターフェース (QMF for Workstation または QMF for WebSphere) が、取り出した照会結果をデータの行ごとに別個の SQL INSERT ステートメントを使用してデータベースに保存します。このタイプの保存では、大量のデータをデータベースに戻すオーバーヘッドのためにパフォーマンス・コストが高くなります。

リレーショナル照会 (**relational query**). 照会とはデータ・ソースに情報を要求することです。リレーショナル・データ・ソースに情報を要求する場合、照会は SQL ステートメントを使用して作成されます。

リソース限界 (**resource limits**). QMF for Workstation/WebSphere リソース限界はデータ・ソース・アクセスとリソース使用量を制御します。データ・

ソースにアクセスするときにユーザー ID に有効なリソース限界を表示するには、データ・ソースに接続している必要があります。

シーン・パラメーター (**scene parameters**). ビジュアル・ダッシュボードの特定のシーンにのみ使用可能なパラメーター。シーン・パラメーターは、組み込みシーンおよびイベント・アクションの作成時に受け渡されます。

スケジュール・タスク (**scheduled tasks**). プロシージャー、照会、即時報告書、またはビジュアル報告書は、ローカル・スケジューラーまたは QMF for WebSphere スケジューラーを使用して、任意の時点で実行するようにスケジュールできます。別の時に実行するようにスケジュールされているオブジェクトは、スケジュール済みタスクと呼ばれます。

共有リポジトリ (**shared repositories**). 共有リポジトリはデータベース上に存在し、多数のユーザーがそれを共有できます。QMF for Workstation/WebSphere アドミニストレーターだけが、共有リポジトリを作成できます。

SQL 照会エディター (**SQL Query editor**). SQL に経験があるユーザーの場合、「SQL 照会」エディターに自分で SQL ステートメントを入力することにより、照会を作成する方法があります。単一の結果セットに戻す単一の SQL ステートメントでも、複数の結果セットに戻す複数の SQL ステートメントでも書くことができます。エディターは、ユーザーの SQL ステートメントに対するカラーリング・サポートを提供します。

静的 SQL パッケージ (**static SQL packages**). リポジトリ・ストレージ内のいくつかの表は、QMF によって処理情報を格納するために使用されます。これらの表の中には、許可表などのように、機密性の高い情報が保管されているものもあります。デフォルトでは、すべてのユーザーがこれらのリポジトリ・ストレージ表にアクセスし、表に変更を加えられるようになっています。リポジトリ・ストレージ表には、表を保護するオプションがあります。保護モードでは、ストアード・プロシージャーや静的 SQL パッケージ (そのリポジトリ・ストレージのホスト・データベースが何をサポートしているかによって異なる) の集合を使用してリポジトリ・ストレージのユーザーにストアード・プロシージャーまたは静的 SQL パッケージを実行するための許可を付与する必要があります。

置換変数 (**substitution variables**). 置換変数は、実行時に変更値を SQL 照会に入力するために使用します。この機能により、SQL ステートメントの一部を置換して、これをより汎用的なものにすることができます。置換変数がアクティブなのは、オブジェクト (照会、プロ

シージャー、または書式) が実行している間だけです。その結果、1 つのオブジェクトのみが置換変数にアクセスすることができます。この変数は、オブジェクトの実行後は存在しなくなります。

表エディター (Table Editor). ワークスペース内でアクセス可能なすべてのデータベース表を開くことができるインターフェースです。

表ビューアー (Table Viewer). ワークスペース内でアクセス可能なすべてのデータベース表を開くことができるインターフェースです。

翻訳テーブル (translation tables). 翻訳テーブルにより、ダッシュボード設計者は複数言語で表示できる単一のビジュアル・ダッシュボードを公開できます。コンテンツ開発者がダッシュボードを作成するときには、ボタンのキャプション、ラベル、ツールチップ、および他の埋め込みテキストを、ダッシュボード・オブジェクトのプロパティ値に直接入力します。翻訳テーブルを使用すると、コンテンツ開発者はその入力したテキストの代替バージョンを用意して、ロケールが異なるユーザーに対して表示させるようにできます。例えば、日本語の開発者は、日本語で新規ダッシュボードを作成することを決めてから、ドイツ語とフランス語の翻訳テーブルも組み込むことができます。各翻訳テーブルは、ドイツ語およびフランス語のロケールでダッシュボードが表示されるときに使用されます。

取扱コード (usage codes). 取扱コードは、列のデータに関する合計情報を提供します。例えば、取扱コードは列の終わりで総合計情報を提供したり、表の制御の切れ目で部分的な合計情報を提供することができます。使用可能な取扱コードは列のデータと合計のタイプによって異なります。

ユーザー設定 (user preferences). 「設定」ダイアログは、QMF for Workstation/WebSphere アプリケーション・インターフェース現行セッションの特定の機能に適用されるユーザー設定を行うために使用します。「設定」ダイアログは 2 つのペインで構成されています。左のペインには設定を編成する階層ツリーが表示され、右のペインには実際の設定値のページが表示されます。

「変数」バー (variables bar). 変数バーを使用して、プロパティ値を指定できます。「変数」バーは、メニュー・バーにあります。「変数」バーから、ビジュアル・プロジェクトに定義されているグローバル・パラメーターまたはローカル・パラメーター、および一連の照会結果からの 1 つの列名を選択できます。

ビュー (views). QMF for Workstation/WebSphere ビューはエディターをサポートしており、代替表示を提供し、またウィンドウにある情報のナビゲート方法を提供

します。それぞれのビューは、メイン・ワークステーション・ウィンドウ内のペインとして表示されます。QMF for Workstation/WebSphere の各パースペクティブには、特定機能の実行に通常使用するビューが最初に表示されます。

ビジュアル・ダッシュボード (visual dashboards). ビジュアル・ダッシュボードは、企業全体にわたる複数の異種データ・ソースの照会から入手した対話式または永続データを表示します。ビジュアル・ダッシュボードは、図表、グラフ、マップ、およびユーザー・インターフェース・ウィジェットを含む、多様なグラフィックスを使用するシーン・フォーマットでデータを表示します。データ主導型のグラフィック・オブジェクトは簡単にリンクできるので、ユーザーの選択内容に応じて、固有のデータ表示が行われます。コンテンツ開発者は、複数のユーザーが QMF for Workstation または QMF for WebSphere のどちらかを使用して表示できるビジュアル・ダッシュボードを作成できます。

ビジュアル・デザイナー (visual designer). ビジュアル報告者およびダッシュボードを手早くデザインすることができます。そのために、プロジェクトのデザイン・ビューとランタイム・ビューの両方を表示するエディターが含まれる直観的で使いやすい「ビジュアル・デザイナー」パースペクティブ、各ビジュアル報告書とダッシュボードのコンテンツを構造的に詳しく示した「プロジェクト・エクスプローラー」ビュー、さらにビジュアル・デザイナー・エディターに対応し、ビジュアル報告書とダッシュボードの作成を支援する「パレット」、「プロパティ」、「イベント」、「出力」の各ビューを使用できます。

ビジュアル報告書 (visual reports). ビジュアル報告書は、ページ・ベースの印刷可能レポートであり、多様なユーザーに永続データを表示するために、定様式テキストとグラフィックスの両方が含まれています。ビジュアル報告書には、報告書の異なるセクション (見出しや脚注など) に挿入されたデータ主導型のグラフィックス (マップおよび図表など) も入れることができます。データ主導型のグラフィックスはそれぞれ、企業全体にわたって実行される複数の照会からのデータを表示できません。

Web サービス・リポジトリ (web service repositories). Web サービス・リポジトリ接続を作成して、HTTP または HTTPS 接続を使用した QMF for WebSphere の Web サービス API を介して、共有リポジトリへの接続を可能にする情報を設定します。Web ベース接続の場合、ユーザーは、ワークステーションからデータベースに直接接続することなく共有リポジトリにアクセスできます。Web サービス接続を使用してリポジトリに接続すると、中央サーバーでのデ

ータ・アクセスの統合が可能になり、QMF for Workstation を実行しているデスクトップごとに JDBC ドライバーを配布する必要がなくなります。このタイプの接続は、QMF for WebSphere には適用されません。

ワークスペース (workspaces). アクセスできるすべてのデータ・ソースおよびオブジェクトは、QMF for Workstation/WebSphere アドミニストレーターによって定義済みの 1 つ以上のワークスペースに入れられます。アクセスできる各ワークスペースが、「ワークスペース」ビューにリストされます。「ワークスペース」ビューからは、多くの照会機能と報告書作成機能を実行できます。

ズーム (zoom). QMF for Workstation を使用している場合、「ズーム」オプションを使用して、照会結果のセルの内容を 16 進数または 2 進数で表示できます。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アクセシビリティ 247
オペレーティング・システム 248
キーボード・ナビゲーション 247
キー割り当て 247
支援技術 248
WebSphere でのナビゲーション 251
Workstation でのナビゲーション 248
アドミニストレーター 1
アプリケーション
アクセス 14
インストールの完了 15
始動 14
新規バージョンのインストール 12
WebSphere Application Server へのデプロイ 11
アプリケーションの削除 10
一般設定 35
インストール 7, 10, 11
オブジェクト
カスタマイズ 253
オブジェクト・トラッキング報告書 235
活動化 235
実行 236
表の保守 238
オブジェクト・トラッキング・リソース限界 208
オブジェクト・ビュー 254
Q.RAA_OBJECT_VIEW_X 256
Q.RAA_OBJ_DIR_X 254
RDBI.ADMIN_VIEW 257, 259
RDBI.AUTHID_TABLE_X 257, 259, 260
RDBI.AUTHID_VIEW_X 257, 259, 260
RDBI.CATALOG_DIR_X 255, 257
RDBI.TABLE_VIEW2_X 258
RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X 255, 256, 258, 259
RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X 259, 260
RDBI.AUTHID_VIEW_X 255
RDBI.AUTH_TABLE_X 256
RDBLADMIN_VIEW 255

オブジェクト・ビュー (続き)
RDBLUSER.USER_AUTHID_VIEW_X 255
RDBL.ADMIN_VIEW 260
SYSIBM.SYSUSERAUTH 255
オブジェクト・リスト・リソース限界 213
オプション・リソース限界 203

[カ行]

外観設定 36
概説 1, 167
仮想データ・ソース 115, 121
管理 116, 117
設定 58
表 120, 133
編集 116, 117
仮想データ・ソースのキャッシュ 118, 134
仮想データ・ソース・エディター 116, 117
オープン 116
構造 116
セキュリティ 117
環境
作成 143
接続設定の編集 144
設定 143
監査
監査システム
監査データベース 37, 241, 242, 243
監査システム 241
管理者権限 188
規則、強調表示の viii
キャッシュ 120, 121, 133
キャッシュ設定 120, 133
キャッシュ・リソース限界 212
キャッシング 151, 187
リポジトリ・データ 151
強調表示の規則 viii
共有リポジトリ 147, 148, 151
グローバル変数 41
システム 43
ユーザー変数 41
限界リソース限界 202
更新スクリプトのエクスポート 174
構成 63
概説 31
環境 19
構成データのエクスポート 169

コメント、IBM への送付 ix

[サ行]

サード・パーティー・ライブラリー設定 57
サーバー定義ファイル
データ・ソースのインポート 23
サーバー・サイド・ファイル・システム 35
設定 56
サービス情報 viii
サイレント・インストール 170, 171, 172
作成
JavaScript テーブル 127
サポート情報 viii
サンプルの表 233
活動化 233
名前と説明 233
システム要件
QMF for WebSphere 3
QMF for Workstation 2
集合 ID 188
出力設定 55
照会環境
設定 19
照会リソース限界 191
ストアード・プロシージャ 75, 148
静的 SQL パッケージ 75, 148
セキュリティ
データベース・ベース 181
FIPS-140 61
接続 63
設定
一般 35
外観 35, 36
仮想データ・ソース 58
グローバル変数 35
サード・パーティー・ライブラリー 35, 57
サーバー・サイド・ファイル・システム 56
出力 55
ダッシュボード・ランタイム 35
ビジュアル・デザイナー 35, 58
ヘルプ 35, 43
ユーザー 35
ログ 35, 48
E メール 39
JDBC 45
JDBC ライブラリー 35

設定 (続き)

LOB 35, 47

QMF サーバー・レジストリー 56

SMTP 39

設定のインポート 24

セットアップ実行可能ファイルの選択 7

セットアップ・プロセスの実行 7

[タ行]

タイムアウトリソース限界 201

注意

特記事項 341

データの保存リソース限界 206

データへのユーザーの接続 63

データ・ソース 93

フォルダー・データ・ソース 110

ログイン・マッピング 159, 160, 162

データ・ソース・リソース限界 190

デフォルトのリソース限界グループ 193

同時データベース接続 77

最大数の設定 77

ドライバー・クラス名 45

[ナ行]

内部セキュリティ 83

グループ・プロパティ 86

新規グループ 85

新規ユーザー 84

ユーザーおよびグループ 83

ユーザー・プロパティ 85

長い名前のオブジェクト 189

長い名前のサーバー 189

ネットワーク接続 155

ネットワーク・リポジトリ 147

[ハ行]

パーソナル・データ・ソース 102, 103

バインド・リソース限界 206

パス 44

ビジュアル・デザイナー

設定 58

表 74

保護および許可の付与 75

ファイル・ベース・リポジトリ 147,
151

フィードバック、IBM への送付 ix

フィックスパック 10

フォルダー・データ・ソース 111, 112

ヘルプ設定 43

ヘルプ・コンテンツ 44

編集

JavaScript テーブル 132

ポート 44

ホスト 44

[マ行]

マルチディメンション・データ・ソース
108

短い名前のオブジェクト 189

メッセージ

アクセス方法 viii

戻す 11

[ヤ行]

ユーザーおよびグループ

リポジトリ・オブジェクト 177

選択 178

DBA 許可の割り当て 181

SYSADM 許可の割り当て 181

[ラ行]

リソース限界 187

オブジェクト・トラッキング 208

オブジェクト・リスト (object
list) 213

オプション 203

キャッシュ 212

グループ 194

ユーザーの割り当て 213

グループ・スケジュール 194, 197

グループ・スケジュールの値 198

メイン 200

限界 202

照会 191

タイムアウト 201

データの保存 206

データ・ソース 190

バインド 206

リポジトリ 214

ユーザー割り当ての管理 215

レポート・センター 211

LOB オプション 209

QMF カタログ 218

ユーザー・プロファイル 221

ユーザー・プロファイルの管理 220

ユーザー・プロファイルの作成 221

SQL 動詞 203

リソース限界グループ 193

スケジュールの判別 196

複数のスケジュールの指定 195

ユーザーの割り当て 216

リフレッシュ 121

リポジトリ 223

仮想データ・ソース 116

リポジトリ (続き)

共有プロパティ 223

データベース・オブジェクト 226

保護オプション 226

JDBC 接続 224

削除 223

接続の作成 147

共有 148

ネットワーク 155

ファイル・ベース 151

Web サービス 157

データ・ソース 93, 102, 103

仮想 111, 115, 116, 117

フォルダー 112

マルチディメンション 108

リレーショナル 104

Hive 110

JavaScript 121

QMF カタログ・プロパティ 228

データ・ソース 231

表 228

保護状況 230

Web リンクの作成

データ・オブジェクト 163

リポジトリ接続

ネットワーク

設定 156

リポジトリ表の作成 77

リポジトリ・オブジェクトのキャッシング
151

リポジトリ・ストレージ 79

共有 71

内部セキュリティ・フィールド
83

リポジトリの追加 81

JDBC 接続 72

LDAP セキュリティのフィールド
87

リモート・サーバー 44

リレーショナル・データ・ソース 104

追加パラメーター 107

プラグインを使用可能にする 105

リソース限界プロバイダー 106

QMF カタログ 93

オブジェクト 95

拡張 101

拡張プロパティ 102

カタログの選択 100

データベース・オブジェクト 97

保護および許可の付与 98

リンク

IBM 以外の Web サイト 343

レポート・センター・リソース限界 211

ログイン・マッピング 159, 160, 162

ログ設定 48

[ワ行]

- ワークスペース 137
 - コンテンツの追加 137
 - 新規ワークスペースの追加 138

C

- CSV のインポート
 - 区切り記号オプション 114

D

- dataSource オブジェクト 122

E

- E メール設定 39, 40
- ER ダイアグラム 139
- ER ダイアグラムを取り込む 142
- ER ダイアグラム・フォルダー 141
- ERD 139

F

- FIPS-140 61

H

- Hive データ・ソース 110

I

- IMPORT
 - CSV
 - 区切り記号オプション 114
 - TXT
 - 区切り記号オプション 114
 - XLS 114
 - XLSX 114
- iSeries
 - 物理ファイルのリスト 253
 - 論理ファイルのリスト 253
 - EXECUTE 特権の付与 254

J

- JARS 45, 64
- JavaScript 123, 128
- JavaScript データ・ソース 121
 - 接続パラメーターの変更 136
 - dataSource 122
 - dataSource.parameters 122
 - dataSource.url 122

- JavaScript データ・ソース (続き)
 - dataSource.userinfo.login 122
 - dataSource.userinfo.password 122
 - sendHttpRequest() 122
- JavaScript データ・ソース内のモジュール
 - 共通関数 126
 - 切断 126
 - 認証 126
- JavaScript テーブル 127, 128, 129
- JDBC 63
- JDBC 設定 45
- JDBC ドライバー 64
 - アクセスの構成 13
 - エクスポートおよびインポート 173
- JDBC ライブラリー 45

L

- LDAP セキュリティー 87
 - グループ・フィールド 88
 - 認証子のフィールド 91
 - メイン・フィールド 87
 - ユーザー・フィールド 90
- LOB オプション・リソース限界 209
- LOB 設定 47
- LookAt viii

Q

- QMF for WebSphereシステム要件 3
- QMF for Windows からの設定のインポート 24
- QMF for Workstationシステム要件 2
- QMF カタログ 93
 - オブジェクト 95
 - 拡張 101
 - カタログの選択 100
 - データベース・アクセス 217
 - データベース・オブジェクト 97
 - プロパティ 228
 - データ・ソース 231
 - 表 228
 - 保護状況 230
 - 保護および許可の付与 98
 - ユーザー・プロファイル 217
 - 登録 216
 - リソース限界のセキュリティ 193
- QMF サーバー・レジストリー設定 56

R

- RSBIHttpRequest クラス 123

S

- SDF 23
- SMTP 設定 39
- SQL
 - 生成されるサンプル 253
- SQL 動詞リソース限界 203

T

- TXT のインポート
 - 区切り記号オプション 114

U

- URL テンプレート 45

W

- Web サービス・リポジトリー 147, 157
- WebSphere 管理コンソール
 - オープン 12

X

- XLS のインポート 114
- XLSX のインポート 114



プログラム番号: 5737-E42

Printed in Japan

SC43-4721-00



日本アイ・ビー・エム株式会社

〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21